神奈川県考古学会　　平成14年度考古学講座

学史を語る

～学史を踏まえた最新の研究～

主旨説明	考古学史の考古学	岡本孝之
旧石器時代	マンローから月見野　相模野編年確立	鈴木次郎
縄文時代	縄文早期編年の確立と草創期の摘出	戸田哲也
縄文時代	かながわの貝塚調査研究史	中村若枝
弥生時代	環濠集落－拠点集落と集落群	小宮恒雄
古墳時代	古墳・横穴墓の調査歴と研究史 －古墳時代後期の伊勢原を中心として－	立花　実
古代	古代官衙と寺院の研究史と課題	冨永樹之・依田亮一
中世	服部清道と今日の板碑研究	渡辺美彦

考古学者　赤星直忠の学問とその生きた時代
～神奈川県の地域研究に残したもの～　　横須賀考古学会

２００３年３月２３日

神奈川県考古学会

学史を語る

～学史を踏まえた最新の研究～　の開催にあたって

昨年の平成14年は、横須賀考古学会の生みの親である赤星直忠先生の生誕百年に当たり、三浦半島各地域で赤星先生に関連した展覧会等の企画が行われました。本会が主催する神奈川県遺跡発表会でも記念講演として「赤星直忠－偲ばれる研究者の姿正－」を川上久夫先生にお願いして、生前の先生の人となりと考古学に打ち込む真摯な姿勢を感じることができました。

今回こうした先学の業績を広く会員の方々に紹介するのを目的に、平成14年度の考古学入門講座として、神奈川県内の考古学史を各時代毎に各講師の方々に紹介していただこうと企画いたしました。

先学研究者の業績の紹介とともに学史に残る遺跡・遺物の紹介や研究動向の変遷などを紹介する事で神奈川県内における考古学研究の発展を辿ることができれば今回の目的が達成されるものと考えております。また、最新の研究成果をも合わせて紹介頂くことができれば、若い研究者への指針にもなるものと思われます。

神奈川県考古学会

次第と目次

次第			目次
9：00	開場		
9：30	開会		
9：30～9：35	開会挨拶	神奈川県考古学会会長　寺田兼方	
9：35～10：15	主旨説明	考古学史の考古学　慶応大学　岡本孝之	1
10：15～10：55	旧石器時代	マンローから月見野　相模野編年確立 神奈川県教育庁　鈴木次郎	19
10：55～11：35	縄文時代	縄文早期編年の確立と草創期の摘出 玉川文化財研究所　戸田哲也	27
11：35～12：15	縄文時代	かながわの貝塚調査研究史 日本考古学協会員　中村若枝	37
12：15～13：10	休憩		
13：10～13：50	弥生時代	環濠集落－拠点集落と集落群 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター　小宮恒雄	47
13：50～14：30	古墳時代	古墳・横穴墓の調査歴と研究史 －古墳時代後期の伊勢原を中心として－ 伊勢原市教育委員会　立花　実	55
14：30～15：10	古代	古代官衙と寺院の研究史と課題 （財）かながわ考古学財団　冨永樹之・依田亮一	65
13：10～13：25	休憩		
15：25～16：05	中世	服部清道と今日の板碑研究 重永・横田記念板碑研究所　渡辺美彦	75
16：05～16：45	総括	神奈川県考古学会顧問　小出義治	
16：45～16：50	閉会挨拶	神奈川県考古学会副会長　伊東秀吉	
16：50	閉会		

資　料　「考古学者　赤星直忠の学問とその生きた時代」
～神奈川県の地域研究に残したもの～　横須賀考古学会

考古学史の考古学

岡本　孝之

１．本講座の意図

(1) 考古学の本質は現在を過去からの流れの中で考えることにある。石器時代から、人類史のより深いところから同じ視点、眼、観方で考察することができる。この意味において、考古学の歴史、考古学史自身を考古学しなければならない。近代考古学は、モース以後、1877年以後とするなら126年を経過している。

(2) 考古学史については寺田和夫、斎藤忠、日野一郎、岡本勇、坂詰秀一らの研究があり、県内では杉山博久（『魔道に魅入られた男たち』、小田原市史、南足柄市史、二宮町史、直良信夫、三輪善之助)、浜田晋介（川崎)、寺田兼方（藤沢)、鈴木一男（大磯)、大貫英明（相模湖町史)、伊丹徹（弥生)、荒井秀規・かながわ考古学財団（古代)、近野正幸（沼田頼輔)、縣敏夫（服部清道)、横須賀考古学会・川上久夫（赤星直忠)、坂本彰（岩沢正作)、須田英一（榊原政職）の研究がある。私も研究史に関して発言しているが、不勉強のため何度も間違いを犯している。

(3) 考古学は125年の歴史があり、神奈川県では昨年の2002年が赤星先生生誕100年の記念の年であった。また、考古学の危機的状況を迎えている。藤村事件の総括がなされるべきであるが、考古学は最初から虚偽を内包していた。弥生町遺跡問題（上野武2001「「最初の弥生土器」発見の真相―発見者有坂鉛蔵の嘘―」『古代学研究』153）は考古学の根本問題でもある。

昨年は『考古紀行いばらき―考古学に魅せられた人びと―』と題する特別展が茨城県歴史館で開催され、服部清道について紹介している。

(4) 先輩の業績を比較的容易に確認できる環境がある。復刻、赤星ノートの利用など資料が豊富となってきた。考古学史研究の諸条件が整ってきた。

(5) 今回の講座では、先土器・旧石器時代を鈴木次郎氏、縄文時代を戸田哲也氏と中村若枝氏、弥生時代を小宮恒雄氏、古墳時代を立花実氏、奈良平安時代を冨永樹之氏と依田亮一氏、中世を渡辺美彦氏にお願いして神奈川県の考古学の歴史を考えることにした。

(6) 資料として神奈川県の考古学に関係した先人たち259名の名簿を年齢順に作成した。凡例は別記した。また神奈川県内の考古学関係の研究・同好団体の一覧表を作成した。さらに神奈川県考古学125年の歴史年表を作成した。これは私個人の見方にかなり偏っているものであり、もっと多くの人の参加を得て、神奈川県考古学会からみた名簿や年表をつくる必要があると思っている。文献目録は一部にとどまり、省略したものが多いことをお断りしたい。写真は斎藤忠氏の著書などから複写した。

また別に昨年横須賀考古学会で開催した『考古学者　赤星直忠の学問とその生きた時代～神奈川県の地域研究に残したもの～』の展示資料、文字パネルを全面的に使用掲載させていただいた。篤く感謝申し上げる。

２．神奈川県における最初の調査

1879年のミルンの採集が最初の調査であり、博物局の大橋の確認があった。白井は新聞記事を引用しているが未見（白井1932）。大橋の資料は東京国立博物館に保管されている可能性がある。

同年、シーボルトが横浜で出版している（翻訳が関俊彦らによって行われ、大田区の『史誌』に掲載されている）。シーボルトの1889（明治22）年の住所は居留地20番館とする。ミルンも横浜にあった学会誌に発表している。横浜での学会活動の復元が重要である。

1883年に冨士谷孝雄（地学・地理学）の調査があり、それを受けて坪井・白井の中村横穴調査が実施される。翌1884年に人類学会が創立され、1885年に斎藤賢治（工科大学学生）は上末吉村貝塚を調査している（第16会（1886年1月10日）発表）。1886年には人類学会が税関山（池ノ坂貝塚）を踏査する。舟越小二郎（戸部町5丁目138）がその直後の3月に入会しているが、1888年に亡くなる。また、医師の船越鼎太郎も1886年6月に入会し、後に同住所に転居しているので子息と思われる。

斎藤忠2000のあげた1887（明治20）年の人類学会会員3名のうち、石橋絢彦（あやひこ）は横浜灯台局勤務（1986年8月入会）、森廉次郎は横浜郵便電信局勤務で森は明治20年11月に入会して21年3月に退会している。船越鼎太郎と石橋が会員として1899（明治32）年まではいることを確認した（以後は未確認）。横浜には1890～1897年にいた小林運重、1887年に入会した福田乾一（1898年まで）、シーボルトが会員にいて、1893年には浦賀町鴨居の蛭子小次郎が入会して1895年まで会員としていた。

３．無名の研究者の群像

小林與三郎については新しい知見がある。1894（明治27）年7月に人類学会に入会しており、住所は小石川・上富坂・多田小学校とあり、小学校の先生であったようである。第10巻の名簿にあるが第11巻の名簿にない。第13巻139号（1897年）にも再び入会記事があり、以後の活動状況は『考古論叢神奈河』9に述べたとおりである。その活動は個人的なものではなく、147号で藤田己之助、村松久太郎、中野嘉一郎（雪翠）を紹介し、149号で鈴木澄次郎を紹介して入会させているので、グループを形成していたのではないかと思われる。横浜における最初の考古学研究会である。

そのころの活動のわかる人は以下の名前が知られている。

阿部正功（華族）、内山九三郎、林若吉、田中正太郎、金沢悌次郎（三浦）、大谷木耐三（横浜・小田原）、藤田清八（横浜医師）、比企野兼次郎（平塚）、青木純造（八王子市相原）、外山松次郎（愛川町）、森潤三郎

４．南加瀬貝塚の発掘（発見から破壊へ）

発見については諸説があるが、調査については江見水蔭が重要な役目を果たしている。江見の報告により、1904年に弥生式土器研究会が開かれ、現地調査が実施された。参加者は江見水蔭（34歳）、

今井聡、前田、蒔田鎗次郎（32歳）、松村瞭（23歳）、中村士徳、中澤澄男（32歳？）、野中完一、大野雲外（40歳）、関保之助（35歳）、柴田常恵（26歳）、玉置繁雄、鳥居龍蔵（33歳）、山中笑（53歳）であり、遠足会には今井、蒔田、松村、中澤、野中、大野、関、柴田、玉置に加えて古谷靖、伊藤望蜀、水谷幻花（38歳）が加わった。

マンローと八木奘三郎の発掘が1906年に行われ、弥生と縄文を層位的に確認したことで重要である。マンローは横浜坂の台貝塚・三沢貝塚なども発掘しており、ベルツも参加している。ベルツは遺産3000円をマンローに残している。マンローは人類学会にＲ・Ｓ・ミットゥーを紹介している（1905　人雑20－227）。友人か発掘の仲間と思われる。台地上の大規模な貝塚は1914～1915年に東芝の工場建設のため破壊された。

台地下にもハマ貝塚が存在することを江見は指摘している。中山清隆の再評価があり、鈴木正博の指摘（鈴木2000）するように川崎・横浜の宮ノ台期弥生文化を考える上で南加瀬貝塚は重要である。昨年、江見のみた地点と杉原・酒詰らの発掘地点を再確認することができた。

５．石野瑛らの武相考古会（1922～1925）

1922年から1923年に7冊刊行し、関東大震災で中断して1925年10月に第2巻第１輯（8冊め）を刊行して終わる。武相考古会としては1941年ころまで確認できる。

会員は石野、谷川（大場）、山田蔵太郎らのほかに、八幡一郎、大野一郎、上羽貞幸、首藤保之助、加山道之助、木島鄰、中山毎吉、山田淳、山田和一郎、（3号）吉田文俊、尾形順一郎、小松真一、甲野勇、（５号）梅原末治、（６号）沼田頼輔、芦田伊人、後藤守一、岩沢正作が参加している。他の多くは大場の教え子、二中の生徒であるらしい。

大場磐雄の『楽石雑筆』にはこのころの活動状況が克明に記録されている。学生考古会や赤星直忠との交流が述べられている。石野瑛の業績の評価が課題として残されている。(『武相の古代文化』1924、『武相考古』1926、『横浜近郊文化史』1927、『考古集録第1～第4』1934～1941)

６．横浜考古学研究会（1927～1939）

1928年に1号から1937年の15号まで刊行するが、13･14号は予告のみのようである。まだ全部は実見していない。『神奈川県史』1979の文献目録には11・12・15号のみ掲載されている。石田武雄、清水裕（小学校教員）、池田健夫（歯科医）、中川一郎ら関東学院の卒業生（1909，1910年ころの生まれと推定）が中心となって坂の台貝塚、弘明寺、東台遺跡、篠原貝塚、稲荷山貝塚などの調査を行った。会長は利根木亀之助配属将校であった。石野瑛の指導を受け、八王子史談会と交流した。

1930年の5号以後、高橋正人（慶応医学部）、西岡秀雄（1912～）、守田文彦、斎藤房太郎（1909頃～）、松下胤信（1909～）、佐藤陽之助、池谷健治（1913～）らが加わり、『貝塚』によれば慶応商工グループとの交流が1939年ころまであった。藤森栄一、八幡一郎、尾形順一郎も入会し、橘樹考古学会の岡栄一、吉野清之輔らとも交流があった。

橘樹考古学会（1931～1932）

浜田晋介1993・1995の研究がある。岡道孝、岡栄一兄弟と50人の仲間がいた。

横須賀考古学会（1935～　　）

赤星直忠と角井長一（川上久夫の小学校の先生、中村勉の父）、小笠原義隆らがいた。赤星と横須賀考古学会の業績については本資料集の資料を参照してほしい。

赤星の未登録文献に1940年の「逆効果」『貝塚』19がある。岡本勇の小学校への訪問授業は1941年であり、その根拠が分かるという。

７．戦後の発掘（登呂1947年・岩宿1949年以前）

神奈川県内では赤星直忠の1947年の野島貝塚と早稲田大学西村正衛の茅山貝塚の発掘が知られているが、茅ヶ崎市甘沼横穴の調査を早稲田大学桜井清彦の指導により青木一男が実施している。その前、1946年に三戸遺跡発掘を日本考古学研究所（市川）のグロートと後藤守一らが行っている。

石野瑛の武相文化協会結成も1946年であり、武相考古学研究所、武相考古館を設立している。詳細は不明である。山内清男らの講演会を実施している。小出義治は神奈川県学徒考古学会の設立を呼びかけ、武相学園に事務局を置いたようである。

市川規平の活躍にも注目したい。吉田格の発掘に参加し、吉崎昌一らと各地の発掘に参加している。武相学園の鵜木晶（1933～1961）も高校生時代に石野の池の坂貝塚、称名寺貝塚などの調査に参加し、杉田貝塚晩期地点を明治大学の杉原荘介らに伝え、明大に進学する。神澤勇一の1年後輩にあたる。

８．展望

(1) 学史の人々をもっと知りたい。中央の研究者の動向史（斎藤忠や寺田和夫）だけでは満足できない。地域研究者の発掘を進め、人物誌をまとめてみたい。

(2) 戦後の高等学校の考古学活動をまとめておく必要がある。武相学園、鎌倉学園、湘南高校、慶応高校、横須賀工業高校、横須賀高校、立正高校など。

(3) 江戸末・近代考古学の確立をもくろみたい。横浜市内遺跡の発掘を実施したい。小出義治先生の願望は横浜最古のキリスト教会跡の確認という。藤沢薬品の大砲、元町公園内の山手80番館のレンガ基礎、ジェラール邸水屋敷跡、外人墓地など考古学の対象となるものが豊富である。神奈川県考古学会の講座でも開催し、研究会を連続的に開催したい。

(4) このような研究は若い人への指針となるだけでなく、私自身の考古学の仕事として重要である。今回の私の発表は問題提起であって、まだ緒についたばかりである。考古学史の考古学をもっとさかんにしたい。先人に直接教えを受け、関係された方々も多いと思われるが、ぜひ教えてもらいたい。

第１表　神奈川県考古学史の人々

名前	生没年		県内活動期など	出身地など	文献・出典
モース	1838	～1925	1877	米人・東大	モース1879
小島　仙之助			1880	大磯滝之沢横穴	鈴木1995
ルーミス	1839	～1920		米人宣教師	岡部2000
井上　喜久治	1846	～1894	1893	東京米商会社	八木1895
ベルツ	1849	～1913	1904	ドイツ・医学	ベルツ1952・1955
ミルン	1850	～1913	1879	英人・地質学	白井光太郎1932
山中笑（共古）	1850	～1928			
林　　喜楽	1850	～1929		川崎市	岡1934、浜田1993
大橋　某			1879	博物局	白井1932
シーボルト	1852	～1908	1879	ドイツ	H・ケルナー1974
					ドイツ日本研1996
富士谷　孝雄			1883	東大	学芸志林13
若林　勝邦	1862	～1904	1886～1888	東大	人雑3－63
舟越　小二郎		～1888	1887～1888	横浜戸部町	斎藤2000・名簿
石橋　絢彦			1887～	横浜太田村	斎藤2000・名簿
森　　廉次郎			1887～1888	横浜羽衣町	斎藤2000・名簿
船越　鼎太郎			1887～	横浜戸部町	人類学会名簿
坪井　正五郎	1863	～1913	1884～1911	東大	考古学選集
白井　光太郎	1863	～1932	1884・1932	東大・植物学	斎藤1984
大野　雲外	1863	～1938	1900～1917	東大	考古学選集
マンロー	1863	～1942	1904～1908	英人・医師	桑原1983
					北海道記念館2002
徳富　蘇峰	1863	～1957	1925	評論家	国学院大学2001
斎藤　賢治			1886	工科大学生	人雑1－1
細木　松之助			1886		人雑1－6
浅井　郁太郎			1886	東京第1高	人雑1－8
岡本　高介			1887		人雑2－p239
鎌田　諧			1887	東京第1高	人雑2－p239
田中　延次郎			1887	理科大学	人雑2—11
福田　乾一			1888	横浜市本町	人類学会名簿
吉田　東伍	1864	～1918		早大	早稲田大学1965
小林　運重			1889	戸部	人類学会名簿
水谷　幻花	1865	～1943	1898～	新聞記者	杉山1999
矢後　駒吉	1865	～1925	1924	愛川町	海老名市1995
八木　奘三郎	1866	～1942	1894～1907	東大	考古学選集
上羽(谷)貞幸	1866	～1937	1923	陸地測量部	杉山1999
天津　隆也	1866	～	1925～	伊勢原市	石野1927
沼田　頼輔	1867	～1934	1898～	清川村宮ヶ瀬	考古学選集
河田　羆			1892～1907	史学会員	大磯誌
中山　毎吉	1868	～1942	1911～1942	海老名市国分	海老名市1995
丘　　浅次郎	1868	～1944	1887・1897	進化論	人雑2－15
関　　保之助	1868	～1945	1901地名表3	帝室博物館	考古学選集
阿部　正功			1893	華族	人雑8－90・96
蛭子　小次郎			1893～1895	浦賀町鴨居	人類学会名簿
江見　水蔭	1869	～1934	1904～1917	小説家	杉山1999
					斎藤監修2001
内山　九三郎			1894		人雑9－94
佐藤　伝蔵	1870	～1928	1897～1899	東大・地質学	人雑13－139
山崎　直方	1870	～1929	1887～1924	東大・地理学	人雑20
沢野　永太郎	1870	～1945		平塚市	平塚市郷土誌事典
鳥居　龍蔵	1870	～1953	1893～1929	東大・国学院大	考古学選集

北村　包直	1870頃～1936頃	1925	神奈川師範	三浦大介と其一党
野中　完一	～1925	1895～1901	東大・銅駝坊	杉山1999
蒔田　鎗次郎	1871　～1920	1896～1904		岡本勇1985
高橋　健自	1871　～1929		帝室博物館	考古学選集
喜田　貞吉	1871　～1939	1917	東大	考古学選集
和田　千吉	1871　～1945	1928地名表5	帝室博物館	考古学選集
中沢　澄男	1871頃～	1901	『日本考古学』	地名表3版
須藤　求馬		1896	金沢・熊本	人雑12－11
林　若吉		1897・1898	東大・集古会	地名表1版
田中　正太郎		1897～1901	東大・岐阜県	地名表1版
小林　與三郎		1897～1915	栃木県・韓国	岡本2001
有吉　忠一	1873　～1947		神奈川県知事	斎藤1984
森　照吉	1873　～1949	1907～	平塚市金目	石野1927・1941
金沢　悌次郎		1898	三浦郡	地名表2版
大谷木　耐三		1898・1917	横浜	地名表2・4版
島村　孝三郎		1898・1901	江ノ島・東亜考古	地名表3版
山田　和一郎	1874　～		川崎市岡上	石野1927
藤田　清八		1899・1901	横浜市・医者	地名表3版
比企野　兼次郎		1899	平塚市高根	人類学会名簿
松村　瞭	1880　～1936	1900～	東大	斎藤1984
岩沢　正作	1876　～1944	1898～	横浜市・群馬県	坂本1994
尾形　順一郎	1876　～1954	1930～	横浜市史料係	石野1927
青木　純造		1899・1901	堺村相原	地名表3・4版
外山　松次郎		1900～1903	愛川町	地名表3版
森　潤三郎		1901		地名表3版
柴田　常恵	1877　～1954	1932～	東大・慶大	考古学選集
玉置　繁雄		1902・1917		地名表4版
井上　欣一		1902	藤沢・大和	長後小誌
林　五策		1902	松田町延命寺	人雑17－77
林　晁		1903・1917	三中（厚木高）	人雑19－211
永井　健之輔		1903	伊勢原市	
西村　真次	1879　～1943	1926	早大	文化人類学事典
木島　鄰	1879　～1960	1922～	寒川町長・医師	角川書店1993
神津　猛		1904・1917	長野県	藤森1969
長谷川　一郎	1880　～1964	1928～	相模湖町増原	大貫2001
橋本　増吉	1880　～1956	1925・1933	慶大	史学29－4
吉田　文俊		1905～1917	茨城・東京など	斎藤2000
川口　清	1881　～1964	1953	平塚市	中郡勢誌
長谷部　言人	1882　～1969	1924～1942	東大	考古学選集
杉山　寿栄男	1884　～1946		工芸家	斎藤1984
移川　子之蔵	1884　～1947	1925	慶大・台湾	文化人類学事典
古谷　清	1884　～？	1930～1932	文部省嘱託	斎藤2000
古川　哲		1909		人雑24－316
入田　整三	1885　～1946	1937	帝室博物館	日本金石文綱要
清野　謙次	1885　～1955	1904	京大	考古学選集
露木　良策	～1945	1927	二宮町・上海	岡本2000
広田　清次	1886　～1974	1927・1928	茅ヶ崎市	岡本1995
西谷　珠雄	1887頃～1907	1907	早大生	江見1909
鈴木　重光	1887　～1967	1928～	相模湖町奥畑	大貫2001
三輪　善之助	1887　～1979	1922	古瓦・板碑	縣敏夫1980
後藤　守一	1888　～1960		鎌倉市小坪	考古学選集

鶴田　栄太郎	1888　～1968	1941～1966	茅ヶ崎市円蔵	岡本1996・1997
石野　瑛	1889　～1962	1923～	武相学園	石野1948・1964
大山　柏	1889　～1969	1927～	史前学研究所	斎藤1984
伊丹　信太郎	1890　～1962	1928	千葉県	山岸1989
児島鉚蔵（李雨）	1891　～1973		海老名市	
徳富　萬熊	1892　～1924	1928	逗子市	地名表5版
黒田　源太郎		1917	南足柄・小田原	地名表4版
石川　喜三郎		1917	厚木市妻田	地名表4版
宮崎　浅次郎		1917	津久井三沢	地名表4版
住田　正一	1893　～1968	1918・1919	東京都副知事	考雑8－5
石田　茂作	1894　～1977		帝室博物館	斎藤1984
和田　軍一	1896　～1998	1910	正倉院事務所長	斎藤2000
富士川　滋		1921		人雑36－8～12
軽部　慈恩	1897　～1970	1958～	日大	斎藤1984
山口　金次	1897　～1983		茅ヶ崎市	角川書店1993
足立　康	1898　～1941	1931	平塚市小鍋島	大岡1942・著作集
塩野　半十郎	1898　～1984		農業	斎藤1984
山田　淳		1923～1925	武相考古会	武相研究7
山田　蔵太郎		1923～1928	新聞記者	川崎誌考
塩　善次		1923・1928		人雑38－5
榊原　政職	1899　～1922	1918～1921・1928	京大	須田2000
小松（川村）真一	1899頃～1970	1922・1923	東大	人雑37-10
大場　磐雄	1899　～1975	1922～	国学院大	著作集
大里　雄吉		1924・1925	大場の友人	歴史地理43－2
岡　道孝	1900　～1984		川崎市久本医師	浜田1995
大岡　実	1900　～1987		建築史	
高瀬　慎吾	1900　～1991		平塚市	角川書店1993
甲野　勇	1901　～1967	1920～	東大	考古学選集
グロート	1901頃～1970	1939～1952	日本考古学研究所	領塚1996
宮本　延人	1901　～1988	1925～	台湾・東海大	
水沢　虎清		1926		史跡1－11
中谷　治宇二郎	1902　～1936	1925	東大	考古学選集
酒詰　仲男	1902　～1965	1934～	同志社大	考古学選集
山内　清男	1902　～1970	1937～	東大	考古学選集
直良　信夫	1902　～1985	1923～	早大	杉山1990
八幡　一郎	1902　～1987	1923～	東大	著作集
赤星　直忠	1902　～1991	1926～1992	横須賀市中里	横須賀考古1992
森本　六爾	1903　～1936		東京考古学会	考古学選集
岡　栄一	1903　～1964	1931～1934・68	川崎市久本医師	浜田1993
千々和　実	1903　～1985		学芸大学・板碑	
中野　敬次郎	1903　～1987		小田原市	杉山1998
宮坂　光次	1903頃～	1929	東大	史前学雑誌1－1
高橋　光蔵		1928	町田市三輪	橘樹誌、考雑
井上　頼寿		1928	三浦市	地名表5版
林　良幹		1928	横浜市新治	地名表5版
尾崎　喜左雄	1904　～1978		山北町・群馬大	斎藤1984
浜田　勘太	1904　～1984	1949～	横須賀市長浦町	横須賀考古1990
内田　輝彦	1904　～1984		藤沢市	武相文化
服部　清道	1904　～1997	1948～1997	板碑概説	寺田1997、縣1998
高橋　正人		1923～1934	慶大医学部	丘の上
江上　波夫	1906　～2002		東大	

高橋　光	1906　～		大磯町	
鈴木　一		1931		上代文化4・5
庄司　啓三		1931	橘樹考古学会	橘樹誌1―4
中山　六蔵		1931	橘樹考古学会	橘樹誌1－4
内藤　政恒	1907　～1970	1954	東京薬科大	考古学選集
三森　定男	1907　～1977	1941	横須賀市・京大	斎藤1984
久保　常晴	1907　～1978		立正大	斎藤1984
三上　次男	1907　～1987		東大	考雑73－2
吉野　清之輔		1932	横浜市港北区	橘樹誌
岩崎　一郎		1932	横浜市港北区	橘樹誌
守田　文彦		1933		丘の上11
石田　武雄	1909頃～	1928～1933	横浜考古学研	丘の上
矢島　栄一	1909　～1936	1934～1935		人雑50－12
和島　誠一	1909　～1971	1940～	岡山大	著作集
清水　裕	1909頃～1976	1928～1933	横浜考古学研	丘の上
内田　武雄	1909頃～1978		小田原市	小田原史談会
桑山　龍進	1909　～1987	1935～1954	大正大・僧侶	史前学雑誌7－2
松下　胤信	1909　～	1929～1934	大正大卒	考雑19－9
斎藤　武一	1909　～1996	1934～	相模原市	銅鐸4
樋口　清之	1909　～1997		国学院大	
内藤　晃	1909　～1997		静岡大	
斎藤　房太郎	1909頃～	1934～1937	横浜考古学研	丘の上12
佐藤　陽之助		1934・1935	横浜考古学研	丘の上12
岡田　計一		1934		銅鐸4
池上　啓介	1910頃～1977	1931～1935	史前学研究所	宮崎1977
鈴村　茂	1910　～1982		厚木市	角川書店1993
滝口　宏	1910　～1992		早大	日野1991
簡野　啓	～1935		立正大	銅鐸5・史前雑7－4
関口　斉		1935		史前学雑誌7－2
藤森　栄一	1911　～1973		長野県	著作集
岡本　太郎	1911　～1996	1952～	芸術家	岡本太郎美術館
竹下　次作	1911頃～2000	1934～1936	史前学研究所	
中根　君郎	1911頃～	1930	大田区久ヶ原	人雑45－11
神尾　明正	1912頃～1995		千葉大	神尾1996
大給　尹	1912頃～1996	1935～1943	史前学研究所	史前学雑誌7－4
森　貞成	1912頃～	1932～1937	慶大・東博	史学11－2
松岡　六郎		1937	国学院	考古雑27－12
小笠原　義隆		1937	横須賀市・僧侶	考古学8－11
杉原　荘介	1913　～1983		明大	追悼文集
立木　望隆	1913　～1995	1947～	小田原市	杉山1998
池谷　健治	1913　～1998	1934～1969	横浜市鶴見区	丘の上12
中川　直亮		1938		史前学雑誌10－1
磯野　喜悦		1938		銅鐸7
保坂　三郎	1914頃～	1937～	慶大	
永沢　譲次		1939～1940	東北大・慶大	史学18－1
西村　正衛	1915　～1995	1948～1954	早大	早稲田大学1995
日野　一郎	1915　～1997	1936～1999	武相学園	神奈川県2000
古江　亮仁	1915　～2001		川崎市民家園	
加藤　誠夫		1940～1987	南足柄市	
佐久間　昇		1940・1966	鶴見中学	貝塚19
小片　保	1916　～1980		新潟大学解剖学	斎藤1984

江藤　千万樹	1917　～1945	1937・1938	国学院大卒	斎藤1984
滝田　宏	1917　～1974		茨城県	
井手　佐重	1917　～1987		山梨県	山梨県2
清水　潤三	1917　～1988	1942～	慶大	史学
千貝　幸之助	1917　～2000	1974	横浜郷土研究会	
淺川　利一	1917　～2002		玉川学園	
永井　参治		1942	伊勢原市	
原　敬造		1942	大楠	考雑32－2
奥田　直栄	1918頃～1988		根津美術館	
武田　宗久	1918　～2001	1936	早大・千葉県	史観10・日野1991
山田　一男		1943	大磯町	武相文化
林　新	1919　～	1943	国学院大	古代文化14－3
島田　暁	1919　～2001	1943		古代文化14－3
渡辺　直経	1919　～1999		東大	人雑107－2
中沢　保	1920　～1986	1954	早大	古代1、日野1991
渡辺　勲	1920　～1994	1970～	厚木市	厚木史談会
佐野　大和	1921　～1995	1943～	横浜市金沢区	古代文化14－7
藤原　一哉	1922　～1999		茅ヶ崎市	西方Ａ遺跡報告書
中川　成夫	1922　～2000	1955～1958	立大	貝塚追悼号
庄司　隆玄		1957	茅ヶ崎市	郷土ちがさき
金谷　克己	1923　～1961	1952	相模女子大	考古雑38－3
曽野　寿彦	1923　～1969		東大	斎藤1984
丸山　次雄	1924　～1971	1954～1969	インド	近藤1998
青木　一男	1926頃～1966	1947	茅ヶ崎市・早大	鶴田1948・1954
丸子　亘	1926　～1986		立正大	立正史学62
相澤　忠洋	1926　～1989	1951	岩宿遺跡	貝塚38
榊原　松司	1926頃～1993	1972～	明星大	
白崎　高保	1926頃～	1939	東工大	人雑54－7
亀井　正道	1927　～1999	1955～	東博・日大	考雑85－2
森本　岩太郎	1928　～1998		聖マ医科大	人類学講座5
野口　義麿	1929　～1982		東京国立博物館	国学院大学1983
江藤　昭	1929　～1990	1973～1991	縄文文化研究会	
岡本　勇	1930　～1997	1948～1998	横須賀市	神奈川県2001
大津　一男	1931　～1984	1976	横浜市港南区	
久保　哲三	1931　～1989		早大	追悼論文集1993
曽禰　秀次	1931　～1997		茅ヶ崎市	郷土ちがさき
麻生　優	1931　～2000	1956～1968	千葉大	
岩本　義雄	1932　～1982	1964～	鵠沼女子高	古代学協会1982
神澤　勇一	1932　～2001	1955～1988	県立博物館	赤星資料館2001
鵜木　晶	1933　～1961	1949～1958	武相学園	杉原・戸沢1963
塚田　光	1934　～1981	1955～	下総考古学研	著作集
古山　学	1934　～2001		東大	坂本2002
林　国治		1958	赤穂原遺跡	
小島　金之助		1985	横浜	
内田　盛雄	1936頃～1993		小田原市	小田原史談会
高津　真亮		1961	横浜市池辺町	
塚田　明治	1937　～1993	1972～93	横須賀市	赤星資料館1995
和島　誠	1939　～1964	1955～	早大院生	はらから9追悼号
佐藤　安平	1940　～2002	1971～	横浜市南区	
森谷　ひろみ	～1975	1965～	千葉大学	
小島　弘義	1941　～1990	1971～	平塚市博物館	岡本1999

森　昭	1942	～1999		写真家	坂本2000
酒井　仁夫	1945	～1986頃		平塚市・福岡県教委	
清水　博	1949	～1999	1982	櫛形町教委	山梨県2000
山本　守男	1954	～1995	1976～	秦野市教委	
大河内　勉	1955	～2001		鎌倉考古研	
木村　美代治	1957	～1999	1976～	鎌倉考古研	鎌倉考古2002
村上　徹	1966	～1986	1986	慶大生	追悼論文集1988

凡例

1 本表は、神奈川県内の考古学に関与し、亡くなった者を生年順にまとめたものである。同年の者は死亡年順とした。郷土史家、鎌倉関係については多くの遺漏がある。
2 生没年が確定できない場合は「頃」としてある。没年の年齢、高校、大学の入学年などから推定したものである。一部大きな推定がある。
3 著作などがあって生年の確認できない者については、最初の著作・発表などを25歳と仮定して順に繰り入れた。一部変更したものがある。
4 県内活動期は、『神奈川県史資料編20考古資料』掲載の文献目録の年代による。一部他の資料による。文献欄の文献の多くは同書に掲載されているので参照されたい。
5 出身地などについては、神奈川県出身者は市町村名など、他県者は職業、勤務校、出身校などを記した。
6 文献は、著者姓・年代を示す。雑誌名は略称を用いたものがある。人雑―東京人類学会報告、東京人類学会雑誌、人類学雑誌、考雑―考古学雑誌、橘樹誌―橘樹考古学会誌、史跡―史跡名勝天然記念物、 考古学選集―日本考古学選集（築地書館）1～25巻、地名表―日本石器時代人民遺物発見地名表（東京帝国大学）第1～5版
7 多くの遺漏についてはお許し願いたい。今後とも内容の確認に努める所存である。

参考

斎藤　忠	1908	～		大正大	
角井　長一	1908	～	1937	横須賀市	考古学8－11
池田　健夫	1910頃	～	1928～1937	横浜市・歯科医	丘の上・松田2002
三木　文雄	1911	～	1955	国立博物館	
高橋　良	1911	～		横浜市・医学	藤沢市教委1992
玉口　時雄	1918	～	1947～	東洋大	古稀記念論文集
長田　実	1918	～		静岡県	
江坂　輝彌	1919	～		慶大	
増田　精一	1922	～		教育大	
小出　義治	1922	～		神奈川歯科大	

第２表　考古学関係研究団体と刊行雑誌など

会名（代表者名）	活動期	発行誌名・出典など
集古会（林若吉）	1896～	『集古会誌』1896～1921
太古遺跡研究会（江見水蔭）	1905～	江見1907
武蔵野会（鳥居龍蔵）	1916～1943	『武蔵野』1918～1943
神奈川県郷土研究会	1913～1917	石野1927
横浜地理歴史研究会	1914～1917	『学校タイムス』、『帰元』（石野） 『武相郷土史論』1917
武相考古会（石野瑛・谷川磐雄）	1922～1941	『武相研究』1～8（～1925）
相武史談会（沼田頼輔）	1922～	
徴古会（関東学院）	1923～1927	横浜考古学研究会に発展
学生考古会（横浜第二中学校）	1924	大場1975
八王子史談会		
横浜考古学研究会（戸根木亀之助）	1927～1939	『丘の上』1～12・15（1928～1937）
橘樹考古学会（岡栄一）	1931～1932	『橘樹考古学会誌』1－1～2－6
神奈川県中等学校歴史研究会	1932～1939	『歴史と郷土』（『相武研究』に継続）

史蹟めぐり会	1932～1944	石野1964（武相文化協会に継続）
鎌倉史蹟めぐりの会	1932～1943	沢寿郎1972
鎌倉文化研究会	1935～1940	『鎌倉』
横須賀考古学会（赤星直忠）	1935～	『横須賀考古学会年報』1～37
		『横須賀考古学会紀要』1～2
国宝史蹟研究会（八幡義生）	1938～1988	『国宝史蹟』1～46
神奈川県郷土研究連盟・武相考古会	1939～1941	『相武研究』（『郷土神奈川』に継続）
神奈川文化研究会	1940～1941	『神奈川文化』1～8（同上）
神奈川県郷土研究会（県知事）	1941～1944	『郷土神奈川』1－1～3－2
武相文化協会（石野瑛）	1946～	『武相文化』1～
神奈川県学徒考古学会	1948	小出義治1948・武相文化2（1948）
高津図書館友の会郷土史研究部	1952～1966	『考古たちばな』1～7
武蔵地方史研究会（和島誠一）	1954～1990	『研究メモ』1～89
小田原史談会（中野敬次郎）	1955～	『史談小田原』1～192
鎌倉文化研究会（沢寿郎）	1959～	『鎌倉』1～95
県央史談会（小金喜一）	1961～	『県央史談』1～41
湘南考古学同好会（服部清道）	1963～1968	『会報』1
三浦古文化研究会	1965～1994	『三浦古文化』1～55
鎌倉考古学研究会（三上次男）	1967頃	報告書1967
相模考古学研究会（小野正敏）	1968～1979	分布調査報告書1971
小田原考古学研究会（杉山博久）	1969～	『小田原考古学会会報』1～10
港北ニュータウン内埋蔵文化財調査団	1970～	『港北のむかし』1～90
神奈川考古同人会（小川裕久）	1976～	『神奈川考古』1～38
神奈川県遺跡調査研究発表会	1977～1990	『同発表要旨』1～26　（神奈川県考古学会に継続）
相武古代研究会	1977～	『相武古代研究』1～3
緑区郷土研究会考古部会	1977～	『都筑文化』1～5
湘南考古学同好会（服部清道）	1979～	『湘南考古学同好会会報』1～90
鎌倉考古学研究所（大三輪竜彦）	1980～	『鎌倉考古』1～48
縄文文化研究会（江藤　昭）	1981～	『縄文文化研究会紀要』1～8
利根川同人（坂本彰）	1981～	『利根川』1～23
西相模考古学研究会（曽根博明）	1982～	『西相模考古』1～11
かながわ考古学同好会（川島東平）	1984～	『かながわ考古学同好会会報』1～28
		『考古学を学ぶ』1996
神奈川地域史研究会（児玉幸多）	1984～	『神奈川地域史研究』1～20
石器文化研究会（安蒜政雄・白石浩之）	1985～	『石器文化研究』1～10
三浦文化研究会（石渡勝雄）	1985～	『御浦』1～18
東国土器研究会（服部敬史）	1988～	『東国土器研究』1～5
縄文時代文化研究会（鈴木保彦）	1989～	『縄文時代』1～13
神奈川県考古学会（日野一郎）	1991～	『考古論叢神奈河』1～10
		『考古かながわ』1～25
中世都市研究会（斎木秀雄）	1991～	『中世都市研究』1～3
相模の古代を考える会（大上周三）	1995～	
下寺尾寺院跡研究会（岡本孝之）	1995～	『下寺尾寺院跡研究会会報』1～30
中世瓦研究会（小林康幸）	1995～	小林2002（考古かながわ25）
石器に学ぶ会（織笠昭）	1997～	『石器に学ぶ』1（1998）～4
神奈川の貝塚に学ぶ会（川口徳治朗）	1999～	『私たちのフィールドノート』1
弘明寺研究会	2000～	岡本他2000（神奈川考古37）
神奈川災害史研究会（上本進二）	2001～	『神奈川災害史研究』1～8
東国中世考古学研究会（斎木秀雄）	2002～	

第３表　神奈川県考古学年表

1877（明治10）	モース　横浜からの車中で大森貝塚発見・発掘（モース1879）
1879（明治12）	ミルン　横浜根岸村で遺跡調査、博物局大橋某確認（白井1932）
1879	シーボルト　横浜でNotes on Japanese Archaeology 刊行
1883（明治16）	富士谷孝雄、横浜市中村横穴墓、藤塚貝塚調査（富士谷1883、不明1886）
1883	坪井・白井　中村横穴墓調査（白井1932、岡本勇1985）
1884	坪井正五郎、白井光太郎ら　人類学会（1886に東京人類学会）創立
1886（明治19）	人類学会　横浜税関山で採集　船越小二郎（戸部町5丁目138）入会
1895（明治28）	考古学会（1941に日本考古学会）設立。『考古学会雑誌』創刊
1897（明治30）	東京帝国大学『日本石器時代人民遺物発見地名表』第1版刊行
	税関山遺跡など（1898第2版、1901第3版、1917第4版、1928第5版）
1897	小林與三郎　横浜の貝塚など分布調査
1898（明治31）	八木奘三郎ら　平塚市万田八重窪横穴墓群発掘
1902（明治35）	井上欣一　藤沢市代官山横穴調査『長後小誌』
1902	野中完一　二宮町川匂神社の瓦にふれる（考古界2－7）
1903（明治36）	水谷乙次郎・伊藤望蜀　川崎市南加瀬貝塚発掘。江見、人類学会に報告
1905（明治38）	マンロー・八木奘三郎　横浜市三ッ沢貝塚発掘　竪穴住居、人骨発見
1905	マンロー　小田原で旧石器？採集
1906（明治39）	マンロー・八木奘三郎　南加瀬貝塚発掘（1915破壊）
1907（明治40）	江見水蔭『地底探検記』刊行（1909『地中の秘密』など）
1907	坪井正五郎ら　横浜市鶴見の瓢箪山古墳、横穴発掘
1908（明治41）	マンロー　Prehistoric Japan　刊行
1908	坪井正五郎　寒川町大神塚古墳発掘
1918（大正7）	沼田頼輔　平塚国府説（1927・1933）
1919（大正8）	住田正一　横須賀市宗元寺の古瓦紹介
1921（大正10）	榊原政職　三浦市諸磯貝塚発掘　諸磯式土器の提唱
1922（大正11）	石野瑛・谷川（大場）磐雄ら武相考古会設立。『武相研究』刊行（1～8）
1922	赤星直忠　宗元寺跡調査開始（赤星1922・1927・1935など）
1922	八幡一郎ら　横浜市保土ヶ谷（帷子）貝塚発掘
1923（大正12）	茅ヶ崎市で相模川旧橋脚出現（関東大震災）
1924（大正13）	赤星直忠　横須賀市田戸遺跡調査開始
1924	松村瞭、八幡一郎、甲野勇、中谷治宇二郎　平塚市万田貝塚発掘
1924	中山毎吉・矢後駒吉『相模国分寺志』刊行
1925（大正14）	石野瑛　平塚市五領ヶ台貝塚発掘　西村真次も実施
1926（大正15）	大山柏　相模原市勝坂遺跡発掘
1927（昭和2）	横浜考古学研究会発足（～1939）
1927	相模湖町寸沢嵐遺跡発見（国史跡指定）（1928城山町川尻遺跡発見）
1927	大山柏　史前学雑誌創刊（～1943）　鶴見川流域の貝塚調査
1928（昭和3）	橋本増吉　日吉遺跡報告（1932～弥生集落発掘　西岡1939、清水1942）
1929（昭和4）	赤星直忠　三浦市三戸遺跡報告（1930赤星　横須賀市茅山貝塚報告）
1930（昭和5）	赤星直忠・山内清男　田戸遺跡発掘（赤星1935、山内1937）
1930	森本六爾ら東京考古学会設立。石野瑛参加。『考古学』創刊（～1943）
1931（昭和6）	岡栄一ら　橘樹考古学会発足（～1932）
1931	八幡一郎　横浜市折本で竪穴住居発掘
1931	田辺泰・足立康　国分寺論争
1932（昭和7）	山内清男　日本遠古之文化（ドルメン）発表
1933（昭和8）	石野瑛　伊勢原市八幡台遺跡発掘（国史跡指定）
1934（昭和9）	石野瑛『考古集録』第1　刊行（第二1935、第三1936、第四1941）
1935（昭和10）	石野瑛ら　平塚市真土大塚山古墳発掘（1960日野一郎　再調査）
1935	赤星直忠　横須賀考古学会結成。榎戸貝塚発掘（～1939）

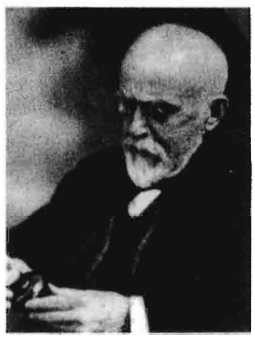
1937（昭和12）	諸磯貝塚で竪穴住居跡発掘（赤星・酒詰1938）三浦半島で最初
1937	川崎市日吉加瀬（白山）古墳発掘（慶応大学1953）
1938（昭和13）	酒詰仲男　神奈川県下貝塚調査概報　発表
1938	大井町中屋敷で土偶発見
1941（昭和16）	江坂輝弥　平塚市五領ヶ台貝塚発掘
1941	日野一郎「宝篋印塔形式の発達とその地方相」『古代文化』12－8～12
1946（昭和21）	グロート、後藤守一　三浦市三戸遺跡発掘（後藤1948、領塚1996）
1946	石野瑛　武相文化協会設立
1947（昭和22）	赤星　野島貝塚発掘（赤星1948）、西村正衛　茅山貝塚発掘（西村1950）
1948（昭和23）	日本考古学協会設立
1949（昭和24）	岡本勇　横須賀市平坂貝塚発掘
1949	津久井町三ヶ木遺跡（津久井高校）で弥生土器出土
1950（昭和25）	横須賀市夏島貝塚発掘（1955第2次調査）
1951（昭和26）	吉田格　横浜市称名寺貝塚発掘
1951	明治大学　横浜市大丸遺跡発掘（～1952）
1955（昭和30）	和島誠一　横浜市南堀貝塚発掘
1958（昭和33）	赤星直忠　三浦市大浦山遺跡発掘（1964）
1958	小田原市千代寺院跡発掘（1960第2次調査）
1958	和島誠一　『横浜市史』1
1959（昭和34）	和島誠一　横浜市三殿台遺跡発掘（～1961）
1959	服部清道・寺田兼方　藤沢市西富貝塚発掘
1960（昭和35）	樋口清之　小田原市下曽我遺跡発掘（～1962）
1960	横須賀市博物館　吉井貝塚発掘（～1961）
1961（昭和36）	箱根町朝日遺跡で旧石器発見
1963（昭和38）	服部清道・寺田兼方　藤沢市稲荷台地遺跡群の発掘（～1967）
1965（昭和40）	海老名市相模国分寺跡発掘（～1966）
1965～1970	渡辺誠　川崎市初山遺跡の発掘
1967（昭和42）	神奈川県立博物館開館（1995年に歴史博物館）
1968（昭和43）	『神奈川県埋蔵文化財遺跡地図』刊行（1971年第2版）
1968～1969	大和市月見野遺跡群発掘調査
1970（昭和45）	横浜市港北ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査団結成（～1989）
1972（昭和47）	神奈川県教育委員会　厚木市鳶尾遺跡の発掘調査
	以後伊勢原市下北原遺跡、海老名市上浜田遺跡、相模原市当麻遺跡など
1973（昭和48）	樋口清之・小島弘義ら　平塚低地の遺跡分布調査
1976（昭和51）	神奈川考古同人会（代表小川裕久）発足　『神奈川考古』刊行
1976	河野喜映　土師器編年案提示
1977（昭和52）	神奈川県遺跡調査研究発表会　横浜で開催
1977	綾瀬市寺尾遺跡の発掘
1979（昭和54）	大川　清　横浜市長者ヶ原遺跡発掘（～1981）
1979	東海大学考古学研究室開設
1980（昭和55）	玉川文化財研究所創立
1980	鎌倉考古学研究所（所長大三輪龍彦）発足
1982（昭和57）	神奈川県立埋蔵文化財センター発足（1993かながわ考古学財団発足）
1982	小田原城の本格的な発掘開始
1983（昭和58）	綾瀬市宮久保遺跡で木簡出土
1984（昭和59）	小島弘義　平塚国府説発表（1995明石新　国府域設定）
1984	藤沢市遺跡調査発表会開催
1985（昭和60）	平塚市遺跡調査会（会長日野一郎）発足
1985	相武考古学研究所創立（1991から盤古堂考古学研究所）
1985～	清川村宮ヶ瀬遺跡群の発掘　以後池子、吉岡など大規模発掘実施
1986～1990	藤沢市慶応ＳＦＣ遺跡調査

1989（平成1）　横浜市埋蔵文化財センター開設
1991（平成3）　神奈川県考古学会（会長日野一郎）発足 『考古論叢神奈河』刊行
1994（平成6）　神奈川県考古学会　考古学講座『横穴墓の謎』開催
1996（平成8）　かながわ考古学財団パネルディスカッション『敷石住居の謎に迫る』
1997（平成9）　茅ヶ崎市教育委員会『茅ヶ崎市下寺尾寺院跡の研究』刊行
1998（平成10）　小田原市中里遺跡見学会に1万人
1999（平成11）　逗子市・葉山町　長柄桜山古墳群発見（国指定2002）
2002（平成14）　茅ヶ崎市高座郡衙発見、下寺尾寺院跡発掘進む

文献

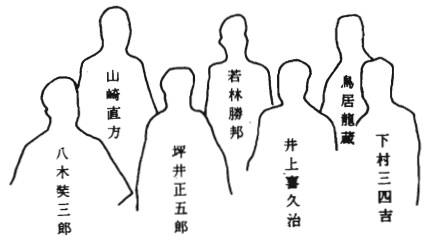
縣　敏夫1990　「『武蔵野』時代の三輪善之助」『庚申』82
縣　敏夫1999　『服部清道と『板碑概説』 ある板碑研究者の歩み』
赤星直忠・岡本勇1979　『神奈川県史』資料編20　考古
石川栄吉他編1987　『文化人類学事典』弘文堂
石野　瑛1927　「武相考古関係の会」『趣味の考古学』（『考古集録第一』1934所収）
石野　瑛1941　「森照吉氏蒐集相模中部考古資料目録」『神奈川県史跡名称天然記念物調査報告書』9（『考古集録第四』1941所収）
岩崎卓也1988　「蒔田鎗次郎論」『弥生文化の研究』10
上田　薫・寺田兼方1985　「藤沢市考古学関係主要文献一覧」『湘南考古学同好会会報』20
江見水陰1909　「故西谷珠雄君」『地中の秘密』
大貫英明2001　「相模湖町の原始・古代」『相模湖町史』歴史編
大場磐雄1975　「楽石雑筆」『大場磐雄著作集』
岡　栄一1934　「林喜楽翁」『ドルメン』3－5
岡部一興編2000　『宣教師ルーミスと明治日本』有隣新書
岡本　勇・麻生　優1958　『日本石器時代総合文献目録』
岡本　勇1985　「明治時代神奈川県下考古学研究の先駆者たち」『神奈川地域史研究』2
岡本　勇1985　「弥生文化研究と蒔田鎗次郎」『論集日本原史』
岡本　勇1990　「海老名市域における考古学研究のあゆみ」『えびなの歴史』1
岡本　勇1992　「かながわの考古学をきずいた人たち」『考古論叢神奈河』1
岡本孝之1993　「湘南の考古学100年を考える」『湘南考古学同好会会報』50
岡本孝之1995　「広田清治氏と茅ヶ崎駅の考古学―石神古墳との関連から―」『下寺尾寺院跡研究会会報』9
岡本孝之1997　「茅ヶ崎の坪井正五郎」『茅ヶ崎市文化資料館研究報告』5
岡本孝之1999　「考古学研究のあゆみ」『平塚市史』11上　別編考古（1）
岡本孝之2000　「二宮町上海の銅鏃」『西相模考古』9
岡本孝之2001　「横浜考古学事始―100年前の歩けオロジスト・小林與三郎のこと―」『考古論叢神奈河』9
神尾明正1996　「学位論文としての園生貝塚研究から今日まで－神尾明正先生の研究の到達点－」『貝塚研究』1
桑原千代子1983　『わがマンロー伝』
近藤英夫1998　「私たちと丸山コレクション」『丸山次雄コレクション覚え書－新しい考古学のための基礎研究－』1
斎藤　忠1984　『日本考古学史辞典』東京堂出版
斎藤　忠2000　『郷土の好古家・考古学者たち（東日本編）』
斎藤　忠2000　『郷土の好古家・考古学者たち（西日本編）』
斎藤　忠監修2001　『江見水蔭『地底探検記』の世界　解説・研究編』
坂本　彰1993　「ふるさと川和―「博覧強記」への道とその背景―」『博物学者岩沢正作記念論集』群馬県考古学研究所編
坂本　彰1994　「三枚の履歴書―岩沢正作の生涯とその若き日について―」『多摩考古』24
坂本　彰1999　「折本新緑―港北ニュータウン遺跡群の発掘事始め―」『岡本勇先生追悼文集』
坂本　彰2000　「有隣塾と中井幸太郎―岩沢正作の軌跡を追う―」『利根川』21
坂本　彰2000　「ヒゲの兄貴―森昭さんの思い出―」『利根川』21
坂本　彰2002　「農耕社会の原像を求めて―古山学さんの思い出」『利根川』23―
沢　寿郎1972　『鎌倉―鎌倉史蹟めぐりの会記録―』
白井光太郎1932　「武蔵国久良郡石川中村穴居記」『ドルメン』9月号

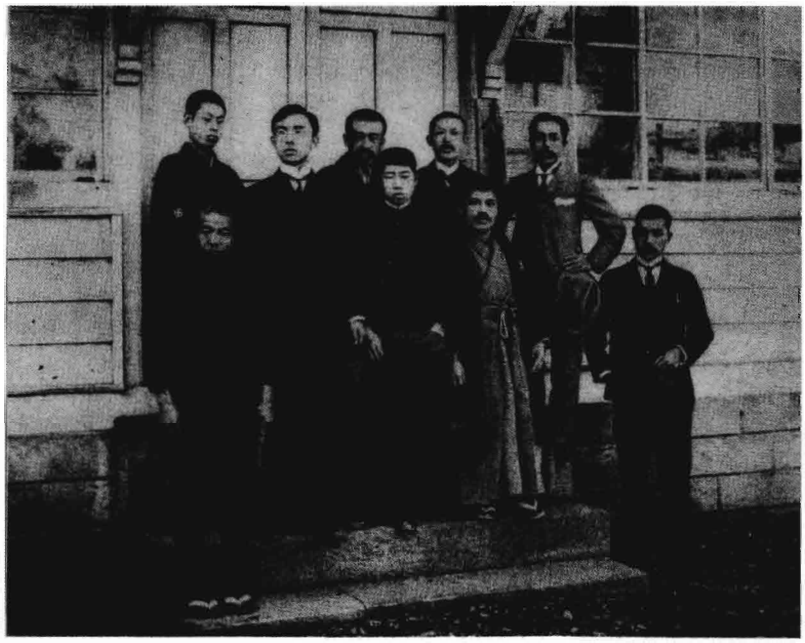
杉山荘平1984　「江見水陰論」『縄文文化の研究』10
杉山博久1976　「大磯丘陵の横穴墓群―研究史的回顧と展望―」『小田原地方史研究』8
杉山博久1989　「市内の遺跡とその調査・研究の歴史」『南足柄市史』資料編1
杉山博久1990　『直良信夫と考古学研究』
杉山博久1994　「考古学的研究の回顧」『二宮町史』通史編
杉山博久1998　「小田原市域の遺跡群とその研究の歩み」『小田原市史』通史編
杉山博久1999　『魔道に魅入られた男たち』
鈴木一男1995　「大磯町における遺跡調査の記録―先人たちの偉業を振り返る―」『大磯町史研究』4
須田英一2000　「榊原政職と諸磯遺跡」『横須賀考古学会研究紀要』2
住田正一1968　『古瓦』学生社
寺田兼方1985　「藤沢における考古学研究のあゆみ」『湘南考古学同好会会報』20
寺田兼方1998　「服部清道先生と湘南考古学同好会」『湘南考古学同好会会報』71
近野正幸2001　「沼田頼輔と私家版『宮瀬村の伝説と歴史』」『立正史学』90
服部清道1986～1994　「森本六爾伝の側面(1)～(15)」『湘南考古学同好会会報』24～54
服部清道1996　「森本六爾さんに会う(1)～(2)」『湘南考古学同好会会報』63・64
浜田晋介1993　「川崎における考古学の先達―橘樹考古学会と岡栄一」『川崎市市民ミュージアム紀要』6
浜田晋介1995　「岡道孝コレクション」『川崎市市民ミュージアム収蔵品目録』考古資料1
日野一郎1982　「地域考古学の先達　神奈川県」『考古学ジャーナル』207
日野一郎1991　「神奈川県における考古学研究と早稲田大学」『古代』92
藤森栄一1969　「遥かなる両角守一」『考古学ジャーナル』29
宮崎　糺1977　「池上啓介さんを偲んで」『考古学ジャーナル』142
八木奘三郎1895　「故人類学会中央委員井上喜久治略伝」『東京人類学会雑誌』108
山岸良二1989　「慶応義塾の「独鈷石」」『考古学の世界』
領塚正浩1996　「ジェラード・グロート神父と日本考古学研究所―失われた考古学史を求めて―」『鎌ヶ谷市史研究』9
ハンス・ケルナー1974　『シーボルト父子伝』
ベルツ1952・1955　『ベルツの日記』岩波文庫
赤星直忠博士文化財資料館1995　「副館長塚田明治氏追想」『文化財資料館だより』2
赤星直忠博士文化財資料館2001　「神澤勇一氏の追想」『文化財資料館だより』10
海老名市1995　『中山毎吉　―その人と業績』海老名市史叢書1
角川書店1993　『神奈川県姓氏家系大辞典』角川日本姓氏家系大辞典14
かながわ考古学財団2000・2001　「神奈川県における奈良・平安時代の考古学的研究―その歩みと今後の視点―」(Ⅰ・Ⅱ)『かながわの考古学　研究紀要』5・6
神奈川県考古学会2000　「日野一郎先生追悼記念号」『考古論叢神奈河』8
神奈川県考古学会2001　「岡本勇先生追悼記念号」『考古論叢神奈河』9
鎌倉考古学研究所2002　「追悼　木村美代治所員」『鎌倉考古』47・48
國學院大学考古学資料館1983　「故野口義麿氏寄贈資料」『国学院大学考古学資料館要覧』1983
國學院大学考古学資料館2001　「徳富蘇峰旧蔵資料」『国学院大学考古学資料館要覧』2001
古代学協会1982　「岩本義雄助教授を偲んで」『古代文化』34－5
湘南考古学同好会1997　「服部清道会長追悼号」『湘南考古学同好会会報』68
縄文時代文化研究会1999　「縄文時代文化研究の100年」『縄文時代』10
多摩考古学研究会1968　『甲野勇先生の歩み』
ドイツ-日本研究所1996　『シーボルト父子のみた日本　生誕200年記念』
日本歴史学会1999　『日本史研究者辞典』吉川弘文館
はらから会1965　「和島誠君追悼号」『はらから』9早大第一文学部東洋史専修卒業生の会
北海道開拓記念館2002　『海を渡ったアイヌの工芸　英国人医師マンローのコレクションから』
山梨県考古学協会2000　「清水博事務局長追悼号」『山梨県考古学協会誌』11
横須賀考古学会1990　「浜田勘太先生追悼号」『横須賀考古学会年報』28
横須賀考古学会1992　『赤星直忠の人間と学問』
早稲田大学校地埋蔵文化財調査室1995　「西村正衛先生追悼号」『早大文化財調査室室報』3
早稲田大学史学会1965　「吉田東伍博士生誕百年記念」『史観』71



モース

内山正居
石田収蔵
大野延太郎
木川半之亟
鳥居龍蔵
野中完一
坪井正五郎
柴田常恵


八木奘三郎
山崎直方
坪井正五郎
若林勝邦
井上喜久治
鳥居龍蔵
下村三四吉



シーボルト

坪井正五郎

マンロー

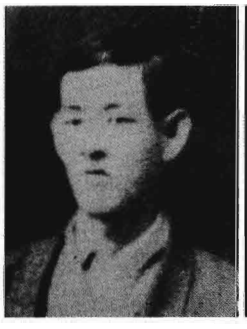
八木弈三郎

沼田頼輔

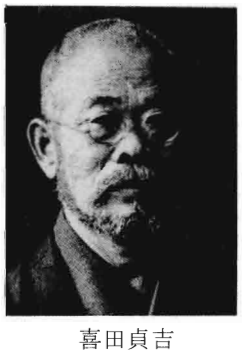
中山毎吉

江見水蔭

鳥居龍蔵


蒔田鎗次郎

高橋健自


喜田貞吉

森　照吉

柴田常恵

清野謙次

石野　瑛

大山　柏

大場磐雄

甲野　勇

グロート

山内清男

直良信夫

八幡一郎

赤星直忠

森本六爾

岡　栄一

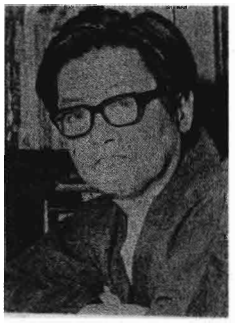
尾崎喜左雄

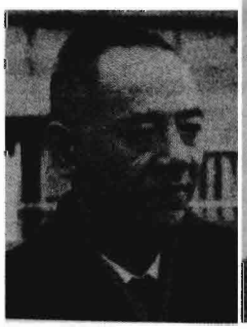
浜田勘太

服部清道

和島誠一

池上啓介


藤森栄一


杉原荘介

西村正衛

古江亮仁

白崎高保

大場磐雄　石野　瑛　日野一郎　永井参治

岡本　勇

塚田明治

旧石器時代　マンローから月見野　相模野編年確立

鈴木　次郎

はじめに

日本に旧石器時代文化が存在することを科学的に証明したのは、1949に行われた群馬県岩宿遺跡の発掘調査である。しかし、旧石器時代文化の追究は岩宿遺跡の発見以前にも何人もの研究者によって試みられており、中でもマンローが国内最初の旧石器時代遺跡の探究を神奈川県内で行ったことは注目される。また、旧石器時代の本格的な調査・研究は、岩宿遺跡の調査後、北関東及び信州を中心に進められ、南関東、中でも神奈川県では、厚く堆積した関東ローム層が災いしてか調査・研究が大きく立ち後れていた。しかし、岩宿遺跡調査から20年を経た1960年代後半以降、大和市月見野遺跡群の発掘調査を契機として、県内でも調査・研究が本格的に進められ、現在では300箇所余りの旧石器時代遺跡の存在が明らかにされ、石器群の編年研究や遺跡の構造研究（集落研究）などが大きく進展した。

ここでは、県内の旧石器時代研究の歩みを学史上注目される調査を中心に紹介するとともに、最近の研究情勢についてもふれることにしたい。

1．岩宿遺跡発見以前の調査・研究

日本の近代考古学の幕開けは、1877年（明治10年）にE．S．モースが行った大森貝塚の発掘調査であることは広く知られているが、旧石器時代の最初の調査もやはり外国人の手によって試みられた。1905年（明治38年）、横浜に居留する英人医師N．G．マンローは、神奈川県西部の早川及び酒匂川流域の調査を行って礫層や礫層上の赤色粘土層から旧石器状の角礫を採集し、1911年（明治44年）に刊行した『先史の日本』（Prehistoric Japan）で紹介している。その中でマンローは、これらの角礫は、河床で礫がぶつかり合ってできた可能性があるとしながらも、ヨーロッパやアメリカで発見されているエオリスや粗雑な旧石器に類似するとしたうえで、日本の更新世には象・熊・鹿・野牛・野馬・犀などが生息しており、旧石器時代の人類が陸橋づたいに日本に渡ってきた可能性があることを指摘している（Munro 1911）。こうしたマンローの指摘は、更新世の動物相や陸橋との関係で人類の渡来を考えるなど現在でも傾聴に値する重要な内容をもつものであるが、当時の考古学界は縄文時代人の人種論争に明け暮れ、マンローの発言に耳を貸すような状況ではなかった。なお、マンローの報告した資料については、岩宿遺跡調査後の旧石器時代研究の第一人者である芹沢長介は、写真による観察ながら最初は自然礫としていたが（芹沢1957）、後には人工的な石器の可能性があると積極的な評価を行っている（芹沢1969）。

このほか県内の調査としては、永沢譲次が1939年（昭和14年）に、横浜市港北区日吉や川崎市中原区井田の砂礫層中から人工の疑いのある石片や「研磨した匙形骨器」を発見したと報告している

(永沢1939)。

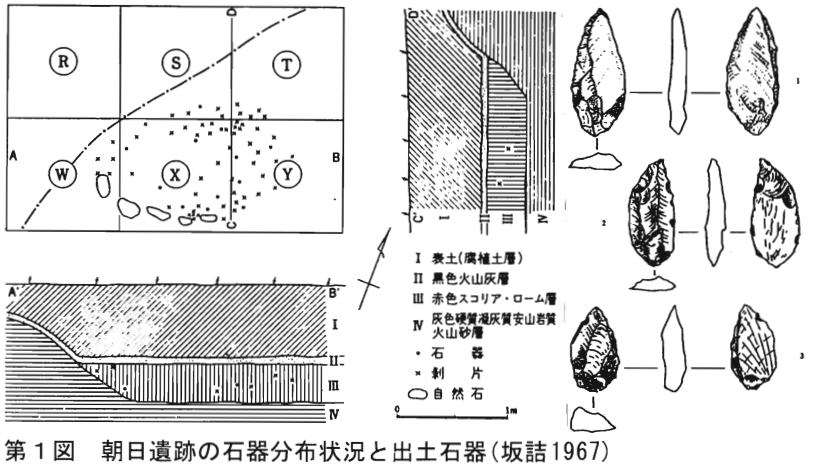
2．岩宿遺跡調査後の研究と神奈川県内の研究初期の調査

大正・昭和と、マンローのように旧石器時代文化の存在を積極的に追究した何人もの研究者がいたが、第二次大戦直後まではいずれも実を結ぶことはなかった。それまでの考古学界の常識として、発掘調査は縄文土器が出土する黒土層を掘り下げると終了しており、下層の関東ローム層は、活発な火山活動によって人類の生活ができない環境で堆積したと考えられており、発掘調査の対象とはされていなかった。

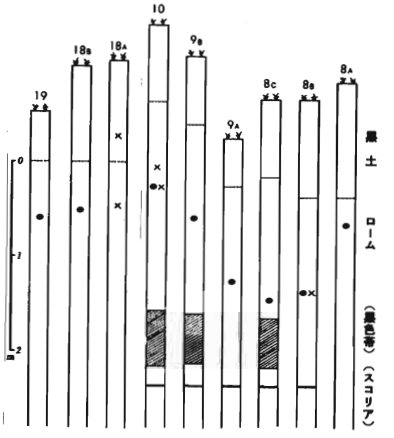
群馬県岩宿遺跡は、このような既成観念に縛られることのない民間研究者の相沢忠洋によって1948年に発見され、翌1949年に明治大学によって発掘調査が行われた（杉原1956a)。岩宿遺跡の発掘調査を契機として、その後数年以内には全国各地で旧石器時代遺跡の発見が相次ぎ、発掘調査も行われた。1950年代半ばには、研究の先駆者である杉原荘介や芹沢長介により関東・中部地方の調査資料をもとに最初の編年が作られた(1)。それらはナイフ形石器・切出形石器・尖頭器といった代表的な石器を地質学の示準化石になぞらえた示準石器として位置付け、石器群の出土層位を考慮して組み立てた編年であり、こうした編年は1965年に刊行された「日本の考古学」第Ⅰ巻（先土器時代）において集大成され、敲打器文化→刃器文化→尖頭器文化→細石器文化という編年体系により全国各地の豊富な資料が位置付けられた。しかし、やがて各地の多様な内容をもつ石器群によって示準石器による編年の矛盾が明らかとなり、1960年代後半には石器群の新たな体系化が模索されはじめた。

次に、こうした研究初期の神奈川県内の状況をみると、最初に遺跡が発見されたのは1952年のことで、鎌倉市粟船山遺跡と相模原市古山遺跡である。粟船山遺跡は、吉崎昌一等が鎌倉市内の建設残土から赤土（ローム）の付着した黒曜石製剥片を発見し、工事関係者からの聞き取りにより土取りを行った遺跡の所在を確認したことが報告されている（吉崎1954)。また古山遺跡は、地質学者の戸谷洋が関東ローム層の調査の折りに露頭断面の同一層位に河川礫が点在するのを発見したもので、戸谷はすでに岩宿遺跡や茂呂遺跡の調査を見学して旧石器時代の遺跡には礫群が伴うことを知っており、自然の営力では河川礫が関東ローム層中に入り込むことは考えられないことから、これらの礫が礫群の一部をなす可能性が高いと考えたのである（戸谷・貝塚1956)。

発掘調査としては、岡本勇等が1957年に行った横浜市瀬谷区本郷遺跡が最初であり、約１坪の範囲から頁岩・チャート等の剥片７点と若干の石片を発掘している（和島・岡本1957)。その後1961年には、坂詰秀一が箱根町朝日遺跡において配石で区画された石器集中１箇所から数点のナイフ形石器を含む石器群を発掘しており（第１図、坂詰1967)、1963年には、藤沢市稲荷台地遺跡群Ｓ地点（小田1965）でナイフ形石器を伴う石器群が、また相模原市塩田遺跡（岡本1964）で細石刃を伴う石器群がそれぞれ発掘されている。これらの発掘調査は、いずれも小規模なもので塩田遺跡の調査を除いて石器の発見を契機とした単発的な調査であり、出土石器の位置付けもその時点での編年研究



第１図　朝日遺跡の石器分布状況と出土石器（坂詰1967）



第２図　岡本勇等の調査遺跡の層位柱状図（岡本1964）

●は礫群、×は石器、9は古山遺跡、18は塩田遺跡

に照らして捉えているだけであった。

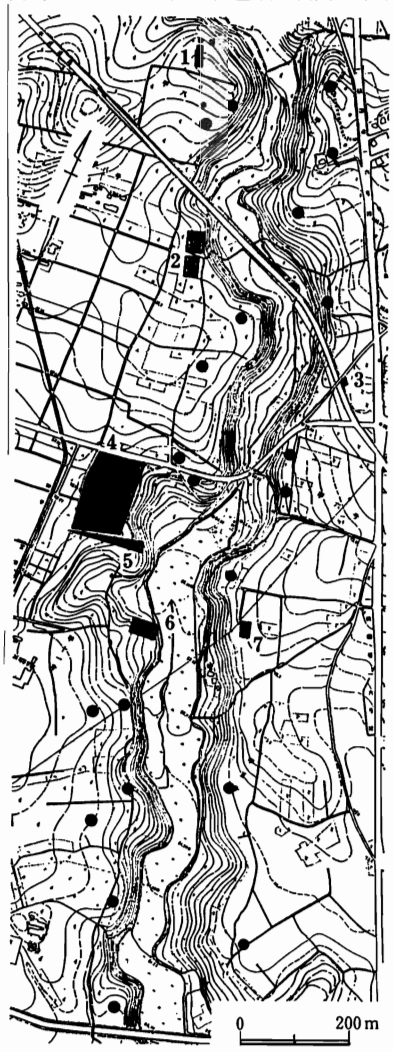
３．相模野台地の遺跡群調査

岡本勇と松沢亜生は、1960年から数年にわたって相模野台地の遺跡分布調査を行い、相模原・大和・座間・海老名各市域の相模野台地北部において42箇所の遺跡の存在を明らかにするとともに、各遺跡の石器や礫等の出土層位を柱状図で示した（第２図）。そして、これらの遺跡は相模野台地を刻んで流れる中小河川に沿って線状に分布することや、ナイフ形石器・片面加工及び両面加工の尖頭器・細石刃といった特徴的な石器の関東ローム層中の出土層位を観察して石器群の編年が可能なことを指摘している（岡本1964、岡本・松沢1965）。また、前述の塩田遺跡の発掘調査は、分布調査で発見した遺跡の内容を発掘によって明らかにしようとしたもので、ローム層直上の褐色土から有舌尖頭器や縄文早期の土器を、ローム層上部から細石刃・細石核をもつ石器群を発掘している。こうした岡本・松沢の調査は、県内における旧石器時代遺跡の最初の本格的な調査として位置付けられ、その後の相模考古学研究会の調査に大きな影響を与えた。

相模考古学研究会は、明治大学の学生によって組織された研究グループで、1967年から数年にわたって相模野台地全域の遺跡分布調査を行い、岡本等が報告した遺跡を含め167箇所の遺跡の存在を明らかにした（相模考古学研究会1971）。この調査では、立川ローム層を黒色帯（B1層～B5層）と黄褐色ローム（L1層～L6層）によって分層区分し(2)、発見した石器や礫の出土層位を記録している。そして、遺跡は中小河川に臨んだ「張出し地形」に立地することが多いこと、河川の上流部や合流部に特に遺跡が集中する傾向があることを指摘している。この分布調査が注目されるのは、相模野台地全域での旧石器時代遺跡の分布状況や立地あるいは層位的な遺跡の増減や礫群の消長などを明らかにしたことと、月見野遺跡群など分布調査で発見した遺跡がその後発掘調査され、今日の編年研究や遺跡群研究のきっかけを作ったことである。

4．月見野遺跡群の発掘調査とその後の調査・研究

1968年に相模考古学研究会が境川支流の目黒川流域の分布調査を行った時には、その大和市域南北2kmの範囲は土地区画整理事業の真っ最中で、縦横に建設された道路脇には多数のローム露頭面が作られ、両岸の台地は雛壇造成により各層位で削平されていた。その結果、2kmの範囲の両岸から19箇所の遺跡が発見され（第３図）、多量の石器が採集された。そして、その中の４遺跡10地点が月見野遺跡群として明治大学によって1968年と1969年の二次にわたり発掘調査された（明治大学考古学研究室月見野遺跡群調査団1969）。また、同じく遺跡分布調査で発見された綾瀬市上土棚遺跡もやはり1968・1969年に明治大学によって発掘調査が行われた。



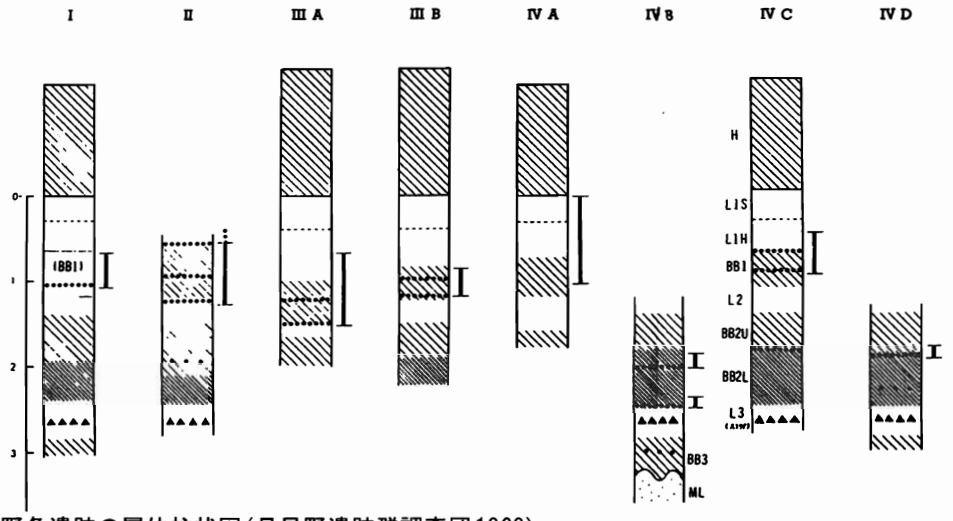
第３図　月見野遺跡群の地形と遺跡の立地（鈴木1989）

網線部：発掘された遺跡の範囲

1　月見野第Ⅳ遺跡
2　月見野第Ⅲ遺跡
3　相模野第149遺跡
4　上野遺跡第１地点
5　上野遺跡第２地点
6　月見野第Ⅱ遺跡
7　月見野第Ⅰ遺跡

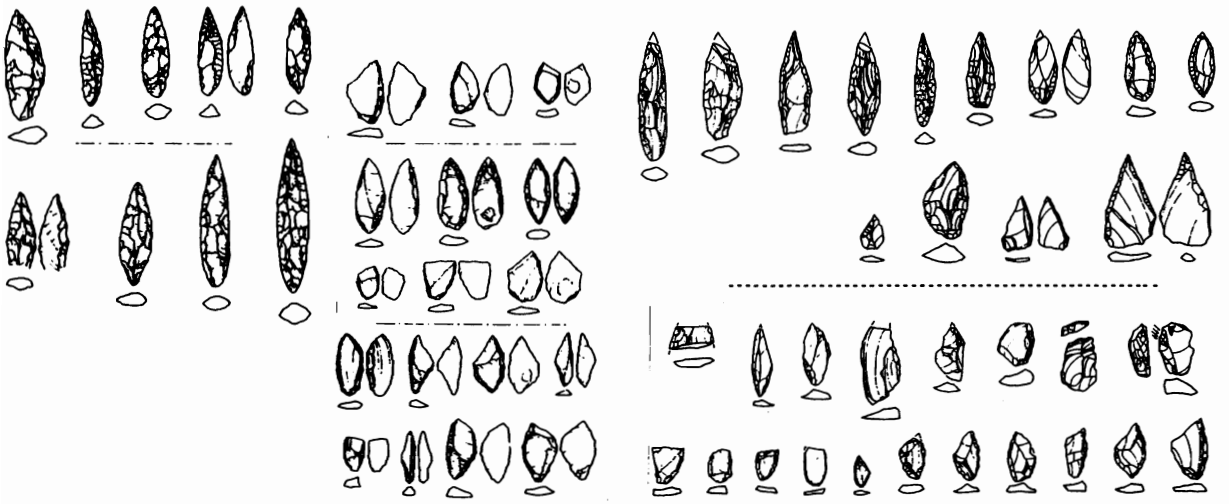
月見野遺跡群は、個々の遺跡では相前後して調査された東京都野川遺跡（小林・小田1971）ほどの文化層の重複はみられないものの、遺跡群全体では立川ローム層上半部から多数の重複した文化層が発見され（第４図）、旧石器時代後半のナイフ形石器や槍先形尖頭器を主体とする石器群の細かな変遷が層位的に明らかにされた（第５図）。それは、石器の垂直分布と礫群との関係から重複した文化層の出土層位を生活面として把握したことによる。また平面的には、広範囲に発掘した遺跡が多く、石器が集中する多数のブロックと礫群を検出し、1966年の埼玉県砂川遺跡の調査で試みた個体別資料の分析（戸沢1968）によってブロック間の関係など遺跡の構造研究も行われた（第６図）。月見野遺跡群の調査が行われた1960年代後半は、ナイフ形石器・槍先形尖頭器・細石刃といった示準石器による編年研究の限界など旧石器時代の研究が閉塞状況にあったが、月見野遺跡群や野川遺跡の調査は、それまでの旧石器時代遺跡の認識を大きく変えるとともに、石器群の編年研究や遺跡の構造研究などにおいて新たな研究視点を提示したものとして学史上特筆される。

一方、相模考古学研究会も月見野遺跡群の調査後、1970年に大和市相模野第149遺跡（鈴木1989）、1971年に綾瀬市小園前畑遺跡（小野・鈴木他1972）、1972～1973年に地蔵坂遺跡（相模考古学研究会1974）、1975年に報恩寺遺跡（鈴木・矢島1979）をそれぞれ発掘調査している。これらの調査は、月見野遺跡群の調査に比べて小規模ながら縄文時代草創期初頭の土器を伴う石器群（相模野第149遺跡）や、細石刃石器群（相模野第149遺跡・報恩寺遺跡）、ナイフ形石器文化前半（B3層）の石器群（地蔵坂遺跡）など月見



第４図　月見野各遺跡の層位柱状図（月見野遺跡群調査団1969）

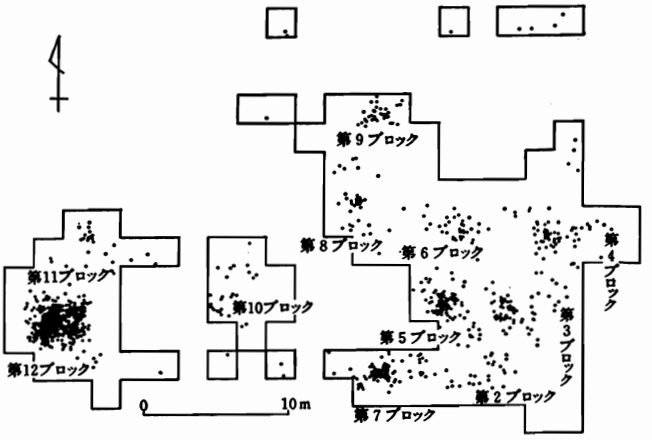
●●●は礫群の位置、I は包含層の範囲を示す



第５図　月見野第ⅣＡ遺跡の出土石器（約1/4　左図：月見野遺跡群調査団1969、右図：矢島・鈴木1976）

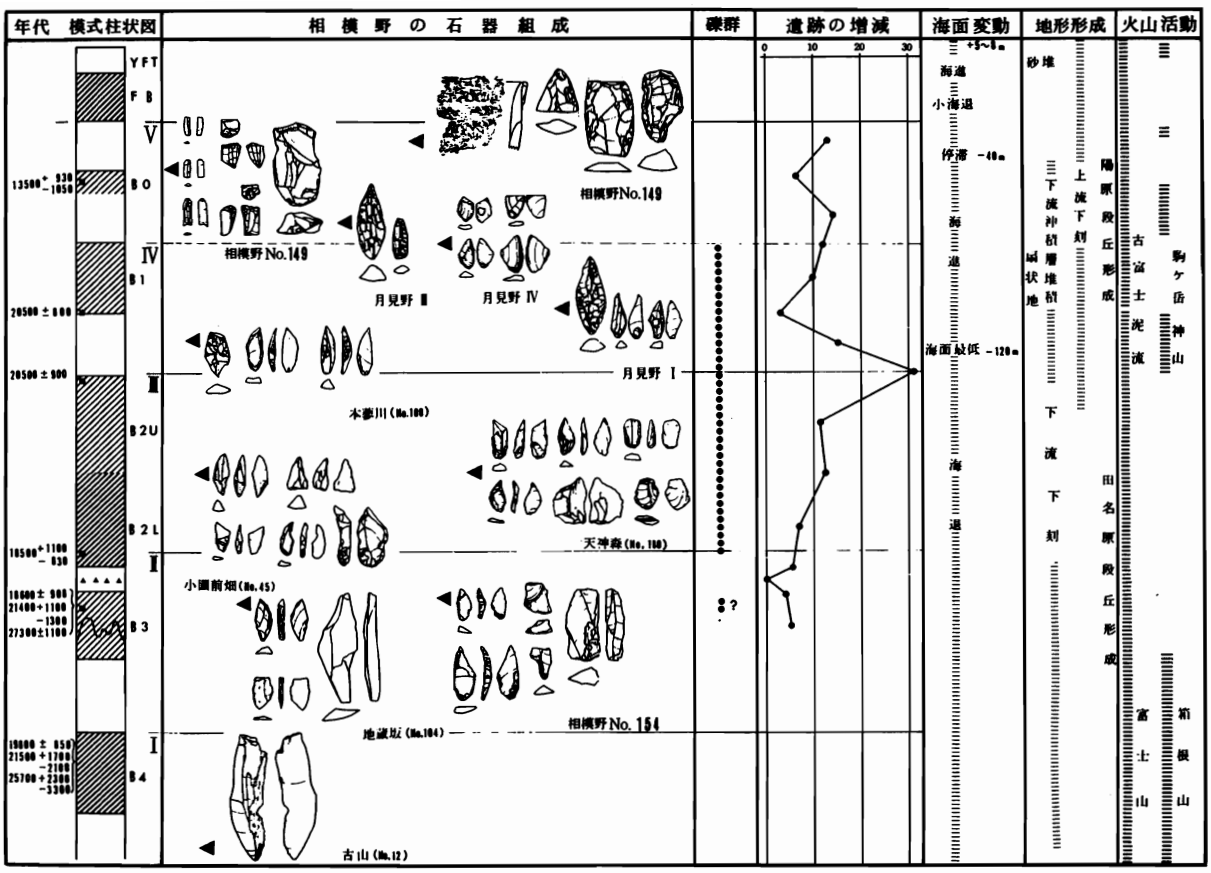
左図は、調査直後に出土層位別に図化したもの（上段：L1S層、中段：L1H層、下段：B1層）

右図は、個体別資料毎に垂直分布を検討し生活面として層位を捉えたもの（上段：L1H層上部、下段：L1H層下底）



ブロック		主な石器				個体別資料の共有関係					
No.	群	ナイフ形石器	尖頭形石器	掻器・削器	その他	No.22	No.11	No.15	No.16	No.39	No.2
2	I	1		2	1	○					
3	I	2		3	4	○					
7	I	2	1		5	○					
5	I	4	1	1	5	○	○				
10	IIa	2		1	1		○	○	○		
4	IIa	5		1	5			○	○		
8	IIa IIb	1		1	1			○		○	
6	IIb	1		1	2					○	○
12	IIb	8	3	1	17					○	○
9		1	1		3						
11			2	1	2						

第６図　月見野第ⅢＣ遺跡のブロック分布（左）と各ブロックの石器（右）（戸沢・安蒜1983）



第７図　相模野第四期紀編年（小野・鈴木1972）

野遺跡群や上土棚遺跡では未発見の石器群を明らかにし、月見野遺跡群等の調査結果を補完するものとなった。また、小園前畑遺跡や地蔵坂遺跡では、個体別資料の分析等により互いに強い関連をもつ複数の「ブロック」を「ユニット」(3)という概念で捉えるなど、月見野遺跡群で試みた遺跡の構造研究を具体化している。そして、月見野遺跡群以来の調査成果をもとに最初の相模野編年を提示した（第７図)。それは、出土層位に基づき石器群の変遷をⅠ期～Ⅴ期に区分するとともに、関東ローム層を共通の時間軸として石器群の変遷・礫群の消長・遺跡の増減・海面変動（気候変動)・相模川の地形形成・火山活動といった人類活動と自然環境の変動を総合的に捉えるという第四紀総合編年を目指したものであった。石器群の編年研究は、その後矢島國雄と鈴木次郎によってさらに進められたが、それは石器群の層位的な検討とともに、石器群を構成する各器種と剥片剥離技術及び調整加工技術の技術基盤を構造的に捉えて石器群の構造の変化・推移を把握するというものである(矢島・鈴木1976、鈴木・矢島1978)。

５．開発事業に伴う発掘調査の増加と研究の多様化

1970年代後半になると、1976年の相模原市下九沢山谷遺跡、1977年の綾瀬市寺尾遺跡・大和市上和田城山遺跡をはじめとして開発事業に伴う発掘調査が相次いで実施されるようになり、こうした状況は現在でも続いている。これらの調査の中には調査期間が１年間をこえる大規模な発掘調査が

十指に余り、調査面積が1万㎡をこえる遺跡など月見野遺跡群に比べて遙かに広範囲に及ぶ調査が多い。そして、夥しい数量の資料が発見され、それまで不明だった各種の石器群の存在が明らかにされてきた。また、相模原市田名向原遺跡の住居状遺構・清川村宮ヶ瀬遺跡群の石囲炉址・藤沢市用田鳥居前遺跡の大型炭化材・横須賀市打木原遺跡等の陥穴状土坑・綾瀬市上土棚遺跡の土壙などの注目される希少な遺構や、綾瀬市吉岡遺跡群と用田鳥居前遺跡の2㎞を隔てた石器の遺跡間接合など、旧石器時代の生活を復元する上で貴重な発見もみられる。

ところで、1970年代以降の開発事業に伴う発掘調査は、大学等の研究者が中心となって行った1960年代までの発掘調査とは異なり、行政内の職員や民間調査組織の調査員が中心となって実施されてきた。そして、こうした若い研究者によって豊富な発掘資料を基にした研究が推進され、県域をこえた南関東各地の石器文化の比較検討を行うシンポジウムが開催されたり（神奈川考古同人会1979・1980・1983)、旧石器時代研究を目的とした研究グループが組織されて活発な研究活動が行われている。また、研究内容も従来からの編年研究の見直しや遺跡の構造研究・遺跡群研究に加え、ナイフ形石器・槍先形尖頭器・細石刃・掻器・彫器といった個別石器の分析研究、石器の使用痕・石器製作技術といった実験考古学、あるいは石器石材の同定及び産地分析・火山灰分析・年代測定等の理化学分析など多様な研究が幅広く行われるようになった。

おわりに

これまで、神奈川県の旧石器時代研究の歩みについて、月見野遺跡群調査後の1970年代前半までを中心に述べてきた。それ以降の研究の詳細については、中心となる編年研究や遺跡の構造研究が1970年代までの研究の延長として捉えられること、多くの研究が現在も継続中であること、紙面の関係などから割愛させていただいた。

また、旧石器時代の研究といえば、最古の石器文化追究に多くの関心が集まるが、2000年11月に「前・中期旧石器時代遺跡の捏造」という未曾有の事態が明らかとなり、その後、学界・関係行政機関が総力をあげて検証作業を行っている。この事態については、筆者は20年にわたり捏造に気づかず「前・中期旧石器」を認めてきた一人として率直にお詫びしたい。幸い、神奈川県ではこの問題の直接の影響はなかったため、本稿では敢えて取上げることはしなかった。なお、本県最古の石器群は、今のところ確実なものとしては綾瀬市吉岡遺跡群D区B5層出土石器群であり、その年代は約35,000年前と考えられる。

注

(1) 杉原は、まず「岩宿文化」→「茂呂文化」→「上ノ平文化」という三つの石器文化の階梯という編年を提示し（杉原1953)、その後資料の増加により「岩宿Ⅰ文化」→「武井Ⅰ文化」→「岩宿Ⅱ文化」→「茂呂文化」→「茶臼山文化」→「武井Ⅱ文化」→「上ノ平文化」→（細石器文化）とし、出土石器の組合せで石器群相互の比較を行う編年を行った（杉原1956b)。これに対して芹沢は、「Hand axeを伴うもの」→「大形Blade・縦長Flakeを伴うもの」→「Knife bladeを伴うもの」→「切出形石器を伴うもの」→「Pointを伴うもの」→（「小形石器」）という、それぞれ特徴的な石器で石器群を代表させた編年を提示した（芹沢1954)。

(2)　分布調査時においては、立川ロームと武蔵野ロームの境界をB3層下底の波状帯としていたが、1972年以降は武蔵野・相模野のローム層対比の見直し（町田1971）によりB5層の下層にあるスコリア層（S2S）の約１ｍ下を立川ローム層の下底部と捉えている。また、1969年にはL1層中に黒色帯を確認してこれをB0層とし、B0層より上層の軟質部をL1S層、下層の硬質部をL1H層とした。

(3)　石器の集中地点については、筆者らは月見野遺跡群の調査以来「ブロック」と呼称しているが、野川遺跡をはじめ武蔵野台地の調査では「ユニット」と呼ばれている。このため、複数の「ブロック」からなるまとまりに対して「ユニット」と呼ぶことは混乱を生じるため、筆者は「ブロック群」と呼んでいる。

参考文献

岡本　勇　1964　「赤土の中の文化」『相模原市史』第１巻　pp. 179～212

岡本　勇・松沢亜世　1965　「相模野台地におけるローム層内遺跡群の研究」『物質文化』第6号　pp. 1～14

小田静夫　1965　「Ｓ地点の調査」『稲荷台地遺跡調査概報』pp. 158～170（藤沢市文化財調査報告書　第２集）

小野正敏・鈴木次郎編　1972　『小園前畑遺跡調査報告書』（綾瀬町文化財調査報告　第１集）

神奈川考古同人会編　1979　「ナイフ形石器文化終末期の問題」『神奈川考古』第7号

神奈川考古同人会編　1980　「ナイフ形石器文化終末期の問題(2)」『神奈川考古』第8号

神奈川考古同人会編　1983　「シンポジウム南関東を中心としたナイフ形石器文化の諸問題」『神奈川考古』第16号

小林達雄・小田静夫他　1971　「野川先土器時代遺跡の研究」『第四紀研究』第10巻第4号　pp. 231～252

坂詰秀一　1967　「芦ノ湯の旧石器時代遺跡」『箱根町誌』第1巻　pp. 67～81

相模考古学研究会編　1971　『先土器時代遺跡分布調査報告書　相模野篇』（相模考古学研究会）

相模考古学研究会編　1974　『地蔵坂遺跡発掘調査報告書』（綾瀬町文化財調査報告　第2集）

杉原荘介　1953　「日本における石器文化の階梯について」『考古学雑誌』第39巻第2号　pp. 21～25

杉原荘介　1956a　『群馬県岩宿発見の石器文化』（明治大学文学部研究報告　考古学　第１冊）

杉原荘介　1956b　「縄文文化以前の石器文化」『日本考古学講座』第3巻　pp. 2～42（河出書房）

杉原荘介編　1965　『先土器時代』（日本の考古学　第Ｉ巻　河出書房）

鈴木次郎　1989　『相模野第149遺跡－相模考古学研究会による発掘調査の記録－』（大和市文化財調査報告書第34集）

鈴木次郎・矢島國雄 1978　「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』(1)　pp. 144～169（有斐閣）

鈴木次郎・矢島國雄 1979　「神奈川県綾瀬市報恩寺遺跡の細石刃石器群」『神奈川考古』第6号　pp. 1～53

芹沢長介　1954　「関東及中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生に関する予察」『駿台史学』第4号　pp. 65～101

芹沢長介　1957　『石器時代の日本』pp. 38～39（築地書館）

芹沢長介　1969　「先縄文文化」『新版　考古学講座』第3巻　pp. 23～46（雄山閣）

戸沢充則　1968　「埼玉県砂川遺跡の石器文化」『考古学集刊』第4巻第1号　pp. 1～42

戸沢充則・安蒜政雄　「神奈川県　月見野遺跡群」『探訪先土器の遺跡』　pp. 237～247（有斐閣）

戸谷　洋・貝塚爽平　1956　「関東ローム層中の化石土壌」『地理学評論』第29巻第6号　pp. 23～31

永沢譲次　1939　「神奈川日吉の旧石器時代人類遺物」『史学』第18巻第1号

明治大学考古学研究室・月見野遺跡群調査団　1969　『概報　月見野遺跡群』

矢島國雄・鈴木次郎1976　「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』第１号　pp. 1～29

吉崎昌一　1954　「鎌倉市内粟船山の縄文文化以前の遺物」『貝塚』第49号

和島誠一・岡本　勇　1957　「無土器文化の時代」『横浜市史』第1巻　pp. 1～8

MUNRO N.G. 1911,　Prehistoric Japan, Yokohama,　pp. 37～43

縄文早期編年の確立と草創期の摘出

戸田 哲也

はじめに

筆者に与えられた課題は戦前～戦後1970年頃までに進められた撚糸文土器の発見から隆起線文土器、爪形文土器等々の発見まで、縄文土器最古型式を追求する学史的展望と、縄文土器大別区分の早期から草創期の分離区分に関する今日的問題の考察にある。

	隆起線文以前／隆起線、爪形、短縄文	原体押捺、回転縄文	撚糸文土器
昭22（1947）			平坂貝塚発見
昭23（1948）			花輪台貝塚調査
昭24（1949）			花輪台貝塚報告・平坂貝塚調査
昭25（1950）			夏島貝塚調査（第１次）
昭26（1951）			大丸遺跡調査
昭28（1953）			平坂貝塚報告
昭29（1954）	「関東及中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察」－芹沢長介（撚糸文土器編年）		
昭30（1955）	日向第Ｉ洞穴調査 （山内、始原縄文の指摘）		西ノ城貝塚第１次報告（井草２細分） 夏島貝塚調査（第２次）
昭31（1956）	本ノ木調査		大丸遺跡報告（層位学的確認）
昭32（1957）	本ノ木調査（押圧縄文土器の発見）		夏島貝塚報告（層位学的確認）
昭33（1958）	小瀬ヶ沢洞窟調査開始	桧の湖報告（表裏縄文土器指摘）	平根山遺跡報告
昭34（1959）	神子柴調査	西鹿田報告	馬の背山遺跡報告（井草３細分）
昭35（1960）	福井洞穴調査（細石器 と隆起線文土器共伴）	室谷洞窟調査（室谷下層式確認） 東釧路調査	
昭36（1961）	神子柴報告	西谷報告	
昭37（1962）	長者久保発掘 ／「縄文土器の古さ」草創期設定－山内清男・佐藤達夫 「無土器文化から縄文文化の確立まで」草創期編年表－小林達雄		
	一ノ沢洞窟報告		
昭38（1963）	上黒岩岩陰調査・馬渡岩陰調査 荷取洞窟報告		
昭39（1964）		室谷洞窟報告（撚糸文との編年差確認）	
昭40（1965）	福井洞穴報告	大谷寺洞穴調査 （表裏縄文土器の層位的確認）	西ノ城貝塚第２次報告 （室谷下層との関係指摘）
昭41（1966）			原信之－金鈴論文
昭42（1967）	「日本の洞穴遺跡」出版 （九合・石小屋・上黒岩報告） 長者久保・酒呑ジュリンナ報告	橋立岩陰報告（表裏縄文土器の存在）	多摩No52報告（室谷下層との関係） 大船山居報告（井草以前の指摘）
昭43（1968）	田沢概報 狐久保報告	「室谷第１群土器に関する覚書」 －小林達雄（多摩No52の指摘）	
昭44（1969）	「縄文草創期の諸問題」－山内清男		
	不動ヶ岩屋報告	栃原概報	
昭45（1970）	泉福寺洞穴調査開始		
昭46（1971）	「高畠町史考古篇」－出版		

付表１　縄文草創期研究史（昭22～昭46）略表

講座という関係から表を多く用い、また一部山内清男博士による「縄紋草創期の諸問題」論文原本の一部を転載した。「縄文土器大成Ⅰ」1982での芹沢長介先生の特論「縄文土器の起源」において次のように言わさしめたその山内博士の呼吸を感じていただけたらと思う。「山内独特の激しい用語で論敵を罵倒する文章は、それを書いているときの大先学の昂った呼吸がじかに伝わってくるような、一種のなつかしさ、あるいは壮快さが感じられるのである。」

（1）縄文土器の細別と大別について

縄文土器型式の細別と大別については、昭和12年（1937）山内清男先生により理論化され提唱された（「縄文土器型式の細別と大別」先史考古学、第1巻、第1号）。

細別の理論ー「細別と大別」1937論文より

「真に執るべき科学的手段は先ず個々の短い文物を確認する。そしてこれらを層位又はその他の自然現象に応じて年代順を定める……従って連続する文化の区分は最も短時日である程一挙一動まで明らかにされるであろう。……型式は益々細分され、究極まで推し進むべきである」

「縄紋土器型式の細別とその年代的編成は各地方に亘って遺漏なく行われなければならない。…一国一郡の如き小区域に於いても行われ得るものであり、最も正確なる結果はこれら個々の成績の綜合比較によって達せられるであろう。」

「年代的組織は先史考古学の根幹であって、これは年代の細別、研究地域の細別によって精密となるのである。」

付表2　　**縄紋土器型式の大別と細別**

	渡島	陸奥	陸前	関東	信濃	東海	畿内	吉備	九州
早期	住吉	(+)	槻木 1 〃 2	三戸・田戸下 子母口・田戸上 茅山	曾根？× (+)	ひじ山 粕畑		黒島×	戦場ケ谷×
前期	石川野× (+)	円筒土器 下層式 (4型式以上)	室浜 大木 1 〃 2a, b 〃 3—5 〃 6	蓮田式 花積下 蓮田式 関山 蓮田式 黒浜 諸磯 a, b 十三坊台	(+) (+) (+) 踊場	鉾ノ木×	国府北白川 1 大歳山	磯ノ森 里木 1	轟？
中期	(+) (+)	円筒上 a 〃 b (+) (+)	大木 7a 〃 7b 〃 8a, b 〃 9, 10	五領台 阿玉台・勝坂 加曾利E 〃（新）	(+) (+) (+) (+)			里木 2	曾畑 阿高 出水 ？
後期	青柳町× (+) (+)	(+) (+) (+) (+)	(+) (+) (+) (+)	堀之内 加曾利B 〃 安行 1, 2	(+) (+) (+) (+)	西尾×	北白川 2 ×	津雲上層	御手洗 西平
晩期	(+)	亀ケ岡式 (+) (+) (+) (+)	大洞B 〃 B—C 〃 C1, 2 〃 A, A′	安行 2—3 〃 3	(+) (+) (+) 佐野×	吉胡× 〃 × 保美×	宮滝× 日下×竹ノ内× 宮滝×	津雲下層	御領

註記　1. この表は仮製のものであって，後日訂正増補する筈です。
2. (+) 印は相当する式があるが型式の名が付いて居ないもの。
3. (×) 印は型式名でなく，他地方の特定の型式と関聯する土器を出した遺跡名。

大別の理論－「細別と大別」1937論文より

「細別を進行せしめ、それを知悉して後大きな区分に想到し得れば最もよいのである。……仮に大別を協定し得たならば一般の記述に多くの便宜を生ずるであろう。」

「自分は各大別も亦出来れば同数位の細別型式を含むものとしたいと思う。この点を考慮して私は前中後に早晩の二期を補い、全期を５期に分かつことを提案したい。」（付表２参照）

（２）草創期の区分

山内清男先生は昭和37年（1962）に改めて上記５期大別のうち早期を二つに区分し、新たに草創期の用語を用いた（山内清男・佐藤達夫「縄文土器の古さ」科学読売12巻13号）（付表３参照）。さらに７年後の昭和44年（1969）には草創期の真意が誤り伝えられることもあり得ることを危惧して、草創期の解説が試みられた（山内清男「縄紋草創期の諸問題」ミュージアム第224号）。（転載１～３）

昭和37年11月には小林達雄先生編集による土器編年表が発表され現在用いられる草創期編年の大綱が確立するがこの表ではまだ縄文早期の名称が使われ、草創期の区分名称の端境期であったことがわかる（「無土器時代から縄文時代の確立まで」『若木祭展示目録』上代文化別冊）（付表４参照）

草創期の理論－「縄文土器の古さ」1962より

「早期の最も古い時期－より古い段階の土器が数型式発見される様になった。これをかりに二つに区分して考えることができる。まず縄紋の多い型式群である……戦前に稲荷台式、井草式が発見され、戦後大丸式、夏島式、花輪台式等が追加された。……次に縄紋の稀な型式群があって、花輪台Ⅱ式、平坂式、普門寺式等がはいる……回転押型文は遠く九州、関西、中部地方にも以前から知られ、近年東北地方にも発見されつつある。早期を二つに区切るならば、これは良い目標になるだろう。」

「新潟県の縄紋土器の古い部分の区分が進んできたが、室谷中層が関東の井草式に当たり、その前に３、４の型式があることになった。即ちC[14]の測定で世界最古といわれた夏島式より、土器型式にして五型式くらい古い土器があることになる。」

（３）「縄紋草創期の諸問題」1969以後の草創期論

岡本勇先生の場合

昭和57年（1982）１月に刊行された「縄文土器大成Ⅰ」において編集執筆者である岡本勇先生は草創期の区分について次のように述べている。「山内編年とこの実年代観は不可分の関係にあることを銘記すべきである。……したがって、その年代観の基礎をなしている草創期なる用語は、紀元前2,500～2,100年という実年代と切り離すことのできない性質のものなのである。」

「私個人はそうした前提の上で、１万年説を肯定する。それゆえに、草創期なる用語を用いることには、ある種のためらい（傍点筆者）を覚えざるを得ない。ここであえて「草創期」という時期区分を採用しな

かったのは、以上のような二つの理由によるのである。」

この岡本先生の見解に対して、岡本先生の先輩であり、同シリーズの監修者である芹沢長介先生は特論を寄せ、岡本先生と全く同じ実年代の論法に立ち「筆者はこの「草創期」論（山内説－筆者補注）に対しては、あくまで反対の態度をとり続けるつもりである。……「草創期」論を今でも信奉する者は……立川ロームが完新世の堆積であることを立証できると思っているのだろうか。それはとうてい不可能である。」

小林達雄先生の場合

小林達雄先生は昭和64年（1989）「縄文土器大観Ⅰ」において山内先生による草創期提唱後の各説を整理し、前に述べた岡本勇・芹沢長介両先生の見解に対して次のように反論する。

「特に新しい６期区分案は、先述のごとき山内の年代観と一体をなすものであるから、その短期編年とは逆の長期編年派にはとうてい認められないというのが最大の理由であった。しかしながら、そもそも縄文土器編年は縄文土器に相対的な新古の順序を与えるものであり、これに絶対年代を割り当てる問題とはまったく別次元というべきであろう。」

小林達雄先生の反論は正しいところを指摘していると筆者も賛同するものである。そもそも山内先生にとって細別と大別の方針は1937年以来の理論と方法論であり、25年後の土器型式研究の成果を得て草創期を区分したのもその延長線上の実行であったことはミュージアム論文に詳述されているところである。[14]Ｃ年代論は後に生じた別次元の研究課題となる。その意味において岡本・芹沢両先生の論拠は感情的なものを背景に，問題点のすり替えが行われているといわざるを得ない。

撚糸文土器～早期末条痕文土器編年研究の第一人者であり、かつ神奈川地域編年研究の実践者であった岡本勇先生は、山内清男先生の学問を深く理解していたと私は断言できる。その岡本先生が[14]Ｃ年代論を理由に「ある種のためらい」を持たれ「草創期」の表現を用いられなかったのである。岡本先生を知るものとしてはあまりスッキリとした論理となっていないことは当時から感じており、そこには山内先生が指摘された学界の党派性のようなものが影響していると感じるのは筆者だけであろうか。

時系的に前後するが昭和55年（1980）１月に発行された「（座談会）縄文土器の起源」國學院雑誌第81巻第１号において小林先生は自説を開陳している。

小林「われわれが育った時代は勿論のこと、概に撚糸文土器が早期の一番古い土器としてもうちゃんと公認されて以来長い時が経過しているのです。だから山内先生が御自分で扱わなかったからといっても、撚糸文土器を早期（草創期の誤植か、それにしても微妙な誤植である－筆者補注）に入れるわけにはいかんということで、賛同できなかったわけです。」

岡本（東三）「山内先生の言われる前半期だけをとって、小林さんは草創期とされるわけですが、」

小林「僕も混乱を招いた張本人なんだけれど、特に固執するつもりはないんですが、（傍点筆者）大山内にさからったには、それなりのやっぱり理由もあるということです。」と述べている。

小林先生は同様の見解をより具体的に前述した縄文土器大観 I1989において述べている。

「稲荷台遺跡に続いて登場した井草遺跡や栗原遺跡そして夏島貝塚や大丸遺跡の各種土器群を早期の枠のなかで長らく扱ってきたのも事実である。この慣用が山内の新提案で一転して無効にされる結果となった。抵抗感が生まれるのはけだし当然といわねばならない。」

この発言には多少の誇張があろう。というのは稲荷台（昭16)、井草（昭17）そして戦後の夏島(昭25）までというのはごく限られた研究者により、ごく限られた南関東域において、戦中、戦後の社会状勢をはさみ、試行錯誤されていた期間であり、「早期の枠のなかで長らく扱ってきた」、というほどの時間ではなかろう。仮にそう思う研究者は日本全体で見た場合に極く限られた人間達のあいだだけなのであって、山内の新提案は「一転して無効」とするほどの内容であるとは筆者には思えないのである。ましてやその早期とは山内５期大別に立脚して用いられているのである。

「撚糸文土器と押型文系土器の２様式は、……決して新古の順序関係となるのではなく、少なくとも撚糸文系土器様式の中間段階ほどの時期に押型文系土器様式が出現して、しばらくは時間的に並行しているのである。もしその押型文系土器の出現に焦点を合わせて早期のはじまりとすれば、撚糸文系土器をその前半を草創期、後半を早期に引き裂く結果をまねくのである。」

「これではいかにも理不尽きわまりない。山内の草創期設定の方針は大賛成であるが、境界線の位置は修正が必要である。」

撚糸文土器を早期に加える所説は小林達雄先生の見解である。しかし撚糸文土器と押型文土器がしばらく時間的に並行するという考え方は比較的最近の提案であって、ましてや撚糸文と押型文との並行関係の証明は未だ未解決となっている。わずかに東京都秋川市二宮神社遺跡出土の稲荷原式の器形、特徴に山形押型文を加えている例が、証明し得る最古の事例となる。関西と関東の押型文との並行関係も決定的な証明事例に欠けていることは衆知の事実であり、小林達雄先生が撚糸文から早期とする区分に押型文土器問題を加えたのは後の付加条件と言える。

しかし現状において撚糸文と押型文の一部が並行することは確かでありこのような場合に大別であれ細別であれ境界線を引くことは今後の研究課題としての論議を必要としている。即ち、早期末～前期初頭、前期末～中期初頭、中期末～後期初頭、後期末～晩期初頭の全てにおいて同様の論議すべき課題を生じているのである。小林先生の言われる「理不尽」とは本来土器型式研究が持っている宿命であって、草創期区分の反論とはなり得ないと言えるのである。

草創期に関する各説は、感情論、党派性をふくめ極めて人間臭い学史が浮かびあがってくる。しかし土器編年研究を科学として捉え、あくまでもその研究上の利便性を考えようとするならばそれらの人間臭を一切捨象しなければならないと考える。「道に迷ったら、最初の出発点にもどる」これは山登りの鉄則であり、学問研究も常に学史をふり返り、そのうえで現時点を確かめ、新しい一歩を築いていかねばならない。

付表３

バイカル湖地方（オクラドニコフによる）			日本（山内・佐藤）		日本（芹沢氏による）
9000—					無土器文化
8000—	晩期旧石器時代（中石器時代）				（細石器）福井洞窟
7000—					夏島
6000—					縄文文化
5000—	新石器時代	キナ文化	無土器文化		
4000—		イサコブォ文化		長者久保 神子柴	
3000—		セロブォ文化	縄紋文化	草創期	
				早期	
2000—		キトイ文化		前期	
	金石併用期	グラズコブォ文化		中期	
1000—		シベラ文化		後期	
BC	青銅器時代			晩期	
0—	初期鉄器時代		弥生文化		弥生文化
AD					

縄紋早期の編年

草創期	福井洞窟
	曽根
	小瀬ケ沢—本ノ木
	室谷
	井草—大丸
	夏島
	稲荷台
	花輪台1
	〃 2—平坂
早期	普門寺
	三戸
	田戸下層
	田戸上層
	子母口
	茅山
前期	

（左）日本及びシベリア先史時代年代比較。（右）草創期と早期の区分

付表４

（昭和37年11月７日現在）

縄文早期	IV期	回転施文	撚型文 貝殻沈線文 撚型文 無文〈尖底〉	福井Ⅰ 上黒岩４層 上黒岩６層 神宮寺，大川 樋沢下層 卯ノ木 橋立Ⅲ，普門寺 田戸下 三戸 平坂 花輪台Ⅰ 尼子，上原田
			縄文 撚糸文〈尖底〉	九合洞窟 室谷Ⅱ群 橋立Ⅱ 稲荷台 日向 夏島 井草，太丸
	III期		縄文 羽状縄文〈平底〉	室谷Ⅰ群 西谷 神立沢 一の沢
	II期	押圧施文	押圧縄文（石槍）〈平底〉	本の木 西鹿田Ⅱ
			爪形文（長脚鏃）	福井Ⅱ 桃ノ湖，曽根 小瀬ケ沢Ⅱ 西鹿田Ⅰ 日向
	I期	隆線文	微隆起線文	日向，一の沢
				荷取
			細隆起線文（有舌尖頭器）〈丸底〉	小瀬ケ沢Ⅰ 橋立Ⅰ
				上黒岩７層 柳又BⅡ
			隆起線文（細石刃）	福井Ⅲ
無土器時代				福井Ⅳ 柳又AⅡ 荒屋 矢出川

な憶測が行われたのであるが、記述を省略する。事実、井草・大丸式は孤高の位置を数年間持ち続けたのである。

これらの型式では多くの器面に広く縄紋または撚糸文を持って居る。広大な縄紋面は地方により、時代により断続はあるが縄紋式終末にまで達し、さらに弥生式、続縄紋式にまで連続して居る。[註13]そしてこれはアフリカと並んで日本先史土器の重要な特徴となって居る。この状態で大陸から伝来した形跡はない。広い縄紋面の由来はさらに年代的に遡って追求されねばならない。この見地から私は各地の新発見土器の観察を続けて居たのであるが、山形県日向洞窟（昭和三〇年秋柏倉教授御持参）からの短い縄の圧痕を口辺から底部まで何段にも並列する土器に着目した。この種の縄紋を特徴とする本ノ木式（第五図下）が新潟県で発見[註14]された。同じ新潟県小瀬ケ沢洞窟からは下層に未見の種々の沈紋・圧痕等を有する土器が発見され、中村氏によって小瀬ケ沢式としてこの資料が報告[註15]されて居る。そのうちに縄の小部分の圧痕、短い幅の回転圧痕の若干（第四図）が発見された。縄紋附着の始原を示すものかも知れない。同様のものは日向洞窟にもあった。引き続いて中村氏は、新潟県室谷洞窟を発掘して多くの土器型式が層位的に重畳することを証明された。[註16]就中重要なのはここの中層上部に田戸下層式（第二図2）、三戸式等があり、その下層に井草式（同図3）を発見されたことである(1)。なおその下層には、この地方で新発見である室谷下層式(2)を発見されたのである（第三図1～5）。(1)は久しく孤高、独善、専横をきわめた関東の井草城を初めて開国に向わせたものとして記念すべき事件であったし、さらに下層の(2)は底部四角形、羽状縄文を有し数々の特徴ある土器が見出され、井草式以前の土器に世人の目を新たに開かせるに充分であった。一方長崎県福井洞窟[註17]が発見され、下層に無土器を出す諸層があり、その上層に隆線文のある土器、そのまた上に、古く長野県諏訪湖の曽根から発見されて居た様な爪形文土器、さらに上層には早期初頭の押型文土器が発見された。また愛媛県上黒岩洞窟[註18]では同様、押型文土器が第四層にあり、その下には六層無文土器を主とする層、第九層に隆線文土器が発見された（江坂氏）。

この結果を総合して見ると隆線文土器が最も古く、次に爪形文が来ると思われる。隆線文土器は遠く信濃、山形でも既に発見されて居たが、その古さが漸く縄紋最古と定まったのである。爪形文は古く曽根の諏訪湖底遺跡[註19]から発見されて居り、たまたま細石器（？）を伴出？するというので八幡一郎氏が古いものと考えたことがあったのであるが、椛ノ湖遺跡[註20]の下層から発見され、（上層は内外面に縄紋ある椛ノ湖2式）古い型式と考えられて居たが、福井洞窟発掘の結果早期以前の草創期と定まった。小林・栗原氏[註21]は埼玉県西谷遺跡の表面採集土器を精査して私の方針によって縄紋押捺の初現的形態を報告して居るが、曽根式の爪形文と縄紋の短い圧痕を同一土器で発見して居る。爪形文が初現的縄紋と関連あることを示すのであろう。なお、日向洞窟・小瀬ケ沢洞窟にも爪形文が出ているが分析が行われていなかった。また関東地方橋立岩陰[註22]、西鹿田遺跡にも爪形文とその他草創期土器が出ている。

上記日向洞窟、新潟県小瀬ケ沢・室谷を経て福井・上黒岩と一連の洞穴研究は草創期前半の編年を達成するに大いに寄与した。引き続いて洞穴研究が学界の問題点になったのも一理あるが、私は一歩退いて一般的な考察に努めることにした。縄紋技法による縄紋文化の遡源は困難となったが、石器の分析によってこれを補う道を選んだのである。

その後草創期の研究[註24]は多少進展した。細隆線文土器は長野県石小屋洞窟[註23]（第一図1）や愛知県酒呑その他各地から発見されて居る。殊にわれわれの身近の新発見は栃木県大谷寺洞窟[註25]の土器であろう。㈠井草式の層がある。㈡その下に内外面に粗い単方向縄紋を有し、椛ノ湖上層に似た土器が出る。底は隅丸方形平底で室谷下層に近い。㈢その下に粗製の土器型式がある。これは一見無紋のごとくであるが、きわめて浅い縄の回転圧痕が見られ、決して無紋なのではない。器の粘土がほとんど乾いてから回転させたか、幾分軟かさの残って居る部分にのみ浅い圧痕が見られるのかもしれない。また一度乾いた器面に水を少々与えて表面だけ柔らかになったところに回転したのかも知れない。そうすると、これらは上黒岩の無紋土器とは違い、顕在的ではないが、潜在的縄紋の仲間と見てよい。㈣の最下層は細隆線文である。この大谷寺の型式別に肉を付けてゆくと草創期前半の年代順が判然とするだろう。1隆線文　2爪形文　3大谷寺2　4大谷寺3（椛ノ湖Ⅱ）、1・2の附近に小瀬ケ沢、2の附近に始原縄紋、本の木等の型式を置くならば各地の草創期細別[註41]を大観し得るであろう。

れる様になった。各期の細別の数は細分の秘術を尽くしても十前後に止まって居る。各期が平均して大差ない存在年代を持つという論拠ともなり、今後すべての細別型式を十進法を用いて整理し得るという将来計画は微動もして居ない。ただし早期には特殊事情がある。

早期およびそれより古い土器の細別型式は戦前から戦後にかけて増加した。十数型式である。そこで先に前期、後期を二分したと同じ方針で、これらを二分することを考えたのである。昭和十二年早期を前期から分立した時には、回転押型文、田戸下層式、同上層式、子母口式、茅山式等があったが、これらに相当する諸型式を「早期」として残す。それ以後発見された、より古い土器型式を一括して、新しく「草創期」としたのである。この大別を得て、縄紋六分法[註3]が成立したのである。現在早期の範囲に細別約十型式があり、新たに認定された草創期にも十近い細別がある。この両大別は各地において認められ、また認められる見込みがある。前期以降の各大別と同様分布、細別の数（従って恐らく平均存続期間）が一様であることを見られるであろう。[註4]（17頁表1参照）

もし草創期の大別を認めず、早期を無思慮に古い方に延すとすると、縄紋式の大別における整列が壊れ、体系の妙味は失われる。そこには徒に長い早期細別型式の羅列を見るだろう。鎌木氏、江坂氏等の編年表を見れば明白である。

2　草創期の土器

縄紋草創期の設定は他の時期と同様、まず土器型式によって行われている。それに伴う遺跡・遺物の吟味から、当時の自然、文化系統にまで達し得るであろう。縄紋文化の最も古い段階であるから、この文化の起源を解明する鍵がこのうちに隠されて居ると見なければならぬ。その年代が何時であるかも草創期の文物、自然が答えるに違いない。これら最も重要な問題の解決は一応、草創期の正確な知識と、偏見なき諸判断によるところが多いであろう。

まず土器型式を見よう。各型式の発見、設定の積み重ね、これを取扱う研究者のその時々の思想、理念、素養等を考慮して研究史風に叙述するには莫大な紙数が必要であり、多くを省略して重点的に記すこととする。

【草創期後半】　当時中学生であった白崎高保君は昭和十二年ごろから、当時早期と考えられて居た三戸式、田戸式よりも古い二、三の土器型式[註5]を発見した。そのうち正式に学界に公認されるに至ったのは「稲荷台式」で、倒砲弾形尖底で外面に撚糸文のあるものであった。ローム層直上のローム塊を含む層から出て、他にローム上部に食い込んで出土する所がある。それで年少の一群の考古学者はこの型式が甚だ古き年代に属し、沖積世初頭に近いとの信念を持った。これは同君らが参加した右翼考古学者の団体「古代文化学会」の思想によくマッチしたものであって、当時後藤守一氏はその功績を故らに賞揚した。また同会の幹部であった矢嶋清作氏[註6]はこれに似た形態を持ち、口縁の捲れ上った、その外面に一種の縄紋を持つ型式、「井草式」を発見報告した。縄紋初頭を争う新型式発見は戦後も続き、一種の羽状縄紋を有する「花輪台式」が吉田格[註7]氏によって発見された。井草式に近似する大丸式[註8]が芹沢長介氏によって報告された（第一図3）。また有名な夏島貝塚[註9]が発掘され、新たに「夏島式」が追加された。

これらの型式は縄紋を豊富に持つという一般的特徴（多縄紋型式群）を持つ。その次は平坂式・花輪台2式、普門寺式（回転押型文）の様な稀縄紋型式群がある。（これらは早期初頭とした方がよいであろう）

多縄紋型式群は草創期の後半に位し、後藤博士門下の営々たる努力によって分類され編年された。それに属する細別型式は一言にしていえば㈠井草、大丸式㈡夏島式㈢稲荷台式㈣花輪台式または大浦山式の階段[註10]に分れることが確定した。その後の新型式の発見は少ないが細部の変化が追加されている。西村氏の西の城貝塚[註11]、多摩ニュータウン考古学者[註12]による新型式（第一図4）のごときはその一例かと思われる。私はこれらの型式発見の先頭に立つことはしなかった。しかし、縄紋附着の技法については自分の研究を進め、はじめからこれを当事者に伝えるところがあった。白崎・矢嶋氏の報告にも見られるであろう。芹沢氏が夏島の報告で図示した縄紋の技術は私の講義によったものである。ただし甲野氏、早川氏等は芹沢氏の創見として引用して居る。

【草創期前半】　上記の草創期後半の土器は関東地方に分布して居ることが証明されて行った。しかし、他地方にこれに並行する型式は発見されなかった。早期初めの土器まではあるのに、誠に不思議なことである。これについて種々

縄紋草創期の諸問題

山内清男

東京国立博物館編集 MUSEUM 第二二四号
日本考古展特集　一九六九年十一月

1　草創期とは何か

縄紋草創期と言う称呼は多分一般化して来て居ると思うが、まだ数年以来のことであるし、ちょうどこのころ日本石器時代についての二つの学説が戦闘状態に入って居り、ある党派の人々はこの称呼を抹殺しようとした。例えば鎌木義昌編「日本の考古学第二巻縄文時代」のごときはその編集に際して「縄文時代は早、前、中、後、晩の五期に分つこと、草創期等は用いないこと」と執筆要項に記し、多くの著者に指令を発し、検閲を行なった。その他学界の党派性と関連して、「禁句」とさえ考えられて居る傾向がある。それがため草創期の真意が誤り伝えられることもあり得るので、この機会に一応の解説を試みることとする。

大正末、昭和初年にかけて縄紋土器の区分が進行した。若干数の大別があり、その内に細別多数を含むことが知られて来た。研究者の間に年代的地方的の究極の単位（細別）を求めようとする考えと共にこれを適宜に大別しようとする考えが芽生えた。縄紋式を前、中、後の三期に分つことがまず試みられた。[註1] 中期は八木氏の陸平式、鳥居博士の厚手式、松本博士の凸曲線縄紋期に当り、後期は八木氏の大森式、鳥居博士の薄手式、松本博士の凹曲線縄紋期に相当する。前期は一部八木氏または榊原氏の諸磯式を含む新発見の型式群に与えられた総称であった。中期後期の年代順は松本博士の最初に唱えられたところであり、前、中期の年代順は昭和初年大山研究所と私が証明したものである。私は初めから細別に努める立場であったが、この前・中・後の大別の提案を、些細に内容的に検討して見て、問題があることを知った。「中期」に包括される細別型式の数は当時知られて居た関東、東北地方でも数型式に留まって居る。細別の進行した現在でも各地において十型式位なものである。これに反して前期に属する細別型式は十五位（現在では二十位）ある。いわゆる後期に分属されて居る型式はいわゆる薄手式および亀ケ岡式を加えると総計十五型式（現在では略々二十型式）もある。いわゆる前期、後期は中期の二倍もの細別を含んで居るわけである。各大別が保有する細別の数は同数位であることが望ましい。これには二つの将来計画（後述）と関係があり、前期、後期を二分することを考えた。「後期」を関東薄手式と、これと並行する型式群に限り、その後に東北亀ケ岡式およびこれと並行する諸型式を一括して「晩期」とする。「前期」には諸磯式および近似の型式群を包括し、当時新発見の尖底または円底のある型式群を「早期」として再区分したのである。したがって縄文式は五大別（早・前・中・後・晩期）[註2] となり、各大別に属する「細別型式は数型式または十型式未満」となった。現在研究が進行しても十型式内外に止まって居る。またこの大別が、「縄紋式の分布する各地域において一様に認められる」ことに注目して考案されたものであった。もう一つ「大別が学界に認められた歴史と合致する」ことを示した。前・中・後・晩期は明治時代に発見された大別であり、早期のみがわれわれの手で新しく発見された大別であったのである。この縄紋五分法は戦後学界に一般化した。異論をふくみ持つ人は常にあったが、この勢を阻むことができなかった。大別の内にある細別こそは真の年代区分を示すものであり、この理想に向ってトコトンまで行く方針も、いつしか学界の主流となった。「余り分け過ぎる」というブレーキは落伍者の車についていた。

現在に至るまで各期の細別はますます進行した。各地方で細別が一斉に行わ

関西	中部	関東	東北
(+)	(+)	茅山	(+)
(+)	↑ 大根平	↑ 子母口	(+)
(+)	↑ 細久・ひじ・樋上	↑ 田戸Ⅱ	(+)
(+)	保山沢層	↑ 田戸Ⅰ	(+)
	(立野)?	↑ 三戸	
?	下り・樋下	↑ 平坂・花輪台Ⅱ	?
	林沢層	↑ 大浦山・花輪台Ⅰ	
	普門寺	↑ 稲荷台	
	?	↑ 夏島	
		↑ 大丸・井草	
		?	

条痕文 { 茅山 ← 子母口
沈線文 { 田戸Ⅱ ← 田戸Ⅰ ← 三戸
無文 { 平坂・花輪台Ⅱ
縄文・撚糸文 { 大浦山・花輪台Ⅰ ← 稲荷台 ← 夏島 ← 大丸・井草 ← ?

推定年代	期	型式 (関東地方)	中国文化
C.2500 B.C.	草創期	大1隆線文 谷2浅縄紋 寺3斜縄紋	彩陶
	Jomon Ⅰ	井草・大丸 夏島 稲荷台 花輪台・大浦山	
C.2100 B.C.	早期	普門寺式等稀縄文型式群 三戸式 田戸式 1,2	黒陶
	Jomon Ⅱ	子母口式 茅山式 1,2,3,4	
C.1700 B.C.	前期	花積下層式 関山式 黒浜式	原史時代
	Jomon Ⅲ	諸磯式 a,b,c 十三菩提	
C.1300 B.C.	中期	五領台 阿玉台・勝坂	殷
	Jomon Ⅳ	加曽利E 1,2,3,4	
C. 900 B.C.	後期	称名寺 堀之内 1,2 加曽利B 1,2,3	周
	Jomon Ⅴ	曽谷 安行 1,2	
C. 500 B.C.	晩期	安行 3 a,b,c,d 千網／荒海	戦国
	Jomon Ⅵ	荒海／女方	

C.100 B.C.

表1 縄文草創期の年代的位置・中国年代との対比・縄紋各期土器型式（関東地方）の大要（特に早期以後の型式は省略したものがある）

参考資料（戸田付図）

上図２点
芹沢長介 1954
「関東及中部地方における無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察」付表
駿台史学第４巻

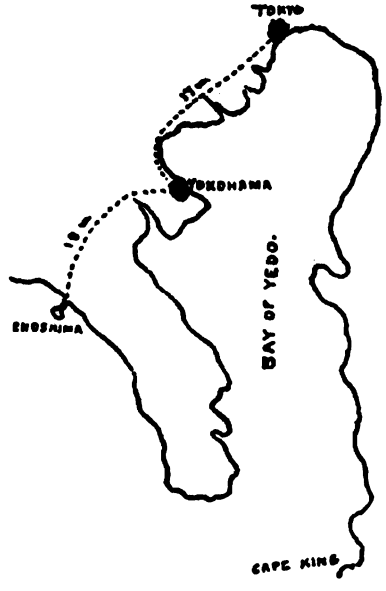
右図
山内清男 1969
「縄紋草創期の諸問題」付表
ミュージアム 224

かながわの貝塚調査研究史

中村　若枝

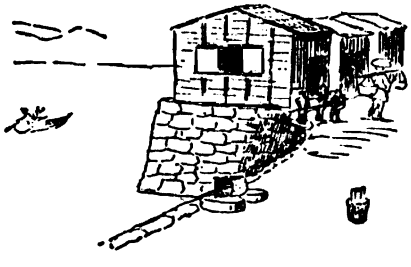
はじめに

1877年(明治10) 9月22日、人夫2名を同行したアメリカ人Edward Sylvester Morse(1838-1925)により、大森貝塚で日本初の科学的発掘調査が行われました。その3ヶ月前、サンフランシスコから17日間の航海をへて横浜に上陸したモースが、新橋に向かう汽車の窓から貝塚を発見した事に端を発した逸話は、良く知られています。

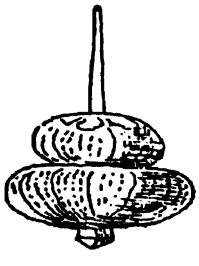


モース来日の目的は、日本近海に多くの種がいるという腕足類の研究のためで、横浜から南18マイル（約29ｋｍ）の江ノ島に実験所を設けました。『日本その日その日』によれば、江ノ島には8月28日まで6週間滞在したとあります。大森貝塚を発掘したのは、この後のことでした。横浜に上陸し、江ノ島に東洋初の臨海実験所を置くほどモースと「かながわ」の縁は深かったのですが、神奈川県の貝塚との出会いはなかったようです。

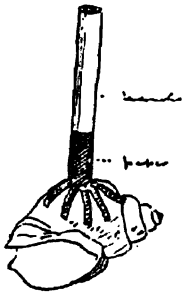
しかし、モースの功績は、その影響を受けた人々により受け継がれました。



江ノ島の実験所



江ノ島のみやげ物
ウニ二つで作った独楽



小甲香の殻を共鳴具として葦笛をつけたラッパ
(1970「日本その日その日」平凡社より)

ここでは、神奈川の貝塚研究を次の6期に分け、その概要をたどってみたいと思います。

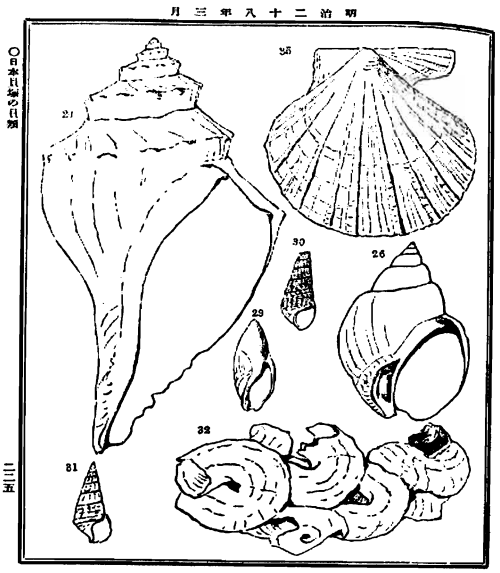
1．第1期　　貝塚発見期　　明治時代前半（1877M10～1897M30）

■　動物学者「丘　浅次郎」

モースの影響は、動物学者が貝塚に目を向けた、という事にもあらわれています。その一人　丘浅次郎　は進化論を紹介した人ですが、1887年（明治20）1月4・5日に「久比里村貝塚」を発掘

し報告しています（東京人類学雑誌2巻15号）。「江戸坂字貝殻畠ト云フ所ニ貝塚アリ」とし「縄目土器多ク」「朝鮮土器モ少シ交ジリアリ」と報告しています。石器は少なく、魚骨、猪の牙・鹿角など羅列した上で、貝類は学名付きで13種列挙しています。

こうした経験を踏まえ、貝の種名を容易に確認できるように、理科大学人類学教室にあった貝塚出土の貝類を調べ、63種類の実大の図と説明を載せています（1895 「日本貝塚の貝類」東京人類学会雑誌10巻108号）。貝類の特徴からその種名にたどりつけるスタイルで書かれています。邦文の貝類図鑑がない時代に、大いに役立ったことであろうと、金子浩昌は「日本考古学に於ける動物遺存体研究史」(1992国立歴史民俗博物館研究報告42)で紹介されています。



丘浅次郎(1985「日本貝塚の貝類」東京人類学会雑誌10-108号)

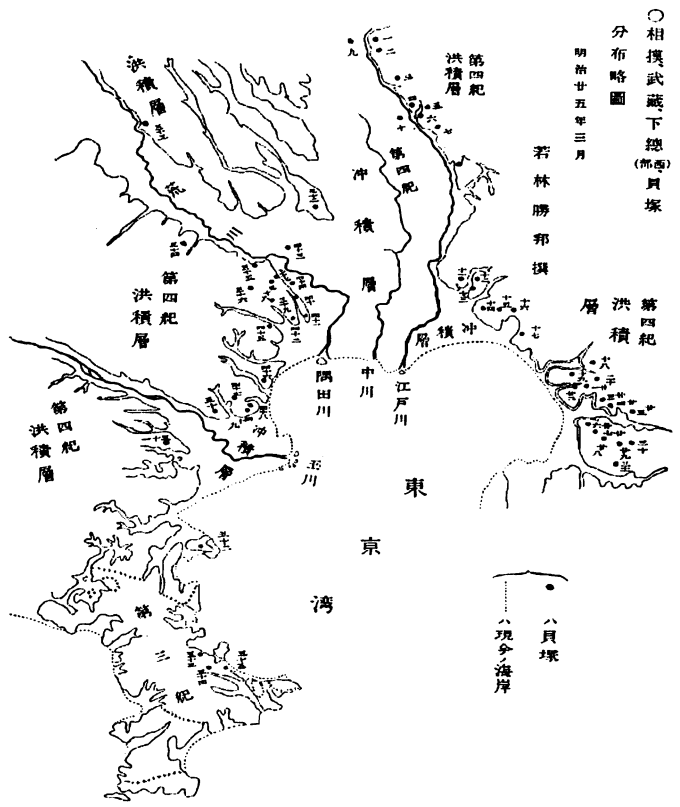
24.（テングニシ）「あかにし」に似るも大突起なし　26.ばい(バイ)角度は45度より少し大きい　29.（リュウグウホタルガイ）30.（ヒタチチソメンカワニナ）「にな」に似る海産の貝（※淡水貝）31.にな（ウミニナ）淡水産。表面黒色。長い円錐形。　32.（オオヘビガイ）形はイモ虫が集まったような外観　35.（アズマニシキガイ）表面の隆起に大中小の三種、大二本の間に中十二本、またその間に小百二十二本ある。　※（　）内の現和名は、金子前出1992による

■ 「若林勝邦」 の 分布調査

この頃、貝塚の分布調査を積極的に進めたのは、東京大学人類学教室に勤務していた　若林勝邦　でした。精力的に踏査を重ね、1892年（明治25）「下総武蔵相模に於ける貝塚分布」(東京人類学会誌7巻73号)の中で、55ヶ所報告しています。

県下の貝塚としては、51武蔵国橘樹郡**高田**（横浜市高田貝塚）　52武蔵国橘樹郡**横浜中村**（横浜市稲荷山貝塚）　53相模国**横須賀海軍病院構内**(横須賀市深田貝塚)　54三浦郡**吉井村**（横須賀市吉井貝塚）　55三浦郡**久比里村**（横須賀市江戸坂貝塚）の名前があがっています。この中で吉井貝塚は、若林勝邦が発見したとあります。

相模・武蔵・下総（西武）貝塚分布略図→



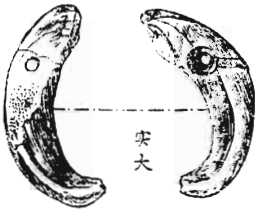
1893年（明治26）には、**井上喜久治・鳥居龍蔵**が、「横浜貝塚探検記」東京人類学雑誌８巻83号、「鶴見川沿岸貝塚探検記」同8巻88号を、**1894**年には内山九三郎が「玉川沿岸の貝塚」を同９巻94号に報告しています。

明治20年代の終わりには、川崎市（**子母口・久末・南加瀬**）横浜市（**番神台・西寺尾・師岡・駒岡・末吉・箕輪・折本・高田**）横須賀市（**茅山・吉井・江戸坂**）の貝塚が発見されました。

２．第２期　人種問題解明のための発掘期　明治時代後半（1898M31～1912M45）

明治時代後半の考古学は、珍品採集と人種論の解明に主力が注がれていました。

■「藤田清玖」の　岡村貝塚発見



1901年（明治34）医者藤田清**玖**は、岡村貝塚（三殿台貝塚）を発見しました。(「武蔵国久良岐郡屏風ヶ浦村岡村貝塚発見報告」東京人類学会雑誌14巻158号)。藤田は、往診時に高台の畑の側面が崩壊し、おびただしい貝殻が露出しているのを発見しました。鳥居龍蔵に通知し、同氏と巡検しています。採集した遺物の中に歯牙製飾具があり、鑑定した鳥居は「曲玉の起元物」という説をとなえた事が紹介されています。

■「八木奘三郎」の　諸磯貝塚・「佐藤伝蔵」の　カヤマ貝塚調査

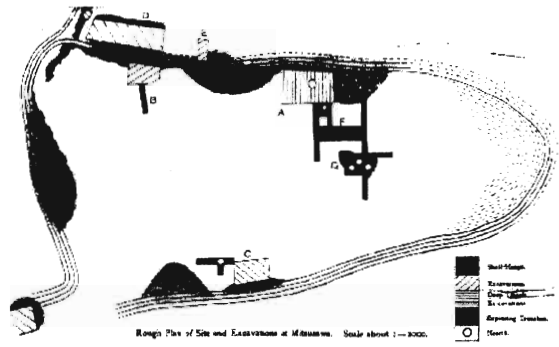
東大人類学教室で、坪井正五郎の指導を得た八木奘三郎は下村三四吉とともに、茨城県椎塚貝塚や千葉県阿玉台貝塚を発掘しましたが、貝の淡鹹により土器の新旧を決定するという方法論を打ち出しました。大正時代に導入された層位学的方法以前における方法論として評価されています。その**八木奘三郎**は1899年(明治30)三浦市**諸磯貝塚**を調査し、同じころ佐藤伝蔵も「相州（**カヤマ**）貝塚」を調査し、東京人類学会雑誌で報告しています。

■「マンロー」の　三ツ沢貝塚調査

石器時代人種問題は、明治20年代から人々の感心を集めていました。モースのプレアイヌ（アイノ）説、フィリップ・シーボルト、ジョン・ミルンによるアイヌ説、ベルツによる混合人種説、渡瀬荘三郎コロボックル説がとなえられました。坪井正五郎は吉見百穴を調査後、横穴を住居と考え、小金井良精・鳥居龍蔵・浜田耕作らの批判を受ける事になったコロボックル説を展開しました。この論争は1912年ロシアで開催された世界人類学会にでかけた坪井が客死したことにより消滅しました。

神奈川県では、**1905**年(明治38)スコットランド出身の医師　**ニール・ゴードン・マンロー**（Neil Gordon Munro ）により、**三ツ沢貝塚**が調査されましたが、その目的は人種問題の論拠となる人骨の採集でした。明治24年(1891)に来日して、山手のゼネラルホスピタルの医師であったマンローは、かつて日本列島にはアイヌ人が住んでいたと考え、そのことを証明するために、人骨を発見し

たいと考えていました。 **八木奘三郎** の協力を得て、明治38年6月から３ヶ月 にわたる調査を行い、５体の人骨（内子供１体）と竪穴住居の柱穴・壁・炉を発見しました。トレンチ方法によるそれまでにない大規模な調査で、神奈川県下で行われた初の本格的発掘調査でもありました。この炉址と調査で柱穴など日本で初めて住居址の一部が発見された事も、特記されます。人骨は小金井良精のアドヴイスを得てアイヌであるとし、「後石器時代之頭蓋骨」（東京人類学雑誌22巻255号）として明治40年水上久太郎の手をかり和文に翻訳し発表しました。



三ツ沢貝塚の見取り図（1908PrehistoricJapan）

■ 南加瀬貝塚 の 縄文と弥生

1908(明治39)年7月、医業が忙しかった**マンロー**は、**八木奘三郎** に依頼し川崎市夢見ヶ崎にある **南加瀬貝塚** を発掘しました。その縄文の上に弥生の貝層が7尺の厚さで堆積していた特異な遺跡です。マンローは今日でいう弥生式土器を中間土器（縄文と土師・須恵器の中間という意味）と命名しましました。縄文式土器と弥生土器が層位的に確認された遺跡として、研究史に残っています。八木の調査の前に、明治36年**伊藤望蜀**が弥生土器を採取しており、翌年**江見水陰**らも見学会かてら小発掘を試みています。この時、「弥生土器」の命名者、蒔田鎗次郎もいたようです。しかし、明治40年頃には、貝灰用や土とりのため全滅してしまいました。のちに杉原荘介は貝層なりとし、酒詰仲男は文化遺物が少ないので自然貝層であるとしました。

図76 南加瀬貝塚出土の久ヶ原式弥生土器（伊藤望蜀の発掘 『地中の秘密』より）

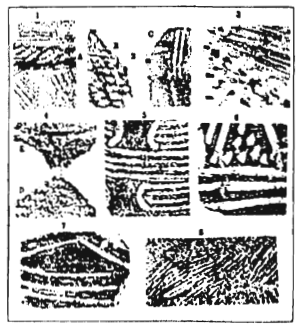
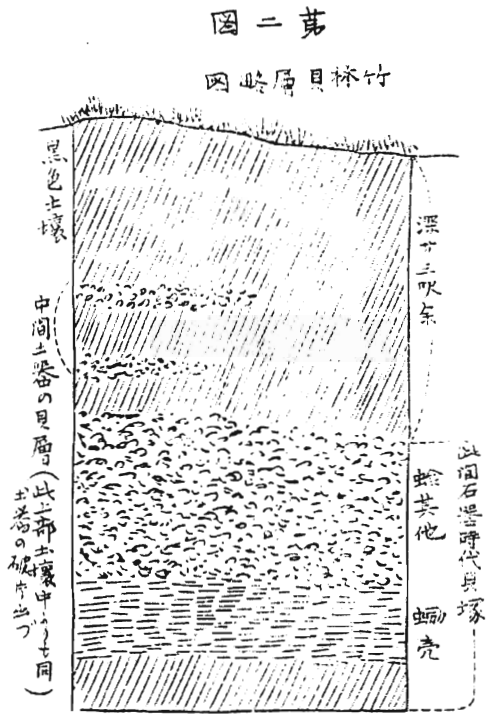


図78 南加瀬貝塚出土の弥生土器片拓影（八木奘三郎発掘『Prehistoric Japan』より）

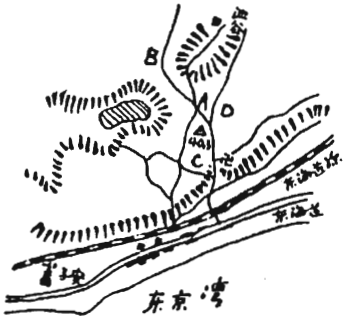
八木奘三郎「中間式土器の貝塚報告」
東京人類学雑誌 248 号より→



3. 第3期　土器編年解明のための発掘期　大正時代　(1913～1926)

■諸磯式土器編年　のための　調査

1921年（大正10）２月、**榊原政職**　は三浦半島では最大規模と言われている横須賀市**久比里貝塚**(江戸坂)を調査し、６月に『考古学雑誌』11巻10号に報告しました。同年、病をおして**諸磯貝塚**も調査されました。そして中期とも後期とも違う土器を「諸磯土器」と名づけました。諸磯式土器が鳥居龍蔵のいう厚手式と薄手式のどこに位置づけらかという課題のもと、1924年　**甲野勇**　による鶴見区**生見尾村**　(風早台貝塚)、**谷川磐雄**による同港北区**箕輪貝塚**　と続きました。風早台は４ヶ所の地点貝塚が発見されました。Ａ地点ではハマグリを主体とする厚さ30cmほどの貝層を確認し、以前掘り出し埋めてあった伸展葬１体を掘り出しました。



風早台1924甲野勇人類学雑誌19-4～6

この調査で、坪井は諸磯式は薄手式より新しく弥生に近いと考え、初めて時間差を意識しました。

1925年　**谷川磐雄**　は考古学雑誌に、横浜市港北区箕輪貝塚の報告をし『諸磯式土器の研究』を書かれています。「貝層は薄く遺物も散漫的なのは、貝の採集・廃棄が個人的だったためではないか」と想定しました。谷川は当事は通説であったのですが、厚手式・薄手式・諸磯式が並存していると考えました。1925年　**八幡一郎**　らが**万田貝塚**で火山灰をはさんで下から諸磯式、上層から厚手式を発見し、この課題は解決し収束しました。

この他に、1922年～23年にかけ、八幡一郎・小松真一　が　保土ヶ谷貝塚（帷子）の調査を行っています。八幡によれば「貝層中に灰の層があったり、棒をさしたらしい陥没もあった。獣骨は非常に多量で、犬の骨が完全にでていた」ようです。現在は横浜国立大学の構内ですが、ここでもかろうじて数片の貝の散布を確認することができる程度です。

４．第４期　貝塚研究の基盤形成のための資料収集期　(1927S1～戦前)

■大山史前学研究所　の　鶴見川渓谷の調査

貝塚の淡鹹度により編年序列をしようとしたのは大山史前学研究所でした。これは、明治27年に八木奘三郎らが示した方法論を継承したものでした。**大山柏**　が私財を投じて作った研究所では、南関東の貝塚を毎週１日１貝塚の予定で、5～10平方メートル程度の小発掘をおこないました。貝層を純鹹・主鹹・淡鹹・主淡・純淡の５分類に分け、渓谷（東木龍七によれば、おぼれ谷の方がふさわしい）ごとに集成しました。昭和２年から４年の月日を費やし

て、東京湾に注ぐ鶴見・多摩・入間・綾瀬・元荒川・古利根川の６渓谷95遺跡を調査しました。昭和８年「東京湾に注ぐ主要渓谷の貝塚における縄紋式石器時代の編年学的研究予報」が出され、収束しました。

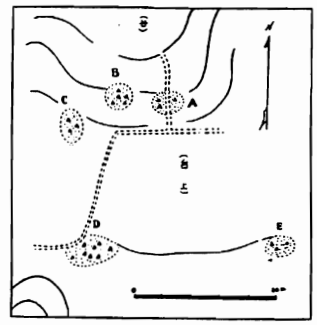


Fig. 2　下菅田貝塚群

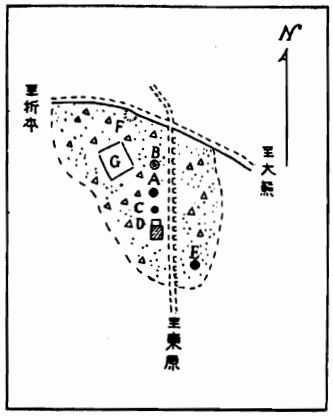


Fig. 2　折本貝塚
A.　八幡氏發掘點
B.C. 研究所發掘點
D.　土地人の發掘せる肥料穴及び肥料小屋
E.　板口氏發掘點
F.　堆　土
G.　表面に介殻散布なき畑地

鶴見渓谷諸磯式文化として折本貝塚・下菅田貝塚群について関東縄文式文化編年学的研究資料第１冊・第２冊として報告しています。

大正15年神奈川県**勝坂遺跡**　を発掘し、打製石斧を土掻き具と考え、縄文農耕を唱えました。食料問題についても、関心を示され「史前食料概説」を書き、食料の可食部分はどれくらいか、といった事に最初に着目された人でした。

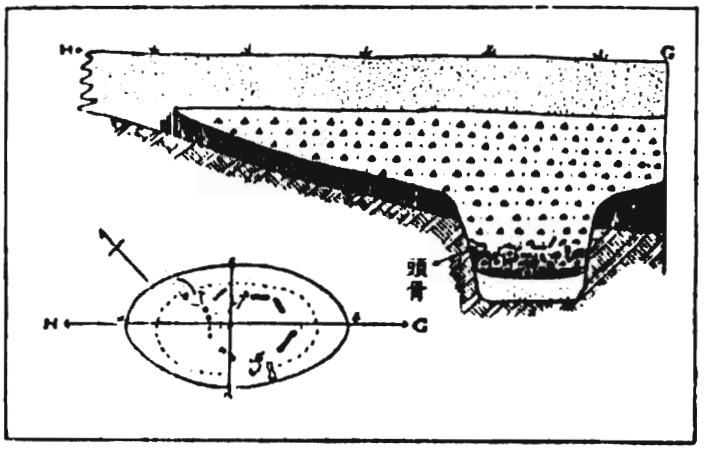
1929（昭和４）史前学雑誌発刊の頃は、会員数300人をこえる会でしたが、敗戦の色が濃くなった昭和18年史前学雑誌は15巻１号をもって廃刊となり、昭和20年渋谷区穏田にあった研究所は空襲で焼けてしまいました。

■今日の貝塚研究の基盤を作った　酒詰仲男　の研究

酒詰仲男は、大山史前学研究所の研究員として貝塚を調査し、大給尹らとともに、魚類・貝類の集成をはじめました。

1935(昭和10年)３月、**池上啓介・大給尹・土岐仲男**(酒詰のペンネーム)らは、横浜市鶴見区**小仙塚**　を発掘しています（史前学雑誌7巻4号)。15ヶ所の地点貝塚の内、Ａ貝塚が20×30ｍと広く、生育の良いハマグリ主体の純貝層は、厚いところでは90cmあったとあります。イカの甲が多量に発見されています。現鶴見高校内で、おそらく後期の馬蹄形貝塚が存在していたものと思われますが、1966年の校舎改築工事の発掘調査を最後にほとんど湮滅しました。

酒詰は関東地方の貝塚をすべて歩いて表を作成したいと考えていました。すでに東木竜七が石器時代の海岸線を復元していましたが、文献で調べて該当する地名の位置にドットをおとしたものでありました。酒詰は実際に歩き、もう一度やりなおしてみたいと考え、昭和９年に本籍地の神奈川県からスタートしました。まず、研究室に出入りしていた溝ノ口の岡栄一の病院をたずね、**久本貝塚**の場所を聞くことから始めたと、その著書『貝塚に学ぶ』に書いてあります。「保存のいい貝塚で土器の見当がつかない時には、史前学研究所の例にならって、坪堀り位はやってみる必要があったとあります。**山田西ノ谷貝塚**　(前期)のような、人のさわったことのない貝塚が残っており、**竹下次作**に手伝ってもらい、埋葬されたイヌの全身骨格を発掘しまた。それまでイヌの出土例は折本・菊名など全国で24例ありましたが、土壙に埋葬した状態で発見された例は初めてでした。「チンのよ



↑西ノ谷貝塚のイヌ埋葬土壙(1936史前学雑誌8-2より)

うな顔の子犬で、頸骨(軸椎)に骨折があり、それが癒着して治癒していました。歯牙は磨耗が甚だしく老犬であったといいます。

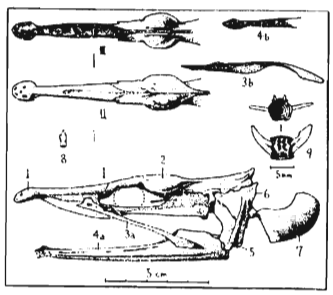
この家犬の発見については、その後港北ニュータウンの発掘調査で全域を調査された坂本彰氏が、果たして縄文時代のイヌだったのだろうか、という疑問を提示されました。詳しいことは、今印刷中の報告書に書かれたようですが、坂本さんによれば、今日においても検証相可能な報告を書かれた酒詰さんの確かな研究姿勢のすごさを感じられたようです。また酒詰は1940年に「貝塚間の相互関連―交通試論」人類学先史学講座17巻の中で、西ノ谷・南堀・北川の３遺跡は血縁集団のひとつではないかという試論を出しています。しかし、ここに迫る具体的な事は書かれていません。幸いこの３貝塚は港北ニュータウン内にあり、全域が調査されています。その意味では、酒詰説を検証するまたとないフィールドであると思います。斜面貝塚があった・住居址内貝塚があった、という事実だけでは、何も導き出せません。具体的にどのような内容だったのか、分析する作業が必要です。現状はその段階で、今後もいっそう厳しい状況ではありますが、やらない事には進みません。

酒詰氏が次々貝塚を発見した事で、研究所では四面楚歌となったようですが、**1938**年（昭和13）神奈川県下の貝塚研究の基盤ともいえる「**神奈川県下貝塚調査概報**」（人類学雑誌53巻１～３号）を出しました。貝塚の総括的研究を志し、貝塚の実数の把握から・地形的考察・文化遺物・自然遺物を綿密に調べあげました。この時の酒詰の徹底した調査は、1979年に発刊された『神奈川県史』考古資料編にある貝塚の93%にあたるといいます（前出 金子1992)。この成果は、**1959「日本貝塚地名表」1961「日本石器時代食料総説」**として結実しました。

金子浩昌は「現在の貝塚研究の基礎を築き、貝塚の研究とその実践にこれほど熱意をもって当たった研究者は誰もいなかったといっても過言ではない」と評価し、酒詰資料の中で行方不明とされる詳細分布地図を起こしさらなる資料価値を高めました。

先にもふれました『**貝塚に学ぶ**』は氏の自伝ですが、没後2年たった昭和42年に発刊されましたが、名著であるといわれています。その表紙カバーは、余山貝塚で出土人骨にあわせてはポーズをとる氏の写真で、飾られています。「本書は考古学を勉強している一学徒の手記である。私一代のよろこびも、悲しみも、すべてこの一書の中にうずも

れているのである。」と冒頭に記されています。「離婚と失職という中で、酒詰さんは貝塚の研究というさだかに見えないものにむかって、その全身をうちつけようとしている感じだった。」と芹沢長介氏は、1975「日本考古学選集22酒詰仲男」築地書館のあとがきで書かれています。「欠けた二本の前歯は、危険思想の持ち主ということで受けた拷問で折られたもので、人生の深い傷あとともいえるものだったが、酒詰さんは長い間それを直そうともしなかった。」といいます。まだ少年だった芹沢氏は、**大棚・吉田六間町・下田西・三殿台・荒立・杉田・諸磯**という横浜の貝塚を、酒詰氏と「ふたりで掘ってふたりで埋め戻した」とあります。



■「大給尹」と　日吉貝塚　（下組貝塚）

1942年10数回にわたって行われた横浜市下田下組貝塚の発掘で、貝塚では新発見のハモとコチについて、骨格の説明や漁法について触れています。コチも、当時としてはあまり出土例が知られていないため取り上げています（「史前漁労関係資料としてのハモとコチについて」史前学雑誌15巻１号）下組貝塚の魚類に関する本報告は1943年に史学22巻1号に掲載されました。それまで立ち遅れていた魚類について、考古学研究者自らの手によって行う事が可能であることを立証した人です。

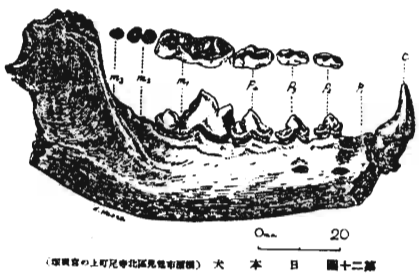
■川崎における「　岡栄一　」の調査

川崎在住の医師　**岡栄一**　は、橘樹考古学会を主宰し地域研究を押し進めました。**久本・子母口・末長窪台・新作八幡台**など、川崎市内の主だった貝塚の調査を行いました。1934年に報告した　**窪台貝塚**　では、遺跡中央部B地点50ｃｍを裁断し分析しています。今日でいうブロックサンプル法を採用している点が注目されます。

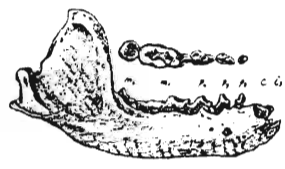
５．第５期　貝塚研究の基盤形成のための小発掘期　（戦中～1950年代）

■「直良信夫」の　研究

著書・報告書は120編、論文は350編におよぶ業績をのこされました。綿密な観察による標本のスケッチは芸術的ですらある、と言われるほどです。ただ写生されたのではなくその特徴がわかるように書かれています。獣類68種について分類・分布・系統の概説を記した「史前遺跡出土の獣骨」『古代文化』には、横浜市内の貝塚（上ノ宮・杉田・下末吉など）から採取した標本のスケッチが掲載されています。



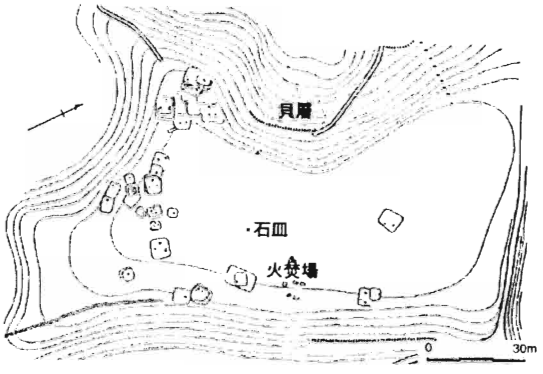
（横浜市の上町尼寺北遺跡出土標本）　犬　本　日　圖十二第



マグナア產塚貝とマグナア石化の產本日　圖十四第
期末世積洪　橿發富岡貝赤縣本栃　上
塚貝田杉市濱橫　下

「遠い先祖のその日その日の生活の片鱗を思って書いた」という直良の姿勢は、「実に広汎な研究

対象を持った人であった」(金子1992)という感慨につながっているように思われます。視界の背景に「人」の存在があり、人間に関係した事にはすべて興味を示したといいます。県下の貝塚の調査では、1941年江坂輝弥と共著で五領ヶ台の報告も書かれています（古代文化12-10)。



24　多くの市民が参加した南堀貝塚の発掘

■「和島誠一」「岡本勇」　を中心とした　南堀貝塚の調査

横浜市史編纂事業の一環として、1955年南堀貝塚の調査が行われ、その成果は「横浜市史」に掲載されました。発掘は、鶴見川中流域に集中分布する前期貝塚の実態追求を目的として、実施されました。原始集落の構成を、具体的に遺跡の発掘によって明らかにしようというものでした。7月15日から８月11日まで、市民参加を含めのべ3000人におよぶ人々が参加しました。中央に広場を持ち、縄文前期の住居址48件が取り囲む縄文時代のムラの様子が明らかになりました。斜面貝層も確認されています。貝塚を伴う集落研究の基本として、多大な貢献をした調査でした。のちの港北ニュータウンの調査で、新たに14件の住居と中央広場から土壙が多数検出されました。

■三浦半島　の　早期貝塚の調査

1949年　**岡本勇**　により**平坂貝塚**　の調査が行われ、貝層下より11本飢餓線をもつ人骨が発見されました。また1950･1955年に行われた**明治大学**(杉原荘介)による夏島貝塚の調査では、夏島から茅山式の土器が層位的に検出され、土器編年を確かなものにしました。動物遺存体については、**金子浩昌**　が分析を行い、縄文文化初頭の漁労活動の様相を明らかにしました。 **野島**（赤星直忠）**吉井**（赤星・岡本 他）の調査も行われ、三浦半島の貝塚の調査から早期の土器編年が確立されていきました。赤星直忠は土器の編年だけでなく、貝塚の貝類・動物遺存体に深い関心を示され、層別による比較、遺跡間の比較など、その貝塚の特徴をあぶりだす努力を重ねられた。

■称名寺貝塚　の調査

江見水陰　によって発見された貝塚ですが、1951年以降　**吉田格**　らによって調査が重ねられてきました。砂丘上に形成された９カ所の貝塚は、古墳・江戸時代の貝塚もありました。イルカの骨も多く、その１頭の口から大型の組み合わせ釣り針を発見しました。1963年に行われたD地点の分析を行った**金子浩昌**は、後期中葉、漁労活動から狩猟活動へ転換していく様子を動物遺存体の分析を通して、具体的に把握し、報告されました。

この頃北台（高橋在久 他）下組・森町（西村正衛）杉田（西村・杉原）西富（寺田兼方）などの貝塚も調査されました。

６．第６期　開発に伴う大規模な緊急発掘調査期　（1960年代～現在）

高度成長経済に伴い大規模開発が行われるようになると、発掘目的が先にあるのではなく、開発に伴い記録保存のための調査が行われるようになりました。1961年三殿台の発掘も、小学校の拡張工事に伴う調査でした。保存の声があがり幸いなことに1966年国指定遺跡となり整備されました。1964年第三京浜の開設に伴う折本貝塚、1970から80年にかけ、高田・宮の原・平台・堤・境田・上台・仏向・西ノ谷・北川・南堀・茅ヶ崎・諸岡・高坂・遠藤貝塚などの発掘が行われました。またここ数年、もうおそらく貝塚の調査は無いのではと思った矢先、羽根尾・杉田・稲荷山貝塚の発掘調査が行われました。羽根尾のように入江に面して形成された斜面貝塚の存在も初めてのものでしたし、また貝層の厚さという点では、県内でも有数のものがあったとおもわれる杉田貝塚の調査もありました。明治19年「中村富士塚」として東京人類学雑誌に報告された「稲荷山貝塚」、2002年豊富な骨角器とともに、貝層形成のあらましに論及した報告書が刊行されました。しかし、膨大な遺物の整理を短期間に終えなくてはならないというのが、近年の現状ではないでしょうか。

もともと、いただきましたテーマは「貝塚研究と集落論研究」というものでした。今果たしてこのテーマで俎上に上げる事のできる遺跡は県下にあるだろうか、というのが正直な感想でした。まず、個々の遺跡の具体的内容を比較検討ができる状態にデータ化し、個々の遺跡の特質を把握する段階が不十分であるといわざるを得ません。しかし、すくなくても、貝塚研究はその視野に、当然集落のありかたを介在させているわけです。今後のこの方向にむかって研究が進んでいかなければならないことは、確かであると思います。

おわりに

モースの次の言葉を紹介させていただきます。それはモースが、大森貝塚に同行した東大生松浦佐用彦氏が病気のため学業半ばで夭折した際、墓碑の裏面に英文で刻んだ言葉です。今も、上野谷中墓地の乙6号2側に「高知県松浦佐用彦墓」は、たっています。

A FAITHFUL STUDENT　A　SINCERE　FREND A LOVER OF NATURE HOLDING　THE　BELIEF　THAT　IN PHYSICAL　QUESTION ″　THE ULTIMATE COURT OF APPEAL IS OBSERVATION AND EXPERIMENT AND　NOT AUTHORITY ″　SUCH WAS　MATSURA　　EDWARD　S.　MORSE

「信頼のおける学徒、誠実な友、自然を愛する士、 物質的な探究心と同じ位、道徳的信念を持っていた。“最終的な判断は権威に求めるのではなく、観察力と実験なり”松浦君がそうであったように」

この言葉こそ、モースが示した研究姿勢そのものであり、そして今日も私たちに語りかけているように思うのです。

環濠集落—拠点集落と集落群

小宮　恒雄

弥生時代の環濠集落の存在がはじめて明らかになったのは1938年、鏡山猛による福岡市比恵遺跡の調査である。連接し重複した１辺30～70mの方形の環濠３基と、１辺90mの環濠の一部が確認され、小型の１基についてほぼ全容が調査された。環濠内に一部重複した竪穴住居址５軒と井戸２基、環濠外に甕棺７基があり、時期は中期であった。

第二次大戦後1950年から、山口県東部の島田川流域で小野忠　による高地性集落の調査研究が始まった。天王遺跡、岡ノ山遺跡、岡原遺跡などで、いずれもＶ字溝を備え、岡原遺跡では土塁が確認された。これら高地性集落は農耕に不向きな所にあり、溝や土塁の規模が大きいことから、防御集落と考えられた。

この頃北九州では、1951～54年に福岡市板付遺跡が日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員会の事業の一環として調査された。遺跡は弥生時代開始期の環濠集落で、西端部の環濠と弦状溝の部分が発掘され、多数の貯蔵穴が発見された。しかしこの時点で、環濠の全形はまだ明らかではなかった。

ほぼこの頃に、神奈川でも環濠が確認されている。1954～55年に和島誠一を中心として横浜市史編纂のための遺跡分布調査が行われ、その中で横浜市篠原町表谷1433付近でＶ字溝２条、折本町西原遺跡で深さ1.5mのＶ字溝が崖面に発見された。

1960年代後半には、環濠集落の全貌が明らかになってくる。まず1965年、大阪府高槻市安満遺跡で前期の環濠集落の北端部が発掘され、二重環濠が確認された。そして1967～68年に、岡本勇を団長として横浜市朝光寺原遺跡の調査が行われ、環濠集落の全容が初めて明らかになった。時期は弥生中期後半である。弥生時代の集落はさらに後期終末まで継続し、環濠を設けることなく変遷した。環濠集落の内部は約60軒の竪穴住居址が2群に分かれて分布し、中に１軒巨大住居がある。中段の台地からは18基の方形周溝墓が集中する墓地が発見された。方形周溝墓はまったく遺物が伴わなかったため、墓はすべて古墳時代前期のものと考えていた。この調査によってはじめて環濠集落の全容が判明し、防御機能を備えた地域の拠点集落という認識を持つに至ったのである。

1970年代に入ると、巨大環濠集落の様相が判明してきた。1969～70年に行われた第2阪和国道建設に伴う池上曽根遺跡の調査で、巨大な環濠集落の両端が明らかになり、この頃、愛知県朝日遺跡でも、大規模な環濠集落と厳重な防御施設が調査されている。

1973年、横浜市港北ニュータウン内の大塚遺跡の調査がはじまった。その前年、隣接する歳勝土遺跡の調査で弥生中期の方形周溝墓群を調査し、その集落を解明するために、予備調査で大塚遺跡の環濠を把握していた。弥生集落の全面調査には２年を要し、文字どうりその全貌を発掘したので

ある。

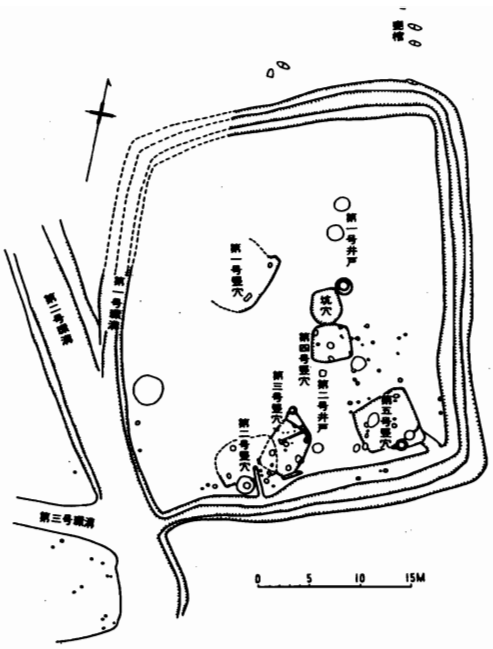
大塚遺跡は複数の単位集団が構成する拠点形の集落である。鶴見川流域には朝光寺原遺跡などこうした拠点型環濠集落が点在し、その周囲に環濠を持たない小規模な周辺型集落がいくつか点在して集落群を形成していた。そしてそれら割拠する集落群は、巨大環濠集落・折本西原遺跡を核として結合し、流域全体で一つの共同体的地域集団を形成していたのであろう。この折本西原遺跡を中核型集落と呼ぶ。

1970年代後半から80年代には、奈良県唐古・鍵遺跡（1977～87）や佐賀県吉野ケ里遺跡（1986）など西日本各地で引き続き巨大環濠集落の調査が相次いだ。この頃南関東地方では横浜市四枚畑遺跡（1979）、殿屋敷遺跡（1983～1984）など後期の小規模環濠集落の発見が増加した。後期になると環濠集落の規模が縮小すると共に、環濠集落のあり方自体が変化する。中期のような周辺型、拠点型、中核型といった組織は解体し、新たな集団編成が進んだかに見える。南関東では東京湾岸の背後に小土器分布圏が成立し、中期の宮ノ台式分布圏は大きく再編されるが、鶴見川流域や多摩川流域ではこうした小土器分布圏の境界近くに、後期の小規模環濠集落が成立するらしい。

1988年、愛知県でシンポジウム「弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題」が開催された。その資料は３冊におよぶ膨大なもので、北九州から北陸に至る弥生前期から古墳前期までの297箇所に及ぶ環濠集落が集成されており、日本列島における環濠集落の動態の大筋が判明してきたかに見える。しかしそれはまた、新たな問題を提起することにもなる。

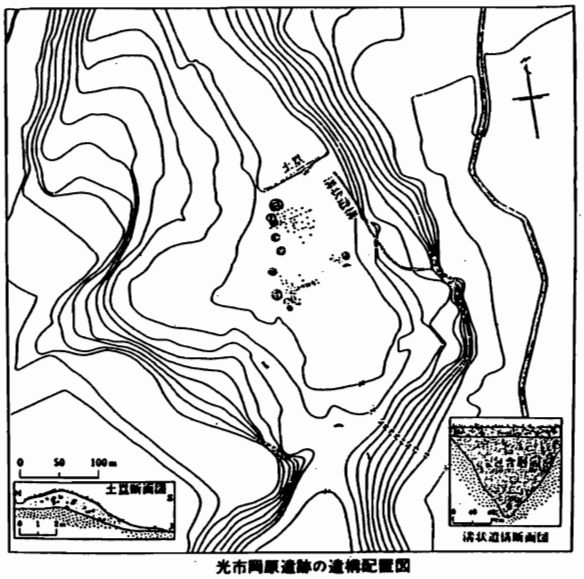
環濠集落のルーツの問題は、1990年に韓国で検丹里遺跡の環濠集落が発見され、彼我の対比が具体的になってきた。また、90年代に入って巨大集落での大型建物の発見などを契機に、西日本では弥生都市論も起こってきた。

神奈川県内では1989年に綾瀬市の神埼遺跡が調査され、後期小型環濠集落がほぼ純粋に東海西部の土器を出土することが明らかになり、集団の直接の移動を考慮しなければならなくなってきた。特に90年代に入って県西部で伊勢原市御屋敷添遺跡（1991, 1994）、厚木市宮の里遺跡（1993, 1997）など後期の環濠集落の発見調査が相次いでいる。これらは東海東部と東海西部とにグループ分けが出来るといわれており（西川1998）、それが在地の発展とどうかかわったのか、地域の弥生後期の歴史像を構築しなおす上で、避けて通れない課題となっている。

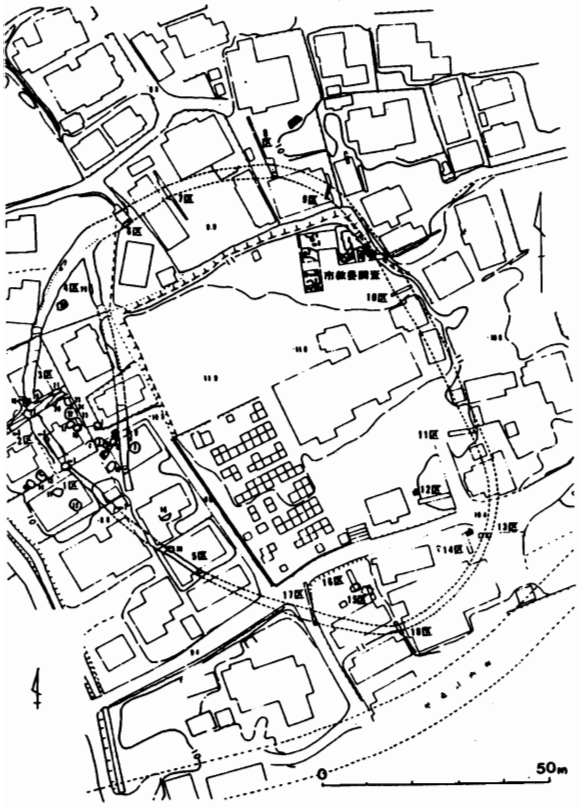


比恵第一環溝住居址平面図

鏡山猛「環溝住居阯小論(1)～(4)」思淵　第67～78輯

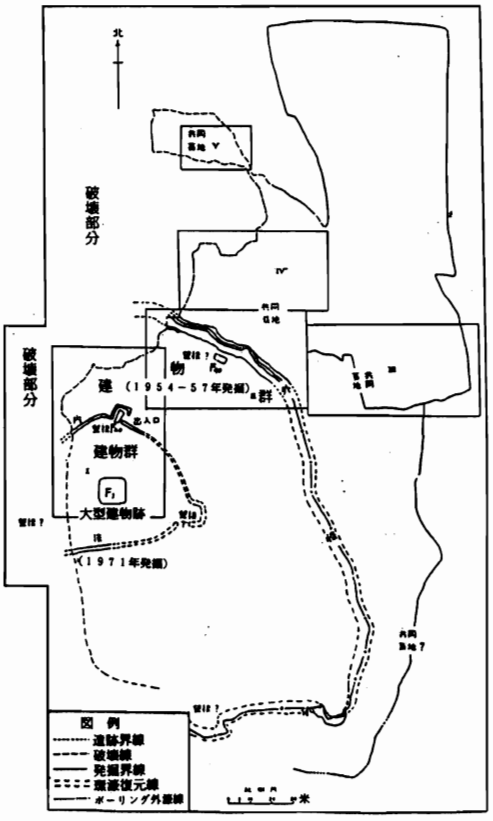


光市岡原遺跡の遺構配置図



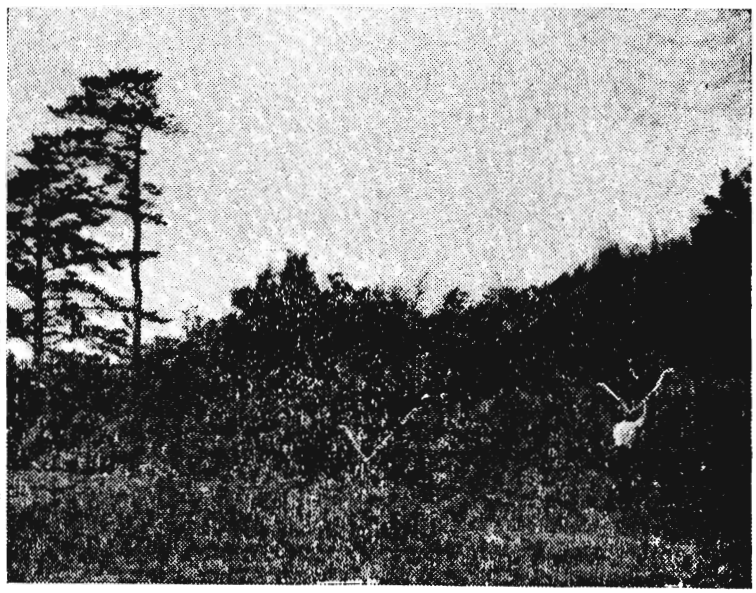
板付遺跡環溝図

森貞次郎・岡崎敬「福岡県板付遺跡」『日本農耕文化の生成』



中国陝西省の半坡遺跡の環濠集落

銭　耀　鵬　『青陵』第85号



弥生時代集落に付随する「V字溝」の断面（白線）

港北区篠原町表谷1433番地付近発見

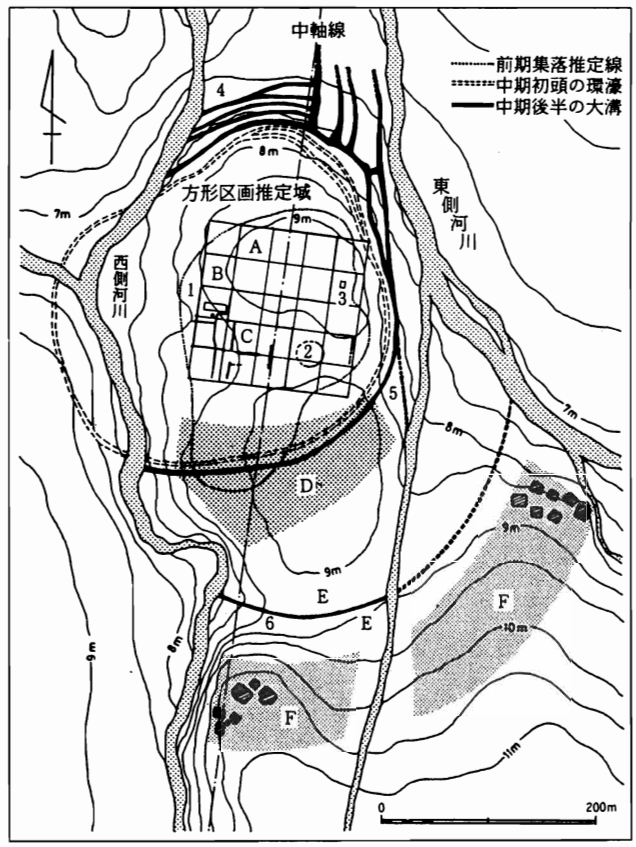
『横浜市史』1

「朝光寺原A地区遺跡第1次発掘調査略報」

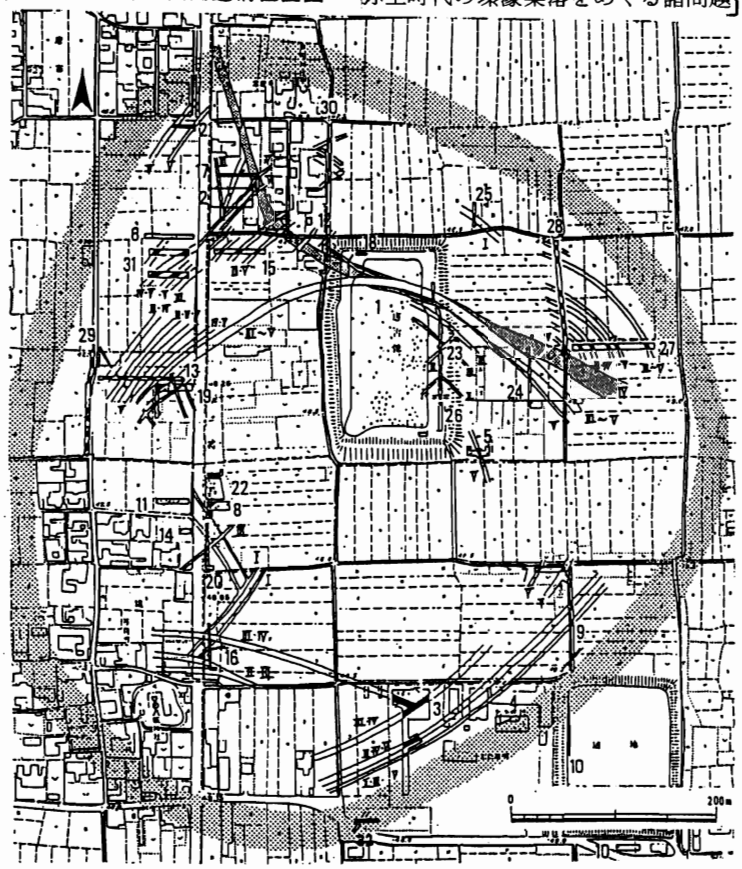
池上曽根遺跡の集落配置

A.首長居館　B.祭殿域　C.工房域
D.一般居住域　E.空閑地　F.墓域
1.大型高床式建物　2.円形台地
3.大型掘立柱建物　4.多重環濠帯
5.内濠　6.外濠

池上曽根遺跡史跡指定20周年記念
弥生の環濠都市と巨大神殿



唐古・鍵遺跡検出遺構位置図　「弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題」



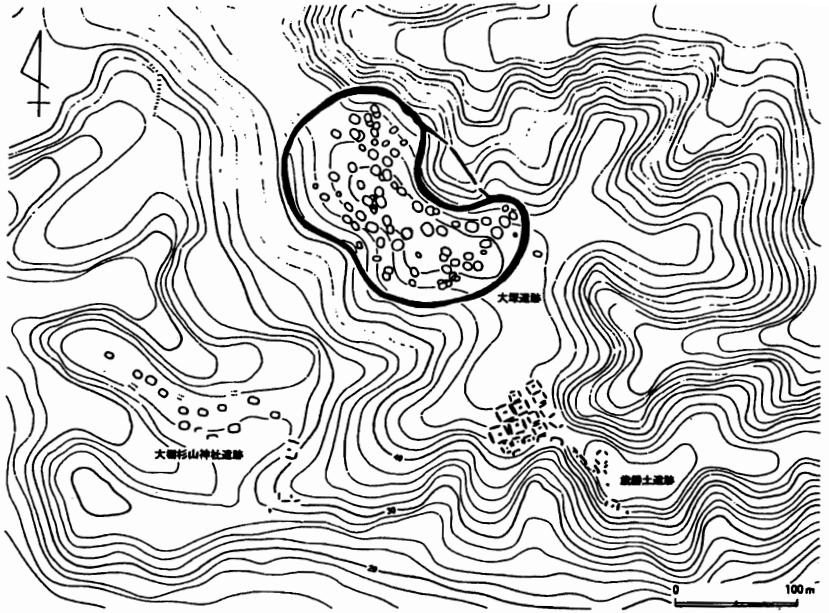
大塚遺跡

歳勝土遺跡

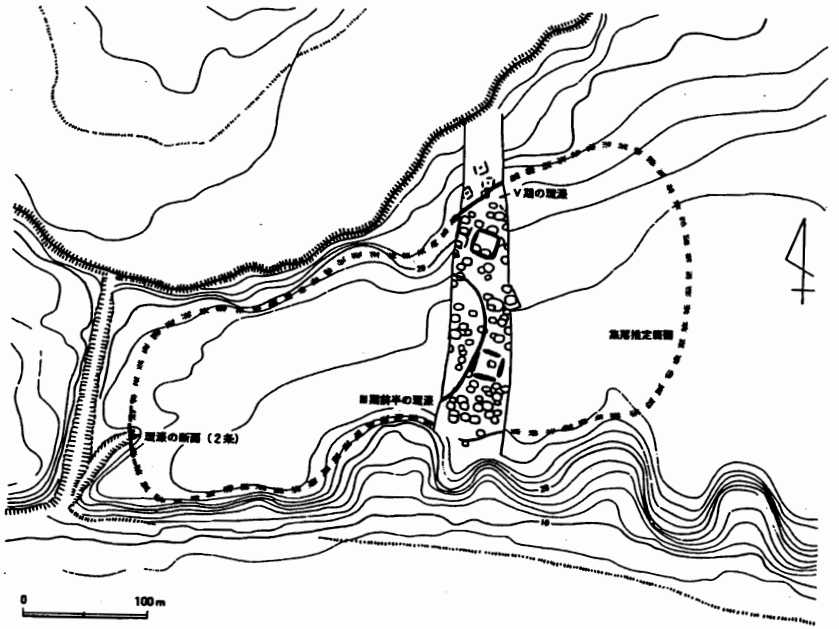
0　100m

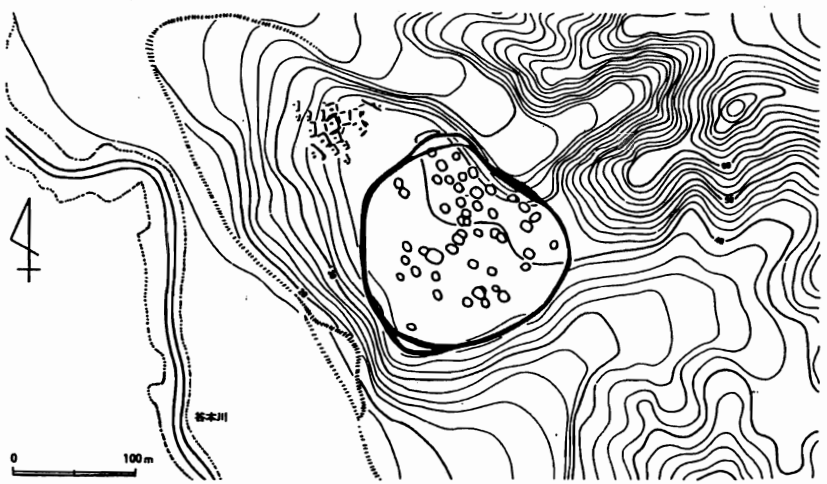
大塚（C８）遺跡と歳勝土（C６・７）遺跡の全体図（弥生時代以外の遺構は省略してある）

大棚杉山神社遺跡（都筑区）



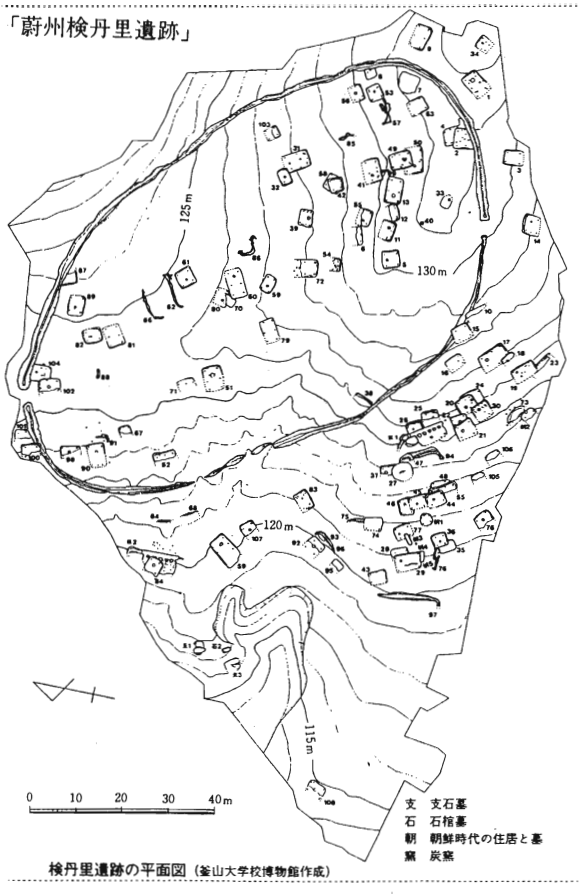
第２図　大塚・歳勝土遺跡、大棚杉山神社遺跡（1/5000）





第３図　朝光寺原遺跡（1/5000）

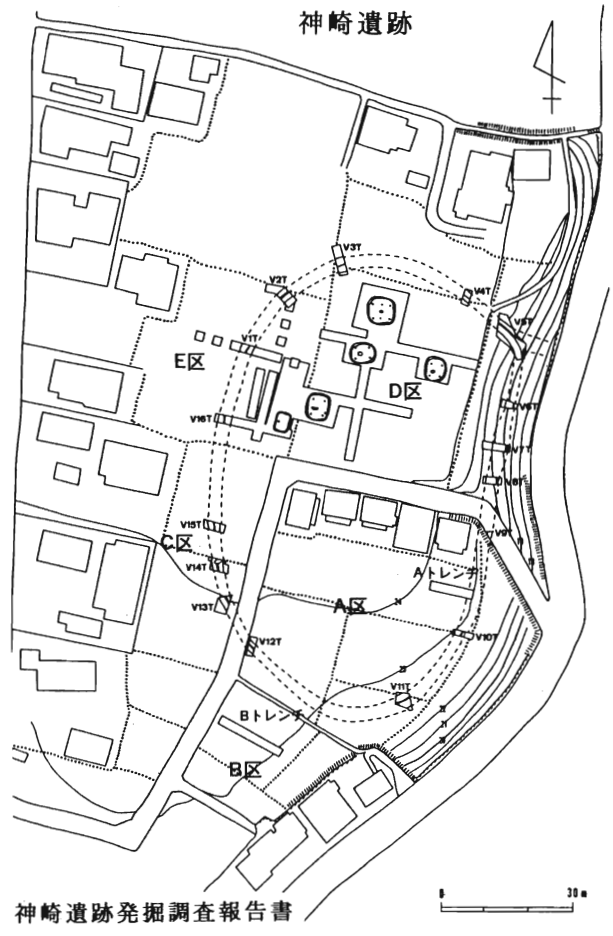
「蔚州検丹里遺跡」



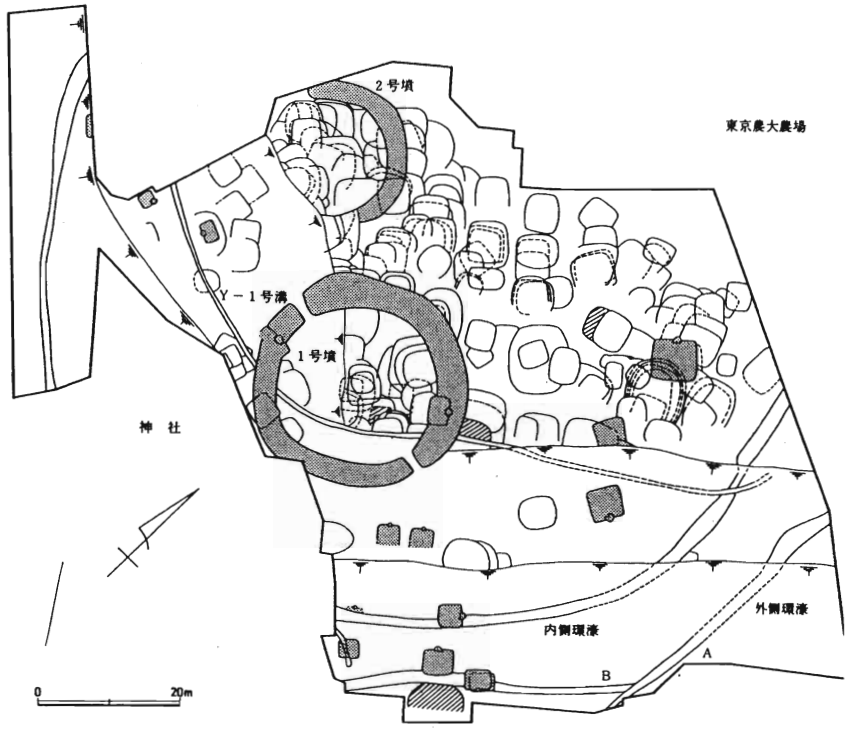
検丹里遺跡の平面図（釜山大学校博物館作成）

考古学研究146

神崎遺跡



神崎遺跡発掘調査報告書



厚木市宮の里遺跡遺構配置図　第12回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨

古墳・横穴墓の調査歴と研究史

—古墳時代後期の伊勢原を中心として—

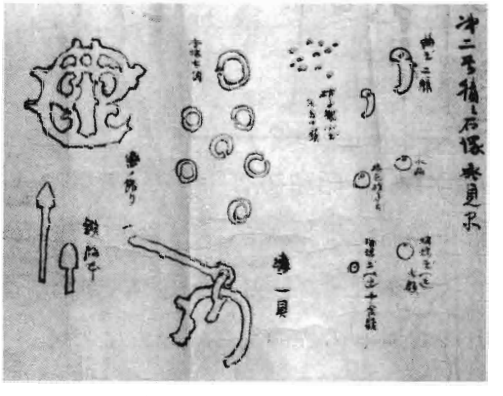
立花　実

はじめに

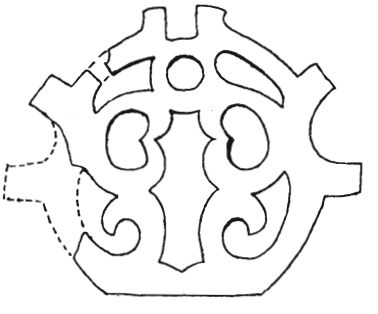
今回の統一テーマは研究史である。私に課せられた課題も神奈川県における古墳時代の研究史であった。しかし、古墳時代の350年間という期間は社会が大きく変化した時代であり、居住域・墓域・生産域それぞれにおいて技術革新により多くの文物が生み出された。それらについての個別の研究も数多く、神奈川県という枠内においてもそれらを簡潔に整理することは難しい。よって、表面的な解説よりも具体例をとの考えから、私の勤める伊勢原を中心として、今まであまり知られていない古墳と横穴墓の調査、研究に絞って紹介したい。

１．古墳時代後期の古墳と横穴墓の調査

（１）明　治　県内の古墳の調査歴は詳らかではないが、明治時代後半には本格的な発掘調査が実施されていたらしい。伊勢原でも明治33年には東京帝国大学の坪井正五郎によって三ノ宮の御領原（ごりょうはら）古墳群の発掘調査が行われている。調査に際しては、三之宮比々多神社の永井健之輔宮司の助力があったようで、当神社に坪井の筆による調査記録が残されている（１）。それによると、神社周辺の十数基にのぼる古墳を調査したらしく、鉄刀、鉄鏃、刀子、耳環、勾玉等の他、素環の鏡板付轡（くつわ）、雲珠（うず）等の馬具も見ることができる。また、２号墳からは「轡の飾り」と記されている金属製品が出土しているが（１の左上）、これは後に国学院大学に保存されている神林淳雄資料の実測図（２）によって金銅製の双竜環頭大刀の柄頭の一部であることが確認された（穴沢他1979）。今のところ、県内発見の環頭大刀６例のうちのひとつである。しかし、残念なことに現物の所在は明らかになっていない。



１．明治33年、坪井正五郎による御領原古墳群出土遺物の記録
（三之宮比々田神社蔵）



２．金銅製双竜環頭大刀柄頭
（穴沢他1979より）

この他、東京国立博物館の資料目録によると、明治から大正時代にかけて三ノ宮出土の刀や馬具等が収蔵されており、学界でも後期古墳の群集する地域として注目されていたことがわかる。

3．尾根山古墳の調査(『赤星ノート』より)

4．埒免古墳の調査(三之宮比々多神社蔵)

5．三ノ宮３号墳の調査(『赤星ノート』より)

6．北高森第１号墳の調査(寺村他1998)

(２)大正～昭和初期　学術調査には厳しい世相であったと思われるが、引き続き古墳と横穴墓を中心に踏査が行われている。石野　瑛、大場磐雄らの名が見られるが、特に石野の残した踏査記録には当時の様子が詳しく記されており、資料的価値は高い。昭和初期の石野の記録によれば、三之宮比々多神社の周囲約３km四方に古墳111基、横穴墓５群、35基が現存していたという。

(３)第２次大戦後　戦後の新しい調査・研究をリードしたのは赤星直忠である。古墳時代後期に関して赤星は、主に三浦半島や大磯丘陵では横穴墓を、そして伊勢原を中心とした県央部では横穴式石室を持つ古墳を積極的に調査したようだ。なかでも昭和35年に偶然発見された登尾山古墳は、比々多神社の永井参治宮司の尽力により、神奈川県と国学院大学で正式な発掘調査が実施されるに至り、豊富な副葬品が出土するなど多大な成果を挙げた。この調査は、後に『神奈川県埋蔵文化財調査報告１』としてまとめられることとなる。この後赤星は、当時計画していた大山周辺文化財調査の一環として、昭和36・37年に尾根山(おねやま)古墳群の発掘調査を実施するが(３)、それも登尾山(とおのやま)古墳での多大な成果に触発されてのことと思われる。

また、高度成長期の先駆けとなる開発事業関係でも古墳の発掘調査が相次いだ。東名高速道路の建設に関しては県内で三個所の発掘調査が行われたが、その内の二個所が伊勢原の古墳であった。それは昭和39年の明治大学隊による三ノ宮３号墳(５)、同40年の国学院大学隊による北高森第１・２

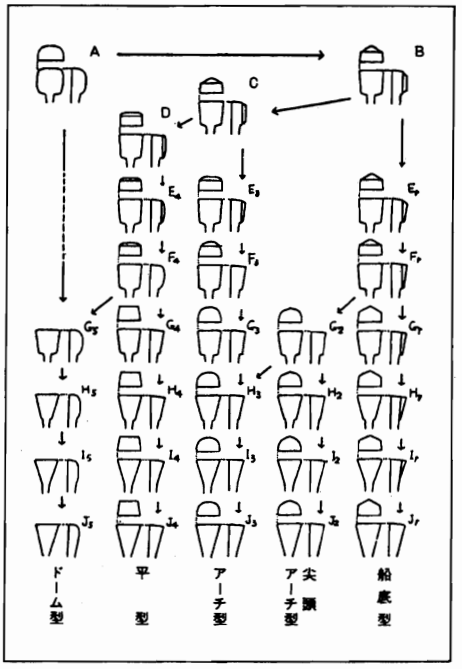
号墳（6）の調査であり、別に県教委によって川上の横穴墓群（昭和41年）の調査も行われている。また、民間の工事を原因とする緊急調査についても県教委の北高森第３号墳（昭和40年）、国学院大学の埒免（らちめん）古墳（4、昭和40年）の調査が実施されている。このように、当時東京の考古学界では、伊勢原三ノ宮近辺は古墳調査の良好なフィールドと評価されていたようだ。ただし、このときの印象から、“横穴墓の大磯、古墳の三ノ宮”というイメージが必要以上に強調されたことも否定できない。

もう一点ここで重要なことは、こうした行政の体制が整う前の調査資料が、各地でしばしば散逸してしまっていることが多いなかで、三ノ宮地域の調査に限ってはその多くが現在まで残されていることである。これは、先の永井参治宮司の個人的な努力によるものであり、考古資料の価値が今ほど認められていなかった時期に、いち早くその重要性に気づき、自ら収集を図った姿勢には頭が下がる思いである。これらの資料は今でも三之宮比々多神社で見学することができる。

２．古墳と横穴墓の研究史

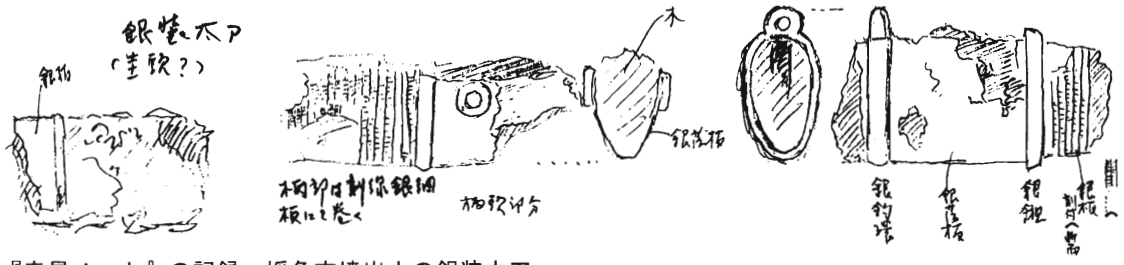
（１）古　墳　見てきたような古い調査歴がありながら、古墳の研究はあまり進展しなかった。特に遺構の研究は、精度の高い実測図が少なかったこともあって、近年になってようやく議論が始まったといえる（冨沢1991、宍戸2000・01、関根2001）。遺物については、鉄鏃等一部については総合的な研究があるものの、刀や馬具については集成が行われた程度で、装飾品等を加えた副葬品の組み合わせについての分析も未だ行われていない。一方、出土品から見た地域勢力やその性格（遠藤1989、須藤1995）、現時点までの研究史（近野1993）については論考がある。

（２）横穴墓　県内の横穴墓研究については、赤星直忠がその先駆者といえる。赤星は三浦半島や大磯丘陵を中心とした調査により、横穴墓の形態変遷を明らかにした（7）。それは、時期的検証に問題を残しながらもその後の研究の基礎となり、かながわ考古学財団のプロジェクトチームにより県内各流域毎の形態変遷が示されることで結実したといえる（古墳時代研究プロジェクトチーム1996～2002）。また、玄室外の施設が明らかになった横浜市市ケ尾横穴墓群（田中他1982）、被葬者像について論じた阿部黎子の研究（阿部1966）は他地域の横穴墓研究にも大きな影響を及ぼした。こうして、現在は県内の各地域で形態と時期、群のあり方などを中心に資料の蓄積と分析が行われている。

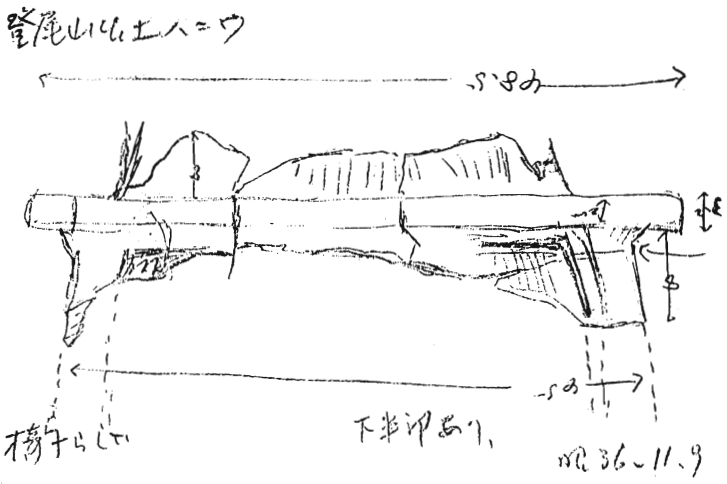


7．横穴墓の形態変遷図（赤星1964）

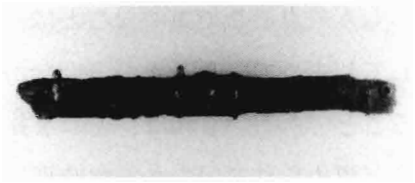
このように横穴墓については、ここで詳しく紹介できないほどの研究史があり、それらについては本会の第１回入



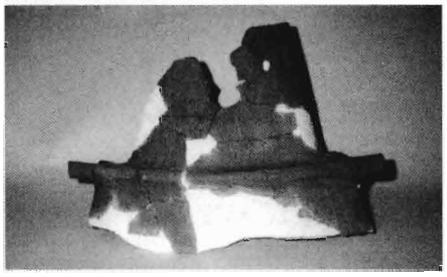
8．『赤星ノート』の記録　埒免古墳出土の銀装大刀



10.『赤星ノート』の記録　登尾山古墳出土の家形埴輪



9．修復した銀装大刀



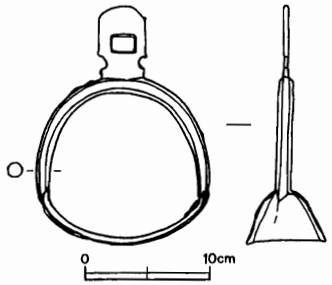
11. 現存する家形埴輪

門考古学講座（神奈川県考古学会1994）をはじめとし、上田　薫、池上　悟らによってわかりやすくまとめられている（上田1989・93、池上1980・2000、古墳時代研究プロジェクトチーム1995）。

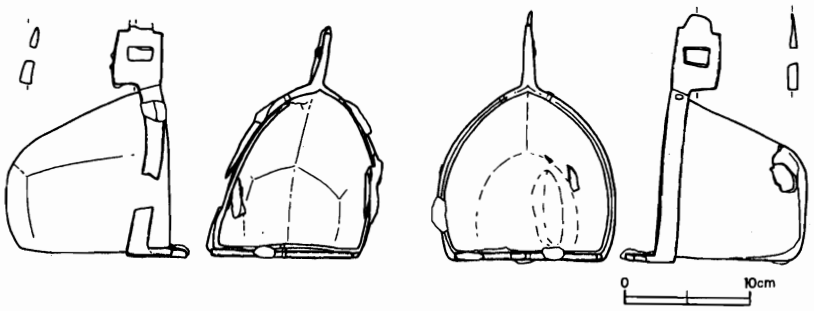
（3）踏査記録　正式な発掘調査には至らなかったが、外観からもある程度の判断が可能な古墳と横穴墓の特性を生かして、その踏査や聞き取り調査の記録にも優れたものがある。先に触れた石野瑛に加えて、赤星直忠の通称『赤星ノート』も実に豊富な内容を備えている。これは赤星が行った調査の実測図、写真、日誌、スケッチ、メモで、埋蔵文化財をはじめとし、建築、民俗、工芸品、歴史資料等多岐に渡る文化財について克明に記されている。県内各地の記録は段ボール箱数十箱に及び、その膨大な情報量に圧倒される。ここに示したものはその内のごく一部であるが、埒免（らちめん）古墳の銀装大刀（8）や登尾山古墳の埴輪類（10）は未だに資料化されていないものである。また、三ノ宮周辺の聞き取り調査では、金冠、頭椎（かぶつち）大刀、壺鐙、鈴釧の出土も伝えられている。この『赤星ノート』は県内埋蔵文化財担当者必須の内容を備え、現状が大きく様変わりしている今であるが故にその価値は計り知れない。

3．古墳と横穴墓をめぐるこれからの課題

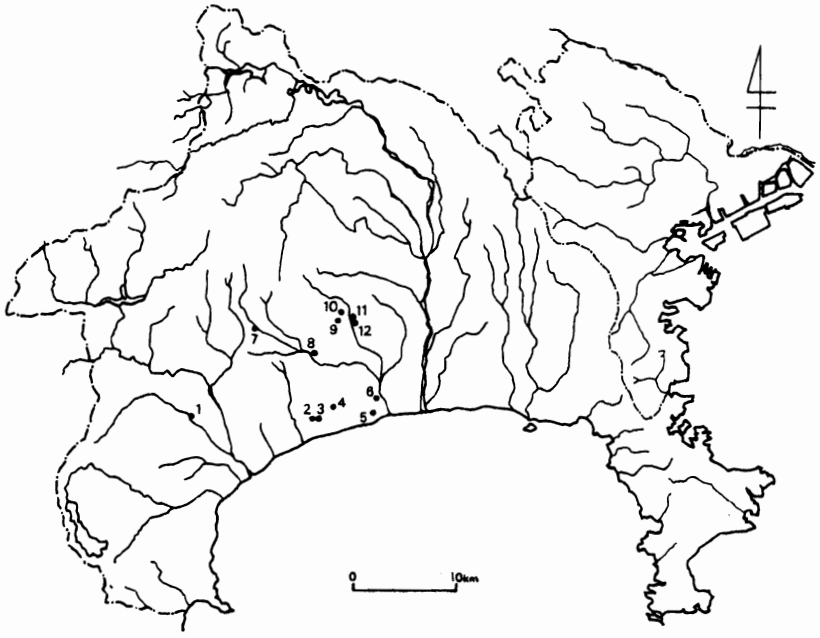
次に古墳と横穴墓のこれからの課題について、従来から指摘されている長期懸案事項と、このところ分析が進んできた事項に分けて取り上げてみたい。



12. 三ノ宮・下尾崎遺跡第１号
横穴墓出土の輪鐙（立花1995）

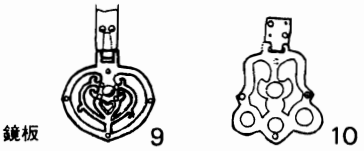


13. 三ノ宮・上栗原遺跡第５号横穴墓出土の壺鐙（立花1995）



相模国領域出土の金銅装馬具

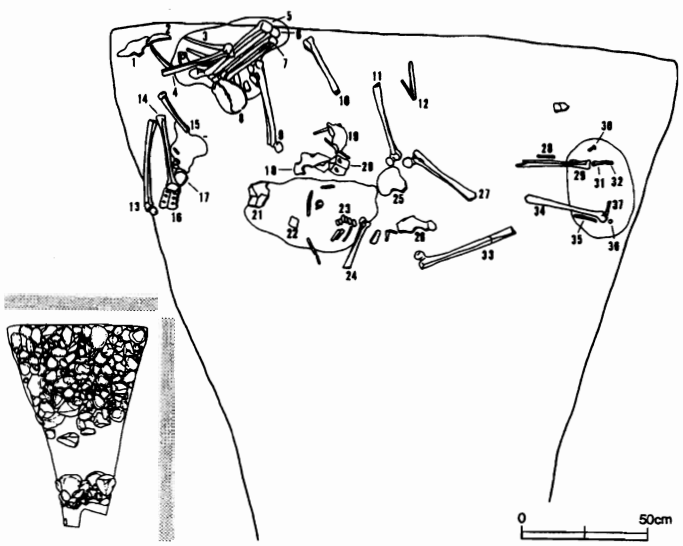
	No	遺跡名	種類
鎌倉	1	塚田２号墳	しおで金具、鞍金物
	2	諏訪脇西９号横穴墓	帯金具？
	3	諏訪脇Ｃ６号横穴墓	帯金具
	4	下田６号横穴墓	しおでの座金具？、二脚鈴
	5	前谷原横穴墓群	辻金具
	6	高根８号横穴墓	花形杏葉、雲珠
	7	桜土手38号墳	辻金具、帯金具
	8	曽屋大字斎ヶ分	雲珠、辻金具
相武	9	登尾山古墳	鏡板付轡、杏葉、雲珠、辻金具、帯金具、二脚鈴
	10	らちめん古墳	鏡板付轡、杏葉、鞍金物
	11	三ノ宮３号墳	雲珠
	12	鈴川古墳	雲珠、カコ



14. 神奈川県における金銅装馬具の分布（立花2001）

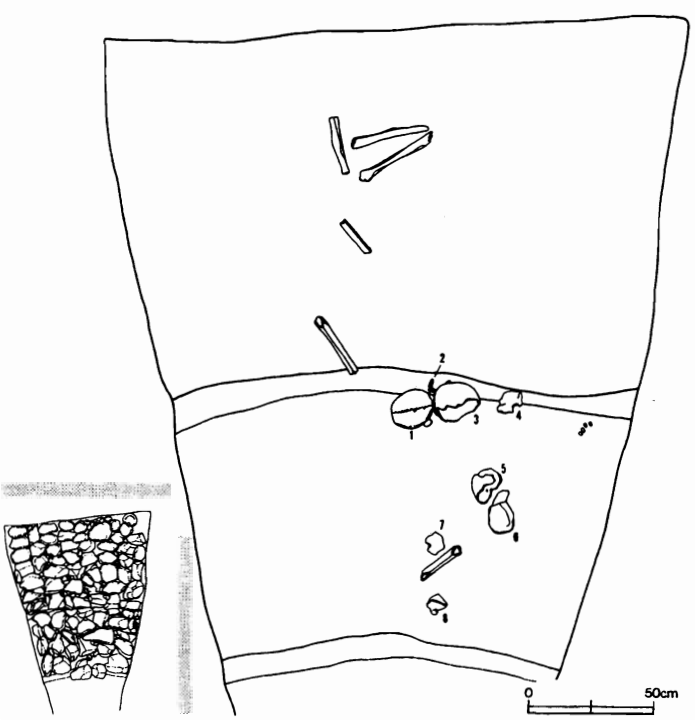
（１）古典的課題　幾度となく言われ続けている最大の課題は、古墳と横穴墓の関係である。この異なる墓制がなぜ時間的に重なり、空間的に混在しながら存在するのだろうか。特に両者が近接して併存する伊勢原ら県央部にとっては、大きな問題である。これに対しては、集団差、階層差、系統差、職掌差など様々なことが言われているがどれも決め手に欠ける。今現在言えることは、これほどの墓制の違いが、集落では見いだせないということである。集落の調査で異なる集団を抽出したとか、階層差、系統差が歴然としているという事例は聞いたことがない。つまり、識別しえない以上、古墳に葬られた人も横穴墓に眠る人も、生前は似たようなムラに住んでいたことになる。確かに古墳に比べて横穴墓の築造労力は少なく、また副葬品の内容も見劣りする場合が多い。しかし、三ノ宮の下尾崎遺跡、上栗原遺跡で横穴墓から出土した鐙（あぶみ）（12・13）は、古墳でさえ馬具を副葬しなくなる７世紀後半になって納められたものであり、同型の資料は輪鐙で３例、壺鐙で18例ほどと全国的にも限られた存在である。このことは、古墳と横穴墓の関係が単なる社会的な階層差だけでは説明できないこと、そして一方では、私たちが重要視する副葬品が本当に階層性を示しているの

かという疑問をも生じさせる。実際には、三ノ宮の7世紀後半の馬具は、(14) のように前代の馬具をはじめとする数々の金銅製副葬品が集中する伝統性の継承を示しているとするのが正しい認識だと考えているが、そうであれば、古墳、横穴墓という埋葬施設の差よりも、副葬品の組み合わせや葬送儀礼における文物の使い方、死者の扱い方や死に対する考え方といったものに、両者共通の要素を見いだしたうえで、地域的な特性を明らかにしていくことが大切だろう。つまり、地域の中で両者を比較しつつ、そこで執り行われた数々の行為を分析していくことである。確かに当地域においては、横穴墓に比べて横穴式石室に代表される古墳の各施設の形態変遷の分析は立ち遅れている。そうした前提となる基礎作業は不可欠ではあるが、とはいえ、古墳と横穴墓を切り離して考えていては、集落を含めた真の地域社会を描き出すことは困難であろう。

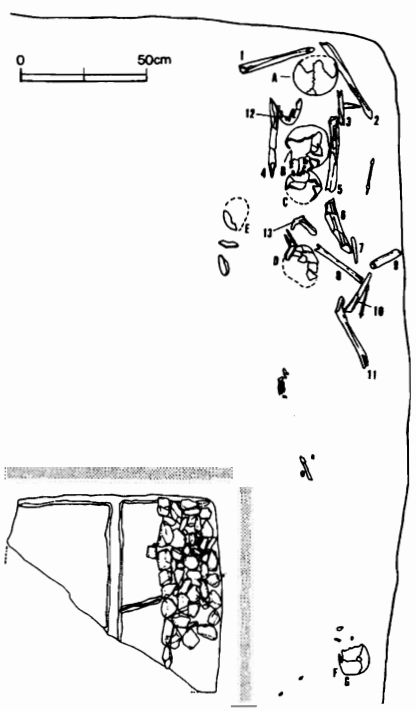


15. 下尾崎遺跡第11号横穴墓人骨出土状況

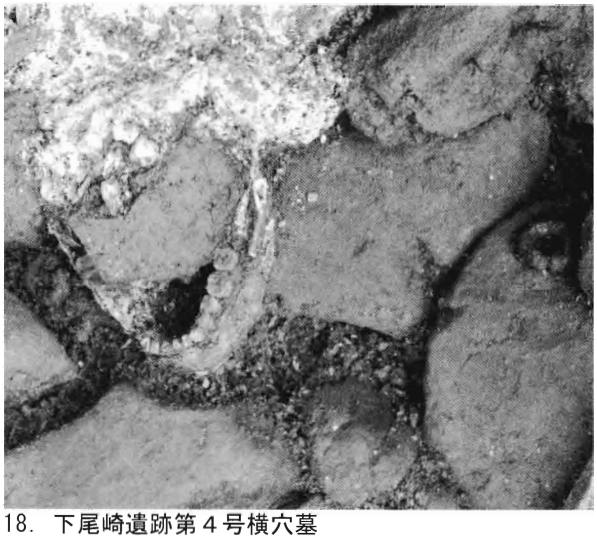
(2) 新しい課題　続いて、古墳と横穴墓が死者を埋葬する施設であるという原点に立ち戻ったうえで、出土人骨の分析から、古墳や横穴墓にどのように人を埋葬したのかについて考えてみたい。



16. 下尾崎遺跡第23号横穴墓人骨出土状況

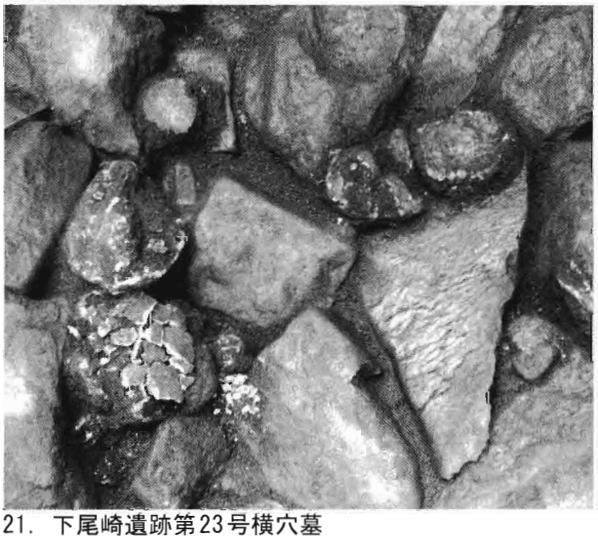


17. 下尾崎遺跡第26号横穴墓人骨出土状況

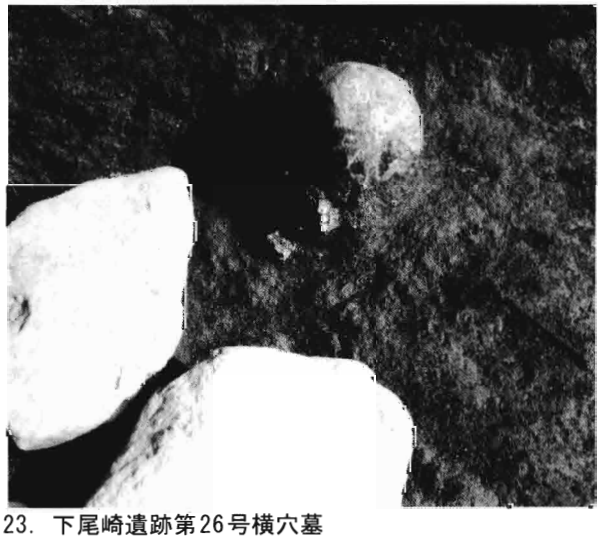

18. 下尾崎遺跡第４号横穴墓

19. 下尾崎遺跡第11号横穴墓

20. 下尾崎遺跡第11号横穴墓


21. 下尾崎遺跡第23号横穴墓

22. 下尾崎遺跡第26号横穴墓


23. 下尾崎遺跡第26号横穴墓

この分野の研究は近年、歯の遺伝的形質（田中1995）やＤＮＡ鑑定などの自然科学的分析により血縁関係を特定する研究が盛んになってきている。非常に魅力的な研究ではあるが、導きだされた家族モデルにはまだまだ検討する余地がありそうである。ここで紹介する分析はこのようなたいそうなものではなく、出土状況の把握を第一義においた通常の考古学的手法によるものである。以下は三ノ宮・下尾崎遺跡の調査データからの検討である（小寺・立花1996）。

「横穴墓に最初に葬られたのは誰か」　これは、追葬を前提としている横穴墓では特定が難しいが、一人しか埋葬されていない横穴墓でなら特定可能である。それでも単体埋葬と考えられる例のうち分析可能な人骨は25～45才の女性１例であった。わずかな例ではあるが、横穴墓を新たに作る契機は女性の死ということもあり得ることになる。

「何人埋葬したか」　１基に最大15人以上という例もあり、平均でも７人を越える。性別はほぼ一対一、年齢構成は５歳未満13%、５～10歳16%、11～15歳０%、16～25歳28%、25歳以上43%となっている。10歳未満が30%を占め、当時の年齢構成そのものとは言えないが、それほど大きくかけ離れてはいないだろう。

「どのように埋葬したか」　第４号横穴墓では下顎骨のすぐ脇から耳環が出土しており（18）、耳に耳環を装着したまま葬られたと考えられる。一方第11号横穴墓では、玄室中央に腰から両脚の骨が伸び、一見寝かされたまま葬られたとの印象であった（15・20）。しかし、解剖学的鑑定によると、腰と大腿骨はうつ伏せ、脛は仰向けで、なおかつ足首に関節する側が膝近くに位置し、また２本ある脛の骨のうち細いほうは腕の骨であった。つまり、この個体は複数個体の骨を含み、人為的に、自然な骨の結合に似せて、しかし間違った配列で並べられていたのである。

「片づけと並び替え」　この第11号横穴墓の奥壁際にはいくつもの四肢骨が重ねられていたが（19）、これは追葬に当たって先に納めた骨を片づけた結果と考えられる。一方、第23号横穴墓では複数の幼児の頭骸骨と成人２個体の頭骸骨に少数の四肢骨が確認された。丈夫な成人の骨が限られる中、薄い幼児の頭骸骨が残されていることには、頭骸骨に対する特別な意識をうかがうことができる。ちなみに、この横穴墓には16歳以上の若い成人と30歳以上の女性、それに10歳までの子供１人に２歳未満の幼児３人が葬られていた。

続いて、第26号横穴墓では、少なくとも13個体が葬られ、そのうち７個体の頭骸骨が残されていた。しかもそれは、礫敷の棺座の中央に並べられており、この状態では次の埋葬が不可能であることから、先の「追葬のための片づけ」とは別の意味があると考えられる。そして、頭骸骨に見合うだけの他の四肢骨が見られないことからも、頭骸骨だけを特別に選択したと考えられる。さらに単なる片づけが、それが何度繰り返されても、常に最新の個体を埋葬するスペースを確保することが目的であるのに対して、この例は最終的には頭骸骨を並べることを意識していると考えられる。とすると、頭骸骨の並び替えは何回かの片づけの繰り返しではなく、一度の片づけ、並び替えの結果としたほうが無理がない。

「白骨化した場所」 それではどこで白骨化したのだろうか。県内の横穴墓をみると、解剖学的位置関係を保ったまま出土する人骨が以外に少ないことに気づく。追葬を繰り返せば最後の埋葬者以外は全て動かされていることも想定されるが、東京都や千葉県ではまさにそのまま白骨化した事例も数多い。こうした横穴墓では横穴墓内の片づけだけでなく、異なる横穴墓への改葬も想定されている。伊勢原市内の横穴墓では、今のところ解剖学的位置関係を保つ人骨の出土例はなく、また先の第11号横穴墓のように、白骨化した骨を並べている確実な例があることも事実である。一度横穴墓に埋葬した遺体を白骨化するのを待って再び開封し、並び替えるという必要性があるのだろうか。やはりこうした例は、骨の状態で横穴墓に納めたと考えたほうがよさそうである。すると、この個体は別の横穴墓で白骨化した可能性もあり、改葬の際に細かな骨が抜け落ちれば、異なる横穴墓に同一個体の骨が残されることも想定されよう。また、横穴墓以外の場所、モガリの場のような所で白骨化した可能性も捨て切れない。

「誰が執り仕切ったか」 以上のように横穴墓では、埋葬すれば二度と遺体と接することはない竪穴式石室や土壙墓とは大きく異なり、遺体や人骨を何度となく扱う必要があった。そして、その度に何かしらの儀式が執り行われたと推定される。第11号横穴墓の人骨の人為的な並び替えは、これを行った人物が現代の解剖学者程ではないが、全くの素人はあり得ず、かなりの専門的な知識を有していたことを示している。つまり、横穴墓の葬送儀礼は死者の近親者ではなく、それなりの専門家によって執り仕切られていたと考えられる。恐らく、横穴墓の設計から築造、管理、そこでの儀式や遺体、人骨の取り扱い等も専門の集団が行っていたと推察される。

以上のことは、発掘調査の所見と解剖学の専門家の鑑定を合わせて考察したことである。出土した人骨を専門家に預けて、性別、年齢などを調べてもらうだけではなく、出土状況のデータをも提供して、埋葬順序や姿勢、その後の働きかけ等についても共に議論することが大切である。そして、さまざまな可能性について想定することが埋葬に関する当時の風習を知ることにつながるだろう。

古墳や横穴墓はしばしばその政治性や経済性がクローズアップされるが、本来の墓という機能に立ち戻り、地域の中でそのあり方を検討していくことも必要である。そして、埋葬方法を知るには葬られた人骨がどのように扱われているかを調べることが近道であり、そのためには他のどの時代のどの遺構よりも良好な人骨資料を提供してくれる横穴墓が最良の調査素材である。

おわりに

古墳・横穴墓の調査歴、研究史について伊勢原という狭い地域に関連して概観し、数多くの中からそこでの調査経験をもとにした今後の課題について取り上げてみた。本来こうしたことは県内各地域で可能であり、その土地に根差した調査と研究史、そして課題があるはずである。何よりも、古墳、横穴墓で当初から区分するのではなく、地域の特性を明らかにしながら集落、生産域を含む総合的な議論を展開していくことが大切であると考える。

【引用・参考文献】

明石　新　2001 「相武国から相模国へ」『相武国の古墳』 平塚市博物館
赤星直忠　1964 『神奈川県大磯町の横穴古墳』大磯町文化財調査報告１
赤星直忠　1970 「伊勢原町登尾山古墳」『埋蔵文化財発掘調査報告』１　神奈川県教育委員会
赤星直忠　1974 「伊勢原市尾根山古墳群」『埋蔵文化財発掘調査報告』６　神奈川県教育委員会
穴沢　光・馬目順一・中山清隆　1979 「相模出土の環頭大刀の諸問題」『神奈川考古』第６号
阿部黎子　1966 「横穴被葬者における一考察」『考古学雑誌』第52巻5号
池上　悟　1980 『横穴墓』 ニュー・サイエンス社
池上　悟　2000 『日本の横穴墓』 雄山閣出版
石野　瑛　1956 『神奈川縣大観』４　湘東・湘中　武相出版社
上田　薫　1989 「神奈川県の横穴墓研究の歴史」『國學院大學考古学資料館紀要』第５輯
上田　薫　1993 「横穴墓」『かながわの考古学』第３集　神奈川県立埋蔵文化財センター
遠藤秀樹　1989 「神奈川県の後期古墳」『専修考古学』第４号　専修大学考古学会
大塚初重他　2001 「三ノ宮３号墳」『三ノ宮・下谷戸遺跡（No.14）・』 財団法人かながわ考古学財団
小寺春人・立花　実　1996 「三ノ宮・下尾崎遺跡　三ノ宮・上栗原遺跡の横穴墓出土人骨について」『文化財ノート』第４集　伊勢原市教育委員会
古墳時代研究プロジェクトチーム　1994 「神奈川県における墳墓出土の鉄鏃について」『かながわの考古学』第４集　神奈川県立埋蔵文化財センター
古墳時代研究プロジェクトチーム　1995 「横穴墓の研究（１）」『かながわの考古学』第５集　神奈川県立埋蔵文化財センター
古墳時代研究プロジェクトチーム　1996～2002 「横穴墓の研究（２）～（８）」『研究紀要』１～７　財団法人かながわ考古学財団
宍戸信悟　2000 『三ノ宮・下谷戸遺跡（No.14）・』 財団法人かながわ考古学財団
宍戸信悟　2001「横穴式石室から見た古墳時代の秦野盆地」『秦野市立桜土手古墳展示館研究紀要』第２号
須藤智夫　1995 「古墳時代相模における在地社会の一様相」『考古学の世界』 学習院考古会
関根孝夫　1999 「伊勢原の古墳」『第23回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』 神奈川県考古学会・伊勢原市教育委員会
関根孝夫　2001 「桜土手古墳群の構成とその性格」『秦野市立桜土手古墳展示館研究紀要』第２号
立花　実　1995 『三ノ宮・下尾崎遺跡　三ノ宮・上栗原遺跡発掘調査報告書』 伊勢原市教育委員会
立花　実　2001 「相武国の確立」『相武国の古墳』 平塚市博物館
立花　実・手島真実　1999 「伊勢原市登尾山古墳再考」『東海史学』33　東海大学史学会
田中義昭・甘粕　健　1982 「市ケ尾古墳群の発掘」『横浜市史資料編』21
田中良之　1995 『古墳時代持続構造の研究』 柏書房
近野正幸　1993 「高塚古墳研究の現状と課題」『かながわの考古学』第３集　神奈川県立埋蔵文化財センター
近野正幸　1996 「後期古墳石室内における多数埋葬」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念論文集
寺村光晴他1998 「伊勢原市北高森古墳群と出土遺物」『御屋敷添遺跡　高森・一ノ崎遺跡　高森・窪谷遺跡（第二分冊）』 財団法人かながわ考古学財団
冨沢一明　1991 「神奈川県の横穴式石室」『専修考古学』久保哲三先生追悼号　専修大学考古学会
森岡秀人　1983「追葬と棺体配置」『考古学論叢』関西大学考古学研究室開設参拾周年記念

『赤星ノート』は神奈川県教育委員会が保管しており、今回はその許可を得て掲載させていただいた。

古代官衙と寺院の研究史と課題

依田　亮一・冨永　樹之

(1)相模国府について

相模国府の研究は、江戸時代以来その所在地をめぐって長い論争が繰り広げられた後、1970年代後半以降には考古学的調査の進展によって数多くの事実が解明されてきた経緯があるが、未だ決着を見ていない課題が山積されている状況にあるといってよい。この一連の論争史については、すでに明石新・荒井秀規・岩田直樹他の諸氏によって詳細かつ端的に整理されており(明石1998、荒井1995・98、岩田2000など)、ここでは紙幅の関係からそうした先行研究の要約を呈示することにしたい。

研究の端緒は、諸史料にみる国府所在郡が複数ヶ所記載されていることに拠るもので、すなわち9世紀末から10世紀初頭の様子を伝える二十巻本『和名類聚抄』や、平安時代末期の二巻本・三巻本『色葉字類抄』によれば国府は大住郡に所在したとあり、鎌倉時代初頭の十巻本『伊呂葉字類抄』には余綾郡とあることから、文献史料上は大住郡→余綾郡へ最低2ヶ所に相模国府が造営されたことが示されている。このうち余綾国府は、石清水文書の保元三(1158)年の官宣旨に「旧国府別宮」の記載や、『吾妻鏡』で治承四(1180)年源頼朝が富士川合戦の論功行賞を当地で行ったことから、平安時代末期の12世紀半ば以前には移転していたものと思われ、その故地は現在に伝わる地名から大磯町国府本郷付近に想定され、六所神社や国府祭の存在はそれを確定付ける根拠にもなっている。

また、江戸時代後期に編纂された『新編相模国風土記稿』には、国府と国分寺が同一郡に所在するという全国的な動向を背景として、相模国分寺が立地する高座郡の国分付近に天平期の国府を求める見解が記載されている。この記事を根拠として、以後の研究では相模国府は高座郡→大住郡→余綾郡という3度の変遷を遂げたとする考え方が通説的な理解となったが、この場合の大住国府を何処に求めるかが資料上の制約もあって判然とせず、これまでに伊勢原市三ノ宮説(大槻1911、大場1951、石野1954、浅香1960、藤岡1969)、同市東大竹説(中山1924)、同市糟屋説(吉田1924)、秦野市御門説(中村1973)、平塚市説(沼田1927、蘆田1941、中山1942)など多数の候補地が挙がり、全体としては伊勢原市域に国府を置く考え方が趨勢を占めていた。一方で、これに対して当初の相模国府を「国府津」地名の存在や当時の官道ルート、さらに東大寺式伽藍配置が想定される千代廃寺を初期国分寺と見なして足柄の地に求め、高座国府の存在を否定する考え方も示されている(山田1959・61、木下1974)。この説によると、相模国府は足下郡→大住郡→余綾郡へと三遷したことになる。

ところが、1978年から調査が行われた平塚市四之宮下郷遺跡と、その後の周辺地域における考古学的調査では、「政所」・「曹司」などの官衙施設名を表記した墨書土器や、官人の身分を表示する帯金具や緑釉陶器などの威信財が多量に出土し、さらに官衙的様相を示す掘立柱建物が発見されるに及んで、『和名類聚抄』に記された大住府を平塚市四之宮周辺に求める説が急浮上することになった。これに対して、大住国府の所在地に挙がっていた他の候補地では、現時点では考古学的な裏付けが

得られておらず、大住国府はほぼ四之宮説で確定的ともいえる状況に至っている。考古学的調査が進展する以前、主として文献史学・歴史地理学的方法によって、大住国府の所在地をめぐる論争が花開いていた時期を相模国府研究史上の第一期とするならば、大住国府＝四之宮説が確定された以降を第二期と区分し、新たな研究展開を向かえた時期として整理出来るであろうか。

さて、高座・足下を初期国府とする三遷説の両者は、大住郡へ国府が移転した背景を、『類従国史』弘仁十(819)年の国分寺火災の記事、『日本三大実録』元慶二(878)年の東国を襲った地震による国分寺倒壊記事、などをそれぞれの拠り所としている。ところが、四之宮地区の考古学的状況からは、①国府の施設名を示す「厨」銘の墨書土器が集中して出土し、かつその年代は８世紀第Ⅲ四半期に遡る、②竪穴住居の時期的動向を50年単位でみた場合、８世紀前半が全体の15.7%で９世紀後半に次ぐ件数を有する、ことから高座・足下の両初期国府の存在を否定し、相模国府は文献史料にみられるように大住郡→余綾郡へ移遷したとする説が、明石新氏によって指摘されている(明石1999他)。ただし、この二遷説にも問題が無い訳ではない。その一つは、13kmにおよぶ国府と国分寺間の距離、それと郡の相違を如何に理解するか。さらにもう一つは、平塚市内で直接官衙の存在を示す８世紀前半に遡る遺構が未確認であることで、この点において三遷説を完全に否定し得るものではない。

特に、近年初期国府を高座郡に置く立場としては、相模国分寺出土瓦の製作技法の検討から、千代廃寺＝初期国分寺説を否定し、国分寺詔に基づいて建立された初期の寺院であることを明らかにし(国平1990・91)、さらに古代の文献史料に現れる高座郡関連記事の多さを根拠として高座国府説の補強作業も行われている(宮瀧1994)。また、足下郡に初期国府を置く立場も、７世紀後半に小田原市下曽我遺跡付近を足下評衙として想定したうえで、それに付帯する形で国宰所が設置されていたとする説が出されている(荒井1998)。こうした中で、1998年には平塚市博物館主催によるｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ『相模国府とその世界』が開催され、二遷説、三遷説(高座郡・足下郡)各々の立場をとる研究者が一同に集って議論が展開されたが、現時点ではいずれの説も鼎立している状況といえるだろう。

今後は、①初期国府の問題をどのように捉えるか、②国庁域をはじめとする大住国府の実態解明、③余綾国府への移転時期と理由さらにはその実態、等々解明しなければならない課題が多く残されている。

(2) 郡衙関連遺跡をめぐる調査・研究の現状

神奈川県内における古代の郡域は、武蔵国に属する橘樹・都筑・久良３郡と、相模国に属する足上・足下・余綾・大住・愛甲・高座・鎌倉・御浦８郡の計11郡に分割され、このうち2003年1月現在までに郡衙関連の遺構が検出された遺跡は、発見された順に都筑郡衙(横浜市青葉区長者原遺跡:1979～81年調査)、鎌倉郡衙(鎌倉市今小路西遺跡(御成小学校内):1984～85年調査)、橘樹郡衙(川崎市千年伊勢山台・伊勢山台北遺跡:1996年～断続的に調査)、そして高座郡衙(下記参照)の４箇所を数える。

郡衙の所在を探る歴史地理学的なアプローチの方法としては、主にこれまでは郡名と郷名が同一である場合に、当該郷域内にそれを求める傾向がみられたが、郷域の比定自体が想定の域を出ない

ことが多く、必ずしも積極的な根拠とはなり得ないのが現状であった。例えば高座郡衙の研究状況をみると、まず現在の字名「高倉」を手がかりに藤沢市北部～大和市南部に想定する説(鳥飼1989)が発表された。その後考古学の立場からは、相模国分寺の存在や海老名市大谷向原遺跡出土「高坐官」銘の墨書土器、綾瀬市宮久保遺跡出土木簡などにより海老名～綾瀬市域一帯に郡衙を想定する説(荒井1991・宮瀧1996・木下1997・滝澤1998)や、古東海道筋や下寺尾廃寺の所在を根拠に茅ヶ崎市北部に想定する説(岡本1997)、茅ヶ崎から海老名へ郡衙機能が移転したとする説(田尾1999)、それとは逆に海老名市本郷付近に存在した初期評衙が、以後茅ヶ崎下寺尾付近に移転し、郡司層の邸宅は海老名付近に残ったとする説(大上2000)が発表されるなど、多説が林立する状況が続いていた。

ところが、昨年実施された県立茅ヶ崎北稜高校の建替に伴う西方A遺跡(茅ヶ崎市下寺尾所在)の発掘調査では、高座郡衙と推定される遺構群が発見され、一連の論争に画期を築く重大な成果が得られることとなった。発見された郡衙関連遺構は、大きく調査区南端の郡庁域と、そこから約100m北に離れた正倉域とに分かれる。大半が調査区外に相当する郡庁域は、東西約64m(南北規模不明)の範囲を「コ」あるいは「ロ」字状に区画した建物群(脇殿・後殿)と、その区画中央には正殿と思われる外周に庇を有する側柱建物から構成され、一方の正倉域では、総柱建物が4棟東西に並列している状況と、その南隣に性格不明の長大な側柱建物の存在が確認されている。これらは時期的に7世紀末～8世紀初頭の遺構群とされるが、周囲には隣接して所産時期の近い竪穴住居も多数存在しているようで、郡衙施設とこのような居住遺構、さらには相模国府・国分寺との関係も含め、今後報告書の刊行が期待されるところである(財団法人かながわ考古学財団2002・村上2002)。

また、郡衙の所在を直接的に示す遺構は未発見ながらも、出土遺物から付近にその可能性が指摘される遺跡として次の二箇所がある。小田原市千代仲ノ町遺跡第Ⅳ地点出土の「厨」銘墨書土器と、千代南原遺跡第Ⅶ地点出土木簡からは千代・下曽我地区に足下郡衙が想定され、また平塚市四之宮地区のいわゆる相模国府域では、「大住厨」・「大厨」・「郡厨」銘の墨書土器が出土し、国府に近接して大住郡衙が併存していたことが伺える。周囲での考古学的調査が進むなかで、いずれその様相が明らかとなってくるであろう。その他、集落遺跡の中で縷々発見される大型の掘立柱建物をめぐっては、官衙的性格を帯びた施設あるいは村落首長層の邸宅などの性格が付与される事例もあるが(財団法人かながわ考古学財団1998)、国衙・郡衙に比べて企画性の少なさから、単純に解釈論に陥りやすい危惧もあり、今後県外の事例も含めて比較・検討をしていく必要はあるだろう。　　(依田　亮一)

神奈川県内の官衙研究主要文献　（※紙幅の関係で、出版元の掲載は割愛させて頂いた.）

大槻如雷1911『驛路通』上
喜田貞吉1917『神奈川県教育』
喜田貞吉1917『武相郷土史論』
沼田頼輔1918「相模国分寺考附国府駅路考」『歴史地理』31－3
石野瑛1924『武相の古代文化』
中山毎吉他1924「相模国分寺研究」『歴史地理』38－2
中山毎吉1924『相模国分寺志』
吉田東伍1924「奈良平安時代の武蔵相模」『日本歴史地理之研究』
石野瑛1926『武相考古』
片岡永左衛門1926「相模師長国府考」『歴史地理』47－1
沼田頼輔1927「相模国府遺址に就いての一考察」『考古学雑誌』17－6
沼田頼輔1930「相模国分寺に就いての一考察」『史蹟名勝天然記念物』2－5
田辺康1931「相模国分寺建築論」『建築雑誌』45
中山毎吉1931「相模国駅路考」『歴史地理』59－5
石野瑛1933「相模(大住・余綾)国府址考」『考古集録』3
沼田頼輔1933「相模国府の位置」『ドルメン』2－12
石野瑛1934「相模国府址の推定と其の調査」『歴史と郷土』1－6
赤星直忠1938「相模国分寺」『国分寺の研究』上
蘆田伊人1941「相武古駅路考」『歴史地理』78－1
川口清1942「第二次相模国府の遺跡」『郷土神奈川』1－7
川口清1942「大住国府址及び大住余綾両軍団址とその沿道調査」『郷土神奈川』1－9
佐藤善次郎1942「相模国国府祭解説」『郷土神奈川』1－10
中山毎吉1942「武相に於ける古道の探究2」『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』10
永井参治1942「相模旧国府と五霊社」『郷土神奈川』1－7
永井参治1942「相模旧国府と正庁附御牧国倉」『郷土神奈川』1－9
永井参治1943「国府祭の古事と三宮の旧儀」『郷土神奈川』2－6
大場磐雄1951「相模国府の位置について」『史迹と美術』21－2(のち1975『大場磐雄著作集』4に再録)
石野瑛1952「相模の国府と国分寺」『考古集録』21
石野瑛1952「相模国府址－大住国府と余綾国府－」『史蹟名勝天然記念物調査報告書』21
石野瑛1956『神奈川県大観4　湘南・相中』
山田弘道1959「地名からみた国府」『地名学研究』8
浅香幸雄1960「国府の位置と相模国府の三遷」『歴史地理学紀要』2
大場磐雄1960「国府集落」『神奈川県の歴史』(のち1975『大場磐雄著作集』4に再録)
石野瑛1961『神奈川県大観』5
山田弘道1961「続地名からみた国府」『地名学研究』18
山田弘道1961「続々地名からみた国府」『地名学研究』19・20
丸茂武重1962「国府郡家の建物」『國學院雑誌』62－9
樋口清之1963「さかさ川の謎」『発掘』
赤星直忠1965「神奈川県小田原市下曽我低地遺跡」『日本考古学年報』13
日野一郎1967「平塚市下ノ郷廃寺跡」『日本考古学年報』15
藤岡謙二郎1969「甲斐と相模及び武蔵国府」『国府』
中村兵吉1973『相模の国府と国分寺の変遷』
丸茂武重1973「相模国府」『地形図に歴史を読む』5
木下良1974「相模国府の所在について」『人文研究』59
権守桂城1974「相模の国府と総社」『県央史談』12
千田稔1974「国津と国府津」『埋もれた港』
木下良1976「災害による国府の移転」『歴史地理学紀要』18
永井参治1976「誤った国府址論を締し正しい国府設置の条件を論ず」『県央史談』14
小島弘義1978「平塚市発掘調査の回顧と展望」『平塚市博物館資料』13
井上清1980「相模の国府と官道」『県央史談』19
前場幸治1980『古瓦を追って－相模国分寺・千代台廃寺考－』(私家版)(のち1980『古瓦考』)
目崎徳衛1981「相模の国司」『神奈川県史たより』1
大川清ほか1982「長者原遺跡の調査」『日本歴史』406
中村二郎1982「雑談　国府祭」『神奈川県史研究』49
林陸朗1983「相模国府の有力な擬定地」『日本歴史』425
小島弘義ほか1984『四之宮下郷』
神奈川地域史研究会1984『宮久保木簡と古代の相模』
前場幸治1984『国分寺古瓦拓本集　巻1　相模編』
日本観光文化研究所1985「相模国府祭」『あるく・みる・きく』222
木下良1986「国府と国分寺の関係について」『人文地理学　の視圏』
国立歴史民俗博物館1986「古代国府の研究」『国立歴史民　俗博物館研究報告』10
松村鉄心1986『相模と武蔵の国府』(私家版)
木下良1988『国府』
鳥飼直樹1989「奈良・平安時代」『大和市史1　通史編　原始・古代・中世』
国立歴史民俗博物館1989「古代国府の研究(続)」『国立歴　史民俗博物館研究報告』20
今小路西遺跡発掘調査団1990『今小路西遺跡（御成小学校　内）発掘調査報告書』
大平聡1990「古代の地方行政制度」『神奈川地域史研究』9
神奈川地域史研究会1990「御成遺跡にみる古代の鎌倉」『神奈川地域史研究』10
國平健三1990「初期相模国府の所在地について(上)－造瓦技法に比較と分布からみた場合－」『えびなの歴史』創刊号
鈴木靖民1990「神奈川県出土の木簡」『川崎市民ミュージ　アム特別展図録　木簡』
水野順敏1990「都筑郡衙跡」『関東官衙遺跡の検討』
神奈川地域史研究会1991「南鍛冶山遺跡を考えるｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ」『藤沢市史研究』24
荒井秀規1991「南鍛冶山遺跡の周辺官衙遺跡と郡郷の問題」『藤沢市史研究』24
國平健三1991「初期相模国府の所在地について(下)－造瓦技法の比較と分布からみた場合－」『えびなの歴史』第2号
鈴木靖民1991「下曽我遺跡と出土木簡」『木簡研究』13
田尾誠敏1991「古代の余綾1」『大磯町郷土館だより』1
田尾誠敏1991「古代の余綾2」『大磯町郷土館だより』2
田尾誠敏1991「古代の余綾3」『大磯町郷土館だより』3
松尾光1991「茅ヶ崎出土の木簡と古代の放生」『日本社会史研究』
望月一樹1991「神奈川の古代木簡」『神奈川文化』342
木下良1992「相模国の国府について」『大磯町史研究』創刊号
木下良1992「「国府と駅家」再考－阪本太郎博士説の再検討－」『國學院大學紀要』30
田尾誠敏1992「古代の余綾4」『大磯町郷土館だより』4
田尾誠敏1992「古代の余綾5」『大磯町郷土館だより』5
田熊清彦1992「東国の国府と郡家」『新版　古代の日本』8
田尾誠敏1992「古代の余綾6」『大磯町郷土館だより』6
荒井秀規1993「相模国足柄評の上下分割をめぐって」『市史研究あしがら』5
鈴木靖民1993「相模の木簡」『古代東国と木簡』
長谷川厚1993「相模国府と国分寺の所在について」『かながわの考古学』3
明石新1994「相模国府と郡衙」『図説平塚の歴史』上巻
荒井秀規1994「茅ケ崎市居村「放生木簡」をめぐって」『茅ヶ崎市史研究』18
大上周三1994「古代本郷遺跡の一特質」『考古論叢神奈河』3
河野一也1994「相模国分寺」『ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ関東の国分寺』
河野喜映・明石新・若林勝司1994「神奈川県」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』
高島英之1994「大磯町馬場台遺跡出土の銅印についての覚書」『大磯町史研究』3
中村太一1994「古代東国の水上交通」『古代東国の民衆と社会』
宮瀧交二1994「相模国高座郡と天武系皇族」『綾瀬市史研究』創刊号
安池尋幸1994「十一・二世紀における相模の国衙軍制と三浦一族」『横須賀市博物館研究報告（人文科学)』40
明石新1995「相模国府域の様相－国府域内の集落の分析をとおして－」『考古論叢神奈河』4
明石新1995「発掘から見た相模国府」『国史学』156
荒井秀規1995「相模国府の所在をめぐる研究動向と今後の課題」『国史学』156
荒井秀規1995「豆支と国府」『山王B・大会原遺跡他』
神奈川県考古学会1995『かながわの古代集落』
國平健三1995「相模国府の論点－大住府はどこまで遡る－」『国史学』156
中村太一1995「東国国府の立地と交通路」『国史学』156
明石新1996「相模国「国厨家」について」『自然と文化』№19
明石新1996「幻の相模国府をもとめて」『考古学をまなぶ』
明石新1996「相模国」『国府－畿内・七道の様相－』
木下良1996「東海道」『古代を考える　古代道路』
岡本孝之1997「下寺尾寺院跡の研究」『茅ヶ崎市文化財資料集』12
菊川英政1997「古代鎌倉の様相」『考古論叢神奈河』6
國平健三1997「相模国府研究の現状」『神奈川県立博物館研究報告(人文科学)』23
杉山幾一1997「相模の国府」『地方史事典』
藤沢市教育委員会1997『藤沢・神奈川の古代文字』
藤沢市教育委員会1997『神奈川の古代道』
明石新1998「大住郡域の集落の様相－相模大住国府を理解するために－」『列島の考古　学』
明石新1998「相模国府の所在地をめぐって」『考古学を学ぶ　考古学の争点』
明石新1998「相模国」『ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ東国の国府in WAYO　考古学からみた東国国府の成立と変遷』
荒井秀規1998「神奈川県古代史素描－ﾔﾏﾄの進出と足柄評の分割－」『考古論叢神奈河』7
財団法人かながわ考古学財団1998『公開セミナー　古代の大型建物跡』
滝澤亮1998「相模国高座郡衙の所在について」『えびなの歴史』10
平塚市博物館1998『夏期特別展　相模国府とその世界』
武蔵国ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ実行委員会1998「武蔵国の道と役所」『国府・国分寺・武蔵路－研究の現状と保存・活用』
明石新1999「国府は移転したか」『幻の国府を探る』
田尾誠敏1999「土器から見た古代の茅ヶ崎」『平成10年度茅ヶ崎市文化資料館　記念講演会』
平塚市博物館1999「相模国府とその世界(ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ集録)」『自然と文化』22
宮瀧交二1999「古代相模国府の所在地に関する覚書」『湘南考古学同好会々報』51
大上周三2000「古代高座郡の支配機構の動向」『神奈川考古』36
神奈川地域史研究会2000「ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ木簡が照らす古代の小田原」『神奈川地域史研究』18
河合英夫2000「川崎市千年伊勢山台遺跡」『第24回神奈川県遺跡調査・研究発表会』
河合英夫他2000『千年伊勢山台北遺跡』
岩田直樹2001「国府の研究－相模国府研究史の歩みと今後の展望－」『研究紀要6 かながわの考古学』
中田英2001「郡衙の研究」『研究紀要6　かながわの考古学』
明石新2002「相模国府の研究」『神奈川県立歴史博物館総合研究報告』
財団法人かながわ考古学財団2002『下寺尾西方A遺跡の発掘調査』
村上吉正2002「下寺尾西方A遺跡」『第13回茅ヶ崎市遺跡発表会』
市毛秀人・依田亮一2003「普及啓発事業における遺跡復原図活用の一例－古代相模国府景観想像図の制作方法を中心に－」『研究紀要8 かながわの考古学』

(3)寺院

神奈川県の寺院については相模国分寺跡に関し、江戸時代末期編纂の『新編相模風土記稿』にすでに記載がある。近代に入ると、明治36年永井健之輔氏が相模国分寺についての考察しているが(永井1903)、それ以後、戦前まで古瓦研究と現地踏査を中心とした古代寺院研究がくりひろげられる。戦中までに取り上げられたのは海老名の相模国分寺・国分尼寺、川崎の影向寺、横須賀の宗元寺(曹源寺・宗源寺とも書かれる)、小田原市の千代廃寺(勝福寺とも書かれる)などである。

その頃特に主体的に扱われたのは相模国分寺であり、特に海老名村小学校校長中山毎吉氏の研究は特筆されるべきものである。その成果は大正13年発行の『相模国分寺志』(矢後駒吉共著)として結実し、現地の状況や礎石の配置などから伽藍を法隆寺式伽藍とし、天平以前に創建されたと推定した。また関連遺跡として国分尼寺・薬師堂・漢河寺の検討など幅広く行っているが戦後、住宅建設や道路敷設により失われた遺構もあり、現在も国分寺研究に欠かすことのできない著述である。

その後沼田頼輔氏は国分寺については伽藍が法隆寺式であることから創建を国分寺建立の詔以前とし、豪族の寺院を国分寺に転用したと考察した(沼田1927)。それに対し田辺泰氏は国分寺の現地踏査から礎石の配置は天平尺が使われていると推定、創建は天平以後としている(田辺1931)。

戦前期には赤星直忠氏もすでに熱心に古代寺院について論考しており、千代廃寺、宗元寺、国分寺について著述がある。特に赤星氏の居宅の近隣に所在する横須賀の宗元寺については詳細な検討を行っている(赤星1935)。すでに戦前期においても宗元寺跡の宅地化は進行していたが、その中でもかろうじて残された礎石の配置を記録している。忍冬蓮華文の軒丸瓦については奈良県西安寺の白鳳期瓦と似ているが、宗元寺の創建は奈良後期と推定している。

また戦前期には石野瑛氏や大場磐雄氏による県内古代寺院の研究が始まっていたが、古瓦、現地の状況、寺院文化財、伝承などを総合的にまとめることが主眼だった。

戦後になると古代寺院の発掘調査の実施から新しいデータが生みだされ、寺院の伽藍や性格が具体的にわかる例も出てきた。また古瓦や土器の詳細な編年から創建期・再建期について出土品の再検討がなされるようになった。しかし開発のために消滅した古代寺院もあり、地域の古代史復元に重要な資料が失われる危機にも立たされることとなった。

戦後、発掘調査された例として早い段階のものは1958年・1960年に行われた千代廃寺に関する調査である。千代廃寺については調査報告は刊行されなかったため、詳細は不明だが、近年岡本孝之氏がその内容復元に取り組んでいる(岡本1998・1999)。「台ノ塚」と呼ばれる忠魂碑下の高まりが基壇の可能性が高いことなどが明らかにされ、岡本氏らは法隆寺式伽藍配置を想定したが、まだ確定的とはいいがたい。この後千代廃寺については、初期の国分寺であるという考え方が木下良氏や前場幸治氏により発表されるが(木下1974、前場1980)、後述するように近年では郡司層の建造した寺院との考え方が強い。

1965～1967年には相模国分寺の発掘調査が文化庁(当時は文化財保護委員会)他により実施された。

法隆寺式伽藍配置であることが確定した他、回廊は南面と北面のみで東は築地塀であること(西は削平)、講堂北には僧坊や北方建物などの付属施設があることなどが判明した。全国的にも大規模な伽藍を確認し、神奈川県の古代寺院研究上、非常に重要な調査であったが残念ながら報告は概要のみである(町田章ほか1978)。

また他の寺院についても相次いで学術調査が行われるようになった。1961・1962年および1972・1973年には平塚市四之宮下ノ郷廃寺が日野一郎氏らにより発掘調査が行われた。発掘調査の結果は、ほとんど知られることはなかったが、近年、明石新氏・若林勝司氏により概要が報告、内容が再検討されている(明石・若林2000)。それによると建物想定案はいくつかあるが古代に大規模な礎石建物があった可能性が高く、国司館または国府内寺院と推定されている。1977年～1980年にかけて川崎市教育委員会による影向寺の発掘調査が行われた。塔跡や寺院と関連する掘立柱建物が確認され、創建期が七世紀末から８世紀初頭であることが推定された(伊東ほか1982)。1978年には茅ヶ崎市下寺尾廃寺が市史編纂事業として発掘調査されたが、明確に礎石建物は確認できなかった(岡本1978)。瓦類他の出土品については1990年代後半の下寺尾寺院跡研究会による整理作業と報告まで公表されなかった(茅ヶ崎市教育委員会1997)。

その後1980年代前半まで神奈川の古代寺院研究はやや低調であったが、80年代半ばから河野一也氏を中心に瓦類の詳細な分析と寺院の再検討が始まっている。1984年の河野氏らが属する関東古瓦研究会では神奈川県の詳細な古瓦出土遺跡と古代寺院が集成されている(関東古瓦研究会1984)。1988年以後、河野一也氏らは「神奈川考古」に「奈良時代寺院成立の一端について」という形で千葉地廃寺、宗元寺・深田廃寺、下寺尾廃寺、千代廃寺の瓦や伽藍についての検討を相次いで発表した(国平・河野1988、河野1990、河野・山下1991、河野1993)。これは従来の軒丸瓦・軒平瓦の文様研究の他に、県内の丸瓦・平瓦を調整・胎土で大別・時期区分し、寺院にどの系統の瓦が出土するかで寺院の創建期・修復期を探る手法であった。これにより今まで県内の古代寺院が漠然と国分寺の影響下で成立した奈良時代の創建と考えられていたが、白鳳期から奈良時代前期に創建されたものが多いことと、郡との大きな関わりが推定されることとなった。

1997年には寺院に関する大きなシンポジウム・研究会が２大会開催された。関東古瓦研究会の「関東の初期寺院」では河野一也氏らが(河野1997)、埋蔵文化財研究集会の「古代寺院の出現とその風景」では清水信行氏がそれぞれ県内古代寺院の集成を行っている(清水1997)。

1990年代を中心に海老名市教育委員会他により相模国分寺の環境整備に伴う発掘調査や国分尼寺の確認調査、国分尼寺北方遺跡・国分寺周辺遺跡の発掘調査などが相次いで実施された(滝沢亮ほか1990・1991・1992・、須田1990・1993等)。僧寺の区画溝の検出や水煙の発見、国分尼寺が国分寺式伽藍配置と確定させるなど新しい事実が提示されたが、それとと共に国分寺・国分尼寺の変遷について議論を活発化させた(河野1994・1995、国平ほか1998、須田1997・2000等)。

1996年影向寺の東側に郡衙に伴う正倉が発掘調査により検出され、この位置に橘郡の郡衙が存在

することが明らかになった(河合1997)。それに伴って影向寺の性格が郡衙と強い関連を持った寺院であることが決定的になり、郡司層の建立した寺院であることが想定された。

2000年には神奈川県考古学会により考古学講座「かながわの古代寺院」が開催された。今までの古代寺院に関する集大成であるこの大会では、影向寺、宗元寺、千代廃寺、下寺尾廃寺、国分寺・国分尼寺、村落内寺院についてのこれまでの成果と課題を論じることとなった(神奈川県考古学会2000・2001)。また河野一也氏は相模の古代寺院の創建期について下寺尾廃寺を初現とし、時期を天智朝後半から天武朝とした。以後白鳳期から奈良時代前期まで千葉地廃寺、千代廃寺、宗元寺、深田廃寺と続く年代観を示している。この推論については今後の大きな検討課題であろう。

2002年のかながわ考古学財団の発掘調査において下寺尾廃寺の北側の台地上に高座郡の郡衙が発見された(村上2002)。一方下寺尾廃寺の主要部についても茅ヶ崎市教育委員会により確認調査が進行している(大村2002)。郡衙の発見により下寺尾廃寺については郡衙と関連性が強い寺院であることが判明した。郡司による造立が想定されるが、郡衙の成立は調査により白鳳期末から奈良時代初頭と認定された。下寺尾廃寺の創建時期との差が焦点となるだろう。

なおここではあまり取り上げなかったが、本格的な伽藍を持たない寺・仏堂についても古くから調査・研究がされている。1951年に調査された川崎市寺尾台廃寺や川崎市岡上廃寺は瓦を持つがやや小規模な寺院であると考えられている。また「村落内寺院」の調査・研究、横須賀市子安山や厚木市鐘ヶ岳廃寺のような山寺についても存在が指摘されている。

今後の課題

今後注目されるのは、白鳳期から奈良時代前半の郡司層と結びついた古代寺院の特定である。郡衙との関係から千葉地廃寺、下寺尾廃寺、影向寺はほぼ確実だろう。また弘明寺、拝堂遺跡、宗元寺、千代廃寺も同じような性格を想定する見方がある。各郡に必ずあったとも言い難いが、このような郡に関わる寺が国府や国分寺とどのような関係にあったかも興味深いところである。

またこ古代寺院の伽藍配置や寺域の特定、保存計画も引き続いて課題とされるところである。特に国分寺・国分尼寺の調査・報告は期待される。

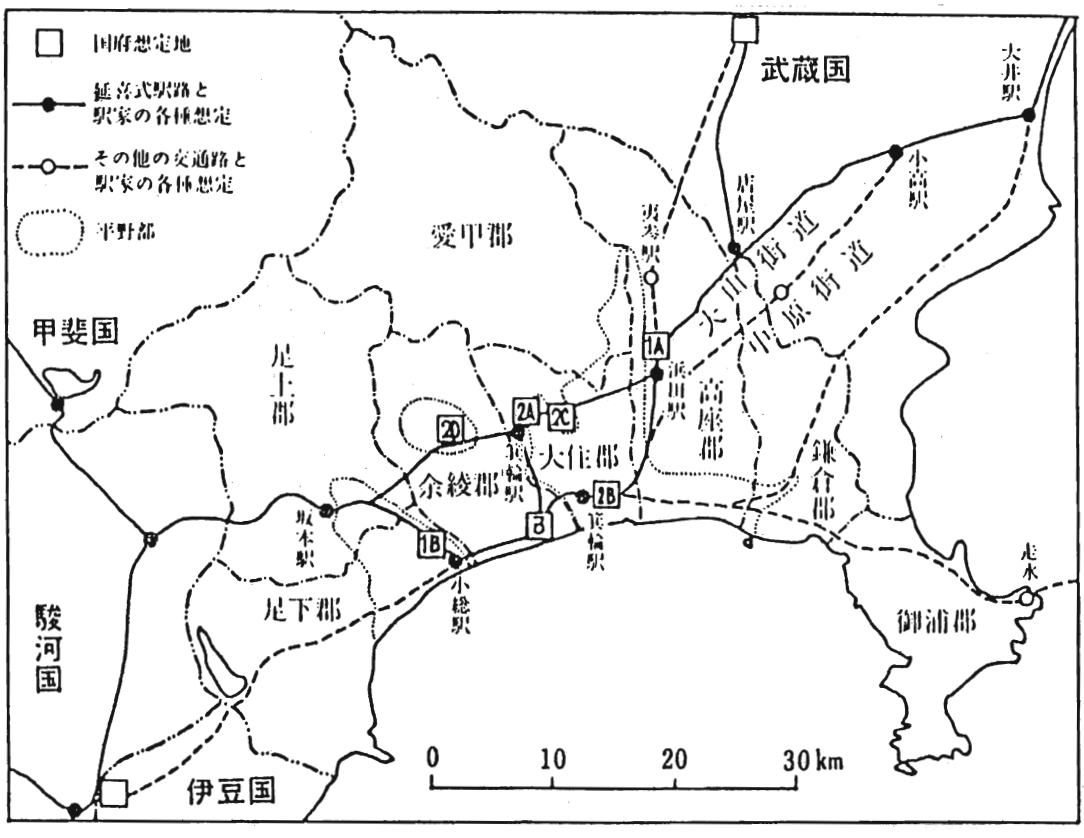
またある時期、国府が平塚にあることは文献・考古学から見ても明らかであるが、推定国府域より多く出土する瓦と仏教関連遺物が何を意味しているのか。四之宮下ノ郷廃寺(高林寺)および四之宮廃寺は国府付属寺院かは今後の課題である。

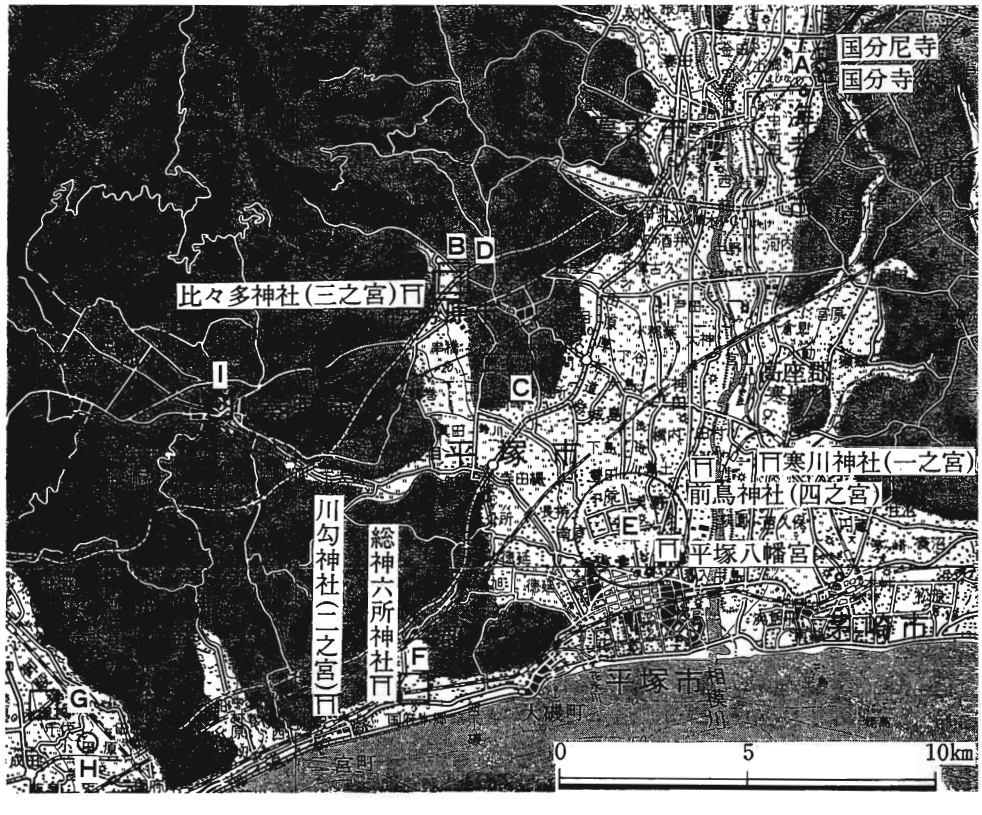
寺院の創建時期や系統を調べるのに昔から古瓦研究が行われてきたが、近年は更に詳細に検討が加えられつつある。さらなる古瓦研究の進展と創建時期の検証が注目される。

本格的な伽藍配置を持つ古代寺院と比較してやや規模の小さい寺院(川崎市寺尾台寺院など)や村の中の仏堂施設も県内で発見されるようになった。また修行場や山寺についても研究が必要な分野である。今後は伽藍のある本格的寺院以外についても目を向けるべきだろう。　　(冨永　樹之)

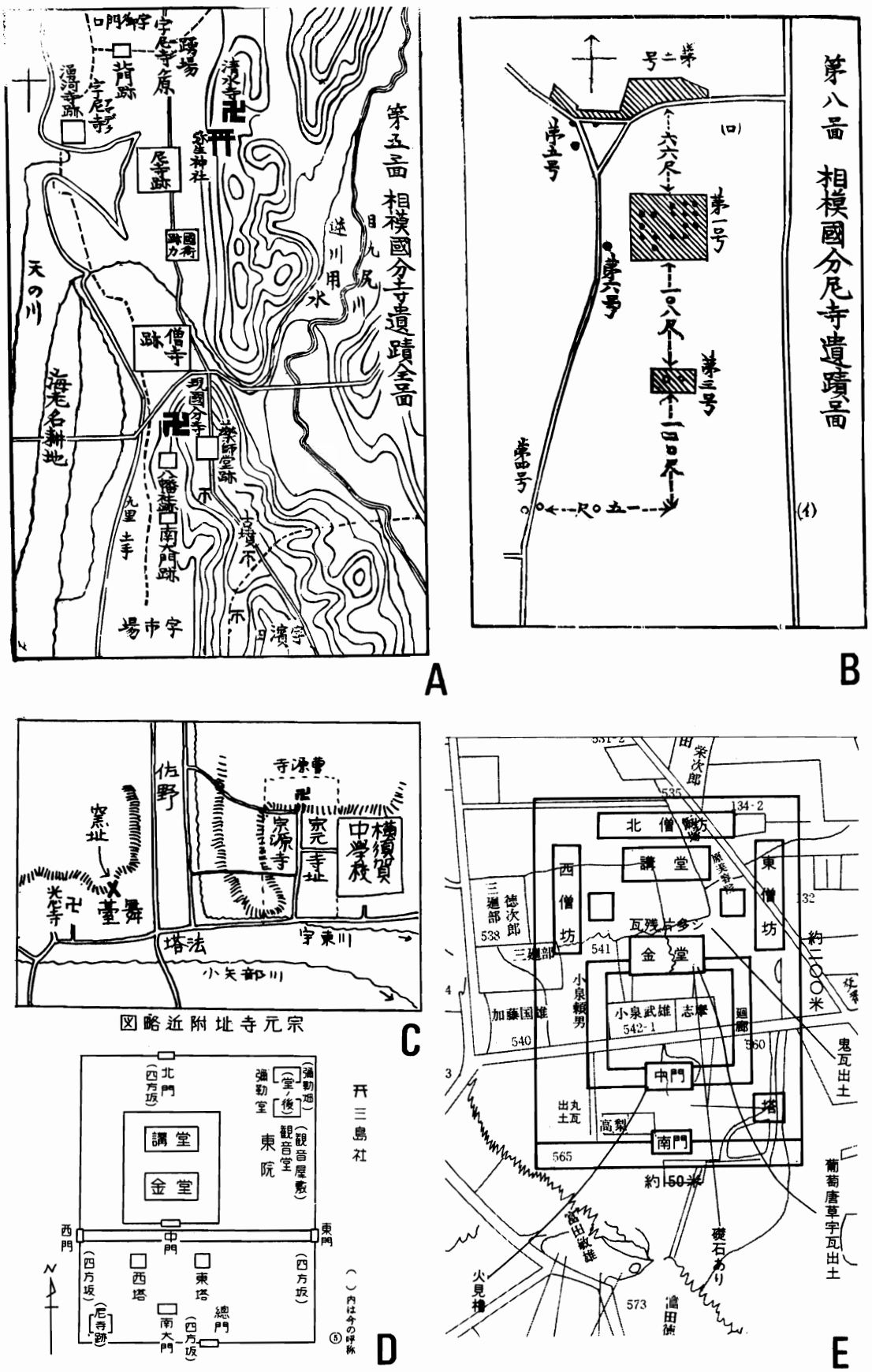
神奈川県の寺院研究　主要文献　（掲載しきれないため一部略しています。また長い場合は掲載図書名を略しました。）

野中完一1902「川匂神社の瓦にふれる」『考古界』２－７
永井健之輔1903「相模國國分僧寺」『古蹟』２－４
中山毎吉1911「相模國分寺研究」『横浜毎日新報』
沼田頼輔1918「相模国分寺考附国府駅路考」『歴史地理』31-3
住田正一1918「相模国曹源寺の古瓦に就て」『考古学雑誌』8-5
矢後駒吉・中山毎吉1921「相模国分寺研究」1・2『歴史地理』38
三輪善之助1922「影向寺寺城発見瓦」『考古学雑誌』13-2
谷川磐雄1923「影向寺発見の古瓦に就いて」１～３『武相研究』
中山毎吉・矢後駒吉1924『相模国分寺志』
谷川磐雄1926「影向寺について」『史蹟名勝天然記念物』7-2
沼田頼輔1927「相模国分寺に就いての一考察」
赤星直忠1927「宗源寺の古瓦」
足立康1931「相模国分寺堂塔年代論」『史蹟名勝天然記念物』6-12
田辺泰1931「相模国分寺建築論」『建築雑誌』45
赤星直忠1933「勝福寺の古瓦を尋ねて」
赤星直忠1935「相模宗元寺址」『史蹟名勝天然記念物』３
赤星直忠1938「相模国分寺」『国分寺の研究』上　吉川弘文館
磯野喜悦1938「相模国分僧寺瓦及び宇瓦」『銅鐸』７
石野瑛1939『武蔵相模に於ける古刹と出土古瓦』『夢殿』19
加藤誠夫1940「千代観音勝福寺址古瓦発見概報」『武相研究』9-9
岡部長章1950「相模尼寺跡で表面採集した文字瓦について」
大場磐雄1951「相模国分寺の性格」『上代文化』20
児島錦造1952『相模国分寺』海老名町役場
鶴田榮太郎1952「七堂伽藍」『武相文化』36
石野瑛1953「上府中村古刹址（千代観音）の考察」
内藤政通1954『川崎市菅寺尾台瓦塚廃堂址調査報告』
石野瑛1954「相模の国府と国分寺」『考古集録』21
赤星直忠1955「横須賀市子安寺址」『日本考古学年報』４
石野瑛1956・1958・1961『神奈川県大観』３～５
加藤誠夫1956「飯泉山勝福寺の研究」『郷土文化』19
石野瑛1956「古酒匂文化と千代観音弓削寺」『郷土文化』19
赤星直忠1957「宗元寺時代」『横須賀市史』
鶴田榮太郎1957「長編七堂伽藍」１・２『武相文化』100・101
加藤誠夫1961「飯泉勝福寺について」『かながわの文化財』22
大川清1962「瓦窯における技術導入の一例－相模国分寺瓦窯－」
石野瑛1963「小田原市旧上府中千代古刹址」
樋口清之1963「さかさ川の謎」『発掘』学生社
内田武雄1965「相模・千代台の寺院跡とその周辺」『国宝史蹟』
日野一郎1967「平塚市下ノ郷廃寺跡」『日本考古学年報』15
大岡実1967「史跡相模国分寺跡の発掘」『ミュージアム』194
岡田茂弘1967「相模国分寺を掘る」『古美術』18
坂詰秀一1968「神奈川県岡上廃堂址の調査」『古代文化』14
古江亮仁1968「市域の生い立ち」『川崎市史』
内藤政通ほか1968『菅寺尾台瓦塚廃堂跡第三次発掘調査概報』
大川清1969『瓦尾根瓦窯』
坂詰秀一1970「川崎市岡上廃堂跡」
赤星直忠1970「上足柄郡松田町瓦窯址調査日誌」
岡本勇1971「横須賀市博物館建設地内の古瓦発見地点の調査」
小出義治1971「子安地区の伝仏堂址発掘調査報告」
赤星直忠1972「松田町からさわ第三号瓦窯調査概報」
杉山博久1972「神奈川県下における古瓦出土遺跡地名表」
中村兵吉1973『相模の国府と国分寺の変遷』新人物往来社
木下良1974「相模国府の所在について」『人文研究』59
大三輪龍彦1975『影向寺遺跡発掘調査概報』
軽部一一1976「横須賀市秋谷出土の古瓦」
町田章ほか1978「国史跡相模国分寺跡」『神奈川県文化財図鑑』
岡本勇1978「七堂伽藍を掘る」『茅ヶ崎市史研究』３
神奈川県県史編集室1979『神奈川県史　考古資料編』
前場幸治1980『古瓦を追って』
伊東秀吉ほか1982『影向寺文化財総合調査報告書』
内田盛雄1984「千代台廃寺鬼瓦について」『鎌倉』45
前場幸治1984『国分寺古瓦拓本集　巻１　相模編』
関東古瓦研究会1984『第八回関東古瓦研究会資料』
神奈川県立博物館1984『神奈川の古瓦』
坪井清足1985「相模国分寺を掘る」『飛鳥の寺と国分寺』岩波書店
清水信行1986「神奈川県からさわ古窯址群出土の瓦をめぐる問題」
望月一樹1987「南武蔵における古代寺院の造営」『郷土神奈川』
竹石健二ほか1988「影向寺史」
國平健三・河野一也1988「奈良時代寺院成立の一端についてⅠ」
中山豊1989「小田原市千代廃寺出土の軒瓦」
影向寺1989『影向寺薬師堂保存修理報告書』
清水信行ほか1989『唐沢・河南沢』
大平聡1989「相模国「国分尼寺」遺跡の破壊」『歴史学研究月報』
滝澤亮ほか1990『相模国分寺関連遺跡』１・２
滝澤亮ほか1990『海老名市国分尼寺の調査』
河野一也1990「奈良時代寺院成立の一端についてⅡ」
国平健三1990・1991「初期相模国府の所在について」上・下
滝沢亮ほか1990・1992『相模国分寺関連遺跡詳細分布調査』ⅠⅡ
小竹実佳子1990「七堂伽藍出土の長頸瓶について」
海老名市図書館1990『国分寺関係資料目録』
須田誠1990「相模国分尼寺の発掘調査概要」
滝澤亮ほか1991「相模国分尼寺跡の第９次調査の概要」
河野一也・山下守昭1991「奈良時代寺院成立の一端についてⅢ」
村田文夫1991「影向寺の創建と史的展開に関する素描」
大岡実1991「相模国分寺」
神奈川県立埋蔵文化財センター『発掘された寺院』展示解説
荒井秀規1992「豆相の定額寺」『古代国家の歴史と伝承』
河合英夫1992「岡上廃堂址の年代観について」『多摩考古』22
滝澤亮ほか1992「海老名市相模国分僧寺・相模国分尼寺跡の調査」
清水信行1992「からさわ古窯址群出土瓦・補遺」『青山考古』10
河野一也1993「奈良時代寺院成立の一端についてⅣ」
須田誠1993「海老名市相模国分寺塔跡」『17回神奈川県遺跡発表会』
前場幸治1993『古瓦考』
長谷川厚1993「相模国府と国分寺の所在について」
村田文夫1993『古代の南武蔵』有隣堂
冨永樹之1994～1996「村落内寺院の展開」『神奈川考古』
海老名市温古館1994『天平の光と華』
菱沼一憲1994「相模国分寺雑考」『えびなの歴史』６
岡本孝之1994「下寺尾寺院跡の保存にむけて」
伊東秀吉ほか1994『国分尼寺北方遺跡－第７次・８次調査』
河野一也1994「相模国分寺」『シンポジウム関東の国分寺』
河野一也1995「相模国分寺の屋瓦と造営」『王朝の考古学』
大坪宣雄ほか1995『黒川地区遺跡群調査報告書Ⅶ』
岡本勇ほか1995『中山毎吉　その人と業績』
岡本孝之1995「下寺尾寺院跡調査の成果」『下寺尾寺院跡研究会』
寺井朗雄1995「下寺尾寺院跡の礎石追跡調査報告」
海老名市遺跡調査会1995「相模国分二寺に使われた石材の産地」
大村浩司1995「下寺尾七堂伽藍跡の調査」『下寺尾寺院跡研究会』
赤星直忠1996「下寺尾寺院跡」『下寺尾寺院跡研究会会報』14
岡本孝之ほか1996「礎石の調査」『下寺尾寺院跡研究会会報』15
岡本孝之1996「下寺尾寺院関連地名考」『下寺尾寺院跡研究会会報』
横山太郎1996「横浜市藪根不動原遺跡」『神奈川県遺跡発表会』
河野一也1997「相模の初期寺院」『シンポジウム関東の初期寺院』
岡本孝之1997「千代廃寺について」１～３
清水信行1997「神奈川県の古代寺院」『古代寺院の出現と背景』
河合英夫1997「岡上廃堂採集の古瓦について」『多摩考古』27
茅ヶ崎市教育委員会1997『下寺尾の七堂伽藍』展示説明
須田誠1997「史跡相模国分寺跡僧坊跡」『神奈川県遺跡発表会』
池田正一郎1997「鎌倉期における相模国分寺」『海老名の歴史』
河合英夫1997「川崎市橘樹郡衙関連遺跡の調査」
海老名市教育委員会1997「史跡相模国分寺跡出土の水煙について」
茅ヶ崎市教育委員会1997『下寺尾寺院跡の研究』
河野一也1998「相模国分寺」『聖武天皇と国分寺』
飯田孝他1998『厚木市史　古代資料編』
岡本孝之1998「千代廃寺跡の研究史的復元」『神奈川考古』34
河合英夫1998「国分寺と郡寺」『相模国府とその世界』
飯田孝1998「国分寺薬師堂跡の遺跡旧観と出土遺物」
国平健三ほか1998『海老名市史１資料編　原始古代』
岡本孝之1999「千代寺院跡の再検討」『小田原市郷土文化館報告』
池田敏宏1999「関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較検討」
境雅仁1999『愛名宮地遺跡』
加藤芳明・冨永樹之2000「厚木市七沢の鐘ヶ岳採集の瓦について」
望月一樹2000「新発見　評の文字瓦」『ミュージアムニュース』56
冨永樹之2000「神奈川県」『古代仏教系遺物集成・関東』
明石新・若林勝司2000「平塚市四之宮所在の下ノ郷廃寺跡の再検討」
平塚市博物館市史編さん担当2000『平塚市内出土の古瓦』
神奈川県考古学会2001『かながわの古代寺院　研究の成果と課題』
須田誠2000「相模国分寺跡の旧説と新説」『財団講座資料』
岡本孝之・国平健三ほか2001「弘明寺の古瓦」『神奈川考古』37
杉山博久2002「三輪善之助と影向寺出土瓦」『考古論叢神奈川』10海老名市教育委員会2002『相模国分寺創建』海老名市温故館
櫻山俊章2002「国分僧寺・国分尼寺の研究」『かながわの考古学』
冨永樹之2002「豪族の寺院と山寺、堂」『かながわの考古学』７
村上吉正2002「下寺尾西方Ａ遺跡」『第13回茅ヶ崎市遺跡発表会』大村浩司2002「下寺尾七堂伽藍跡の確認調査」『同上』





第１図　国府推定地位置図(上図 木下良 1974より、下図 国立歴史民俗博物館 1986より)



第２図　相模国分寺周辺図（Ａ中山 1921）、国分尼寺礎石配置図（Ｂ中山 1921）、宗元寺周辺図（Ｃ赤星 1935）、千代廃寺伽藍配置図（Ｄ石野 1961、Ｅ前場 1980）

服部清道と今日の板碑研究

渡辺　美彦

はじめに

板碑とは中世に造立された石製の卒塔婆である。関東地方に４万基あり、神奈川県には約1500基ある。

板碑の研究は今日、形態、主尊、銘文、荘厳及び製作技法などを中心におこなわれている。それによって、中世の地域ごとの造塔傾向や信仰集団の実態などがしだいに明らかとなり、生産と流通をめぐる問題も解明されつつある。ここでは今日の研究状況を踏まえ、服部清道とその後の板碑研究の歩みについて武蔵型板碑を中心に概観してみたい。

１．服部清道の研究

服部清道の板碑研究は仏教文化史と歴史考古学の確立をめざしたものであったが、1933年（昭和８年）に刊行した『板碑概説』（注１）は、板碑研究の大きな画期となる名著であった。

その中から当面の課題に則して、いくつかの業績を列挙すると次のとおりである。

第１に、板碑の梵字（古代インド文字）を重視し、梵字が象徴する主尊の名を特定した。たとえば、碑面に刻まれた二十一の梵字が山王二十一社の本尊であることを明らかにしたが、そうした研究は画期的なことであり、その後の板碑の宗教史研究の出発点となっている。

第２に、板碑の起源について初めて本格的に論じた。服部は、頭部が三角形で横二条線のある細長い武蔵型板碑について、五輪塔の形が簡略化し地輪が細長くなったもの（長足化）だと述べた。この説はまだ定説となっていないが、今日なお有力な説とされている。

第３に、板碑の形態と石材が地域によって違うことに注目し、板碑の系統を武蔵型、下総型、東北型、阿波型、九州型の５つに分類した。この分類は今日見直しの段階にあるが、全国的視野に立った分類は画期的なことであった。また、どのような形態のものでも銘文内容を満たすものは板碑であると述べたが、これも画期的なことであった。

第４に、板碑の発生を一元的なものと考え、列島各地にある板碑は武蔵型を祖形として伝播の過程で変化したものだと述べた。これは第３の分類に関係することで、まだ解明されない問題があるが今日なお大きな影響力をもっている。

『板碑概説』はその後約70年にわたり、全国各地の板碑研究にほとんど決定的な影響を与えた。近年までの市町村史や資料集の板碑解説が「板碑とは何か」から始まっているのは、『板碑概説』の構想が大きく影響していることを示すものである。

服部は1965年（昭和40年）以降、全国的な地域研究の流れに沿って、居住地の藤沢市を始め神奈

川県内各地の調査をおこない板碑の分布や消長などについて論じた（注２）。それは県全体を見通した総合的研究であり画期的なことであった。中でも県内の板碑を武蔵系列板碑、常総系列板碑、相模系列板碑の３つに分類したことは注目される（注３）。

服部の業績に刺激され、他県でも板碑研究が盛んになった。埼玉県では1930年から40年にかけて（昭和10年代）多くの郷土史家が組織され県内板碑の網羅的な調査が行われている。

1956年（昭和31年）以降は、千々和實が東京都、埼玉県、群馬県などの悉皆調査を行い、『武蔵国板碑集録』などの資料集などを刊行した（注４）。論文集の『板碑源流考』は必読の文献である（注５）。

また1981年（昭和56年）になると埼玉県で２万基に上る板碑が集録され（注６）、北武蔵全域を見通した板碑研究が諸岡勝らによって進められることになった。1983年（昭和58年）には坂誥秀一編の『板碑の総合研究』が刊行され（注７）、全国各地の板碑研究状況を総覧することが可能となった。神奈川県の板碑については渡辺が執筆している（注８）。

なお、服部の業績については1998年、縣敏夫によって適切な紹介がされている（注９）ので、参照されたい。

注１．服部清道『板碑概説』 1933年　鳳鳴書院 〔復刻〕1972年　角川書店
注２．服部清道「板碑の地域性－神奈川県下の板碑について」『日本歴史考古学論叢』1966年
注３．注２に同じ。
注４．千々和實『武蔵国板碑集録』Ⅰ　1956年　私家版
　　千々和實『武蔵国板碑集録』Ⅱ　1968年　小宮山書店
　　千々和實『武蔵国板碑集録』Ⅲ　1972年　雄山閣
　　千々和實『上野国板碑集録』全　1977年　西北出版
　　千々和實『東京都板碑所在目録』 1979年・1980年　東京都教育委員会
注５．千々和實『板碑源流考』 1987年　吉川弘文館
注６．埼玉県歴史資料館編『埼玉県板石塔婆調査報告書』 1981年　埼玉県教育委員会 〔市販〕『板碑埼玉県板石塔婆調査報告書』 1972年　名著出版
注７．坂誥秀一『板碑の総合研究』１総論編・２地域編　1983年　柏書房
注８．渡辺美彦「神奈川県」『板碑の総合研究』２地域編　1983年　柏書房
注９．縣敏夫『服部清道と「板碑概説」 板碑ある研究者の歩み』 1998年　揺籃社

２．千々和到の研究

1973年（昭和48年）、千々和到は70年代の板碑研究を評して「いろいろな視点からの研究は実っているが、総体として『板碑概説』は乗り越えられていない」とし、『板碑概説』をどう相対化するかが研究課題であると述べている。

千々和到が『板碑概説』の相対化のために設定した視点は４点あるが（注２）、ここでは当面の課題に則して３点を紹介しておく。

第１の視点は、板碑の伝播について考えるための視点である。

千々和は「各地の板碑文化をひとまずそれぞれ独自のもの」ととらえ、その特質を明らかにした

上で「それぞれの板碑文化相互の関連を検討し、遠方や遠隔地との網の目状の文化交流を考察することが有効であろう」としている（注３）。

また、服部のいう一元的伝播論は武蔵型板碑を祖形とするものだが、「武蔵より遠くなる地域ほど板碑の形態が武蔵型から遠くなることはない」とした。これは『板碑の総合研究』やその後の各地の調査研究が明らかにした事実を踏まえたものである。

第２の視点は、板碑を「徹底して歴史資料として見る」という視点である。これは板碑によって歴史を研究し叙述することにつながるもので、千々和はすでに1973年、武蔵国（埼玉県）比企・大里・児玉３郡の板碑の銘文を統計処理して次のような５つの画期を見いだしている。

1227年	板碑が初めて現れる。
1300年頃まで	板碑が各地へ伝播する。
1440年頃	板碑に「結衆」の文字がみえ、また板碑の墓標化が始まる。
1520年頃	「結衆」による板碑の造立が進展する。
1600年頃	板碑文化が終焉する。

これによって、板碑をもちいた歴史の叙述が初めて可能となった（注４）。 千々和は、15世紀初頭から半ばの時期を板碑造立の画期ととらえ、その時期には「おそらく墓地景観も大きく変化したであろう」と推測している（注５）。

第３の視点は、「板碑の立地を考え、歴史的な景観の中に板碑を見る」という視点である。これは在地の霊場の問題ともかかわるが、千々和は「立ち続ける風景の変化・変動を見たい」とし、そのためには考古学との協働が重要であると述べている。

千々和はこれとは別に、横浜市と川崎市の中世墳墓群の発掘報告書（注６）に基づき、現位置に埋没した14世紀後半から15世紀の中世墳墓と板碑との関係や、在地領主層の埋葬状況、民衆の信仰状況などを探っている（注７）。

また、千々和は「板碑の銘文を徹底的に読む」ことを提唱している。1973年に発表した論文では、紀年銘と戒名（法名）の配列に注目し、その表現の形式と内容に時期的変化が見られると指摘している。その変化の大きな方向は「仏教的供養から個人銘板碑や講などの結衆による民間信仰的板碑へ」向かうものであると述べている（注８）。

千々和の銘文配列に関する研究は、その後の武蔵型板碑の古文書学的研究に大きな影響を与えている。埼玉県では諸岡勝が与野市（現さいたま市与野）の板碑について同様の研究をおこない（注９）、有元修一と三宅宗議も和光市新倉午王山遺跡出土板碑について同様の研究をおこなっている(注10)。また、千々和の銘文配列様式の研究は東北などの板碑研究にも影響を与えた。たとえば三宅宗議は井内石板碑について、紀年銘、願文など銘文の構成要素の組成関係を基にその配列様式を考える方向を示している（注11)。

注１．千々和到「東国における仏教の中世的展開」『史学雑誌』第82編第２号・第３号　1973年　史学会。
のち『板碑とその時代－てぢかな文化財・みぢかな中世』（1988年　平凡社）に収録。
注２．千々和到「板碑の資料論を考える」『國學院大學紀要　文学研究科』第425号　1994年　國學院大學大学院
注３．千々和の「網の目状伝播論」は次の論考にも詳しい。
千々和到「石巻の板碑と『東北型』板碑の再検討」『六軒丁中世史研究』第３号　1995年　東北学院大学中世史研究会
注４．千々和到「板碑にみる中世の文化」『山形県　地域史研究』20号　1995年　山形県地域史研究協議会
注５．千々和到「板碑で読む多摩の中世」（東国文化研究会例会発表レジュメ）　1999年　東国文化研究会
注６．『山の上遺跡（港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告ＸⅢ）』1992年　横浜市埋蔵文化財センター
久保常晴「川崎市有馬発見の中世墳墓」『続仏教考古学研究』1967年　ニュー・サイエンス社
注７．千々和到「第３章第４節　川崎の板碑を考える」『川崎市史』通史編１　1993年　川崎市
注８．注２文献。
注９．諸岡勝「第２編（一）中世の石造遺物」『与野市史』文化財編　1983年　与野市
注10．有元修一「第３章第４節　中世火葬墓と板碑」『埼玉県和光市新倉午王山遺跡』1981年　和光市新倉午王山遺跡調査会
三宅宗議「武蔵型板碑の銘文配置－和光市新倉午王山遺跡の板碑の場合－」『埼玉史談』第45・46号　1988年　埼玉県郷土文化会
注11．三宅宗議「石巻市の板碑－十三世紀における銘文要素の組成について」『中世奥羽と板碑の世界』2001年　高志書院

３．考古学の立場からの研究

以上のように、板碑研究は千々和到によって新しい段階に至った。千々和の板碑研究は文献史学の立場に立つものだが、提起された問題や解明された内容は歴史、民俗、宗教、考古学などを広く包括するものである。

千々和は1998年（平成10年）、板碑の資料論を述べる中で「徹底的に板碑を歴史史料とする道を選ぶ」と述べ、（注１）、そのための方法として次のような項目をあげている。

ａ．銘文を読みきることで板碑の「古文書学」の可能性を広げる。

ｂ．統計的手法をもちい、課題意識を鮮明にして数値の意味する内容を読み解く。

ｃ．板碑の分布とその地域性を検討しなおす。

ｄ．歴史的景観の中で板碑をみる。

この中で私が考古学の立場から重視している史料化の方法は、ａｂｃである。

まずａであるが、「銘文を読みきる」ことは板碑研究の初歩であるとともに基本である。私は、銘文を含めて、「モノ」としての板碑が含む多様な情報を読み取ることが必要であり、それを史料化することが必要であると考えている。

板碑の史料化に当たって第１に 取り上げるべきものは、形態と石質である。

坂誥秀一は1983年、「板碑を考古学の視点より把握するとき、まず果たすべきことは、形態の類型認識であるが、それは石材と密接な関係を持っていることが想定される。すなわち、板碑の形態的特徴は石質によって規制されていると言うことが出来る」（注２）と述べている。それは板碑の地域的特徴を事実のままとらえられる上で重要なことである。

また、1990年代以降の板碑の研究は形態と石質だけでなく、主尊種子の分析、荘厳の比較、銘文配列の様式化、製作技法の分析など各方面にわたっている。
その中で、私が考古学の立場から関心をもっているのは、銘文（紀年銘）、碑面の荘厳（蓮座、花瓶、法具）、製作方法などである。

板碑についての私の研究は、1983年の『板碑の総合研究』を出発点としている。それは神奈川県の板碑の地域別・年代別分布、型式と特色、信仰形態、造立趣旨などについて概観を試みたものだが（注３）、その時考えたことは紀年銘のない板碑をどのように編年するかということであった。

それで私は、碑面に刻まれた荘厳の一種である花瓶に注目し、その形態の分析と比較によって無紀年銘板碑の編年を試みた（注４）。また、室町時代応永年間の板碑の中から花瓶を刻んだ板碑の基数を集計し、市区町村別の比較を試みた（注５）。同時に、川崎市域における板碑の花瓶の編年も試みている（注６）。

こうした試みは、板碑の各部位の観察を基にして板碑そのものの編年を試みるという当面の課題に対応するもので、鎌倉市域などで出土する中世陶磁器片やかわらけの編年の場合と観点や方法は同じである。これはまた千々和がｂとしてあげた「統計的手法をもちいる」方法とも関連すると思う。

また、千々和がｃとしてあげた「板碑の分布、地域性を再検討する」ことに関連して、私は碑面に刻まれた蓮座や花瓶の地理的分布を問題としている。

たとえば、多摩川流域において蝶形蓮座板碑という地方色ある板碑があるが、そのおおよその分布域と造立年代を確認することができ、板碑の製作と造立における「地方」の範囲を把握することができるようになった（注７）。

板碑の考古学的研究の中で90年代以降進んでいるのは製作技法の研究である。三宅宗議は武蔵型板碑を観察して、採石、成形、調整、彫刻、装飾の５段階を踏んで製作したと推定しているが（注８）、この段階区分は板碑の製作場所と流通過程を解明する上で有効な標識となるものである。

武蔵型板碑の原石は緑泥石片岩（緑泥片岩）で、その産石地は埼玉県秩父郡長瀞町野上下郷と同県比企郡小川町下里である。野上下郷の採石遺構については1998年、私が調査概要を報告したことがあり（注９）、小川町下里の採石場跡については2001年に三宅が加工石材を取り上げて考察している（注10）。

私はまた1999年、消費地（造立地）における板碑製作の研究として綾瀬市の板碑を取り上げ、その成形と彫刻についての分析結果を集計したことがあり（注11）、その一部について、より詳しい観察と史料化を試みている（注12）。

2000年におこなった東京都大田区萬福寺板碑群の報告（注13）は、多摩川下流の対岸地域における板碑の調整技法と彫刻の問題を考えたもので、神奈川県域の板碑との比較検討が課題として残されている。

また2002年に、横須賀市三浦清雲寺の文永八年銘板碑を検討し、これまで偽碑とされて来た板碑の再評価をおこなったが（注14）、これは碑面の風化状態や製作技法などを考古学的に検討した結果の報告である。

しかし、そうした板碑の一つ一つの採石地については未だ確定するまでに至っていない。また、板碑製作の各段階ごとの製作場所も未解明の状況が続いてる。

注１．千々和到「板碑研究の課題」（国史大会講演）　1998年　國學院大學
注２．坂誥秀一「板碑の地域相」『板碑の総合研究』地域編　1983年　柏書房
注３．渡辺美彦「神奈川県」『板碑の総合研究』２地域編　1983年　柏書房
注４．渡辺美彦「多摩川下流域の板碑－秩父周辺の板碑との形状比較－」『東国文化』５号　1993年　東国文化研究会
注５．渡辺美彦「板碑の花瓶（けびょう）について」『かながわの文化財』第76号　1980年　神奈川県文化財協会
注６．渡辺美彦「蝶形蓮座の謎」『川崎市史』通史編１　1993年　川崎市
注７．渡辺美彦「多摩川流域にみられる地方色ある板碑－蝶形蓮座を中心として」『地方史研究』第227号　1990年　地方史研究協議会
注８．三宅宗議「板碑の製作法」『小川町の歴史』資料編３古代・中世Ⅱ　1997年　小川町
注９．渡辺美彦「埼玉県長瀞町野上下郷の採石場跡にある採石痕－板碑の石材産地・加工に関する資料紹介」『川崎市文化財調査集録』第33集　1998年　川崎市教育委員会
注10．三宅宗議「小川町下里で採集した青石の加工石材」『埼玉史談』第47巻第４号　2001年　埼玉県郷土文化会
注11．渡辺美彦「第3節　板碑」『綾瀬市史調査報告書１．中世の石造物』　1996年　綾瀬市教育委員会
注12．渡辺美彦「中世相模における再利用板碑」『綾瀬市史研究』第５号　1998年　綾瀬市教育委員会
注13．渡辺美彦「大田区万福寺板碑の押し削り技法について」（東国文化研究会第35回報告レジュメ）　1999年　東国文化研究会
注14．渡辺美彦「三浦清雲寺の文永八年銘板碑の考古学的検討」『三浦一族研究』第６号　2001年　三浦一族研究会

４．私の研究課題

歴史の叙述を目ざした板碑研究には、大別して次の３つの分野があると思う。

(1)　中世仏教を広めた人々の研究（民衆仏教史の研究）

(2)　板碑を建てた人々の研究（供養者・施主の研究）

(3)　板碑を造った人々の研究（石工集団・諸職人の研究）

この中で、私が特に興味を持って取り組んでいるのは(3)である。しかし、この方面の文献史料はわずかであるから、板碑の観察で得た情報を基に検討することが必要である。

そのため私が考えている研究目標は次の３点である。

１．無年紀銘の板碑の「編年」を試みる。

板碑は他の中世石造物と異なり、紀年銘をもつものが多数あるが、それでも半数以上は破損や磨耗によって紀年銘の部分を欠いている。そのような板碑の年代を特定することは基本的に重要な課題である。

そこで私は、先に述べた花瓶、蓮座などの法具の形態分析や比較をおこなうだけでなく、板碑の形状や製作技法、種子などの彫刻法の分析とその比較研究も試みたいと考える。

２．板碑の地域別の比較研究を試みる。

板碑の碑面には花瓶、蓮座などが刻まれ、ノミ痕などの製作痕がみられる。これらの法具や製作痕を検討することにより、板碑製作にかかわった石工の技術や活動の実態が解明されるだろう。

たとえば、多摩川流域に分布する板碑の蓮座はどのような形状を呈し、いつの時期にどの範囲まで分布していたのか。また、同じ形状の花瓶がいつの時期にどの範囲まで分布していたのかといった問題を解明したい。工人たちが製作に使用したノミの大きさや形状、用法についても同様の研究をおこないたいと考えている。

３．板碑の生産と流通の研究を試みる。

武蔵型板碑の原石が、埼玉県の秩父郡長瀞町と比企郡小川町で採掘された緑泥石片岩であることは明らかである。ただ、具体的にどの場所で採石されたのか（河原か露頭か）、どこで板碑の形態が作られ、どこで主尊や銘文が彫刻されたのか（工房遺跡はどこか）。そういう問題がまだ解明されていない（注１）。

また、板碑未成品や完成品がどのような方法（水運か陸路か）で運搬されたのかも不明であるから、その解明を試みたい。私は特に、三浦清雲寺の文永八年銘板碑など三浦半島全域の板碑が、埼玉県の採石場からどのような手段方法で運搬されたのか、どこで銘文が彫刻されたのかを解明したいと考えている。

以上述べたような研究課題を解くには、板碑を「モノ」として徹底的に観察し、考古学的方法によってその史料化を図ることが基本である。板碑による中世社会史や民衆仏教史の叙述は、そういう考古学的史料も含め活用することで内容豊かなものとなるだろう。

神奈川県では板碑の所在調査はすでに終わっている。ただ、板碑を歴史史料とするための史料化は一部を除きほとんど進んでいない。同じような状況は他の都道府県について多かれ少なかれ当てはまることである。

私の板碑研究の目的は、神奈川県の歴史解明のための基礎資料を作ることである。板碑を中世地方史の良好な史料とするために、考古学的観察とその史料化の方法をを追求することが当面の課題である。私はこれまでの観察と史料化の方法を徹底するとともに、考古学と文献史学との連携を深めて板碑をめぐる諸問題を解明していきたいと考えている。

注１．渡辺美彦「中世石造物からみた交流と変容」『地方史研究』第274号　1998年　地方史研究協議会

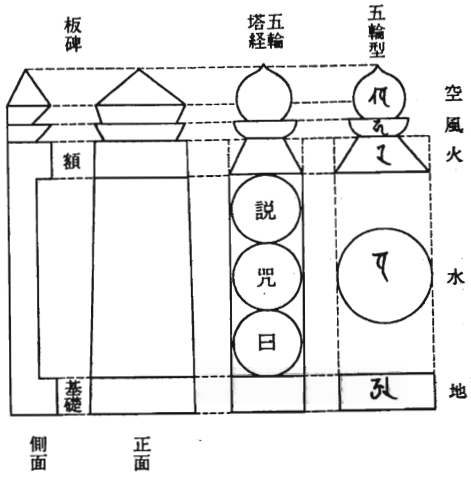
県内の主な中世石造物研究者

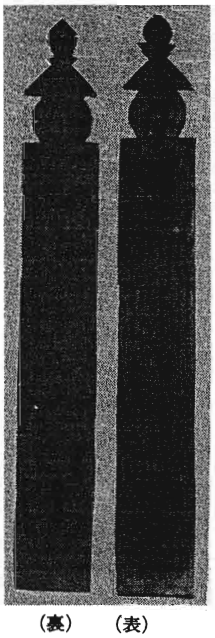
あ　相沢雅雄（横浜市）
　　赤星直忠（横須賀市）
　　新井　清（川崎市）
い　飯田　孝（厚木市）
　　石野　瑛（横浜市）
　　伊藤　潤（小田原市）
　　岩崎宗純（箱根町）
え　海老原徳夫（藤沢市）
お　大森順雄（鎌倉市）
　　大三輪龍彦（鎌倉市）
　　大貫英明（相模原市）

く　久保常晴（川崎市）
こ　小暮慶明（横須賀市）
さ　斉藤彦司（横須賀市）
す　鈴村　茂（厚木市）
し　重永　宰（茅ヶ崎市）
　　渋江二郎（鎌倉市）
た　田中　理（鎌倉市）
ち　千々和實（横浜市）
　　千々和到（横浜市）
の　野村　隆（川崎市）

は　服部清道（藤沢市）
ひ　日野一郎（平塚市）
ま　村松祐介（茅ヶ崎市
　　馬淵和雄（鎌倉市）
み　三山　進（逗子市）
や　安田三郎（葉山町）
　　山形雄三（鎌倉市）
　　八幡義生（鎌倉市）
　　安本利正（秦野市）
よ　横田甲一（川崎市）

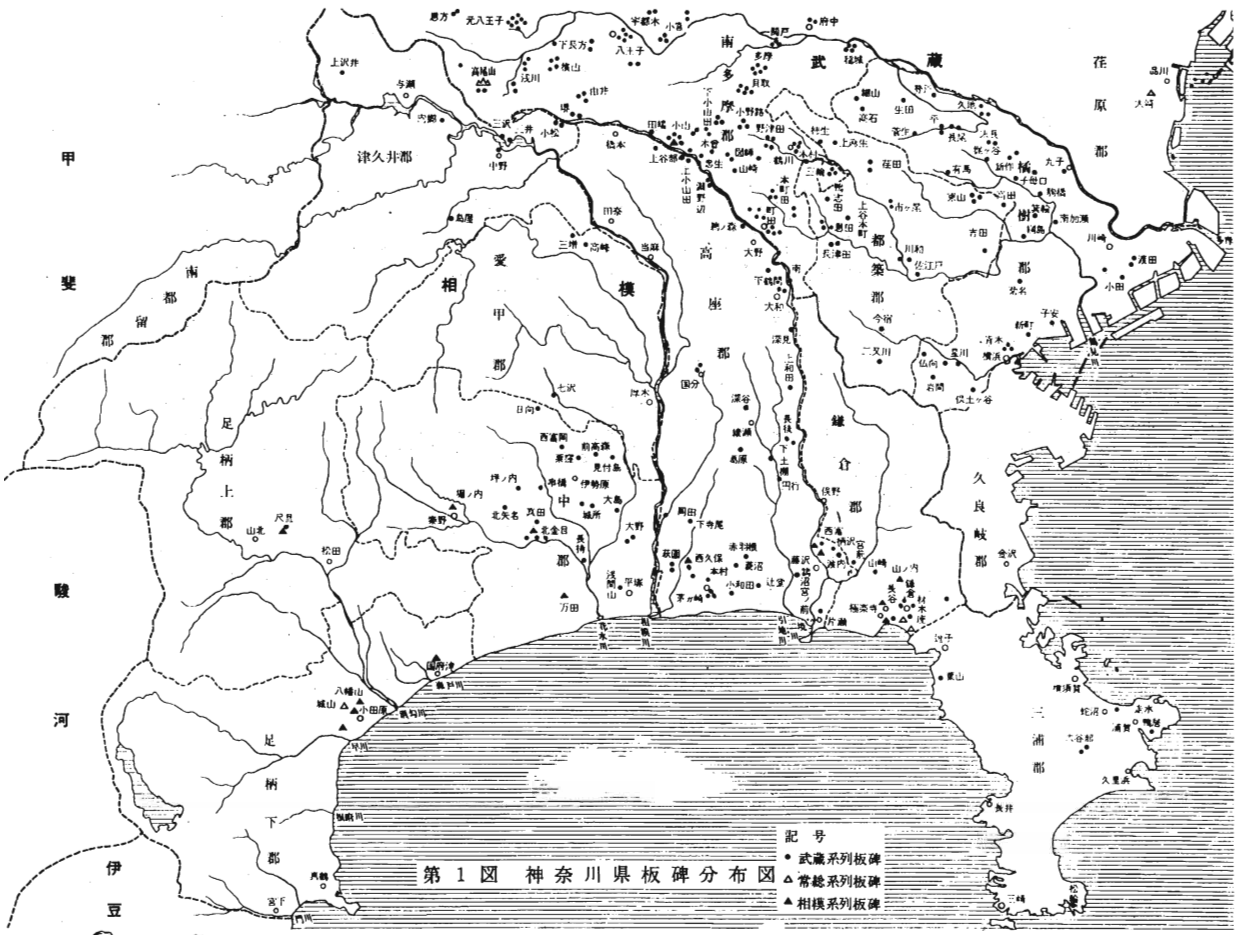
県内の調査に関係した研究者
坂詰秀一（東京都）
池上　年（千葉県）
三宅宗議（埼玉県）
前田元重（東京都）「文献史料」





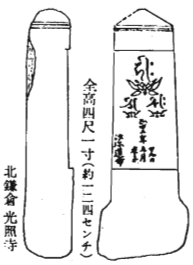
（裏）　（表）
静岡県願成就院の板状長足五輪型塔婆

千々和實『板碑源流考』より抜粋

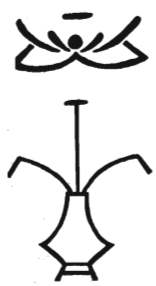


第1図　神奈川県板碑分布図

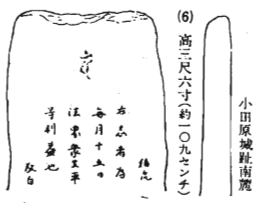
常総型板碑・下総型



相模型板碑



武蔵型板碑



服部清道「板碑の一地域」
『日本歴史考古学論叢』より抜粋

『多摩の板碑』町田市立博物館より抜粋
『板碑の総合研究』地域編「神奈川」より抜粋

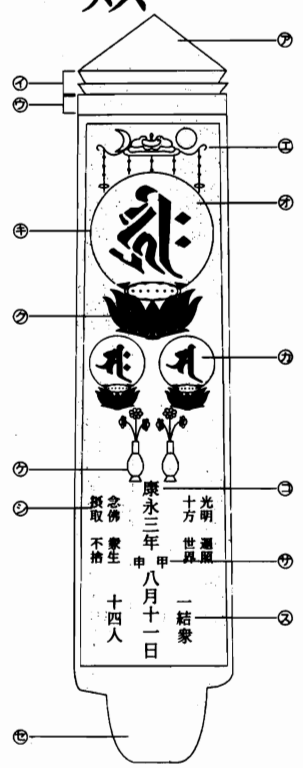
板碑の豆知識

これであなたも板碑博士！

部分名称と梵字の種類

細長い長方形の板碑の表面は、実に様々な内容で埋めつくされています。これらの図や文字の彫りかた、形の特徴などをくわしく分析することで、年号が刻まれていなくても、およその年代を推定することができます。

また、表がわのにぎやかさとはうって変わって、裏には原則として何も描かれていません。



■板碑の部分名称

●山形
先端の三角形の部分です。

●二条線
山形の下に二本の線を彫り込み、多層の塔を抽象的に表現しています。

●額部
庇のように少し前に張り出しています。

●天蓋

●主尊
主体となる仏の図像です。

●脇侍
主尊の両脇に立つ仏を表しています。

●月輪

●蓮座

●花瓶

●紀年銘
板碑を作った年月日。または七回忌などの供養をとり行った日付です。月待供養などの場合は23日、17日などの特定の日となります。個人を供養するのは、やはりお彼岸のころが多いようです。まれに故人の命日が記される例があります。

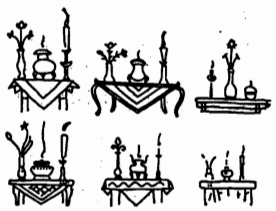
●干支
その年の「えと」です。年号に併記するのが古来の習慣となっていました。

●偈
経典の中から、仏教の心髄を述べた部分を選び出し、韓のかたちにまとめたものです。

●銘文
板碑を造立した理由、目的と作った人の名前が記されます。

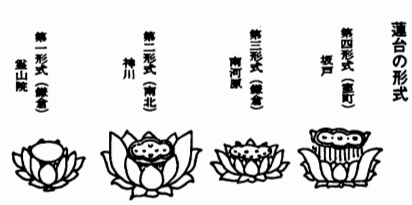
●基部
板碑を立てるために土中に埋める部分で、中央にほぞ穴をあけて基部をはめ込む「台石」がセットになっていることもあります。

嵐山町博物誌【嵐山町の中世】より抜粋



上段　左から文安・享徳・康正
下段　左から文安・文明・康正
三具足

上段、鎌倉時代（左から康元、乾元、徳治）
下段、南北朝時代（康永、貞治、応安）
花瓶



『東大和市史資料編６』より抜粋

赤星直忠博士生誕100年記念

「考古学者　赤星直忠の学問とその生きた時代
～神奈川県の地域研究に残したもの～」

1　開催にあたって　1
2　赤星直忠の学問とその時代　6
3　研究業績　18
4　文化財の保護と普及　33
5　赤星直忠のひとがら　38
6　展示会を終えるにあたって　39

1　開催にあたって

考古学者赤星直忠博士がご存命ならば、今年の４月17日で満100歳になられた。赤星博士は山内清男・八幡一郎・甲野勇・酒詰仲男らとともに、太平洋戦争前・戦後を通して日本の考古学をリードしてきた考古学者である。しかし、他の人とは異なり三浦半島にあって、戦前は小学校教員・陸軍軍人・師範学校教員・鉄道車輌会社社員、戦後は高等学校教員としての仕事の傍ら、考古学研究を進めてきた人である。

赤星博士の日本考古学に対する業績は数多く、研究論文・報告書等だけでも500におよぶ数になる。主な研究をあげれば、関東地方の縄文時代早期の土器編年研究・三浦半島に数多く分布する海蝕洞穴遺跡の研究・古墳時代の墳墓である横穴の編年研究・奈良時代から室町時代まで存在した宗元寺址の研究・三浦氏の本拠地であった衣笠城址をはじめとする中世城郭の研究・中世武士階級の墳墓であるやぐらの研究・近世末の江戸湾防備のための台場および近代の東京湾要塞の研究などがある。

戦前、赤星博士は帝室博物館にいた高橋健自・後藤守一・石田茂作らに考古学の教えを受けたが、考古学に関連する動物学・植物学・地質学・民俗学などは独りで学んでいった。戦後は横須賀考古学会を主宰して自ら調査研究にあたるとともに、後進を指導・育成し、後に日本の考古学界をリードする岡本勇や神澤勇一らを育てていった。

このような赤星博士の学問を顕彰するとともに、竹久夢二の絵を愛し、自らも絵筆を持ち、さらに数多くの短歌を残した赤星博士の別の一面も、多くの考古学関係者や市民に知っていただきたく、赤星直忠博士生誕100年を記念してこの展覧会を開催しました。

横須賀考古学会

赤星直忠

明治35（1902）～平成3（1991）年

神奈川県横須賀市生まれ。大正10（1921）年、神奈川県横須賀中学校卒業後、豊島小学校代用教員となる。大正11（1922）年、一年志願兵で横須賀重砲兵連隊入隊。翌年除隊。大正15年、神奈川県師範学校を卒業、神奈川県師範学校訓導などを勤め、昭和20（1945）年、応召され東部19094部隊に配属される。復員後は横須賀市立工業高校で教鞭をとる傍ら横浜国立大学で考古学を教えた。

考古学の研究は旧石器時代から近代まで幅広く業績を残し、昭和36（1961）年に「横穴古墳の編年研究」で国学院大学より文学博士の学位を授与された。また、戦前は神奈川県史蹟名勝天然紀念物調査委員を委嘱され、戦後は神奈川県重要美術品調査員、神奈川県をはじめ横須賀市、逗子市、鎌倉市の文化財保護（審議）委員を勤め文化財の保護に尽力し、文化財保護の功績により、昭和47（1972）年、勲五等瑞宝章を授与された。

主要著書、『鎌倉市史―考古編』、『神奈川県史―考古資料編』、『中世考古学の研究』他。

『伝赤星直忠作馬形埴輪模型』（横須賀市自然・人文博物館蔵）

赤星直忠以前の三浦半島の考古学

三浦半島での赤星直忠以前の考古学研究の一側面は、東京帝国大学から発行された『日本石器時代遺物発見地名表（以下、地名表）』第1～5版での変化に伺える。明治30（1897）年に発行された『地名表』第1版には相模国の遺跡が22遺跡記載されているが、三浦半島の遺跡は15遺跡で7割近くを占めている。その後も三浦半島の遺跡は発見が相次ぎ、翌年発行の『地名表』第2版では14遺跡、明治34（1901）年発行の『地名表』第3版では1遺跡が追加された。

『地名表』第1版に記載された三浦半島の遺跡のうち10遺跡は佐藤伝蔵の報告で、『地名表』第2版では12遺跡が佐藤と金沢悌次郎の報告である。佐藤は明治28年に帝国大学を卒業し、明治30（1897）年に高等師範学校の教授となることから、それ以前の学生ないしは助手時代の発見であろう。『地名表』第3版での追加が1遺跡に過ぎないことを考えれば、三浦半島の縄文時代遺跡発見に佐藤の残した功績は大きい。

当時の横須賀は明治17（1884）年に海軍の横須賀鎮守府が置かれると同時に陸軍の洋式砲台建設が進み、急速に軍都として発展していった社会環境下にあった。また、明治19（1886）年には帝国大学臨海実験所が三浦郡三崎入船町に落成し、臨海実習が始められた。『地名表』第1・2版に見られるように、相模国の中でも横須賀と浦賀近郊、三崎周辺の遺跡が早くから発見され、三浦半島の縄文時代遺跡の初見記事が明治20（1887）年に動物学を専攻し、三崎で卒業研究を行った丘浅次郎によって報告されたことは、このような社会背景によると思われる。また、大正6（1917）年発行の『地名表』第4版では新たな遺跡の追加がないが、これは明治32（1899）年に要塞地帯法が制定され、

日本石器時代人民遺物地名表にみる相模国の遺跡

	遺　跡　名	第１版（M30）	第２版（M31）	第３版（M34）	第４版（T6）	第５版（S３）
1	三浦郡久比里村江戸坂貝塚	丘　浅次郎	丘　浅次郎	丘　浅次郎	丘　浅次郎･若林勝邦	丘　浅次郎･若林勝邦
2	三浦郡藤沢駅	八木奘三郎	→51			
3	三浦郡吉井村貝塚	八木奘三郎	八木奘三郎	八木奘三郎	八木奘三郎	八木奘三郎
4	三浦郡横須賀貝塚	若林勝邦	若林勝邦	若林勝邦	若林勝邦	→削除
5	三浦郡深田村海軍病院内貝塚	人類学教室	人類学教室	人類学教室	人類学教室	人類学教室・野中完一
6	三浦郡佐野村貝塚	人類学教室	人類学教室	人類学教室	人類学教室	人類学教室
7	三浦郡金田村字鈴ノ川	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵
8	三浦郡金田村字念佛堂	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵
9	三浦郡三崎町字宝蔵山	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵
10	三浦郡三崎町字歌舞島	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵
11	三浦郡三崎町字上ノ御堂	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵
12	三浦郡三崎町字三戸	佐藤伝蔵	→35・36			
13	三浦郡三崎町字東岡	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵
14	三浦郡三崎町大字小網代小字殿山	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵
15	三浦郡三崎町字城ヶ島小字赤羽根	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵
16	三浦郡三崎町字城ヶ島小字養老子	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵	佐藤伝蔵
17	中郡吾妻村釜野貝塚	井上喜久治・鳥居龍蔵	井上喜久治・鳥居龍蔵	井上喜久治・鳥居龍蔵	井上喜久治・鳥居龍蔵	井上喜久治・鳥居龍蔵
18	中郡吾妻村梅澤貝塚	井上喜久治・鳥居龍蔵	井上喜久治・鳥居龍蔵	井上喜久治・鳥居龍蔵	井上喜久治・鳥居龍蔵	井上喜久治・鳥居龍蔵
19	中郡伊勢原町	阿部正功	阿部正功	阿部正功	→114	
20	中郡秦野町曽屋神社台	阿部正功	阿部正功	阿部正功	阿部正功	阿部正功
21	愛甲郡愛甲村	阿部正功	阿部正功	阿部正功	阿部正功	阿部正功
22	足柄下郡真鶴崎	人類学教室蔵	人類学教室	人類学教室	人類学教室	人類学教室
23	三浦郡久比里村大字佐原小字カヤマ貝塚		沼田頼輔	沼田頼輔	沼田頼輔	沼田頼輔･赤星直忠
24	三浦郡三崎町大字小網代永昌寺後山		沼田頼輔	沼田頼輔	沼田頼輔	沼田頼輔
25	三浦郡三崎町大字小網代字鵜ガ島台（一名鷺野）		佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎
26	三浦郡三崎町大字小網代新井浜白石、石切山		佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎
27	三浦郡三崎町字二町谷台		佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎
28	三浦郡三崎町大字諸磯字新井、貝塚家志庫		佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎
29	三浦郡三崎町大字浜諸磯字鼎鋼込		佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎
30	三浦郡南下浦村大字毘沙門字名向山		佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎
31	三浦郡南下浦村大字毘沙門字大乗		佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎
32	三浦郡南下浦村大字毘沙門字大原		佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎
33	三浦郡初声村大字下宮田字飯盛台		佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎
34	三浦郡北下浦村大字野比		佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎
35	三浦郡初声村大字三戸字蜜柑畑		佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎
36	三浦郡初声村大字三戸字地蔵畑		佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎	佐藤伝蔵・金沢悌次郎
37	足柄下郡前羽村前川近戸神社辺		小林興三郎	小林興三郎	小林興三郎	小林興三郎
38	足柄下郡下曽我村谷津寺前		小林興三郎	小林興三郎	小林興三郎	小林興三郎
39	足柄上郡中村字井ノ口村		小林興三郎	小林興三郎	小林興三郎	小林興三郎
40	陶陵郡大磯町虎御石前		小林興三郎	小林興三郎	小林興三郎	小林興三郎
41	陶陵郡大磯町羽代山南麓松本氏邸前		坪井正五郎	坪井正五郎	坪井正五郎	坪井正五郎
42	大住郡土澤村		小林興三郎	小林興三郎	→116	
43	大住郡金目村		小林興三郎	小林興三郎		
44	大住郡關崎村		小林興三郎	小林興三郎		
45	大住郡伊勢原町付近		小林興三郎	小林興三郎	→114	
46	大住郡大畑村		小林興三郎	小林興三郎	→120	
47	大住郡高部屋村字西富岡		小林興三郎	小林興三郎	小林興三郎	小林興三郎
48	大住郡秦野町小学校前		小林興三郎	小林興三郎	小林興三郎	小林興三郎
49	大住郡西秦野村字渋沢村		小林興三郎	小林興三郎	小林興三郎	小林興三郎
50	大住郡大槻村大槻天神付近		小林興三郎	小林興三郎	小林興三郎	小林興三郎
51	高座郡藤沢駅後ノ台		八木奘三郎	八木奘三郎	八木奘三郎	八木奘三郎
52	三浦郡逗子桜山字岩谷平田邸内			坪井正五郎	坪井正五郎	坪井正五郎
53	津久井郡川尻村			青木純造	→137	
54	津久井郡川尻村向原			青木純造	青木純造	青木純造
55	津久井郡湘南村小倉ノ堀ノ内諏訪社直上ノ畑			青木純造	青木純造	青木純造
56	津久井郡根小屋村			青木純造	→138	
57	津久井郡三沢村三井			青木純造	→133	
58	津久井郡三ケ木村小引			青木純造	青木純造	青木純造
59	津久井郡興瀬駅			沼田頼輔	沼田頼輔	沼田頼輔・八王子史談会
60	足柄上郡小竹村（足柄下郡下中村小竹）			人類学教室	人類学教室	人類学教室
61	大住郡南金目村(?)小学校付近			關　保之助	關　保之助	關　保之助
62	大住郡山背村貝殻坂			八木奘三郎	八木奘三郎	→169
63	大住郡伊勢原町字東大竹			人類学教室	人類学教室	人類学教室
64	大住郡大根村北矢名			人類学教室	人類学教室	人類学教室
65	大住郡高部村字日向			人類学教室	人類学教室・吉田文俊	人類学教室・吉田文俊
66	大住郡成瀬村字高森			人類学教室	人類学教室	人類学教室
67	大住郡北多村三ノ宮			人類学教室	人類学教室・林　晃	人類学教室蔵・林　晃
68	大住郡土澤村字中吉澤			人類学教室	→116?	
69	大住郡高部村法城坊ニ登ル途中			關　保之助	關　保之助	關　保之助
70	大住郡東秦野村字寺山			關　保之助	關　保之助	關　保之助・榊原政職
71	中郡神田村田村			沼田頼輔	沼田頼輔	沼田頼輔
72	中郡樽窪村ト今泉村ノ間峠村ニ登ル坂道			關　保之助	關　保之助	關　保之助
73	愛甲郡小鮎村大字飯山			沼田頼輔	沼田頼輔	沼田頼輔
74	愛甲郡愛川村大字半原			外山松次郎	外山松次郎	外山松次郎
75	高座郡御所見村大字用田			沼田頼輔	沼田頼輔	沼田頼輔
76	高座郡海老名村大字国分			沼田頼輔	沼田頼輔・吉田文俊	沼田頼輔・吉田文俊
77	高座郡相原村相原			青木純造	→104	
78	高座郡大野村上矢部御所ノ入			青木純造	青木純造	青木純造
79	高座郡村セド村古寺ノ廃跡近傍			青木純造		
80	高座郡村セド村鈴木藤吉所有地内			青木純造		

81	高座郡田名村滝坂ノ上		青木純造	青木純造	青木純造
82	高座郡田名村宗祐寺ノ後小字堂ケ谷戸		青木純造	青木純造	青木純造
83	高座郡田名村半在家		青木純造	青木純造	青木純造
84	高座郡田名村監田向得寺近傍		青木純造	→112or113	
85	鎌倉郡（川口村）江ノ島		島村孝三郎	島村孝三郎	島村孝三郎
86	鎌倉郡富士見村大字汲澤字オドリバ		田中正太郎	田中正太郎	田中正太郎
87	鎌倉郡富士見村大字汲澤字吹上		田中正太郎	田中正太郎	田中正太郎
88	鎌倉郡富士見村大字汲澤字宮垣内		田中正太郎	田中正太郎	田中正太郎
89	鎌倉郡富士見村大字汲澤字マタクチ		田中正太郎	田中正太郎	田中正太郎
90	鎌倉郡戸塚町裏手ノ高台		田中正太郎	田中正太郎	田中正太郎
91	鎌倉郡長尾台字ヲカンヤシキ上ノ山		藤田清?	藤田清?	藤田清?
92	鎌倉郡鎌倉町長谷向原			蒔田鎗次郎	蒔田鎗次郎
93	鎌倉郡鎌倉町亂橋材木座			蒔田鎗次郎	蒔田鎗次郎
94	鎌倉郡鎌倉町大町延命寺東ノ台地			蒔田鎗次郎	→削除？
95	鎌倉郡鎌倉町師範校前			神津　猛	神津　猛
96	鎌倉郡鎌倉町扇ケ谷天神山			上羽貞幸	上羽貞幸
97	鎌倉郡鎌倉町口ケ浜行逢川ノ山上			蒔田鎗次郎	蒔田鎗次郎
98	鎌倉郡村岡村			江見忠功	江見忠功
99	高座郡藤沢町藤沢山谷			玉僅繁雄	玉僅繁雄
100	高座郡清村、上清、八幡社ノ西			青木純造	青木純造
101	高座郡海老名村國分望地			吉田文俊	吉田文俊
102	高座郡座間村座間入谷			林　晃	林　晃
103	高座郡大沢村大島			青木純造	青木純造
104	高座郡相原村橋本、一本橋近傍ノ畑			青木純造	青木純造
105	高座郡相原村橋本字西裏			青木純造	青木純造
106	高座郡相原村相原外ノ御前社址			青木純造	青木純造
107	高座郡相原村相原字蝸牛塚ノ南			青木純造	青木純造
108	高座郡相原村清兵衛新田、諏訪社頭			青木純造	青木純造
109	高座郡相原村小山久保			青木純造	青木純造
110	高座郡大和村深見			吉田文俊	吉田文俊
111	高座郡大和村上草柳			吉田文俊	吉田文俊
112	高座郡田名村堀ノ内			青木純造	青木純造
113	高座郡田名村四ツ谷			青木純造	青木純造
114	中郡伊勢原町伊勢原			阿部正功・小林興三郎	阿部正功・小林興三郎
115	中郡岡崎村馬渡			吉田文俊	吉田文俊
116	中郡土澤村吉沢			小林興三郎・大野延太郎	小林興三郎・大野延太郎
117	中郡成瀬村東富岡			吉田文俊	吉田文俊
118	中郡成瀬村上粕屋			大野延太郎	大野延太郎
119	中郡大根村天神台			人類学教室	人類学教室
120	中郡岡崎村大畑			小林興三郎	小林興三郎
121	足柄上郡南足柄村狩野			黒田源太郎	黒田源太郎
122	足柄上郡岡本村和田河原向田			黒田源太郎	黒田源太郎
123	足柄上郡岡本村塚原天王院裏			黒田源太郎	黒田源太郎
124	足柄上郡岡本村沼田西念寺裏			黒田源太郎	黒田源太郎
125	足柄下郡石橋村佐奈田神社東北ノ畑			大谷木耐三	大谷木耐三
126	愛甲郡中津村中津			松村　瞭	松村　瞭
127	愛甲郡南毛利村温水			林　晃	林　晃
128	愛甲郡南毛利村戸室尼寺ケ原中学校付近			林　晃	林　晃
129	愛甲郡妻田村			石川喜三郎	石川喜三郎
130	愛甲郡林村権現台			林　晃	林　晃
131	津久井郡三沢村中津			青木純造	青木純造・長谷川　郎
132	津久井郡三沢村三井大沢入山			宮崎浅次郎	宮崎浅次郎
133	津久井郡三沢村三井字五入			青木純造・宮崎浅次郎	青木純造・宮崎浅次郎
134	津久井郡川尻村篭澤			吉田文俊	吉田文俊
135	津久井郡川尻村八木氏ノ畑地			青木純造	青木純造
136	津久井郡青根村八重石			青木純造	青木純造
137	津久井郡串川村長竹立山			青木純造・吉田文俊	青木純造・吉田文俊
138	津久井郡串川村根小屋			青木純造・吉田文俊	青木純造・吉田文俊
139	横須賀市坂本町大六天神裏山				赤星直忠
140	横須賀市公郷町米ケ浜、演習台内				赤星直忠
141	横須賀市公郷町横須賀中学校付近				赤星直忠
142	横須賀市公郷町聖德寺裏山				赤星直忠
143	横須賀市不入斗町、陸軍錬兵場内				赤星直忠
144	横須賀市不入斗町豊久（之）坪				赤星直忠
145	横須賀市不入斗町ラッパ山				赤星直忠
146	久良岐郡金沢町称名山内（貝塚）				赤星直忠
147	三浦郡田浦町榎木、台地				赤星直忠
148	三浦郡田浦町城田ノ山上				赤星直忠
149	三浦郡浦賀町高坂小学校敷地				赤星直忠
150	三浦郡浦賀町鴨居鳥ケ崎（洞穴）				赤星直忠
151	三浦郡浦賀町小学校敷地（貝塚）				赤星直忠
152	三浦郡逗子町新宿海岸				德富真熊
153	三浦郡諸磯新出（堀）并（貝塚）				赤星直忠
154	三浦郡衣笠村森崎春日台				赤星直忠
155	三浦郡北下浦村池代				赤星直忠
156	三浦郡北下浦村津久井、台地				赤星直忠
157	三浦郡南下浦村上宮田、台地				赤星直忠
158	三浦郡南下浦村松輪				井上輯霧
159	三浦郡初声村光照寺裏山				赤星直忠
160	三浦郡初声村シシ穴				赤星直忠
161	三浦郡初声村赤坂				赤星直忠
162	三浦郡初声村和田、台地				赤星直忠
163	三浦郡武山村須軽谷				赤星直忠

164	鎌倉郡腰越村津村		赤星直忠
165	高座郡茅ヶ崎浜ノ郷エンコ塚		石野　瑛
166	高座郡寒川村岡田大塚、古墳盛土中		中谷治宇二郎
167	高座郡田名村久所		石野　瑛
168	中郡国府村石神台		石野　瑛
169	中郡旭村万田貝殻坂（貝塚）		山崎直方・八幡一郎・中谷治宇二郎
170	中郡成瀬村石田浄心寺付近		石野　瑛
171	中郡成瀬村石田高蔵院		石野　瑛
172	中郡高部屋村富岡		石野　瑛
173	中郡高部屋村実蔵原		石野　瑛
174	中郡金目村広川五領ケ台		石野　瑛
175	中郡金目村北金目大神台		石野　瑛
176	中郡金目村大久保		石野　瑛
177	中郡大根村北矢名蛇久保		石野　瑛
178	中郡大根村南矢名桂久保東		人類学教室
179	中郡大根村南矢名矢名原		人類学教室
180	中郡大根村弘法山麓		石野　瑛
181	中郡大根村真田谷津		石野　瑛
182	中郡大根村真田石塚		石野　瑛
183	中郡東秦野村落合		榊原政職
184	中郡北秦野村寺山		榊原政職
185	中郡北秦野村東田原		榊原政職
186	足柄上郡中井村藤沢		石野　瑛
187	足柄上郡曽我村城前寺付近		榊原政職
188	足柄下郡小田原町谷津		石野　瑛
189	足柄下郡国府津町国府津駅裏		榊原政職
190	足柄下郡真鶴町駅遊堂		石野　瑛
191	足柄下郡岩村上塗		石野　瑛
192	足柄下郡福浦村川堀		伊丹信太郎
193	足柄下郡久野村諏訪原		榊原政職
194	愛甲郡玉川村小野		石野　瑛
195	愛甲郡南毛利村長谷		石野　瑛
196	愛甲郡林村福伝寺付近		石野　瑛
197	津久井郡中野町三ケ木		長谷川一郎・鈴木重光
198	津久井郡興瀬町中原		鈴木重光
199	津久井郡興瀬町原		鈴木重光
200	津久井郡興瀬町稲原		鈴木重光
201	津久井郡千木良村原		鈴木重光
202	津久井郡吉野町矢部		佐々木直吉
203	津久井郡吉野町天秦		鈴木重光・八王子史談会
204	津久井郡澤井村中里（南方ノ日野ツ原）		鈴木治作
205	津久井郡佐野川村上川原、南方ノ高台		青木純造？
206	津久井郡青根村東野		人類学教室
207	津久井郡串川村土沢		鈴木重光
208	津久井郡串川村寺沢		鈴木重光
209	津久井郡串川村青山		長谷川一郎
210	津久井郡内郷村		八王子史談会
211	津久井郡内郷村若柳奥畑		鈴木重光
212	津久井郡内郷村若柳若柳		鈴木重光
213	津久井郡内郷村寸澤増原		長谷川一郎
214	津久井郡内郷村寸澤寸澤嵐		鈴木重光
215	津久井郡内郷村寸澤道志		鈴木重光
216	津久井郡内郷村寸澤関口		鈴木重光
217	津久井郡中沢村		八王子史談会
218	津久井郡高峰村角田		山田藏太郎

種々の制限がもうけられたことと無関係ではないだろう。

『日本石器時代人民遺物発見地名表』

明治30（1897）年７月に田中正太郎・林若吉により第１版が刊行されて以降、明治31（1898）年５月に第２版（野中完一編）、明治34（1901）年4月に第3版（野中完一編）、大正6（1917）年12月に第4版（柴田常恵編）、昭和3（1928）年12月刊行の第5版（八幡一郎・中谷治宇二郎編）まで版を重ねた。編纂兼発行は東京帝国大学。第5版より人民が略され、『日本石器時代遺物発見地名表』に改題された。なお、昭和5（1930）年に第5版の追補1が刊行されている。石器時代の遺物発見地を地名・発見遺物・報告者などの順序で表記されている。冒頭に坪井正五郎の「石器時代総論要領」を掲げる。現在においても基本的な文献として、研究活動に多大な貢献をなしている。

『日本石器時代人民遺物発見地名表第4版』、『日本石器時代遺物発見地名表第5版』（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

2　赤星直忠の学問とその時代

(1) 考古学を学び始めた頃の赤星直忠

赤星直忠が本格的に考古学の研究を始めたのは、大正10（1921）年に横須賀中学校を卒業してからであった。この頃の日本はアジアで唯一植民地を領有する帝国主義国家であり、また一方、国内はメーデーなどの労働運動、婦人参政権を要求する懇願運動などが高揚した、いわゆる大正デモクラシーの時代であった。

考古学を学び始めた赤星は、ほどなく高橋健自著の『考古学』や八木奘三郎・中沢澄男著の『日本考古学』を手にし、これらを座右の書とするとともに東京帝室博物館に高橋を訪ね、以降、考古学の師と仰ぐことになった。高橋の指導を受ける傍ら、後藤守一や石田茂作らの先学、学友として親交を深めることとなる森本六爾などを紹介されたことで、赤星の考古学はより深まっていった。

また、一方で、赤星は古本屋で入手した『日本石器時代人民遺物発見地名表』第4版をたよりに、三浦半島をフィールドとして遺跡の踏査と確認、発見につとめていく。昭和3（1928）年に出版された『地名表』第5版では、相模国の遺跡が25遺跡追加されるが、23遺跡が赤星の報告によるもので、後に縄文時代早期の標識遺跡となる三戸遺跡（光照寺裏山）や田戸遺跡（聖徳寺裏山）などもこの時期の発見である。

赤星以前の三浦半島の考古学研究は、遺跡の発見と遺物の採集を主とした時期であった。その後、大正10（1921）年に三浦半島において、初めて本格的な発掘調査が、榊原政職によって諸磯貝塚と江戸坂貝塚に対して行われた。同じ年に赤星が考古学の調査を開始するが、以後の三浦半島と神奈川県の考古学研究が赤星を中心として進められていったことを考えれば、大正10（1921）年という年は神奈川県の考古学研究史上ひとつの画期と考えられる。

a　赤星直忠の初期の報告・論稿

赤星直忠が初めて雑誌に投稿したのは、大正10年12月1日に発行された『民族と歴史』第6巻第6号の民族短信民俗談片の欄に「屋號の話」と題した横須賀市の屋号についての短報である。続いて、大正11年3月1日に発行された同雑誌第7巻第3号の民族短信民俗談片の欄に「三浦半島の方言」、「九州でも長吏」と題した短報とともに5頁にわたる「相模大濱の横穴」という報告を投稿している。

短報はいずれも民俗事例の報告で、「相模大濱の横穴」が初めての考古学の論稿であった。これらの報告・論稿は、赤星が横須賀中学校を卒業したばかりで、まだ豊島小学校の代用教員になる以前に書かれたもので、早くから赤星の学問への興味は考古学だけではなく民俗学にも向けられていたことを示している。

その後、大正13年8月5日発行の『考古学雑誌』第14巻第11号の雑報の欄に「馬らしき陰刻のある横穴」として横須賀市坂本横穴の線刻を図入りで紹介した。以降、大正時代から昭和初期にかけ

て、主に『考古学雑誌』の雑報の欄で三浦半島の縄文時代から古代にかけての遺跡・遺物の紹介を重ね、また「鎌倉だより」(一)～(五)として鎌倉市内の中世のやぐら・板碑などの石塔・瓦などを紹介していく。

赤星の初期のフィールドが生家のあった三浦半島と在学していた神奈川県師範学校のあった鎌倉を中心としていたこと、考古学の対象が先史時代から歴史時代まで広範にわたっていたことが伺われる。また、投稿する雑誌が『民族と歴史』から『考古学雑誌』に変化する間のほぼ2年間は、赤星は休筆しているが、この時期は横須賀重砲兵連隊に入隊していた時期をはさんでいる。

『土器片採集記録一・二』

土器片採集記録2巻は、表紙裏書にあるように、赤星直忠が考古学研究を始めた大正10(1921)年から昭和初年までに三浦半島各地での採集した土器片のスケッチと詳細な観察記録である。

もとは「土器片記」という名称で6冊に及んでいたが、昭和35(1960)年に、赤星は次代の研究者へ受け継ぐ資料として、現在の名称に変えて2冊にまとめた。

昭和3(1928)年に発行された『日本石器時代遺物発見地名表』第5版では、赤星直忠の報告による遺跡が23遺跡追加される。この時までに採集されていた遺物の中には、後に茅山式土器の標識資料となる土器なども含まれており、それらはこの記録によって確認できるもので、学史的にも貴重な記録である。(赤星直忠博士文化財資料館蔵)

『民族と歴史』

喜田貞吉が主筆し、芦田伊人が編集した雑誌で、日本民族とその歴史を研究するのが主目的であった。大正8(1919)年1月に第1編第1号を刊行した。その後大正11(1922)年12月の第8巻12号までつづき、大正12(1923)年1月に『社会史研究』(第9巻第1号)と改題された。第10巻第4号までつづき、大正12(1923)年12月に休刊した。(横須賀市自然・人文博物館蔵)

『考古学雑誌』

現日本考古学会の機関誌。明治28(1895)年4月に三宅米吉・坪井正五郎らが発会した考古学会が明治29(1896)年12月に機関誌『考古学会雑誌』第1編第1号を刊行したのが始まりである。

その後、明治33(1900)年に『考古』、明治34(1901)年に『考古界』と雑誌名が変わり、明治43(1910)年に現在の『考古学雑誌』となった。また、昭和16(1941)年1月に「考古学会」から「日本考古学会」に改称され、『考古学雑誌』第31巻1号より日本考古学会発行となり、現在に至っている。(横須賀市自然・人文博物館蔵)

b　考古学の師たち

高橋健自　明治4(1871)～昭和4(1929)年

宮城県仙台市生まれ。明治27年、東京高等師範学校卒業後、奈良県尋常中学校教諭などを経て、明治37年、東京帝室博物館学芸委員、大正10年、同博物館鑑査官となる。

弥生時代から歴史時代にかけて広く研究し、青銅器、古墳の埋葬施設・副葬品の研究に業績を残した。

学位論文「銅鉾銅剣の研究」。著書に『考古学』、『鏡と剣と玉』、『古墳と上代』などがある。

高橋健自書簡（大正15年2月12日）

鎌倉の永福寺址と泉ヶ谷から同じ瓦が採集されたことを、どう解釈したらよいかという赤星直忠の質問に対して、下野国分寺と奈良東大寺の例を挙げて丁寧に答えている高橋健自の書簡。この時期、赤星は鎌倉にあった神奈川県師範学校在学中で、放課後や休日に鎌倉中を踏査し、やぐらや板碑などの石塔を調査すると同時に中世の瓦を採集していた。　（神奈川県立埋蔵文化財センター蔵）

後藤守一　　明治21（1888）～昭和35（1960）年

神奈川県鎌倉市生まれ。大正6年、東京高等師範学校卒業後、静岡中学校教諭を経て、大正10年、東京帝室博物館鑑査官となる。昭和15年退官、同24年明治大学教授となる。古墳の編年研究に功績を残し、また、戦後の登呂遺跡の発掘調査を指導した。文学博士。著書に『日本考古学』、『日本歴史考古学』、『漢式鏡』などがある。

後藤守一書簡（昭和9年）

後藤守一から赤星直忠にあてた『考古学雑誌』第24巻の9月号を金石文特集とするについて、相模国ないしは鎌倉の金石文をまとめてほしいという原稿依頼の書簡。赤星はこれを受け「鎌倉の金石文」と題して投稿するが、特集は1号遅れて、第24巻10号となった。

（神奈川県立埋蔵文化財センター蔵）

後藤守一書簡（昭和12年3月23日）

昭和12年1月4～6日にかけて発掘した蓼原古墳出土の家形埴輪について赤星直忠の質問に答えた後藤守一の書簡。後藤の『考古学雑誌』への投稿に示唆を受け、昭和13年6月発行の『考古学雑誌』第28巻第6号に「横須賀市に於ける形象埴輪の出土品に就いて」と題して報告している。脱稿は昭和12年9月で、後藤の書簡を受けてすぐ執筆に入ったものと思われる。

（神奈川県立埋蔵文化財センター蔵）

c　考古学の研究

八木奘三郎・中沢澄男著『日本考古学』

明治39（1906）年12月1日、博文館発行。本文382頁。1円20銭。日本最初の考古学概説書である『日本考古学』（八木奘三郎著、明治31年発行）に新たに清（現中国）・韓国を加え、当時の最新成果を総合した。

第1編先史時代、第2編原史時代で、各総論・本論を設け、さらに遺跡・人種・遺物編などに細別されている。とくに時代別にまとめられたことにより、次第に時代区分の概念が認識されるようになったことが学史上評価されている。　（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

後藤守一著『日本考古学』

昭和2（1927）年11月17日、四海書房発行。本文323頁。6円80銭。大正2年、高橋健自の『考古学』に続いて刊行された考古学概説書。第1編序説、第2編先史時代、第3編原史時代、第4編考古学研究法に分かれ、遺跡・遺物を中心に概説されている。当時この2冊が今後の日本考古学研究の指針となり、概説書の手本となった。（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

大場磐雄　明治32（1899）～昭和50（1975）年

東京都麻布区笄町生まれ。旧姓谷川磐雄。大正11年、国学院大学卒業後、神奈川県立第二横浜中学校教諭を経て、大正14年、神社局考証課に勤務。昭和24年、国学院大学教授。

縄文～近世まで広く研究し、特に神道考古学を体系化するという大きな業績を残した。

文学博士。著書に『神道考古学論攷』、『祭祀遺跡―神道考古学の基礎的研究』などがある。

(2) 戦前の赤星直忠の考古学

昭和2（1927）年神奈川県師範学校訓導となってから、昭和15（1940）年に教職を離れ、日本鉄道車輌製造工業組合書記になるまでの13年間は赤星直忠の考古学研究の最も充実した時期で、赤星考古学を特徴づける先史時代から中世まで広く研究を行った時期であった。

縄文時代の研究は山内清男の影響が見られ、昭和5（1930）年に共同で田戸遺跡の調査を行ってからは、層位学的方法にもとづいた発掘調査を行い、縄文時代早期の三戸式、田戸式、茅山式などの型式内容の把握に努めた。この頃は大山史前学研究所にも出入りしていたため、縄文時代に関する論稿は『考古学雑誌』と『史前学雑誌』に多く投稿している。

また、森本六爾は特に親交が深く、森本が中心となって昭和5（1930）年に発足した東京考古学会に入会し、自宅を東京考古学会横須賀支部と呼んだ。森本が弥生文化の研究を主としたことから、弥生時代から古代については機関誌『考古学』に多くの論稿を投稿した。

中世の研究は神奈川県師範学校訓導時代から始めたが、昭和7（1932）年からは鎌倉史蹟めぐりの会に参加し、フィールドが充実するとともに、後には会を指導するようになっていった。会の活動記録は赤星の担当となり、雑誌『鎌倉』に活動記録を載せるとともに、「鎌倉の考古学的研究」と題して、踏査で得た知見を18回にわたって報告していった。

この期間の赤星は20代半ばから30代にかけての年齢で、多くの学友を得て考古学研究に充実した時間を過ごした時期であった。この他にも、貝塚研究を通して直良信夫、酒詰仲男、同じ地域研究者であった藤森栄一、諸磯式土器を研究していた大場磐雄などと親交を深めていった。

a　鎌倉史蹟めぐりの会

赤星直忠の中世鎌倉研究の始まりは、大正14（1925）年に鎌倉の神奈川県師範学校に入学してからであったと思われる。師・高橋健自にやぐらの分布と瓦の出土地を明らかにすることをテーマとし

て与えられていた赤星は、放課後や休日など数人の級友と鎌倉を踏査したことを回想している。

しかし、赤星の中世鎌倉研究の本格的な基礎を作っていったのは、鎌倉史蹟めぐりの会に参加してからである。鎌倉史蹟めぐりの会は、昭和7（1932）年に実業家の亀田輝時や郷土史研究家の磯貝正らが中心となって、鎌倉のすべての史跡を走破しようと組織した会であった。昭和7（1932）年4月14日に亀田ら5人の参加で、畠山重保墓から稲村ガ崎、霊仙ヶ崎までの行程を最初に、昭和18（1943）年まで会の開催された回数は95回を数えた。赤星の参加は昭和8（1933）年4月14日の第9回からで、

その後、第55・95回以外の81回すべてに参加している。

これらの記録は、当初、謄写版の会報であったが、後に鎌倉文化研究会の名で雑誌『鎌倉』として印刷された。『鎌倉』第1巻第2号（昭和10年12月20日発行）～第6巻第1号（昭和15年8月1日発行）にかけて、赤星は踏査したやぐら・石塔・横穴墓、あるいはそのときに採集したカワラケ・瓦などについて考古学的に論及した「鎌倉の考古学的研究」（一）～（十八）を連載した。

10年間にわたって鎌倉を踏査したこと、その知見を『鎌倉』に詳細に記述したことは、赤星の中世鎌倉研究の基礎となっていったと思われる。しかしながら、昭和15（1940）年、『鎌倉』は廃刊となる。奇しくも、同年、赤星は三浦郡大津小学校訓導を退職し、横須賀を離れる。日本は考古学を研究していける時代ではなくなっていったのである。

鎌倉史蹟めぐりの会と赤星直忠

戦後、まとめられた『鎌倉史蹟めぐりの会記録』では、参加者に赤星の名が記載されるのは第10回からである。

しかし、参加者不明で記載のない第9回の行程記事は、「足利公方邸址―梶原邸址―梶原井戸―大江広元墓―明王院（五大堂）―大慈寺址―丈六堂跡―光触寺―富士浅間社―大江広元邸―青砥藤綱邸址―文覚上人邸址―関取場」で、同日の赤星のフィールドノートに書かれた記載と一致することから、赤星は昭和8（1933）年4月27日から参加したものと思われる。

『鎌倉史蹟めぐりの会記録』

『鎌倉―鎌倉史蹟めぐりの会記録―』は、昭和47（1972）年8月に、鎌倉文化研究会の沢寿郎によって刊行されたもので、昭和7（1932）年4月から昭和18（1943）年にかけて、鎌倉史蹟めぐりの会が鎌倉各地域を踏査した95回に及ぶ記録を1冊にまとめたものである。

当時、雑誌『鎌倉』・『神奈川文化』・『郷土神奈川』などに掲載された記録、また、謄写刷りなどで配布されていた記事も未刊・既刊問わず全てが網羅された。　（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

『鎌倉創刊号』、『考古学ノート4』（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

回数	日時	赤星	亀田	進藤	磯貝	太刀川	由比	栗原	北村	梅沢	大野	関	巡回先
第１回	昭和7.4.14		○	○			○	○					上杉憲方墓・忍性墓・聖福寺跡ほか
第２回	昭和7.5.8		○	○			○	○		○			梶原兄弟墓・千代塚方面
第３回	昭和7.10.30		○	○	○		○	○		○			寿福寺・英勝寺・浄光明寺・建長寺ほか
第４回	昭和7.11.13		○	○	○			○		○			永安寺跡　ほか
第５回	昭和7.12.11		○	○	○		○			○			玉縄・村岡方面
第６回	昭和8.1.29		○	○	○		○						証菩提寺
第７回	昭和8.2.26		○	○	○		○	○		○			瑞泉寺・百八やぐら　ほか
第８回	昭和8.3.12		○	○	○		○						大仏切通・洲崎方面
第９回	昭和8.4.27		記載なし										光蝕寺・十二所方面
第10回	昭和8.5.14	○		○	○					○			逗子延命寺　ほか
第11回	昭和8.6.11		記載なし										光蝕寺・瑞泉寺・覚園寺塔銘
第12回	昭和8.6.17	○	○	○	○						○		百八やぐら
第13回	昭和8.6.24	○	○	○	○						○		百八やぐら
第14回	昭和8.8.20		○	○	○								寿福寺　ほか
第15回	昭和8.9.24		記載なし										浄妙寺・東泉水方面
第16回	昭和8.10.17		記載なし										釈迦堂付近
第17回	昭和8.11.12	○	○	○			○						唐糸やぐら
第18回	昭和9.1.28	○	○	○	○		○			○			東勝寺跡・名越山王堂跡・長勝寺　ほか
第19回	昭和9.2.18	○	○	○	○	○	○	○					笹目谷・乱橋材木座・大仏方面
第20回	昭和9.3.18	○	○	○	○		○						弁ヶ谷・補陀洛寺・飯島方面
第21回	昭和9.4.22	○	○	○	○	○	○	○	○				横須賀市史跡見学
第22回	昭和9.5.27	○	○	○	○		○	○					大御堂・釈迦堂方面
第23回	昭和9.6.24	○	○	○	○	○	○						山崎・手広・鎌倉山方面
第24回	昭和9.7.22	○	○	○	○	○	○						英勝寺と寺宝
第25回	昭和9.7.28	○	○	○	○	○	○						光明寺文書目録
第26回	昭和9.12.23	○	○	○	○	○	○						菩川国師入定窟調査
第27回	昭和10.1.13	○	○	○	○	○	○						亀ヶ淵五輪山やぐら群
第28回	昭和10.3.？	○	○		○	○							薬王寺
第29回	昭和10.4.28	○	○	○	○	○	○	○					名越山王堂跡発掘・志一稲荷
第30回	昭和10.5.12	○	○	○	○	○	○						千葉ヶ谷方面
第31回	昭和10.6.9	○	○	○	○	○							別願寺・西方寺跡・無量寺ヶ谷
第32回	昭和10.6.9	○	○	○	○	○							別願寺文書目録
第33回	昭和10.7.14	○	○		○		○						十二所・大江稲荷・大木氏邸
第34回	昭和10.8.11	○	○		○								葉山伊藤家文書
第35回	昭和10.9.8	○	○	○	○								泉ヶ谷文庫（亀田氏邸）

第36回	昭和10.11.10	○	○	○	○	○	○						光明寺鐘銘・墓碑銘調査
第37回	昭和10.12.8	○	○	○	○		○						光明寺内藤家墓地碑銘調査
第38回	昭和11.2.9	○	○	○	○	○							扇ヶ谷・寿福寺ほか
第39回	昭和11.3.9	○	○	○	○	○	○						西御門
第40回	昭和11.4.12	○	○	○									山ノ内（円応寺・禅居庵・長寿寺ほか）
第41回	昭和11.5.10	○	○	○	○								英国士官殺傷事件
第42回	昭和11.6.14	○	○	○	○	○							弁ヶ谷石塔調査・実相寺・上行寺ほか
第43回	昭和11.7.12	○	○	○	○								英勝寺墓地碑銘調査
第44回	昭和11.8.9	○	○	○	○	○							長谷寺・高徳院
第45回	昭和11.9.13	○	○	○	○	○							荏柄天神社・智岸寺谷・山王堂谷
第46回	昭和11.10.11	○	○	○	○								高砂稲荷・極楽寺切通ほか
第47回	昭和11.11.29	○	○		○	○							扇ヶ谷村絵図・松巌寺谷
第48回	昭和11.12.6	○	○		○	○							梅ヶ谷・海蔵寺
第49回	昭和12.1.31	○	○	○	○	○							高砂稲荷・東御門・岩崎別邸
第50回	昭和12.2.14	○	○	○		○							泉ヶ谷文庫座談（聖天宮・扇ヶ谷ほか）
第51回	昭和12.3.14	○	○	○		○					○		泉ヶ谷文庫座談（鎌倉絵図・覚園寺ほか）
第52回	昭和12.4.11	○	○	○		○							覚園寺
第53回	昭和12.5.9	○	○	○	○								泉ヶ谷文庫座談（八幡宮の瓦ほか）
第54回	昭和12.6.13	○	○	○		○							大船小林家文書・竜宝寺
第55回	昭和12.7.11		○	○		○							三浦氏一門墓・東御門
第56回	昭和12.8.8	○		○		○							勝長寿院・上杉朝定及び氏憲邸跡
第57回	昭和12.9.19	○	○	○		○							飯島のやぐら・正覚寺・小笠原系図
第58回	昭和12.10.10	○		○									上杉憲方逆修塔・鶴岡八幡宮の金石文
第59回	昭和12.11.14	○	○	○		○							海蔵寺・清涼寺・藤ヶ谷
第60回	昭和12.12.12	○	○	○		○							千葉ヶ谷本田邸横穴
第61回	昭和13.1.9	○	○	○		○							法泉寺谷・正宗稲荷・寿福寺板碑ほか
第62回	昭和13.2.13	○	○	○		○							釈迦堂・清涼寺・勝長寿院跡
第63回	昭和13.3.10	○	○	○							○		鶴岡八幡宮
第64回	昭和13.4.10	○	○	○		○							相馬師常墓・清涼寺谷やぐら群
第65回	昭和13.5.15	○	○	○		○					○		由比ヶ浜骨塚・多宝寺覚賢塔
第66回	昭和13.6.12	○	○	○		○							仮粧坂やぐら
第67回	昭和13.7.10	○	○			○							由比ヶ浜・金沢文庫
第68回	昭和13.8.28	○	○	○		○							文晁の鎌倉日記
第69回	昭和13.10.17	○	○	○		○							旧巨福呂坂・亀ヶ谷切通・延寿堂跡ほか
第70回	昭和13.11.13	○	○	○									佐介谷白石邸・正宗井戸・金沢文庫
第71回	昭和13.12.11	○	○	○		○						○	宝戒寺・釈迦堂やぐら群・瑞泉寺
第72回	昭和14.1.8	○	○	○		○					○	○	東京国立博物館
第73回	昭和14.2.12	○	○			○							釈迦堂谷やぐら群

第74回	昭和14.3.12	○	○	○							○	大町臼井家文書
第75回	昭和14.4.9	○	○	○		○					○	杉本寺と城跡
第76回	昭和14.5.14	○	○	○		○					○	国宝館の元寇展覧会
第77回	昭和14.7.9	○	○	○		○					○	村岡・玉縄方面
第78回	昭和14.10.15	○	○	○		○					○	箱根の石仏
第79回	昭和14.12.10	○	○	○							○	佐介谷・葛原岡方面
第80回	昭和15.1.21	○	○	○		○					○	金沢文庫・東光寺跡方面
第81回	昭和15.3.10	○	○	○							○	葛原岡の塚
第82回	昭和15.3.21	○	○	○		○						名越やぐら群・東勝寺谷
第83回	昭和15.4.14	○	○	○							○	泉ヶ谷文庫座談
第84回	昭和15.5.27	○	○	○							○	国宝館武具展目録・清水寺谷ほか
第85回	昭和15.6.9	○	○	○								十二所明石・報国寺・衣張山
第86回	昭和15.7.14	○	○	○							○	大谷戸
第87回	昭和15.9.8	○	○	○							○	金沢文庫
第88回	昭和15.10.20	○	○	○							○	大仏谷・深沢方面
第89回	昭和15.11.23	○	○	○	○						○	千代塚
第90回	昭和15.12.15	○	○	○							○	十三坊塚
第91回	昭和16.2.9	○	○	○							○	葛原岡の出土品
第92回	昭和16.3.9	○	○	○							○	出土品探訪
第93回	昭和17.6.7	○	○	○			○				○	極楽寺・浄妙寺方面
第94回	昭和18.5.23	○	○	○			○				○	長谷寺・太寧寺
第95回	昭和18.											鎌倉東部史蹟めぐりの会便覧

b　東京考古学会と森本六爾

森本六爾　　明治36（1903）～昭和11（1936）年

奈良県磯城郡織田村生まれ。大正9年、畝傍中学校卒業後、東京高等師範学校校長の三宅米吉のもとで歴史教室副手として勤務。

昭和2年に考古学研究会を創立、昭和4年東京考古学会と改称し、機関誌『考古学』を刊行した。弥生時代研究に大きな業績を残し、土器・農具研究を通して弥生文化農耕社会論を展開した。

著書に『日本農耕文化の起源』、『日本原始農業』、『日本考古学研究』などがある。

『東京考古学会』

昭和5（1930）年1月に森本六爾が中心となって発足し、2月8日に第1回例会が開催された。編集事務は東京市（現東京都）小石川原町125の森本六爾宅におかれ、会費は半年で3円、1年間で6円であった。

東京考古学会発行の機関誌『考古学』第1巻第1号（昭和5年1月発行）に学会会則が記載されているが、学会の目的のひとつに「本会は考古学に関する知識の普及並に研究者相互の交詢連絡を目的とする」とあり、当時の若い研究者が多く参加した。

『考古学』

東京考古学会の機関誌。昭和5（1930）年1月に第1巻第1号が刊行され、昭和16（1941）年1月の第12巻第1号まで継続した。

編集兼発行は当初森本六爾が東京で行っていたが、のちに坪井良平（大阪）にかわる。昭和16年2月の第12巻第2号より『古代文化』に改題され、編集兼発行も日本古代文化学会

(代表後藤守一）になった。昭和18（1943）年10月の第14巻第10号（編集三森定男）をもって休刊した。

『「東京考古学会横須賀支部」木札』

赤星直忠の直筆で書かれた「東京考古学会横須賀支部」の木札で、反対の面に「横須賀考古学会」と書かれている。横須賀考古学会が本格的に活動を開始するのは戦後からであるが、赤星は戦前からこの名前を使っていたと回顧していた。（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

森本六爾書簡（昭和5年2～6月）

昭和5（1930）年1月に発足した東京考古学会の中心的な存在であった森本六爾が、第1巻第2号に赤星直忠が投稿した「三浦半島の横穴」に対するお礼と東京考古学会への入会の誘いの書簡。以後、東京考古学会を通して、赤星はほぼ同じ年代の森本との親交を深めていった。

また、文面にある「五号弥生式号」は第1巻第5･6号で、赤星は「三浦半島における弥生式遺跡の分布」を投稿している。（神奈川県立埋蔵文化財センター蔵）

梅原末治　　明治26（1893）～昭和58（1983）年

大阪府南河内郡古市村生まれ。大正2年、同志社普通学校卒業後、京都帝国大学考古学研究室に勤め、浜田耕作の指導を受けた。昭和14年、同大学教授、退官後名誉教授となる。

日本だけでなく、中国、朝鮮半島の考古学に関係し、中国の青銅器研究に功績を残した。

文学博士。著書に『漢以前の古鏡の研究』、『日本考古学論攷』などがある。

梅原末治書簡（昭和12年11月18日）

赤星直忠が梅原末治と交流しはじめた頃の書簡と思われ、昭和12（1937）年11月11日に上杉憲方の逆修墓が重要美術品に指定されたことで、赤星から寄贈された『鎌倉』第3巻第4号に載せられた「鎌倉の考古学的研究（十）」に紹介した上杉憲方の逆修塔の内容に興味を感じたことを伝えている。

この重要美術品指定は、昭和8（1933）年に交付された「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」にもとづくものである。（神奈川県立埋蔵文化財センター蔵）

旧要塞地帯内で遺跡調査（赤星直忠）

「憲兵がきてどうしても埋めてしまえというんですよ。要塞司令部の許可をうけているといってもきかないんです。しかたなく埋めてしまったんですよ。」山内清男さん（現在文学博士）は残念そうにいった。昭和５年8月私と山内さんは協力して田戸先史時代遺跡を発掘調査していた。勿論正規の手続をして要塞司令部の許可をうけての発掘だったが、この日勤務先の用事で私は現場に行けなかった。帰宅すると山内さんがまっていたのである。私はすぐ要塞司令部へでかけ、発掘許可してある旨の電話を憲兵隊にかけてもらった。翌日から発掘は又継続された。戦前の要塞地帯内の考古学研究はあらゆる面で不自由であった。土地を３尺（約1ｍ）以上掘る場合には要塞司令官の許可

をうけねばならなかったのである。発掘記録を作るには録取許可が必要だった。遺跡内でのすべての撮影にも撮影許可が必要だった。録取にも撮影にも水陸の地形に関すること、軍用建造物周辺の地形、山の稜線に関することは絶対に許可されなかった。でき上った記事や写真（原版とも）は検閲をうけなければならなかった。検閲済の印をうけたものしか所持は許されなかった。このような中で田戸遺跡・諸磯遺跡・吉井貝塚の調査は行なわれたものであった。東京湾要塞地帯は大船以南の三浦半島全域から房総半島南端にわたっていた。この中で鎌倉市内だけは観光地としてかなりゆるやかな扱だった。葉山町は御用邸所在地として別のきびしさでとりしまれていた。遺跡分布を調査するため山や畑を歩きまわっていると、警察官や憲兵の取しらべをうけた。そのため事実上葉山町には全く調査に入れなかった。私が若いころには三浦半島で考古学研究に志す者としては、主に表面採集によって新遺跡を記録してゆくことしかできなかったのである。

…後略…

神奈川県立博物館だよりＶｏｌ．２　№1（昭和44年5月15日）

『検閲済印のある風景画』

大正15（1926）年に赤星直忠が横須賀市公郷町法塔付近を描いた風景画で、裏面に大正15年9月20日の東京湾要塞司令部検閲済の押印がある。　（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

『吉井貝塚写真裏検閲済み押印』、『考古学研究ノート第5冊』、『ガラス乾板』、『考古学研究ノート第3冊』（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

(3) 太平洋戦争開戦から戦時下での生活

戦前の三浦半島は東京湾要塞地帯で、明治32（1899）年に制定された要塞地帯法によって考古学を研究する上で多くの制限があった。写真の撮影は軍事施設に対しては不許可であり、また軍事施設以外でも位置が特定できるような山の稜線の撮影は禁じられていた。また、地形のスケッチや調査の報告ですら、東京湾要塞司令部の検閲を受けた時代であった。

そのような中で、これらの制限を受けながらも、多くの仲間たちと同じ学問を志す人々と交流しながら、赤星直忠は考古学の研究に没頭していった。しかし、昭和6（1931）年に、南満州鉄道が爆破されるという柳条湖事件がおこって以来、軍部主導の国策によって、時代は不幸な戦争へと進んでいった。

昭和15（1940）年、赤星は三浦郡大津小学校訓導を退職し、日本鉄道車輌製造工業組合書記となり、横須賀を離れ、東京に勤務地が移ることになる。昭和17（1942）年には40歳という年齢で陸軍少尉として予備役に復帰させられ、同年4月18日にはアメリカ軍の本土空襲を東京で経験することになり、徐々に考古学の研究を行う環境ではなくなっていった。また、戦時下での物資の統制から、中世研究の支えとなっていた雑誌『鎌倉』は昭和18（1943）年に廃刊となり、自らの学問的環境は厳しさの一途をたどった。

昭和20（1945）年には、赤星は43歳で応召、地下施設隊である東部19094部隊に配属され、新潟県で地下施設の設営にあたった。このような時代の変化に対応して、赤星の報告・論稿の数は昭和17（1942）年から減少し、昭和19（1944）年から昭和22（1947）年の間は著作年譜に空白が生じることになった。復員後も戦後の混乱の中では、苦しい生活がつづくことになる。

『帝都空襲セラレタル日ノ印象』

昭和16（1941）年12月8日、日本海軍の空母機動部隊によるハワイ真珠湾奇襲攻撃から敗退を続けるアメリカ軍は、自国民の士気高揚を狙い、日本本土初空襲を実行した。この攻撃は、アメリカの海軍と陸軍が共同して、日本の近海まで航空母艦により陸軍の爆撃機を運び、航空母艦から発艦した爆撃機が昭和17（1942）年4月18日の昼間、東京、横須賀、名古屋などを爆撃したものである。

東京の日本鉄道車輌製造工業組合に勤務していた赤星は、この空襲の日の印象を1枚のスケッチに描きとめた。上空には、日本軍の阻止気球が4個浮かび、たなびく工場の煙と建物の上には、高射砲弾が炸裂する様子が描かれている。（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

『車輌統制協会の紙袋』、**『吉井城山原図』**、**『下士官ニ告グ』**（赤星直忠博士文化財資料館蔵）、**『考古学雑誌第32巻第4号』**、**『江戸瓦』**、**『軍服』**（横須賀市自然・人文博物館蔵）、**『予備役召集の通知』**（神奈川県立埋蔵文化財センター蔵）

（4）戦後の赤星直忠と横須賀考古学会

昭和20（1945）年、終戦により復員した赤星直忠は再び考古学の調査を開始するが、それは新たな同学の人々との研究生活のスタートになった。昭和22（1947）年に、赤星は近代砲台あるいは高角砲台の調査のため、猿島に渡るが、これは現在の横須賀市自然・人文博物館の前身横須賀市博物館建設準備のため設けられた郷土文化研究室の高橋恭一らとともに渡島したものであった。以後、赤星は横須賀市立工業高等学校で講師をするかたわら、横須賀市博物館研究員として考古学研究を行っていった。

また、昭和22（1947）年に野島貝塚の発掘調査を行うが、これは赤星にとって戦後初めての発掘調査であった。この調査には明治大学に在籍していた川上久夫や岡本勇らが参加していた。この調査は戦前に設定した茅山式土器にかかわる赤星の研究テーマにもとづくものであった。しかし、その後、川上・岡本らが横須賀考古学会の主要な会員として活躍し、また、縄文土器編年研究が岡本に引き継がれていくことを考えれば、野島貝塚の発掘調査は新旧の研究のながれが交錯した調査といえるかもしれない。

その後、赤星が指導する横須賀考古学会は神澤勇一、塚田明治など優秀な人材を得て調査が進められ、その赤星に学び補佐をしていた人々は、おのおののテーマを持ち、赤星ひとりでの地域研究から、集団研究へと変化していった。

このような変化の中で、赤星は横穴とやぐらを中心とした古代～中世考古学の研究を深化させ、

『中世考古学の研究』などに自らの研究を集成していった。また、後進の指導や博物館での講演や講義を行うなど普及活動につとめ、同時にいくつかの自治体の文化財保護委員として文化財保護にあたり、独善的になりがちな学問の社会性を保とうとした。

『横須賀考古学会年報』

横須賀考古学会の機関誌として昭和36（1956）年に「考古資料第一冊」を年報第1号として以来、今年の第37号まで刊行されている。1～14号までは謄写印刷で15号以後はタイプ印刷およびオフセット印刷。

1～28号までは横須賀考古学会が主体、あるいは援助して行なった三浦半島を中心とする遺跡の調査概報・小論文・遺物紹介が主で、29号からは三浦半島地区遺跡調査発表会要旨と横須賀考古学会研究発表会要旨を掲載している。28号は本会副会長であった浜田勘太先生の追悼号。

（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

『考古学集刊』第1冊

昭和22（1947）年に後藤守一と杉原荘介が発刊を提案した調査報告を主体とした学会誌で、戦前の旧東京考古学会会員たちの協力で、昭和23（1948）年9月に第1冊が刊行された。

赤星直忠は、昭和11（1936）年に32歳の若さで亡くなった森本六爾の意思をついで参加し、戦後、赤星自身はじめての調査報告として「神奈川県野島貝塚」を投稿した。

『横須賀市博物館研究報告』

横須賀市人文博物館の前身、横須賀市博物館の研究報告書。昭和32（1957）年3月30日に人文科学第1号が発行され、赤星直忠・岡本勇「茅山貝塚」として、昭和29（1954）年に行った茅山貝塚の調査報告が載せられた。以後、赤星が博物館の研究員をしていた昭和38（1963）年までの第1～7号において、横須賀考古学会の協力を得て調査した縄文時代遺跡、古墳、横穴の調査報告、あるいは洞穴遺跡などから出土した弥生土器の紹介などが集録された。　（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

『横須賀市史』

『横須賀市史』は、横須賀市博物館の前身である横須賀市郷土文化研究室が発行したもので、赤星直忠の執筆によるものは「三浦半島新田開発」（№2）、「三浦半島灯台史」（№3）、「猿島出土の縄文土器」・「猿島洞穴」（№7）、「三浦半島城郭史（上）」（№8）、「三浦半島城郭史（下）」（№9）、「横須賀市なたぎり遺跡」（別冊）である。　（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

『鎌倉市史』、『鎌倉市史初校』、『横須賀市史原稿』、『逗子市史』、『逗子市史原稿』、『神奈川県史』、『穴の考古学』、『中世考古学の研究』、『日本考古学講座』（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

（5）博士号の取得

赤星直忠の博士論文は、大正末の坂本横穴・鳥ヶ崎横穴から昭和34（1959）年まで調査した、南関東（主として神奈川県）の横穴について、考古学的に型式編年を樹立するために企画されたもの

である。大正末からの調査で赤星は、横穴の形態が多種多様であり、年代的にも同一でないことから、また、地方差も認められることから、横穴の形態の共通点と相違点を追求することにより編年を可能にしたのである。

赤星は昭和34（1959）年において一応の結論ができていたが、全国の横穴にあてはめて資料を得て確信を得たいと考えていた。しかし「学位論文の提出に関する規則」の変更により、大急ぎで提出しなければならなかった。

昭和34（1959）年の中頃に執筆を開始、夜・昼についで書き続け、昭和35（1960）年1月29日の夜、脱稿し、國學院大學に提出した。複写は執筆開始とともに順次、横須賀考古学会会員であった故田中すき子氏によって進められた。論文の主査には國學院大學の岩崎小弥太教授、副査には石田幹之助教授があたり、昭和36（1961）年4月4日に学位が授与された。

学位を受けた後も赤星は全国の横穴に当てはめる調査を行なうために、熊本県をはじめ精力的に調査に赴いた。しかし、おおかた完成後、体の調子不良のため論文追加ができないままになった。

『石田茂作書（昭和36年6月28日）』

昭和36（1961）年3月に、赤星直忠が「横穴古墳の編年研究」で、國學院大學から「文学博士」学位を授与されたことを祝って、石田茂作が贈った書。　（神奈川県立埋蔵文化財センター蔵）

『博士論文』、『博士号取得の通知』（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

3　研究業績

(1) 赤星直忠の縄文時代の研究

赤星直忠の縄文時代研究には、大きくふたつの流れを認めることができる。ひとつは縄文土器、特に早期土器群の編年研究で、他のひとつは三浦半島における縄文時代の歴史を実証的に解明するという地域研究である。

昭和12（1937）年に報告された「茅山貝塚及吉井貝塚」の冒頭には、「茅山貝塚及吉井貝塚と併記した理由は両貝塚出土土器が茅山式土器なる特殊な一形式を示す事に於いて共通点を有し、茅山貝塚にあっては茅山式土器のみの純粋貝層なるに対して吉井貝塚は同じく純粋貝層の部もあるが蓮田式、勝坂式等の他の土器と層をなして出土する相違点のある事と、同一湾入内（仮称内川湾入）の近接地に位置し、略同時期に同一条件にあった両貝塚と考えることによって相互に比較研究することを便とするが故である」と記され、そこには明確な地域研究の態度を読み取ることができ、またふたつの研究の流れが不可分であったことも示している。

土器編年研究では、戦前に縄文時代早期の三戸式土器、田戸式土器、茅山式土器の型式内容を提

示し、戦後は野島式土器を茅山式土器から独立した型式として設定し、後に野島式―鵜ヶ島台式―茅山下層式―茅山上層式土器の諸型式に分離される条痕文土器群の細分研究の基礎を作った。

地域研究による縄文時代社会の復元では、茅山貝塚、吉井貝塚、江戸坂貝塚、高坂貝塚、あるいは称名寺貝塚、榎戸貝塚などの軟体動物、脊椎動物などを詳細に記載し、同一地域における貝塚間の食物残滓の比較研究を行った。また、石器石材・礫の供給源として小原台礫層を想定し、遠隔地石材として三浦半島に搬入された黒曜石の原産地研究などを行い、地域の歴史像を具体的に示そうとした。

直良信夫　　明治35（1902）～昭和60（1985）年

大分県生まれ。岩倉鉄道学校卒業、早稲田大学教授。

独学で考古学、人類学、古生物学などを学び、明石人骨問題など旧石器時代研究や日本古代農業に多くの問題を提起した。

文学博士。『日本旧石器時代の研究』、『日本古代農業発達史』などがある。

直良信夫書簡（大正14年4月12日）

赤星直忠が「介殻押型文の一例」として、茅山貝塚採集土器片に押捺された貝殻腹縁文の写真を『考古学雑誌』第15巻第4号で紹介したのを見た直良信夫からの書簡。

赤星が貝の種名は不明と記したのに対し、直良はハイガイのように思えることと瀬戸内海地方の貝塚によく見られることを書き添えている。直良が初めて赤星に出した書簡で、これ以降、赤星はたびたび直良に貝類・獣骨の鑑定依頼をするようになる。　　（神奈川県立埋蔵文化財センター蔵）

a　田戸遺跡の発見

田戸遺跡は、大正11（1922）年に赤星直忠によって発見された遺跡である。当時の田戸遺跡の周辺は陸軍の田戸演習砲台と横須賀鎮守府司令長官の官舎が存在したところで、民間人が立ち入れる場所ではなかった。このような軍用地に存在する遺跡が発見されたのは、赤星がこの年に陸軍の横須賀重砲兵連隊に入隊したことによる。横須賀重砲兵連隊は現在の横須賀市不入斗にあったが、その演習砲台のひとつが田戸演習砲台であった。既に考古学に興味を持ち、横穴などの調査を行っていた赤星は、横須賀重砲兵連隊に入隊し、その演習で出かけた田戸演習砲台で後に田戸下層式・上層式土器の標識遺跡となる田戸遺跡を発見することになった。

赤星は遺跡を発見した時の様子を、「田戸演習砲台という海岸砲の演習場が兵舎から二キロ余のところにあった。海岸砲の演習の日は弁当持ちでゆくことが多かった。ある日弁当を食う場所を求めて、砲具庫の裏へいった。腰をおろして弁当を食いかかったとき、のばした足のところに土器片がおちているのに気がついた。弁当を食べ終わって、あたりをさがすと、土器片がたくさんみつかった。採集した土器片は飯盒にいれてもち帰った。それからは演習にゆくたびに土器片に注意した。これが田戸遺跡である。」と語っている。

赤星が田戸遺跡を発見した翌年、大正12（1923）年9月に関東大震災が起き、田戸演習砲台は激しく破損して、廃棄されることになった。赤星が横須賀重砲兵連隊に入隊してわずか8ヶ月後のことであった。赤星の入隊が1年遅れていれば、田戸遺跡の発見は大きく遅れていたかもしれないし、また、後にこの土地が大きく改変されたことを考えれば、田戸遺跡は発見すらされずに破壊されていたとも考えられるのである。

山内清男との田戸遺跡の発掘調査

昭和5（1930）～6（1931）年に赤星直忠と山内清男は共同で田戸遺跡の発掘調査を行った。この調査は山内清男が実践してきた層位学的方法にもとづいたもので、赤星にとっては初めての本格的な実践だったと思われる。しかし、分層して発掘した結果、上下の堆積層から出土した土器に明確な型式差を認めた山内と「上下層中に特記すべじ相違なきが如く考える」とした赤星で見解を異ならせることになった。

田戸遺跡出土土器に明確な型式差を認めないとする赤星は、田戸遺跡出土土器を一型式として「田戸式土器」を設定した。それに対して、山内は「田戸下層式」、「田戸上層式」を使用し、後年、横浜市殿袋遺跡において田戸下層式土器が田戸上層式土器を伴わないで出土していることを紹介し、両型式が分離されることを示そうとした。

この報告の中で、山内は田戸遺跡の層位について、「上層の土器片を多量に出す砂質遺物層と、その下方のローム多き、土器片疎らな遺物層とを区別して発掘し、現地において両者の土器が異なることを発見した」と記載している。田戸遺跡の出土土器の全体を概観すれば、圧倒的に田戸上層式が量的に多く、また大型破片も多い。このことは、山内の記載にあるように田戸遺跡では下層出土土器、つまり田戸下層式土器の量が少なく、出土も散在的であったことを示している。

このような出土状況において、すでに同時期の宮城県槻木貝塚などの土器をみていた山内には、田戸遺跡の層位的出土が認識され、まだそのような知見のなかった赤星には慎重な態度をとらせたことで、見解の相違が生じたと思われる。この時期の赤星は「新しいタイプの土器の発見と、相互間の新古判断につとめた。皆はこのような仕事をやっていた我々を編年派とよんだ」と回想しているように、縄文土器の編年研究に積極的に取り組んでいた。

山内清男　　明治35（1902）～昭和45（1970）年

東京市下谷区生まれ。昭和11年、東京帝国大学理学部人類学科卒業後、東北帝国大学医学部解剖学教室、東京大学講師を経て、昭和37年、成城大学教授となる。

縄文土器の施文技法の発見と体系的な把握は、編年研究を方法論的に確立し、日本考古学の基礎を築いた。文学博士。著書に『日本先史土器の縄紋』、『日本原始美術（編集）』などがある。

赤星直忠の茅山式土器の型式認識

茅山式土器の型式内容は、昭和5（1930）年に赤星直忠によって詳細に紹介された。最初に記述されたことは器面内外面に条痕があることと繊維を多量に含むことで、これは山内清男が示した「繊維土器」、当時考えられていた古式縄文土器の特徴に従って冒頭に持ってきたことは想像に難くない。

次に、文様要素やモチーフ、整形技法、器形について9項目にわたって概括的に記載されたが、報文中の土器に対する具体的な記述にも重要な指摘があった。それらを総じれば、細隆線文を主体的な文様要素とし、胴部に括れや隆起帯をもたない土器群、腹部に隆起帯を2本ないしは1本を有し、点列文・点列沈線文・沈線文などの文様をもつ土器群、条痕文のみで胴部に括れや隆起帯をもたない土器群といった、将来、野島式、茅山下層式、茅山上層式と細分される基本的な分類が正しく認識されていたと評価される。しかし、鵜ヶ島台式、茅山上層式についてはその資料がきわめて少量であったり、文様要素が乏しいことによって、この時点での茅山式土器の内容は野島式と茅山下層式を中心としたものであった。

戦後間もない昭和22（1947）年に発掘調査が行われた野島貝塚から出土した土器の特徴は、従来の茅山式土器の一部の要素に限られると認識された。そして、野島貝塚の土器が「田戸式と茅山式との中間に位置する」と編年的に位置づけられ、「野島式」として茅山式土器から型式的に分離された。戦後の茅山式土器の細分研究は、野島貝塚にはじまり、茅山貝塚、鵜ヶ島台遺跡、吉井貝塚という一連の発掘調査で明らかにされていったが、茅山式土器が野島式―鵜ヶ島台式―茅山下層式―茅山上層式と細分された基礎となったのは、戦前の赤星の「茅山式土器」に対する詳細な観察にもとづく的確な認識であった。

b　貝塚遺跡の調査と地域研究

赤星は大正10（1921）年から三浦半島の遺跡の踏査をはじめて以来、縄文時代の貝塚においては土器や石器などの人工遺物だけではなく、貝、獣魚骨などの自然遺物もつとめて採集していた。大正14（1925）年に直良信夫と知り合ってからは、直良に自然遺物の同定を委ねる一方で、直良に指導を受けながら自ら貝や獣魚骨の標本作りも行った。

赤星が行った戦前の貝塚遺跡の本格的な発掘調査は、昭和10（1935）年の榎戸貝塚、昭和11（1936）年の吉井貝塚、昭和12（1937）年の諸磯貝塚などである。これらの貝塚の調査では、榎戸貝塚のように、縄文時代後期の鹿角製釣針、逆刺付刺突具などの豊富な骨角製漁労具が検出されたなど出土品の上でも、当時の漁労具組成が提示されるなどの成果があったが、赤星は人工遺物だけに注目したのではなく、貝、獣魚骨から得られる情報から当時の自然環境を復元し、同時に貝塚間の食物残滓の比較研究で地域史を復元しようとした。

赤星は土器編年研究と同時に貝塚研究も進めたことから、直良だけでなく酒詰仲男とも親交を持っていった。諸磯貝塚の発掘調査は昭和12（1937）年8月26・27日の二日間で行われたもので、これ

は、酒詰仲男と共同で行った調査で、加藤明秀、芹澤長介が参加した。この調査では縄文時代前期の貝層を伴う竪穴住居址が検出されたが、これは三浦半島で初めて発見された縄文時代の生活遺構であった。

調査の報告は昭和13（1938）年、『史前学雑誌』第10巻第3号に赤星と酒詰の連名で、「神奈川県三浦郡三崎町諸磯貝塚に於ける竪穴住居址発掘に就いて」と題して発表された。主要な執筆は赤星が行い、貝、獣魚骨などの自然遺物は酒詰が分担したと思われるが、互いにひんぱんに意見を交換しながら報告を作成したものと思われる。

『諸磯貝塚発掘時の野帳』

昭和12（1937）年8月26・27日にかけて行った諸磯貝塚調査時の野帳。表紙には赤星直忠の筆で「酒詰仲男・赤星直忠」の名が書かれている。

現在の予算に裏付けられた大規模な調査で行われている測量器具を用いた精密な実測図ではないが、観察記録はきわめて詳細に記載されており、赤星と酒詰の遺跡を発掘することへの真摯な態度を示している。（神奈川県立埋蔵文化財センター蔵）

酒詰仲男　　明治35（1902）年～昭和40（1965）年

東京都生まれ。昭和2年、同志社大学卒業後、大山史前学研究所、東京帝国大学人類学教室助手などを経て、昭和29年、同志社大学教授となる。

昭和13年、貝塚研究会を組織し、雑誌『貝塚』を発刊した。特に、縄文時代の貝塚研究に大きな功績を残した。文学博士。著書に『日本貝塚地名表』、『貝塚の話』、『貝塚に学ぶ』などがある。

『市指定重要文化財　榎戸貝塚出土骨角器』

榎戸貝塚は、横須賀市浦郷町の時宗能永寺背後の丘陵斜面に存在する。貝塚を発見したのは、当時の副住職小笠原義隆であった。小笠原は赤星直忠に連絡し、以後昭和10（1935）～14（1939）年にかけて、赤星の指導のもとで数度の発掘調査を行った。

調査の結果、縄文時代後期の多種の骨角器製漁労具が出土したが、これは三浦半島で縄文時代の漁労具組成を示す初めての資料であった。これら横須賀市の縄文時代研究史上貴重な資料が散逸せず保管されていることから、平成12（2000）年に横須賀市指定重要文化財に指定された。

縄文時代研究の残された課題

野島貝塚の発掘から出発した戦後の茅山式土器の細分研究は、昭和29（1954）年に茅山式土器の標識遺跡である茅山貝塚に対して初めて発掘が行われ、その大筋が示された。続いて行われた鵜ヶ島台遺跡、吉井貝塚の調査過程において土器編年研究は赤星直忠から岡本勇に委ねられていった。

その後、岡本は茅山上層式土器に後続する早期末葉土器群の解明を課題とし、下吉井遺跡の調査で下吉井式土器を設定、次に一本松遺跡などの調査を行ったが、その実態は充分には把握されていない。近年、三浦半島では白須遺跡、大塚台遺跡、一本松遺跡などの調査で、茅山上層式土器と下

吉井式土器との間を埋める土器群の良好な資料が出土したが、その型式学的な検討はこれからの課題である。

赤星と岡本によって提示された三浦半島での石材利用の課題については、小原第1遺跡・吉井貝塚などの石器、焼礫あるいは破砕礫の観察から、新たに発見された礫供給源と推定される嶺岡帯に由来する礫も含め、走水礫層中の礫が多用されること、理化学的な産地同定資料の増加から、黒曜石は縄文時代の各期を通して神津島産黒曜石が圧倒的に主体を占めることが確認されつつある。ガラス質黒色安山岩と多孔質赤色安山岩は条痕文土器の時期に特徴的な石材であることが認められつつあるが、遺跡により出土量などに変化があり、それらの現象の意味するところについては今後の課題として残されている。また、茅山貝塚、三浦市間口東洞穴遺跡、吉井貝塚、高坂貝塚などで縄文時代の貝塚が調査され、貝層の詳細な分析データも集積されつつある。

これらはすべて、赤星と岡本が追求した地域研究上の課題で、三浦半島の縄文時代研究にたずさわるものには、早期末葉の土器編年を追求し、他の事象についても新たに得られた資料を集成・検討していくという課題が与えられている。

(2) 赤星直忠の海蝕洞穴遺跡の調査研究

海蝕洞穴遺跡の調査研究の開始は、大正13（1924）年の鳥ヶ崎洞穴の発掘調査で赤星が22才の時である。赤星は大正11（1922）年に徳島県徳島市城山洞穴を鳥居龍蔵が発掘調査を行った新聞記事で読み、また、國學院大學で鳥居が行った講演を聴いており、洞穴遺跡に対する関心を持ちあわせていたものと思われる。富山県氷見市の大境洞穴において日本で最初の洞穴の学術調査が行われてから6年後のことである。

赤星が本格的に海蝕洞穴遺跡の調査研究を進めるのは昭和23（1948）年の猿島洞穴の発掘調査からであり、46才の時である。その後「三浦半島海蝕洞穴と祖先生活」の題名で昭和24（1949）年より2年間、文部省の科学研究費を得て大浦山洞穴をはじめとして一連の発掘調査を行った。この発掘調査の中心になったのが太平洋戦争後、赤星にひきいられ大学生や高校生を中心に組織的に活動し始めた横須賀考古学会である。

この一連の発掘調査によって、洞穴が弥生時代から古墳時代前期においては漁労を中心とした生活の場所として、それ以後は埋葬の場所として使用されたことが知られるようになった。昭和28（1953）年には猿島をはじめとする弥生時代の洞穴の細かな報告が赤星によって「海蝕洞穴」と題して発表され、その前年に三浦半島の洞穴を中心として「金石併用時代の漁民」という論文を発表し、

① 弥生時代の漁労具の出土量が多いことより漁民であり、半農半漁の漁民もあれば純然たる漁民もある。漁法は釣漁法や刺突具を中心としたものである。

② 洞穴は貝包丁や貝輪の製作場で、漁獲物と共に農民の農産物と交換したものであろう。また、漁民間の分業も存在したと考えられる。

③　弥生時代においては洞穴は生活の場所もあり、死者の埋葬の場所でもあった。屍を別の場所で洗骨し、洞穴内の小洞や岩のくぼみの前に岩を並べて境界をつくり、その内側に骨の一部を葬っている。

などの研究成果をまとめている。

その後、さらに弥生時代の生活を具体的につかむために行った雨崎洞穴の発掘調査で出土した古墳時代前期の木棺や火葬骨などから、埋葬場所としての洞穴の研究を進めた。

赤星の死後、間口東洞穴・赤坂遺跡・池子遺跡群・千葉県大寺山洞穴の調査により、三浦半島の洞穴遺跡に関連する新しい事実が報告されている。

開地性集落と洞穴との関係、紀伊・伊豆・三浦・房総半島を結ぶ洞穴間の関連など、赤星が残した研究成果をふまえ研究を進めなければならないといえる。

赤星直忠による海蝕洞穴の調査研究史

大正13（1924）年7月	太刀川総司郎と鳥ヶ崎洞穴発掘調査
昭和22（1947）年	久里浜住吉神社裏洞穴調査
23（1948）年10月～24（1949）年8月	猿島洞穴を横須賀市郷土文化研究室の仕事として発掘調査
24（1949）年4月～5月	大浦山洞穴第1次発掘調査
24（1949）年5月	観音崎洞穴を高橋恭一と調査
24（1949）年8月～11月	松輪（さぐら浜）洞穴発掘調査
24（1949）年12月～25（1950）年1月	間口A洞穴第1次発掘調査
24（1949）年12月～25（1950）年3月	剣崎南洞穴発掘調査
25（1950）年7月	宮川洞穴発掘調査
25（1950）年7月	向ヶ崎B洞穴発掘調査
25（1950）年12月～26（1951）年	毘沙門洞穴群発掘調査 ＊昭和24～25年の調査は、文部省科学研究費補助金による。
26（1951）年7月	かもめ島洞穴を鈴木尚と発掘調査
31（1956）年10月	千葉県館山市鉈切洞穴の発掘調査に参加
37（1962）年8月	大浦山洞穴第2次発掘調査
38（1963）年7月	大浦山洞穴第3次発掘調査
42（1967）年7月～43（1968）年3月	雨崎洞穴発掘調査
57（1972）年6月～7月	西ノ浜洞穴発掘調査
58（1973）年4月～6月	海外第1洞穴発掘調査

『漁民と対馬』

昭和27（1952）年に、九学会連合が編集した報告書。赤星直忠はそれまでの、三浦半島の海蝕洞穴の調査研究の成果を発表している。（横須賀市自然・人文博物館蔵）

『洞穴遺跡調査の野帳』

紙の少ない時代から、赤星はこのように不要になった紙や広告のチラシを綴って野帳としていた。野帳は細かく記録するだけでなく、早朝に加筆・整理していた。（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

『毘沙門洞穴出土の貝包丁・ト骨』

赤星直忠は、海蝕洞穴のなかでも、毘沙門洞穴のように貝包丁が多く出土する洞穴とそうでない洞穴があることにより、洞穴間の分業があったのではないかと考えた。

毘沙門洞穴出土のト骨（東京国立博物館に収蔵されているもの）は、多くの歴史関係の本に掲載されている。（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

『鳥ヶ崎洞穴調査写真』、『考古学雑誌第14巻第12号』、『毘沙門洞穴調査写真』、『間口洞穴出土ト骨』、『大浦山洞穴埋葬写真』、『毘沙門洞穴埋葬写真』（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

(3) 横穴編年研究と宗元寺

横穴の編年研究は、赤星直忠の「穴」を題材とした考古学研究の中でも支柱ともいえる重要な一翼である。やぐら、海蝕洞穴、そして「横穴」は、赤星の一生涯をかけた研究対象で、その出発点は大正11（1922）年頃と早い。

横穴墓研究の成果は、①横穴墓と火葬墓、②横穴墓と集落、③横穴墓の形態変遷の大きく3つに分けられる。特にその中で最大の成果は、横穴墓の形態を類型化し、各変遷過程を模式図化したことである。但し、竪穴住居を祖形と想定し、未確認の形態を模式図化するなどしているため、現在ではあまり引用はされていない。しかし、戦時下の日本では、考古学を研究することすら大変な状況であった。横穴墓の調査・記録をし、変遷を考えることは並大抵ではなかったであろう。左方に展示されている赤星が自分で考えて書留めた変遷案は、研究者としての学問的な苦悩とも悦楽ともみられるが、これが後に博士論文「横穴古墳の編年研究」として帰結し、日本考古学史上今なお評価される赤星の軌跡なのである。

宗元寺の研究は、赤星の考古学研究を始めるきっかけとなった原点である。中学校在中から古瓦を採集し、大正11（1922）年5月には横須賀市豊島小学校の代用教員をやりながら本格的な研究活動に入っていた、宗元寺なしでは考古学者赤星直忠は生まれなかったかもしれない。また、模型や絵画から見ても分かるように一際愛着があったと思われる。宗元寺とその時代を中心とした一連の研究が、日本考古学史上果たした役割が大きかったことは言うまでもない。

このように横穴・宗元寺研究は、赤星の約70年間に及ぶ考古学研究の礎石となり、論稿も80編以上で、一生涯で刊行した約500編に及ぶ膨大な論稿の1／6を占めるのである。

a　横穴の編年研究

赤星直忠の生涯をかけた横穴編年研究の出発点は、大正11（1922）年夏に発見された横須賀市鴨居にある鳥ヶ崎洞穴・横穴群であった。その頃から次第に横須賀市内の大浜（現久里浜）、坂本、高山（現田戸台）や佐野などで横穴群の踏査・記録・資料収集をして知見を広げていった。大正11（1922）年に「相模大濱の横穴」が『民族と歴史』第7巻第3号に、大正13（1924）年に「馬らしき陰刻のある横穴」が『考古学雑誌』第14巻第11号に調査成果として報告された。

赤星が本格的に発掘調査を始めるのは、大正13（1924）年6月に鳥ヶ崎洞穴・横穴群が土取の為に壊されるとの連絡を受け、数基を記録保存し、翌7月に太刀川総司郎・小松真一が発掘調査を行ったのが契機となった。この鳥ヶ崎の調査は赤星にとってより深く考古学研究に入る機会となり、恩師高橋健自や後藤守一の教えを受けながら横穴研究に必要な知識や技術を会得していった。

昭和に入り鎌倉に勤務するようになると、調査範囲は三浦半島から相模へと拡がり、発掘調査も逗子市新宿横穴群など精力的に行っていった。赤星はその頃より個々の横穴から横穴を群としてみるようになり、横穴の性質、横穴の時期、横穴と火葬骨、横穴群と集落の関係といった様々な問題を考えながら横穴の研究を進めていった。

戦後、神奈川県下の横穴1000穴以上を資料化し、出土遺物などから時間差があると考え、「横穴形態変遷図」を作った。昭和29（1954）年に逗子市山野根横穴群などの調査成果から試行錯誤を繰り返しながら、昭和36（1961）年「横穴古墳の編年研究」により、「文学博士」の学位授与に結びついた。それ以後、編年案を全国で検証し、埋葬形態の研究へと深化させていった。

『横穴形態変遷図構想メモ』

赤星直忠は約70年間の研究生活において、神奈川県下の横穴を1000穴以上調査し資料化してきた。その中で横穴出土遺物から横穴には時期的な差異があることを発見し、その形態から変遷を捉えようとした。それは後に「横穴古墳の編年研究」として学位授与に結びつくのであるが、それまでに赤星が試行錯誤したと見られるものがこの変遷図構想メモである。構想の意図は幽明境を隔てられた現在では不明であるが、少なくとも7次までの構想メモが残されている。

（横須賀市自然・人文博物館蔵）

『坂本横穴線刻画拓影図』（横須賀考古学会蔵）、**『考古学雑誌第14巻第2号』**、**『三浦半島横穴発見土器』**、**『三浦半島横穴出土品原色図』**、**『横穴発見直刀』**（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

b　宗元寺の研究

宗元寺研究は　赤星直忠の考古学研究の中で、考古学を始めるきっかけとなった原点であると言っても過言ではないと思われる。赤星は大正10（1921）年横須賀中学校（現横須賀高等学校）を卒業したが、古代宗元寺の跡地が中学校と自宅の近所であった為、中学在学中から古瓦を採集していた。

大正11（1922）年5月に横須賀市豊島小学校の代用教員になってから本格的な研究活動に入り、東

京帝室博物館の高橋健自を訪ねて、いろいろと考古学の指導を仰ぐようになった。同年10月には『宗元寺』を孔版印刷で刊行している。この論稿の序は赤星の郷土に対する愛着を感じるとともに、展示模型や絵画から見ても分かるように宗元寺には一際愛着があったと思われる。また、古瓦、鐘、五輪塔、さらに伝承や屋号のことまで言及されていることは、後の赤星の幅広い考古学研究の始まりであると感じられる。

昭和2（1927）年5月に石田茂作の教示を受けながら「宗元寺の古瓦」を『考古学雑誌』第17巻第4号に発表し、奈良時代創建かどうかを論考した。また、昭和10（1935）年3月刊行の「相模宗元寺址」（『神奈川県史蹟名勝紀念物調査報告書』第３輯所収）の中で、礎石・伽藍配置関係、仏像・仏具関係、古瓦関係などの問題に触れ、宗元寺についてまとめられた。これ以降、昭和32（1957）年の「宗元寺時代」『横須賀市史』まで論稿は見られないが、宗元寺跡の発掘調査が行われず、創建時代や伽藍配置などの新知見が得られなかったためであった。

近年の研究成果では、宗元寺跡は7世紀後半に創建され、忍冬蓮華文軒丸瓦は奈良県西安寺跡の瓦と同笵であることなどが判明しているが、未調査の為に伽藍配置や周辺の郡衙の関係など多くの問題を残している。

『宗元寺古瓦』、**『宗元寺古瓦模型』**、**『宗元寺想定復元図』**（赤星直忠博士文化財資料館蔵）、**『宗元寺復元模型』**（横須賀市自然・人文博物館蔵）

（4）やぐらと中世城郭の研究

やぐらとは鎌倉・室町時代の鎌倉を中心に分布する横穴様の墳墓穴で、江戸時代以後鎌倉周辺では「やぐら」と呼んだ。やぐらは、赤星直忠の中世考古学研究の柱で、生涯追い続けた「穴」という研究テーマでもあった。赤星の研究史上、大正末期から調査を行っているが、本格化するのは、大正14（1925）年、教員になるために鎌倉の神奈川県師範学校に入学してからである。研究を始めたのは高橋健自より、やぐらの性格や分布を調べること、鎌倉の瓦を調べることを課題として与えられたことであった。その後「やぐら」とは何かとの解明に始まり、構造・埋葬・遺物の研究、そして当時の人々の死に対する思想や観念の研究にまで発展していった。戦前は鎌倉史蹟めぐりの会、戦後は横須賀考古学会の研究者らと共に歩み、後に『中世考古学の研究』として結実した。

赤星の中世城郭の研究は、昭和10（1935）年頃より始まる。昭和15（1940）年「武州榎下城の調査」を『神奈川県史蹟名勝紀念物調査報告書』第8輯に、「鎌倉史蹟めぐりの会記録（十九）杉本城の調査」を『鎌倉』第6巻第1号に、昭和17（1942）年「衣笠城について」を『神奈川県史蹟名勝紀念物調査報告書』第10輯に掲載し、横浜市榎下城、鎌倉市杉本城、横須賀市衣笠城について現地踏査の結果、確認した城郭遺構の縄張り図を発表している。当時三浦半島は要塞地帯法の下、厳しい制約が設けられていたが、それでも三崎城跡、新井城跡、玉縄城跡などの調査を進めていった。

戦後は、戦前に行った調査を基礎にして、『三浦半島城郭史』（上）・（下）や『鎌倉市史』考古編

に城郭調査の研究をまとめた。この一連の城郭研究は、現在既に消滅してしまった遺跡も多いために調査記録として貴重である。

a　赤星直忠のやぐらの研究

赤星のやぐら研究は、赤星ノート第1冊に大正13（1924）年2月に衣笠村小矢部城山のやぐらを記録したのが初見だが、大正14（1925）年2月発行の『考古学雑誌』第15巻第2号に「在銘の石塔」として横須賀市佐島の石塔を紹介した論稿がある。この中で「自分はこの種のものを研究したのははじめてであるが大変面白く研究した」とあり、これ以後やぐら研究の本格的な調査が始まっていくのである。

大正から昭和期に入り、高橋健自よりやぐら研究を課題として与えられ、鎌倉をフィールドにするようになってから赤星の研究は発展していった。特に戦前は、「鎌倉史蹟めぐりの会」を中心として鎌倉市内のやぐらや寺院の古瓦・石塔など様々な史跡の調査・記録保存に努めた。特筆すべきは「寿福寺やぐら」、「百八やぐら」の調査である。やぐら構想メモにもあるように、寿福寺の調査はやぐらを解明するにあたっての最初の調査となったようである。百八やぐらは昭和7（1932）年12月より調査されたもので、昭和8（1943）年6月には鎌倉史蹟めぐりの会の調査で鎌倉最大のやぐら群であること、様々な壁面彫刻が施され鎌倉の代表的な存在であることなどが明らかにされた。昭和13（1938）年まで調査が続けられ、総数150穴が1穴1穴詳細に調査されたのが『神奈川県史蹟名勝紀念物調査報告書』第7輯にまとめられた。

戦後は、学術調査が許されるようになり、横須賀考古学会などを中心としてやぐらの調査を行った。戦前は調査が行えなかった朱だるきやぐらなどはその典型である。こうして約50年におよぶ研究により、「やぐら」が鎌倉を中心に分布する有力武士等の墳墓堂を岩窟化したもので、納骨堂と供養堂であることが判明し、やぐらと関連する研究が中世考古学の研究に結実していったのである。

『赤星直忠のやぐらの構想メモ』

昭和56（1981）年2月17日から全5回にわたって、赤星が鎌倉市民講座で「やぐら」の話をした時の構想メモ。とくに寿福寺やぐらは「やぐら」解明の鍵となっているようで、寿福寺の調査からやぐらとは何か、やぐらの構造、出土遺物に関する研究、死とは何かといった一連の課題や解明の糸口に派生している。さらに、大用紙には中世研究構想の全体像が描かれている。

また、下書きや構想を広告などの裏に書くといった紙を無駄に使わずに再利用する赤星の態度は、当時では当然であったであろうが、ものの大切さを感じさせる一面を持つ。

（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

『市指定重要文化財　石造双式板碑』

板碑は死んだ人の極楽往生を願って行う供養のために造られた中世の石塔の一種で、現在の板塔婆の祖形である。現在、満昌寺で保管されている釈迦三尊種子板碑と阿弥陀三尊種子板碑は、主尊

の種子が異なる以外、紀年名、天蓋や蓮座、光明真言の梵字などまったく同じで、2基1対の双式板碑である。この板碑は現在確認されている双式板碑としては県内最古のもので、平成13年に横須賀市指定重要文化財に指定された。この板碑は、もとは満昌寺の東側に存在した薬王寺跡のやぐら内にあったもので、赤星直忠の撮影した写真は、やぐら内にならんで立つ2基の板碑が写っており、本来の状態を伝える貴重な記録である。

『赤星ノートNo.1衣笠小矢部やぐら』、『考古学雑誌第15巻第2号』、『神奈川県史蹟名勝紀念物調査報告書第7輯』、『赤星ノート（百八やぐら）』（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

b　城郭の研究

赤星直忠が城郭研究をはじめるに至った城郭は、三浦氏の衣笠城であると思われる。大正7（1918）年に衣笠経塚が発見された時、中学生であった赤星は、『三浦大介と三浦党』の著者である北村包直の元へ通って様々な教えを受けたようである。その後、昭和12（1937）年には東京湾要塞司令部の許可を取り、衣笠城の構造解明のための調査を開始している。昭和10年代には、榎下城、杉本城、衣笠城についての研究報告を発表している。この当時、城郭研究者の鳥羽正雄から教えを受けていたと赤星は生前に述べている。

その後、他の三浦半島の城郭も詳細に踏査して、その構造を調べ上げた集大成として、昭和30（1955）年に『三浦半島城郭史（上）・（下）』を発表した。その4年後の昭和34（1959）年には、『鎌倉市史　考古編』に、玉縄城等の城郭の研究を発表する。『三浦半島城郭史』、『鎌倉市史』を一つの区切りに、城郭研究は三浦半島以外の城郭にも及ぶ。昭和43（1968）年、津久井城、昭和56（1981）年には小松城の調査を行っている。赤星の城郭の今後の研究方向として、三浦半島以外の城郭を補って、「県内城郭の研究」へ進む予定があったようである。

三浦半島でも引き続き調査研究を続け、住吉城等の発掘調査団長として城郭遺構の発掘調査を指導した。赤星の最後の城郭研究は、原点ともいえる昭和60（1985）年刊行の「衣笠城跡の遺構」『横須賀市文化財調査報告書』第15集である。赤星は、『三浦半島城郭史』（上）で、「筆者が否定した城郭についても他日研究の結果是認されるものもあるかも知れない。見落とした城郭もあるかも知れない。それらは本稿を足場として更に進んだ研究調査によって他日若い人達によって補って貰えると思うので一応『三浦半島城郭史』として出すことにした。」と述べている。

『衣笠城跡歩測図』

衣笠城跡は赤星の城郭研究の原点である。昭和10（1935）年代から三浦半島各地の城郭をめぐり、歩測によりその規模を記録していた。赤星は自身の歩幅（15歩＝10m、1歩約67cm）を基に遺構の大きさを測り、城郭の規模を把握するという一つの調査方法を用いていた。

この図は、昭和58（1983）年1月に赤星直忠、塚田明治、野内秀明により測量された。横浜横須賀道路が衣笠城の搦手口にあたる土地を壊して通ることになり、これに先立ち搦手口の現況を記録

しようとして歩測したものである。赤星の城郭の概念は本城だけではなく、周囲の谷地形が堀であったと考えていたことがよく分かる図である。　（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

武州榎下城の調査

昭和10年代、すでに赤星は発掘調査こそ行っていないが、城郭跡の現地踏査を行い、報告書を書いている。横浜市北部を走るＪＲ横浜線中山駅の西北約500ｍに位置する榎下城がそのひとつである。

このときの調査は、加山道之助との連名で「武州榎下城の調査」として、昭和15（1940）年3月25日発行の『神奈川県史蹟名勝紀念物調査報告書』第8輯に報告された。

この報告の中で、現地踏査を行い確認した遺構の城郭としての構造を述べると共に、縄張り図を作成して具体的に以降の説明を行っている。

『三浦半島城郭史』上・下

昭和10年代から城郭の研究を始めていた赤星は、要塞地帯法にしばられて十分な調査ができなかった。終戦と共に同法が廃止せられて、自由に調査ができる様になった昭和30（1955）年に、横須賀市史の一環として三浦半島の城郭に対する研究として『三浦半島城郭史』を著わした。

これは三部から成り、上巻に第一部と第二部を、下巻に第三部を納める。第一部（慶長以前）では、三浦半島にある城郭を構造上から3期に分類し、一期を平安時代末期の城郭、二期は鎌倉時代の城郭、三期を室町時代から後北条氏時代の城郭としている。第二部の江戸湾口防衛史では、ペリー来航前後の海防陣屋と台場の構造を現地踏査に基づいて記録している。第三部の東京湾要塞歴史では、明治時代から太平洋戦争までに至る三浦半島の近代砲台、特殊潜航艇基地等の現状をくまなく記録している。　（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

(5) 台場と近代砲台の研究

赤星は、大正11（1922）年12月1日横須賀重砲兵連隊へ一年志願兵として入隊、第二大隊第三中隊に属した。そして、大正12（1923）年11月3日に除隊するまで、要塞砲兵として東京湾要塞の大部分の砲台を実地に見ており、ある砲は自身で射撃したものであった。大正15（1926）年3月に予備役砲兵少尉に任官となった。昭和20（1945）年2月応召、東部19094部隊小隊長として新潟県小千谷の山中で終戦を迎えた。

復員後直ぐに、要塞地帯法により立入禁止、記録禁止のため調査できなかった、台場跡、東京湾要塞各砲台をめぐり、写真やスケッチ等の記録を取り、要塞関係者を訪問して資料とし、最後の横須賀重砲兵連隊の隊長から終戦時の海岸砲台について聞き取りを行い、終戦時に焼却を免れた東京湾要塞司令部の『東京湾要塞歴史』を借り必要部分を抜書きして資料とした。これらの資料を基に、三浦半島の古代から近代までの城郭の歴史書として、昭和30年に横須賀市史№8・9『三浦半島城郭史』（上・下）を執筆した。

『三浦半島城郭史』では、第一部で慶長以前の城郭について構造上から3期に分類している。第二部は、江戸湾口防衛史としてペリー来航前後の海防陣屋と台場の構造を現地踏査と県立金沢文庫所蔵の台場絵図面等に基づき記録している。第三部は、東京湾要塞歴史として明治時代から太平洋戦争までの近代砲台から防空砲台、特殊潜航艇基地までくまなく記録し、東京湾防御のための防衛状況を伝えている。

終戦後、赤星はいち早く台場、近代砲台跡をめぐり、これら遺構の記録を取り、他の地域に先駆けて台場と近代砲台の研究に着手している。三浦半島の台場、近代砲台跡の中には、開発により調査されることなく消滅してしまった遺構もあり、赤星の記録から窺い知るだけのものもある。

a　台場の調査

江戸時代の終わりに造られた砲台である台場は、外国船の江戸湾（現在の東京湾）進入を阻止する目的で、東京湾沿岸の三浦半島と房総半島に多く造られた。特に、東京湾の最狭部である富津―観音崎間が重要視され、三浦半島の沿岸では観音崎周辺に集中して台場が造られた。

三浦半島の城郭に対して研究を行ってきた赤星は、台場についても調査研究の対象としてきた。台場に対する調査は、発掘調査こそ行っていないが、文献史料、絵図面等の資料収集のほか、徹底した現地踏査を行っている。これは、台場の調査を目的とした場合に限らず、他の遺構の調査を主目的とした時においても行われている。大正13（1924）年に、観音崎の近くの鳥ヶ崎横穴を調査した際には、鳥ヶ崎台場の『相中留恩記略』の挿絵に描かれている弾丸除堤を実見している。

明治時代以降の東京湾要塞の砲台と台場が造られた位置の多くが重なるため、要塞地帯法により台場が造られた場所に自由に立入ることが出来なかったが、終戦と共に同法が廃止されると、復員後すぐに台場の現地調査に取り掛かっている。この時の調査は三浦半島のすべての台場に及び、千駄崎台場については、「東京湾要塞としての千駄崎砲台内であり、砲台は千駄崎の突端の高所にあったが台場はそれの東下若干低い所と更に其の下の山腹とにあった。要塞内であったことと幸いにも砲台位置とずれていたため玉除土手等も当時のまま全部残っているものの如くであるから、台場の構造を見る唯一の資料である。」と述べている。

三浦半島においては発掘調査事例が少なく、遺存状態が良い千駄崎台場は調査されることなく消滅したが、近年は猿島台場、上宮田の海防陣屋の調査が行われ、文献史料等に考古学の手法を加えた方法による台場の構造解明が緒についた。

『臺場資料』

太平洋戦争が終了した昭和20（1945）年8月まで、東京湾要塞地帯であった三浦半島は、要塞地帯法により立入禁止、記録禁止の場所が数多くあった。台場、砲台があった所はその最たる場所である。復員した赤星は直ちに、これまで調査できなかった台場、砲台跡をめぐり、写真やスケッチ、聞取り調査を行った。そして、このときの調査をもとにして、『三浦半島城郭史』（上）・（下）を執

筆した。『三浦半島城郭史』の発行後、数冊に分かれていたこれらの図やスケッチを永く郷土資料として役立たせようと考えて合本して一綴にしたのが、この臺場資料である。

（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

b　近代砲台の調査

首都東京と横須賀軍港を敵艦艇の攻撃から守り、東京湾に侵入を図る敵艦艇を撃退する目的で、三浦半島及び房総半島の東京湾沿岸の海岸に、砲台、堡塁、海堡等の防御施設の永久築城により、東京湾を守備する海岸要塞である東京湾要塞が造られた。その建設は、明治13（1880）年の観音崎第一及び第二砲台の起工に始まり、同時に日本の近代砲台建設の鏑矢となった。

志願兵として大正11（1922）年に横須賀重砲兵連隊に入隊した赤星は、要塞砲兵として東京湾要塞の大部分の砲台を実見している。復員直後の昭和21（1946）年には、三浦半島の各砲台を踏査して記録を取った。その方法は、物資の乏しかったこの時期、自身の歩測で計測した砲台の規模を記録し、フィルムの入手が困難なため砲台の様子をスケッチしたものであった。赤星の調査は東京湾要塞の砲台だけに止まらず、終戦から日の浅い当時、太平洋戦争中の防空砲台、特殊潜航艇の基地等も城郭遺構としてとらえて記録を残している。

現地をくまなく踏査し、歩測、聞取り、史料収集した成果は、昭和30（1955）年に『三浦半島城郭史』（下巻）の「東京湾要塞史」としてまとめられた。その後、昭和48（1973）年には『三浦半島城郭史』では取り上げられなかった、小坪臨時台場、小坪洞窟砲台、小坪高角砲台を『逗子市文化財調査報告書』で報告し、『三浦半島城郭史』を補記している。

三浦半島では、赤星のこれらの調査以外、久しく砲台の調査は行われていなかったが、平成3（1991）年～6（1994）年に大津山高角砲台の発掘調査、平成8（1996）年に三崎砲台の測量調査、平成13（2001）年には猿島砲台の発掘調査が行われ、砲台を含めて近代の戦跡遺構を遺跡として発掘調査の対象とする動きが出来はじめている。

（6）考古学の周辺の学問

a　黒曜石の原石採集　　b　朱採集　　c　軟体動物標本作成　　d　脊椎動物標本作成

e　赤橋尚太郎著書

『赤星採集の民具：おしょろさま』（横須賀市自然・人文博物館蔵）

4　文化財の保護と普及

(1) 文化財の保護活動

a　赤星直忠の文化財保護

赤星直忠は昭和5（1930）年にわずか28歳で神奈川県史蹟名勝天然記念物調査委員会委員に任命されて以来、戦後の県重要美術品等調査委員・県文化財専門委員をへて昭和55（1980）年に県文化財保護審議会委員を辞任するまで、50年間行政当局からの諮問に考古学の立場から意見を述べ、調査する立場にあった。

このなかで戦前においては、昭和17（1942）年軍都拡大のなかで茅山貝塚が切り崩され埋め立てられようとしたが、貝塚に続く丘陵切り崩しの工事が始まるなか、赤星は県・市の行政官とともに現地を視察して切り崩し工事から免れるよう手配した。

同じく太平洋戦争中、高射砲陣地建設のため大塚古墳が破壊されることを知った赤星は、高橋恭一氏や地元有力者らと直接、隊長に面会して、当時、三浦半島で最大かつ唯一の前方後円墳であることを説明して保存を申し出た。この努力と隊長の理解によって、古墳は破壊から救われた。

戦後において、赤星は、特に城郭跡の保存を行政当局に強く訴えている。しかし、当局からは文献に残されていないという理由で門前払いを受けている。こうしたなかで昭和40（1965）年、戦国時代の北條氏の海賊の城であった浦賀城跡の保存においては、見学会を開催したり、肩書きなしの一市民という立場で自らガリ板を切って説明書を作り、地元住民をはじめ各方面に訴え、保存の要望書を市当局に送ってもらうよう運動を行っている。

昭和41（1966）年以後、文化財保護は横須賀考古学会として組織的に運動を行うようになった。

文化財保護委員などの履歴

戦前において、赤星直忠は神奈川県の史蹟名勝天然記念物調査委員会委員をつとめ、戦後すぐに神奈川県の重要美術品等調査会委員となったが、後藤守一、梅原末治らを通して戦前から国宝指定など国の文化財保護のありかたにも接していた。

昭和25（1950）年、文化財保護法公布後は各自治体の文化財保護委員となり、文化財の保護につとめた。また、県史・市史編さん委員や文化財総合調査委員も委嘱され、埋もれた文化財の発見にもあたった。

〔文化財保護関係履歴〕

昭和5（1930）年	神奈川県史蹟名勝天然記念物調査委員会委員
昭和21（1946）年	神奈川県重要美術品等調査委員
昭和26（1951）年	神奈川県文化財保護審議会委員
昭和28（1953）年	神奈川県文化財専門委員

昭和35（1960）年	鎌倉市文化財専門委員
昭和43（1968）年	逗子市文化財保護委員
昭和50（1975）年	神奈川県文化財保護審議会委員
昭和51（1976）年	横須賀市文化財専門審議会委員

〔自治体史編さん等関係履歴〕

昭和28（1953）年	鎌倉市史編さん委員
昭和43（1968）年	神奈川県史調査員
昭和49（1974）年	神奈川県史編さん委員
昭和51（1976）年	横須賀市文化財総合調査団長
昭和55（1980）年	逗子市史編さん委員
昭和60（1985）年	横須賀市史編さん委員

b　文化財保護法制定以前の文化財の保護

現行の文化財保護法は昭和25（1950）年に制定されたもので、それ以前には文化財を保護するための法令として、古社寺保存法・国宝保存法・史蹟名勝天然紀念物保護法・重要文化財等ノ保存ニ関スル法律などが存在した。

明治政府が文化財の保護に本格的に着手したのは、明治４（1871）年５月２３日の太政官布告第251号の「古器旧物保存方」においてで、明治元年に出された神仏分離令を契機とした仏教排斥運動による文化財喪失といった社会現象に対応するためであった。その後、明治30（1987）年には古社寺保存法が公布され、古社寺が所有する文化財は法の規制のもとで保護されることになった。

古社寺保存法は社寺所有の文化財を対象としたものであったが、昭和４（1929）年に国宝保存法が公布され、保護の対象は個人や自治体所有のものまで拡大された。さらに、未指定の美術品等を保護するため、昭和８（1933）年に「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」が公布され、文化財の保護の充実が図られた。

これらの法律は保護対象が有形文化財に限られていたが、明治40年代に入って、土地に刻まれた文化財の保護が模索され、「史蹟及天然紀念物保存ニ関スル建議案」が貴族院に提出された。この建議にもとづいて、大正8（1919）年に「史蹟名勝天然紀念物保存法」が公布され、史蹟、名勝、天然紀念物の保護措置が図られるようになった。

明治維新以後の日本の文化財保護制度は、昭和初期までに法体系が整えられ、充実したものになっていったが、その必要性を作り出した要因は、近代化に伴う急激な国土開発による史跡破壊、文化財の海外流出などで、近代化による伝統文化財の破壊といった社会現象の側面が存在する。

古社寺保存法

明治30（1987）年6月5日に公布された文化財の保護に関わる日本最初の法令で、古社寺の所有する建造物と宝物の修理にかかる国庫からの保存金の下付制度とより重要なものを「特別保護建造物」、「国宝」としての資格を与え、その公開・監守義務などが定められている。現行の文化財保護法における重要文化財等の指定制度とは異なり、資格制度であるが、保存金の出願・下付と特別保護建造物と国宝の資格決定に内務大臣が古社寺保存会に諮詢するなど本質的には同様の法律である。

国宝保存法

昭和4（1929）年3月28日に公布された法律で、それ以前に存在した古社寺保存法が社寺の所有する文化財の保護を対象としたのに対して、その範囲を民間や地方行政組織、国の所有するものまで広げ、法体系を整備したもの。昭和25（1950）年、現行の文化財保護法施行により廃止された。古社寺保存法で「特別保護建造物」・「国宝」の資格を与えられ保護対象となっていた文化財は「国宝」という名称で統一され、以後、重要な文化財は国宝保存会の諮問を経て「国宝」に指定されることになった。

『国宝指定候補品陳列案内状』

後藤守一から赤星直忠にあてた書簡中にあったもので、後藤が赤星に国宝指定候補品を陳列することを知らせるために送ったものと思われる。

このような機会を得て、赤星は学問を追及するだけでなく、文化財の保護の重要性を認識していったものと考えられる。（神奈川県立埋蔵文化財センター蔵）

重要美術品等ノ保存ニ関スル法律

昭和８（1933）年4月1日に公布された法律で、国宝に指定された物件以外の歴史上、美術上重要な物件の国外流出防止を目的とした。重要美術品等に認定されると、国外への移出、輸出には許可申請が必要で、その物件の重要性が認められた場合には許可申請の日より1年以内に国宝保存法にもとづき国宝に指定し、国外流出を防ぐ制度であった。

史蹟名勝天然紀念物保存法

大正8（1919）年4月10日に公布された法律で、既に存在していた古社寺保存法や後に制定される国宝保存法が有形文化財の保護を定めたものであるのに対して、土地に刻まれた史蹟、名勝、天然紀念物を保護するためのもの。昭和25（1950）年に、現行の文化財保護法施行により廃止された。

史蹟名勝天然紀念物の内務大臣（後に文部大臣）による指定、地方長官による仮指定、現状変更時の地方長官による許可制、地方公共団体による管理などが定められていた。

『昭和13年重要美術品指定展示会の招待状』（神奈川県立埋蔵文化財センター蔵）、**『昭和21年重要美術品等委員委嘱状』**（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

c　戦後の文化財保護

文化財保護法

昭和25（1950）年5月30日に公布された法律で、戦後はこの法律公布まで国宝保存法、史蹟名勝天然紀念物保存法、重要美術品等ノ保存ニ関スル法律によって文化財の保護がはかられていたが、法隆寺金堂の焼失という事件を契機として、これらの諸法律を統合し、埋蔵文化財、無形文化財などを加えて体系化されたもの。その後、数回の改正を経て現在に至っている。

国宝保存法にもとづく「国宝」は「重要文化財」ないしは「国宝」として、史蹟名勝天然紀念物保存法」にもとづく指定物件も史跡、名勝、天然記念物として引き継がれた。重要美術品等ノ保存ニ関スル法律は文化財保護法施行で廃止されたが、認定物件の取り扱いは当分の間効力を有するとして現在に至っている。

『神奈川県文化財専門審議会委員委嘱状』、『横須賀市文化財専門審議会委員委嘱状』、『浦賀城保存要望書』、『昭和40年3月20日神奈川新聞』　（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

(2) 赤星直忠の教育と研究成果の普及

赤星直忠は「遺跡の発掘調査の成果は学校教育の教科書に活かされなければならない」ということをよく発言していた。考古学研究の成果と学校教育との関係に対する、赤星の基本的な考えである。

戦前において赤星が教師としてどのような歴史教育を行なっていたか不明であるが、大正15(1926)年に赤星が鎌倉の第二付属小学校の教育実習生として行なった授業の時に配布した「玉について」の資料や、昭和初期の付属小学校で児童全員を対象として行なった古瓦採集の特別知識指導の日誌からその一端をみることができる。日常の歴史教育であるかは別としても、身近で具体的なものを通して、考古学的要素の強い郷土教育を行なっていたようである。このことは戦後、高校1年の国史「上代の風俗」の授業の参考に作った資料の中に、三浦半島出土の遺物が載せられていることからもうかがえる。また、隔年で行なわれた横浜国立大学での日本考古学の講義ノートにもみることができる。

赤星は遺跡の見学会でも発掘調査でも、見学に来た子どもを大事にし、子どもにわかりやすく説明していた。このような姿勢は、赤星が執筆した何冊かの児童・生徒向けの著書や教師向けの著書にも多くみられる。児童・生徒向け著書としては『先史時代の三浦半島』があり、縄文～弥生時代の各土器型式の特徴や遺跡を訪れた時の遺跡の見方などがわかりやすく書かれている。『やぐらの話』は一般向けに書かれたもので、やぐらの説明を見学に来た家族に歩きながら語りかける設定で執筆されている。

a　博物館建設への努力

『三浦半島　観光と古文化展』ポスター

赤星直忠は横須賀市立博物館の開設にむけて、考古学の成果を市民に周知するための展覧会を数度にわたって開いた。このポスターは、昭和26（1951）年3月、品川の京浜百貨店で「三浦半島観光と古文化展」と題して開いたもので、主催は神奈川県と横須賀市であった。この他に、横須賀市坂本町にあった横須賀市教育研究所や市内のさいか屋百貨店を会場として開催した。

（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

『博物館等設立に関する覚え』、『横須賀市史№1～9』（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

b　教育と普及書

横浜国立大学講義ノート

赤星直忠が昭和31（1956）～38（1963）年の間に、横浜国立大学で日本考古学の講義を行った時の講義用ノート。一般教養課程の考古学概説であることから、講義の目的として「学問としての、専門知識としての考古学ではなく、将来学校教員として立つ者に教養として」という赤星のメモがあり、教育者としての立場がうかがわれる。しかしながら、内容は「考古学」とはなにかから始まり、周辺科学との係わりまで講義し、赤星の考古学に対する立場が知られるもので、考古学史上貴重な資料である。（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

『先史時代の三浦半島』

赤星直忠が執筆したもので、児童・生徒向けに三浦半島の縄文時代の歴史を解説した概説書。昭和25（1950）年11月10日、横須賀市立図書館内にあった三浦半島研究会から発行された。

その内容は縄文時代の概説、「遺跡」と「遺物」とはなにかという考古学概説、遺跡探訪の注意と遺跡案内からなる。（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

『上古の三浦—三浦半島の歴史—』

昭和28（1953）年6月に、赤星直忠が教師の学習指導参考のために執筆した縄文時代から古墳時代までの歴史の概説書。「横須賀市基準教育課程を実施していくに当たって、児童・生徒の学習及び教師の学習指導の参考のために編集した」学習資料シリーズ№9として、横須賀市教育研究所から発行された。（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

『三浦半島の古代文化』

昭和44（1969）年5月15日～20日にかけて、横須賀市のさいか屋百貨店で開かれた「三浦半島の古代文化展」にあわせて発行された三浦半島の旧石器時代から歴史時代までの解説書。各時代の概要以外に、主要遺跡の解説などが載せられている。展示会は、横須賀考古学会、神奈川県文化財協会、神奈川県教育委員会、神奈川新聞社の主催であった。（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

5　赤星直忠のひとがら

赤星直忠のこころを映すもの

赤星直忠は考古学研究に多くの人生の時間をさいていたが、こころ豊かな時間も大切にしていた。既に、『五輪塔』にみられるように、赤星は横須賀中学校時代から短歌をうたう文学青年であった。横須賀重砲兵連隊に入隊していた時期でも、その心象を短歌にしたため、晩年は『信誉日記』として、苦しい闘病と静かな日常のことを短歌に残している。

心の断片は言葉だけではなく、筆をとって絵画としても表現した。その絵は鉛筆、水彩、油彩で描いたもので、その素材は近隣の風景、人物、静物などが多く、また、横穴や洞穴、古代人の生活など考古学の研究対象も題材とした。描かれた古代の情景は学問的な裏付けによるものなのか、あるいは赤星の想像の世界なのかは知るよしはない。

赤星は明治生まれで軍人を経験したことからか、その生活は質素で清廉なものであった。また、反面、大正時代に青年期を過ごしたことからか、文学や絵画を愛した人でもあった。

このような赤星の書斎は常に整理され、かたわらに身近な草花が生けられたハゼ壺が置かれ、壁にはこよなく愛でた竹久夢二の絵がかけられていた。赤星は、その書斎の中央で座り机に向って原稿を書き、訪れる人びとを暖かく迎える日々を過ごしたのである。

晩年は写真が趣味だったようで、『信誉日記』の短歌の多くは、自ら撮った写真を見ながら詠んだようで、一葉の写真と同じところに同じ題材の短歌がいくつか添えられているものが多い。このころは、草花や蝉など季節の変化を映す情景を好んだようである。

a　絵画

『水彩画集』、『宗元寺十二神将図』、『宗元寺』、『衣笠風景』、『毘沙門洞穴』（赤星直忠博士文化財資料館蔵、剣持輝久蔵、横須賀市自然・人文博物館蔵）

b　俳句・短歌

短歌集『五輪塔』他

短歌集『五輪塔』・『城山の麓より』・『雪解くる迄』・『淡き陽影』は、赤星直忠が天牛と号して、大正8（1919）年から大正11（1922）年頃までにかけてうたった短歌集である。

横須賀中学校在学中の17才から横須賀重砲兵連隊時代の20才までの赤星の青年時代の短歌で、当時の日常の生活や心象がうたわれている。（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

『信誉歌句集』（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

c　素顔の赤星直忠

『信誉日記』

信誉日記は、赤星直忠が晩年糖尿病をわずらってから書かれた日記で、昭和60（1985）年頃から平成3（1991）年3月11日に亡くなる直前の1月19日までの記載がある。号の信誉は戒名の研光院信

誉精学居士からとったもの。日記は日常の出来事と病状を短歌によんだもので、この頃の趣味であった写真が貼り付けられている。撮影された対象は草花や樹木が多く、晩年を心静かに送っていた様子がうかがえる。

『竹久夢二の美人画』

竹久夢二は明治17（1884）年に岡山県に生まれた詩画人で、明治時代の末から昭和時代の初めにかけて活躍した。竹久が一世を風靡した時期に、赤星直忠は生まれ、青年時代を送ったことからか、竹久の絵をこよなく愛し、書斎には額に入れられた絵が常に飾ってあった。

『ハゼ壺』

ハゼが巣に入る習性を利用して、6～8月に瀬戸内海の一部で行われる壺漁法に使われる壺。高さ20cm程度で上方に8の字の口がある壺を1本の幹縄に5～8cm間隔で150～500個を付け、海底に置き、1～3日に1回引き上げる漁法。主にウロハゼが対象で、夏季には美味なため、岡山県周辺では高級魚として、取引されている。

展示してあるハゼ壺は、戦後、赤星直忠先生が高島屋デパートで見つけ、民俗資料として入手したもので、底面には墨書で「瀬戸内海ハゼ漁用（ハゼ壺）昭和四十三年頃　赤」と書かれている。赤星先生はこの壺を気に入っていたようで、書斎の傍らでいつも花が生けてあった。

6　展示会を終えるにあたって

(1) 赤星直忠が地域研究に残したもの

赤星は戦前・戦後を通して地域研究に多くの力を注いだ。その研究成果が、

1　三戸式・田戸下層式・田戸上層式・野島式・鵜ヶ島台式・茅山下層式・茅山上層式の縄文時代早期の型式設定
2　弥生時代における三浦半島の海蝕洞穴の利用の解明
3　神奈川県だけでなく全国の横穴にもぐり一つ一つ実測して完成した横穴の編年研究
4　瓦の分布や礎石の位置などから、内容を解明した古代寺院宗元寺
5　鎌倉をくまなく歩いて解明したやぐら
6　軍人としての知識をいかし歩測による独自の方法で作成した、三浦半島を中心とする中性城郭の実測図
7　敗戦後、開放された東京湾要塞の砲台をただちに入り写真やノートに記録し、中世の城郭・近世末の台場とともにまとめた三浦半島城郭史である。

この他にも鎌倉の永福寺跡の調査研究など重要なものが数多くある。これらの中にはすでに遺跡

が失われて、赤星の調査研究したものが唯一の資料というものも少なくない。

赤星の研究成果は、報告書や論文として発表されるだけでなく神奈川県史・横須賀市史・鎌倉市史・逗子市史に地域の歴史として表わされたりしている。また、博物館の展示に活かされたり、一般向けの著書としても表わされている。さらに、ごく少数ではあるが名越の切り通し・茅山貝塚・吉井貝塚・毘沙門洞穴群などが、国や県の指定史跡として保存活用されている。

(2) 赤星直忠の後進の人びと

赤星直忠は、考古学者とは別に真摯な教育者としての一面を兼ね備えた人であった。横須賀考古学会という名称は戦前から存在したようであるが、本格的に活動を開始するのは戦後になってからであった。戦後の横須賀考古学会には岡本勇、神澤勇一、塚田明治などの優秀な若い研究者が赤星のもとに集まったが、赤星はかれらを指導しながら考古学の調査を続け、同時に後進を育てることにも力を注いだ。後進がその研究テーマをかためると、赤星はその分野の研究を若い人に委ね、分担しながら、考古学研究をすすめる姿勢に変化していった。

岡本は赤星の縄文時代早期の編年研究を受け継ぎ、昭和29（1954）年に行った茅山貝塚の調査から吉井貝塚の調査まで主体的に茅山式土器の型式細分につとめ、条痕文土器の編年体系を構築し、その後も広く全国的に縄文時代研究を行っていった。神澤は遊ヶ崎遺跡出土の弥生土器の検討を初めとして、神奈川県立博物館（現神奈川県立歴史博物館）にあって間口洞穴遺跡の発掘調査を行うなど海蝕洞穴遺跡の卜骨・貝包丁などの諸問題について追求していった。塚田明治は赤星とともに行動し、赤星を団長とする調査団において、やぐら、城郭などの中世遺跡の調査を指導した。既に三人とも他界したが、赤星の他界後に横須賀考古学会長を受け継いだ岡本は、「赤星直忠は今まで1人で何でもやってきたが、これからは分担して集団で研究していかなければならない」と集団研究の重要性をうったえてきた。これは、赤星から岡本へ受け継がれた研究態度であり、さらに引きついでいかなければならないことである。

岡本　勇　　昭和5（1930）～平成9（1997）年

神奈川県横須賀市生まれ。昭和29年、明治大学大学院修士課程修了後、横浜市史編さんに関係。その後、立教大学助教授を務め、福井県鳥浜貝塚などの調査を指導した。

縄文時代早期の土器編年に業績を残し、また縄文時代の時期区分論などを展開した。

著書に「原始社会の生産と呪術」『岩波講座日本歴史』、『日本の考古学Ⅱ』などがある。

神澤勇一　　昭和7（1932）～平成13（2001）年

東京都生まれ。旧制中学3年の時に横須賀市に移り、赤星直忠の教えを受ける。明治大学に進み、後藤守一・杉原荘介の教えを受け、大学院修了後、高等学校教員を経て、県立博物館準備事務局で博物館の創設に係わる。

主たる研究としては「関東地方の弥生式土器の研究」・「卜骨・卜甲の研究」・「貝刃・貝包丁の研究」がある。著作に『日本考古学講座』4・『日本の考古学』Ⅲなどがある。

塚田明治　　昭和12（1937）～平成5（1993）年

神奈川県横須賀市生まれ。横須賀市立工業高等学校で、赤星直忠から考古学の指導を受ける。卒業後も会社に勤めながら、調査研究を行い、横須賀考古学会の役員として会の運営にあたる。昭和46（1971）年以後、逗子市教育委員会の嘱託として文化財行政に係わり、赤星の指導のもとに名越切通の発掘調査や住吉城址の測量調査にあたる。

主な著作に『横浜市室の木遺跡』、『横須賀考古学研究会研究調査報告2』などがある。

(3) 横須賀考古学会

三浦半島を中心とした考古学研究、並びに文化財の保護に努めることを目的とした学会で、長く赤星直忠に率いられてきた。横須賀市内に事務所を置いている。昭和10（1935）年前半には存在し、東京考古学会横須賀支部を横須賀考古学会としていた。この頃は赤星直忠とごく少数の個人的な集まりにすぎなかったようである。

歴史が解放され、考古学会が組織的に活動するのは戦後まもなくである。赤星のもとに当時、明治大学の学生であった川上久夫や岡本勇らが加わり市内の高校生も参加して昭和23（1948）年から、再び、横須賀考古学会という名称を使うようになる。横須賀市公郷町の赤星の自宅を連絡所として活動し、野島貝塚、吉井貝塚、称名寺貝塚など貝塚遺跡、猿島洞穴をはじめとする海蝕洞穴、なたぎり遺跡などの調査が行われた。これらの報告は赤星によって執筆され、また、不定期ではあるが「Ｙ・Ａ・Ｓ」という会報も発行された。

昭和29（1954）年に横須賀市博物館が横須賀市久里浜に開館すると、考古学会の活動も博物館の事業を中心とし、茅山貝塚、平根山遺跡、馬ノ背山遺跡、鵜ヶ島台遺跡、吉井貝塚、こんぴら山古墳などの調査が行なわれた。これらの報告は赤星の他、岡本勇、神澤勇一らが執筆し、横須賀市博物館の研究報告として刊行されている。この頃、考古学会の機関誌として『横須賀考古学会年報』も発行されるようになった。

現在、横須賀考古学会の会員は約100名で、旧石器・縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世近代の研究部会に分かれて、毎月1回の割合で調査・研究活動を行ない、毎年1回、研究発表会と三浦半島地区遺跡調査発表会を開いている。

『横須賀考古学会ヘルメット』、『スコップ』、『移植ごて』（赤星直忠博士文化財資料館蔵）、**『弁当箱』、『磁石』**（川上久夫蔵）

(4) 赤星直忠博士文化財資料館

横須賀市長坂2丁目の宇内ビル3階にあり、故赤星直忠博士の考古学研究の成果、収集した資料を

保存・展示し研究活動を行う資料館として、平成7（1995）年に設立された。

博士が大正期から記録したノート類・博士論文・著作集などを保存するほか、江戸坂貝塚・称名寺貝塚・雨崎洞穴・猿島洞穴などの遺物を展示している。毎週水曜日の午後を開館時間としている。

年に3回『文化財資料館だより』を発行している他、研究刊行物として『古代寺院宗元寺』などがある。

『文化財資料館だより』、『古代寺院宗元寺』（赤星直忠博士文化財資料館蔵）

(5) おわりに

赤星直忠博士生誕100年ということで、横須賀考古学会として久しぶりに展覧会を企画しました。諸般の事情で企画・準備を実質半年間でやらなければならなかったため、多くの不備な点があると思います。

しかし、現在の日本の考古学と神奈川の考古学に対して赤星が果たした役割や、在野にあってたゆまぬ研究したこととその学問に対する姿勢を、少しでも理解していただければと思います。

なお、今回の展示にあたっては、田代郁夫氏及び赤星直忠博士文化財資料館・神奈川県立埋蔵文化財センター・横須賀市自然・人文博物館から協力をいただきました。ここに厚く御礼を申し上げる次第です。

主催　横須賀考古学会

凡例

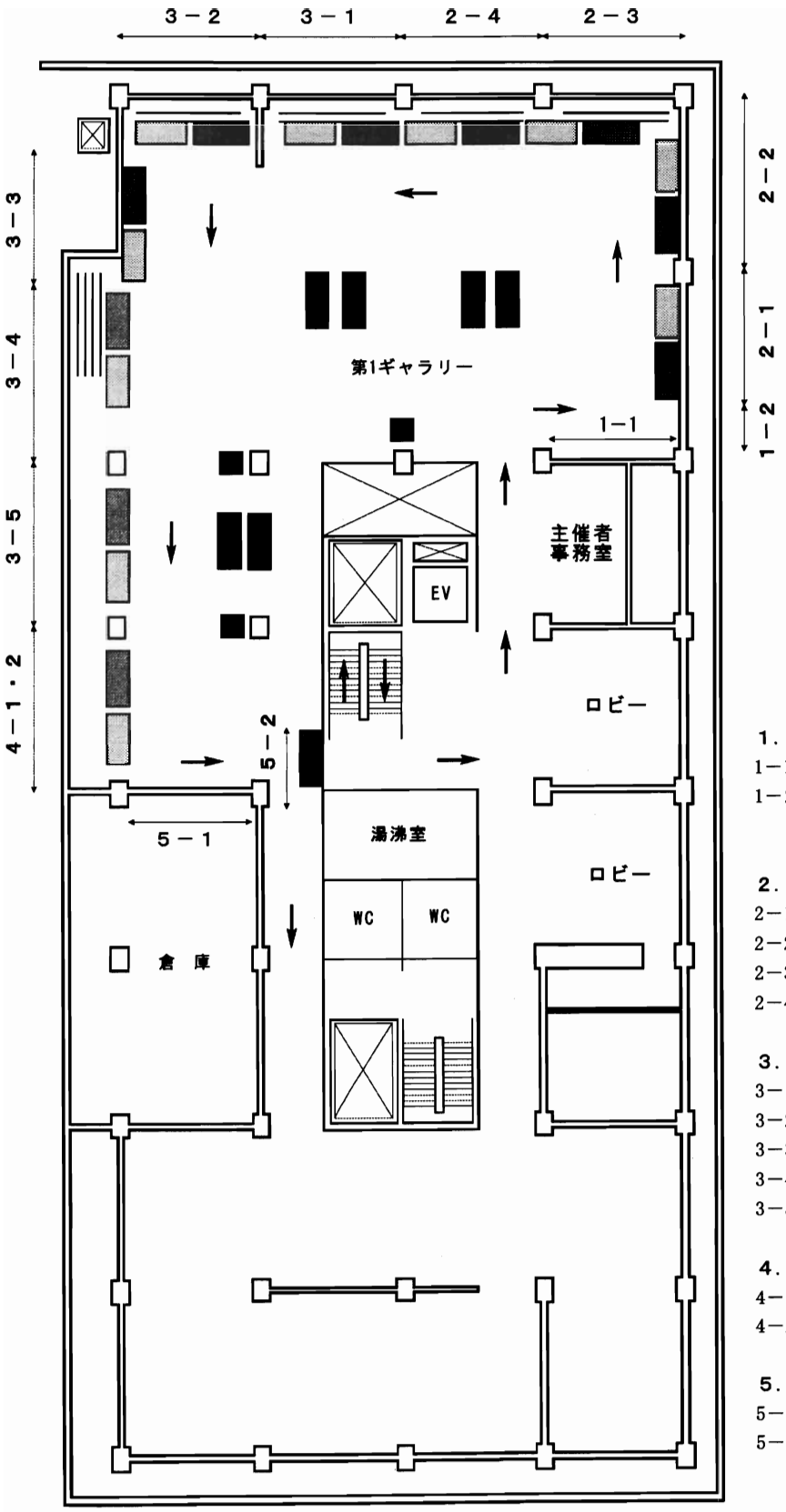
1　「考古学者　赤星直忠の学問とその生きた時代　～神奈川県の地域研究に残したもの～」は、横須賀市文化会館ギャラリーにおいて2002年11月22日（金）～26日（火）に開催された。

2　原稿執筆は、剣持輝久、野内秀明、臼井敦、渡辺一哉による。

3　構成は横須賀考古学会提供のものを岡本孝之が行い、展示と異なる部分がある。

4　文字資料に限定した。パネル原稿と展示品の標本カードから構成される。

5　本資料集掲載にあたっては、川上久夫会長をはじめ、横須賀考古学会の協力を得た。記して感謝もうしあげます。



凡 例

展示台

展示ケース

ソファ

椅子

1．開催にあたって

1－1　赤星直忠の紹介

1－2　赤星直忠以前の三浦半島の考古学

2．赤星直忠の学問とその時代

2－1　大正後半から昭和初期

2－2　昭和初期から開戦まで

2－3　戦時中から復員まで

2－4　戦後から亡くなるまで

3．研究業績

3－1　縄文時代の研究

3－2　海食洞穴の研究

3－3　横穴墓と宗元寺の研究

3－4　やぐらと城郭の研究

3－5　台場と近代砲台の研究

4．文化財の保護と普及

4－1　文化財の保護

4－2　研究成果の普及

5．展示会を終えるにあたって

5－1　赤星直忠の人柄

5－2　後進の人びと

神奈川県考古学会　平成14年度考古学講座

学史を語る
～学史を踏まえた最新の研究～

２００３．３．２３

発行　神奈川県考古学会
会長　寺田　兼方
編集　大坪　宣雄・碓井　三子
印刷　（株）日相印刷

神奈川県考古学会事務局
〒251-0043　藤沢市辻堂元町４丁目17番４号　やよい荘１０２
郵便振替　００２４０－９－７１２０８　口座名：神奈川県考古学会

平成14年度考古学講座関係役員
講座担当役員　大坪　宣雄・明石　新・加藤　緑・鈴木　亘信・河野　眞知郎
講座企画　岡本　孝之・伊丹　徹
表紙カット　Ｎ．Ｇ．マンロー（桑原千代子氏提供）
第一書房刊　復刻『ＰＲＥＨＩＳＴＯＲＩＣ　ＪＡＰＡＮ』
「解説　斉藤　忠」1982より